青森市埋蔵文化財調査報告書　第75集

江　渡　遺　跡

発掘調査報告書

平成15年度

青 森 市 教 育 委 員 会

青森市埋蔵文化財調査報告書　第 75 集

江渡遺跡

発掘調査報告書

平成 15 年度

青 森 市 教 育 委 員 会

序

青森市内では平成15年４月１日現在301カ所の遺跡が周知の埋蔵文化財包蔵地として登録されており、本市の歴史を紐解く上で貴重な資料が埋蔵されている状況にあります。

市内の至るところでは、現在の私たちの生活の利便性を向上させるための公共事業や民間事業者による開発行為が行われております。

開発行為が周知の埋蔵文化財包蔵地内で行われる場合、埋蔵文化財保護と開発行為との調整を図る必要があり、遺跡の保存が難しい場合、記録保存という形で発掘調査が実施されることになります。

本書は、民間事業者の開発行為に伴い、平成15年度に実施した江渡遺跡の発掘調査の成果をまとめたものです。

本調査は平成15年度の年度途中に急遽実施され、その結果、縄文時代および平安時代の竪穴建物跡等の遺構が見つかりました。

この遺跡は、当委員会では調査実績が少ない西部地区の住宅地内に所在する遺跡であり、これまでの山間部付近の調査成果とは異なる貴重な資料を得ることとなりました。

最後に、本書を刊行するにあたり調査委託者をはじめとした関係諸機関および関係各位のご理解・ご協力に対し深く感謝の意を表する次第です。

平成16年３月

青森市教育委員会

教育長　**角田　詮二郎**

例　　言

１．本書は、株式会社大進建設から青森市が委託を受けて、平成１５年度に発掘調査を実施した江渡遺跡（青森県遺跡番号０１１６３）の報告書である。

２．本書に記載される内容は、株式会社大進建設が計画した分譲宅地造成予定地内に関する部分についてまとめたものである。

３．発掘調査は、当委員会が平成１５年度４月に実施した市内遺跡発掘調査事業における範囲確認調査によって造成対象面積５，６５７㎡に対し調査必要範囲を２，７７０㎡と確定し、調査必要範囲について発掘調査を実施している。最終的な調査面積は３，１１６㎡である。

４．江渡遺跡は、昭和５４年度に青森県教育委員会により台帳登録がされている遺跡である。しかし、遺跡の範囲や詳細な状況等が不明であったため、前述のとおり、分譲宅地開発に伴い、平成１５年度当初に市内遺跡発掘調査事業で範囲確認調査を実施して内容を確認している。範囲確認調査の結果については本書第Ⅲ章中にも記載しているが、事業そのものの成果としては市内遺跡発掘調査事業に帰するものであり、範囲確認調査成果については本年度中に刊行される『市内遺跡発掘調査報告書１２』（青森市埋蔵文化財調査報告書第７４集）内に掲載されている。

５．発掘調査は、範囲確認調査の成果を得て平成１５年８月１日～１０月８日までの期間で実施する計画で設定された。調査の結果、調査にあたった人員の熟練度や機械化作業による大幅な効率化により、調査期間を短縮して終了している。期間短縮後の調査期間は平成１５年８月１日～９月５日である。また、整理作業については年度内整理とし、平成１５年１２月１４日～平成１６年３月３１日までとした。

６．本書の執筆・編集は青森市教育委員会が行い、木村淳一、相馬俊也（青森市埋蔵文化財調査員）、松橋智佳子（青森市埋蔵文化財調査員）が担当した。執筆・作成分担については、第Ⅴ章第１節１．及び第２・Ⅵ章第２節について相馬が、第Ⅴ章第１節２．について松橋が、その他の部分の執筆および編集を木村が担当した。

８．調査に関わる出土遺物及び記録図面・写真関係資料は、現在、青森市教育委員会で保管している。

９．発掘調査及び本書作成にあたり、下記の方をはじめ多くの方々からご指導・ご協力をいただいた。（五十音順・敬称略）

青森県教育庁文化財保護課、青森県埋蔵文化財調査センター、浅田智晴、伊藤武士、岩井浩介、岩田安之、宇部則保、小笠原雅行、木村高、越田賢一郎、小松隆史、小松有希子、齋藤淳、榊原滋高、佐野忠史、茅野嘉雄、中嶋友文、成田誠治、平山明寿、藤原弘明

凡　　例

1．図版番号は、本文中に図示したものについては「第〇図」、それ以外については「図版〇」とした。表番号については「第〇表」とした。

2．遺構の掲載について

(1)　方位は国土地理院第Ｘ系平面直角座標系に基づく座標北である。

(2)　各図の縮尺は以下の通りである。

1/25,000　1/10,000　1/2,500　1/500　1/180　1/60　1/30

(3)　水平基準は海抜高をメートル（m）で表示した。

(4)　遺構の略号は、SI ＝竪穴建物（住居）跡、SK ＝土坑、SP ＝ピット、SD ＝溝跡、SC ＝埋設土器遺構、SX ＝その他の遺構である。本書で用いられる遺構の名称のうち、竪穴建物跡は通常竪穴住居跡と呼称される遺構と同質のものであるが、本遺跡から検出した遺構の中には居住以外に使用された可能性を有するものも含まれるため、建物跡という呼称を用いた。

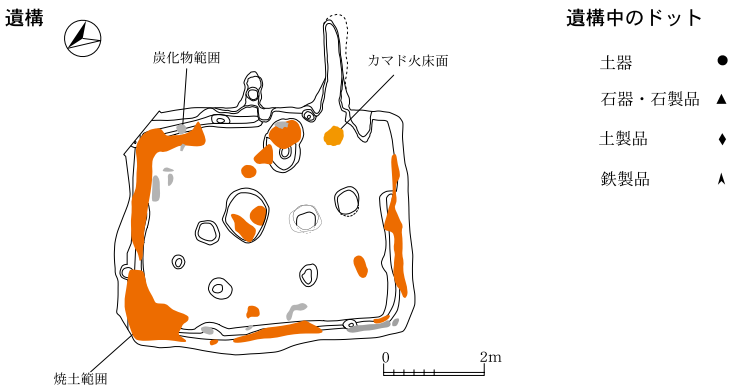
(5)　遺構番号については、遺構の種別毎に番号を付した。具体的には遺構の略号－番号とした。（例：第１号竪穴建物跡＝ＳＩ－０１）

(6)　本書で使われるグリッドについては、調査時に任意の基準点を設け、そこを基準とした座標値を用いている。なお、任意の基準点については発掘調査終了後、ＣＡＤソフトで公共座標値を計算している。基準の軸線については、南北軸をＸ軸、東西軸をＹ軸としている。各軸線のうち、Ｘ軸については南側から北側に向かって、Ｙ軸については西側から東側に向かってそれぞれ数字が増えるように付している。本書における表記について一部の図版において１０ｍ単位のグリッドを用い表示している。また、各遺構の位置については中心点の座標について表示した。

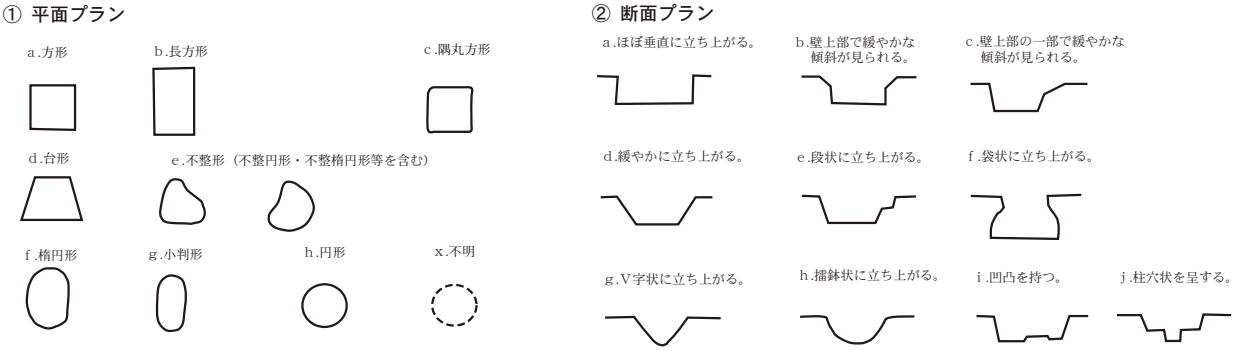
(7)　本書の土層の注記については、『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄 1996）に準拠した。

(8)　遺構の規模については、基本的に長軸×短軸×深さをｃｍで表示した。このうち深さについては、遺構確認面からの計測値を記した。

(9)　本書の遺構図中で使用されるドット等の指示については下図のとおりである。



（10）遺構観察表中で標記されている類型化の記号は当委員会が平成 14 年度に刊行した『雲谷山吹（4）～（7）遺跡発掘調査報告書』（青森市教育委員会 2003）で提示した類型化に基づき提示している。

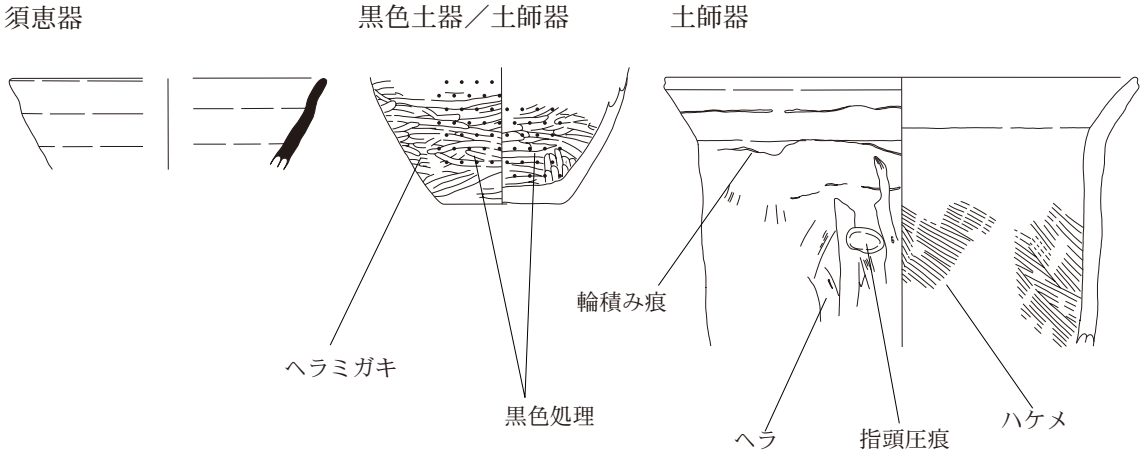


3．遺物の掲載について

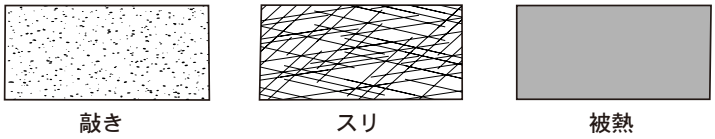
（1）各図の縮尺は以下のとおりである。

土器 1/3・1/9　石器　1/1.5・1/3　土製品 1/3　鉄製品 1/1.5　石製品 1/3

（2）遺物実測図の表現



石器の遺物図版中で使用される網掛けの指示については下図のとおりである。



目　　次

序
例言
凡例
目次

第Ⅰ章　調査経緯
　第１節　調査に至る経緯　・・・・・・・・・・・・ 1
　第２節　調査要項　・・・・・・・・・・・・・・・ 2
第Ⅱ章　遺跡の位置と環境
　第１節　遺跡の位置と地理的環境　・・・・・・ 3
　第２節　歴史的環境　・・・・・・・・・・・・・ 4
第Ⅲ章　調査の概要
　第１節　範囲確認調査　・・・・・・・・・・・・ 7
　第２節　本発掘調査　・・・・・・・・・・・・・ 8
　第３節　調査方法　・・・・・・・・・・・・・・ 8
　第４節　地形と層序　・・・・・・・・・・・・・ 10
　第５節　発掘調査経過（抄）・・・・・・・・・・ 11
　第６節　整理作業および本書の編集について　・ 11
第Ⅳ章　検出遺構
　第１節　縄文時代の遺構
　　１．竪穴建物跡　・・・・・・・・・・・・・ 13
　　２．埋設土器遺構　・・・・・・・・・・・・ 13
　　３．土坑　・・・・・・・・・・・・・・・・ 14
　　４．その他の遺構　・・・・・・・・・・・・ 14
　第２節　弥生時代以降の遺構
　　１．土坑　・・・・・・・・・・・・・・・・ 14
　第３節　古代の遺構
　　１．竪穴建物跡　・・・・・・・・・・・・・ 15
　　２．土坑　・・・・・・・・・・・・・・・・ 19
　　３．ピット　・・・・・・・・・・・・・・・ 20
　第４節　時期不明の遺構
　　１．竪穴建物跡　・・・・・・・・・・・・・ 20
　　２．土坑　・・・・・・・・・・・・・・・・ 21
　　３．ピット　・・・・・・・・・・・・・・・ 22
　　４．焼土状遺構　・・・・・・・・・・・・・ 24
　　５．その他の遺構　・・・・・・・・・・・・ 24
第Ⅴ章　出土遺物
　第１節　縄文時代の遺物
　　１．土器　・・・・・・・・・・・・・・・・ 25
　　２．石器　・・・・・・・・・・・・・・・・ 28
　第２節　弥生時代の遺物
　　１．土器　・・・・・・・・・・・・・・・・ 28
　第３節　古代の遺物
　　１．土器　・・・・・・・・・・・・・・・・ 29
　　２．鉄製品・鉄滓　・・・・・・・・・・・・ 41
　　３．土製品　・・・・・・・・・・・・・・・ 42
　　４．石製品　・・・・・・・・・・・・・・・ 42

観察表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 43 ～ 49

図版
写真図版

第Ⅵ章　統括
　第１節　遺構　・・・・・・・・・・・・・・・・ 97
　第２節　遺物　・・・・・・・・・・・・・・・・ 99
　第３節　古代の遺物と竪穴建物の変遷について
　　・・・・・・・・・・・ 103

引用参考文献・・・・・・・・・・・・・・・・・ 112
まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 113
報告書抄録・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 114
既刊埋蔵文化財関係報告書一覧・・・・・・・・・ 115

第Ⅰ章　調査経緯

第１節　調査に至る経緯

株式会社大進建設（以下大進建設）は、市内大字石江字江渡の一画に分譲宅地の造成を計画し、都市計画法第３２条関連の事前協議として、平成１５年１月２７日に青森市教育委員会文化財課（以下当課）に来課し、開発計画予定地内に遺跡が所在するかどうか照会した。

照会の結果、造成予定地は周知の埋蔵文化財包蔵地である江渡遺跡（青森県遺跡台帳番号０１－１６３）に該当していることが確認され、当課と協議が必要である旨を伝達した。

協議において、周知の埋蔵文化財包蔵地内での開発行為であることから文化財保護法第５７条の２関係の発掘届（工事届）の提出が事前に必要であることと、江渡遺跡は、周知の遺跡でありながら既往の調査実績がなく、周辺の登録されている遺跡についても不明な点が多い状況であったことから、雪解け後の平成１５年度に入って造成対象範囲内に対し、遺跡範囲確認調査を実施し、その調査結果を基に取扱いについて再度協議することとなった。

この協議の結果に基づき、大進建設は平成１５年２月６日付けで青森県教育委員会教育長宛に土木工事等のための発掘に関する届出書を提出し、平成１５年２月１７日付け青教文第１１８０号にて青森県教育委員会教育長から事前の発掘調査が必要である旨の回答がなされた。

年度を明けて、平成１５年度に入り、当課職員が開発予定地に対し現況を確認し、造成予定地５，６５７㎡に対し、範囲確認調査の日程を平成１５年４月１６～１８日の３日間と設定した。

範囲確認調査の結果、造成対象地区の約２，７７０㎡から縄文時代および平安時代の竪穴建物跡、土坑等が確認され、周知の遺跡の範囲内であることが確認された。この調査結果を基に、当課は再度大進建設と協議し、開発計画について見直しや検討を依頼した。

これに対し、大進建設では、現在周辺で進みつつある東北新幹線工事の用地買収関係で、移転を余儀なくされている住民の移転候補地等の提供も踏まえ、開発の変更は難しいという結果となり、当課との協議の結果、埋蔵文化財保護と開発行為との円滑な調整を図るため、発掘調査を実施する方向性となった。

その結果、大進建設は、平成１５年６月２７日付けで青森市教育委員会教育長宛てに発掘調査の依頼をした。当委員会では、既に平成１５年度の各発掘調査事業を実施中で、調査担当者４名が各調査に張り付いており、対応が難しい状況ではあったが、「開発行為と埋蔵文化財保護との円滑な調整を図る」という理念の下、緊急的に対応できる体制に迫られた。

その頃、江渡遺跡から約２km 離れた石江地区では、担当者１名及び臨時職員の調査員２名の体制で土地区画整理事業に係る発掘調査（調査対象面積２４，０００㎡）及び東北新幹線新青森駅建設に係る試掘調査（調査対象範囲１８，０００㎡）を実施している最中であった。

東北新幹線関連の試掘調査が７月１８日をもって終了予定であったことから、二事業を抱えていた担当者１名が８月から２ヶ月間、江渡遺跡の調査担当者となり、区画整理事業については調査員２名を調査専従として、担当者が江渡遺跡の調査に従事しながら統括するという形をとることで、対応することとなった。さらに調査補助員については、既に調査を実施中であった他遺跡の熟練度の高い調査補助員を配置換えして対応することとした。

この調査体制に基づいて、平成１５年７月２５日付け青市教委文第１４７号にて発掘調査受諾の旨を大進建設に回答をした。

発掘調査は、範囲確認調査結果に基づき２，７７０㎡に対し、平成１５年８月１日～１０月８日の期間で実施することとなった。

また、予算措置については、平成１５年度は年度途中であったことから緊急的に非計上費で対応し、９月補正後計上費として予算措置を行った。

第２節　調査要項

１．調査目的

民間業者が計画する分譲宅地造成工事に先立ち、工事予定地内に所在する埋蔵文化財包蔵地の発掘調査を実施し、遺跡の記録保存を図り、地域社会の文化財の活用に資する。

２．遺跡名及び所在地

江渡遺跡　（青森県遺跡番号　０１１６３）　青森県青森市大字石江字江渡１０４－２ほか

３．事業年度　平成１５年度

４．発掘調査期間　平成１５年８月１日～９月５日（当初予定平成１５年８月１日～１０月８日）

５．整理作業期間　平成１５年１２月１４日～平成１６年３月３１日

６．調査面積　３，１１６㎡（工事対象面積５，６５７㎡、調査対象面積２，７７０㎡）

７．調査委託者　株式会社大進建設

８．調査受託者　青森市教育委員会

９．調査担当機関　青森市教育委員会文化財課

10．調査指導機関　青森県教育庁文化財保護課

11．予算措置　調査委託者側で措置

12．調査体制

調査事務局　青森市教育委員会

教育長	角田　詮二郎
事務局長	大柴　正文
事務局参事	
文化財課長事務取扱	遠藤　正夫
文化財課長補佐	多田　弘仁
主　査	木浪　貴子
文化財主事	小野　貴之
〃	木村　淳一（調査担当）
〃	児玉　大成
〃	設楽　政健
主　事	足澤　愛子（庶務担当）
調査補助員	今　直子
〃	佐々木　一人
〃	永洞　佐哉子

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

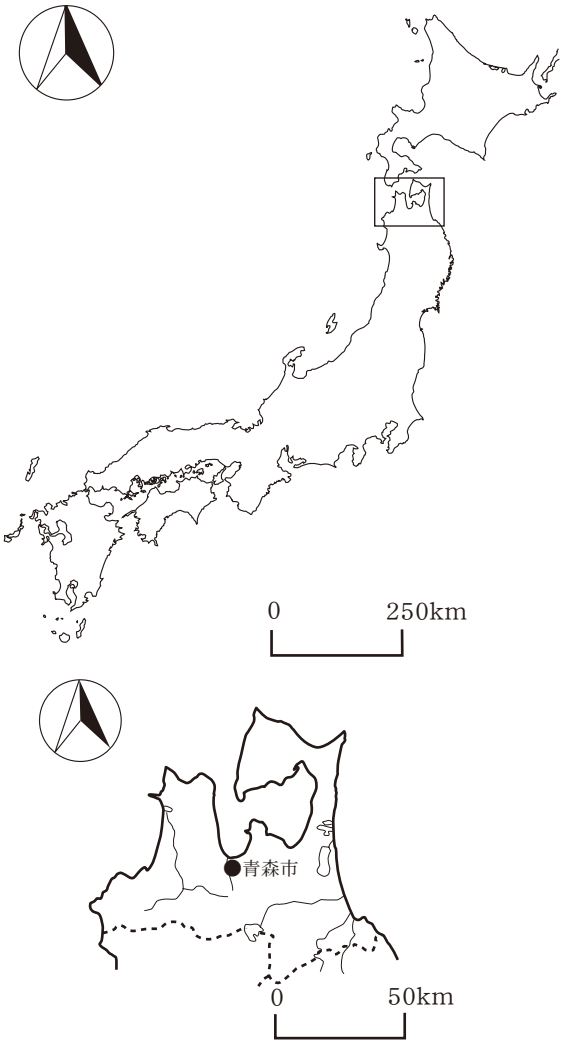
第１節　遺跡の位置と地理的環境

青森市は北に陸奥湾を臨み、南には八甲田山がそびえ立つ人口約３０万人の青森県の県都である。市の面積は６９２．４０㎢を測り、市街地を中心に東西約１０㎞、南北約５㎞の青森平野が広がっている。陸奥湾を臨んだ北側以外の部分はU字状に丘陵に囲まれている。北西部は津軽半島の中央をはしる中山山脈からのびる緩やかな丘陵が広がり、西部は海成起源の岡町層ならびに十和田・八甲田山火山噴出物の堆積層を基盤とする緩やかな丘陵地であり、東流する小河川によって開析されている。

西部丘陵の南端部分には平野部と丘陵地との境に入内断層が走っている。入内断層は西部の丘陵部分と八甲田山火砕流堆積物によって形成された丘陵をも区切っている。南部の丘陵は青森市南部に所在する八甲田山の火砕流堆積物により形成された台地であり、荒川、合子沢川、横内川等八甲田山麓から市街地へ北流する河川により開析が進み、比較的傾斜の緩やかな丘陵が広がっている。

遺跡は西部の緩やかな丘陵地のうち、沖館川の支流に面した標高８～１０ｍの丘陵地上に立地する。

周辺には笹森沼や三内霊園の北側を囲む上堤、中堤、下堤等が所在し、旧河川が堰き止められて形成された沼が点在している状況にある。



第１図　位置図

遺跡周辺の東側には昭和３５年９月に建設された青森県立あすなろ学園・第一養護学校が所在し、西側には昭和１７年に造園された三内霊園が所在している。さらに霊園の北側については、羽州街道であった旧国道（現県道鶴ヶ坂千刈線）が走っており、付近一帯は比較的早い時期に形成された住宅地であるため、丘陵が入り組んだ箇所に道幅の狭い道路が無計画に配置され、その道路に沿って住宅が多数建てられている。埋蔵文化財包蔵地の登録地点以外の部分についても住宅は建設中で開発は進んでいるが、未発見の遺跡について確認が難しい状況に陥っている。

また、遺跡の西側の別丘陵に立地する石江遺跡を縦断する形で東北新幹線が建設予定であり、平成１６年度以降青森県埋蔵文化財調査センター（以下埋文センター）による調査が実施される予定となっていることから、現在住宅地となった箇所の地下に埋蔵文化財が所在しているかどうかについて今後明らかになるものと考えられる。

第２節　歴史的環境

江渡遺跡が所在する沖館川と新城川（新田川）に挟まれた丘陵群では、沖館川右岸に展開する三内丸山遺跡を代表とする遺跡群に比べ、調査事例は格段に少なく、不明な点も数多い。既往の調査として最古の資料は、遺構外出土の資料ではあったが、縄文時代早期白浜式期段階が出土した三内沢部遺跡である。遺跡は、沖館川の左岸上の丘陵地標高約１３～２０m付近に所在し、昭和５１年度に東北縦貫自動車道関連の調査として埋文センターによって実施されている。調査の結果、縄文時代前期については、円筒下層ｂ式期の遺物包含層が検出し、２㎞南西に離れた沖館川の上流域にあたる熊沢遺跡と対比される。また、縄文時代中期については円筒上層ｃ式～最花式期の竪穴住居跡３９軒、埋設土器遺構３基等を検出している。住居跡のうち９軒は最花式土器が伴うもので、うち４軒が複式炉を持ち、石囲炉に２個一対の小ピットが伴う長楕円のくぼみが伴うタイプで、市川金丸氏は「沢部型複式炉」と呼称している。同様の事例は、沖館川の右岸の丘陵地上に立地する三内遺跡や三内丸山遺跡等でも検出している。

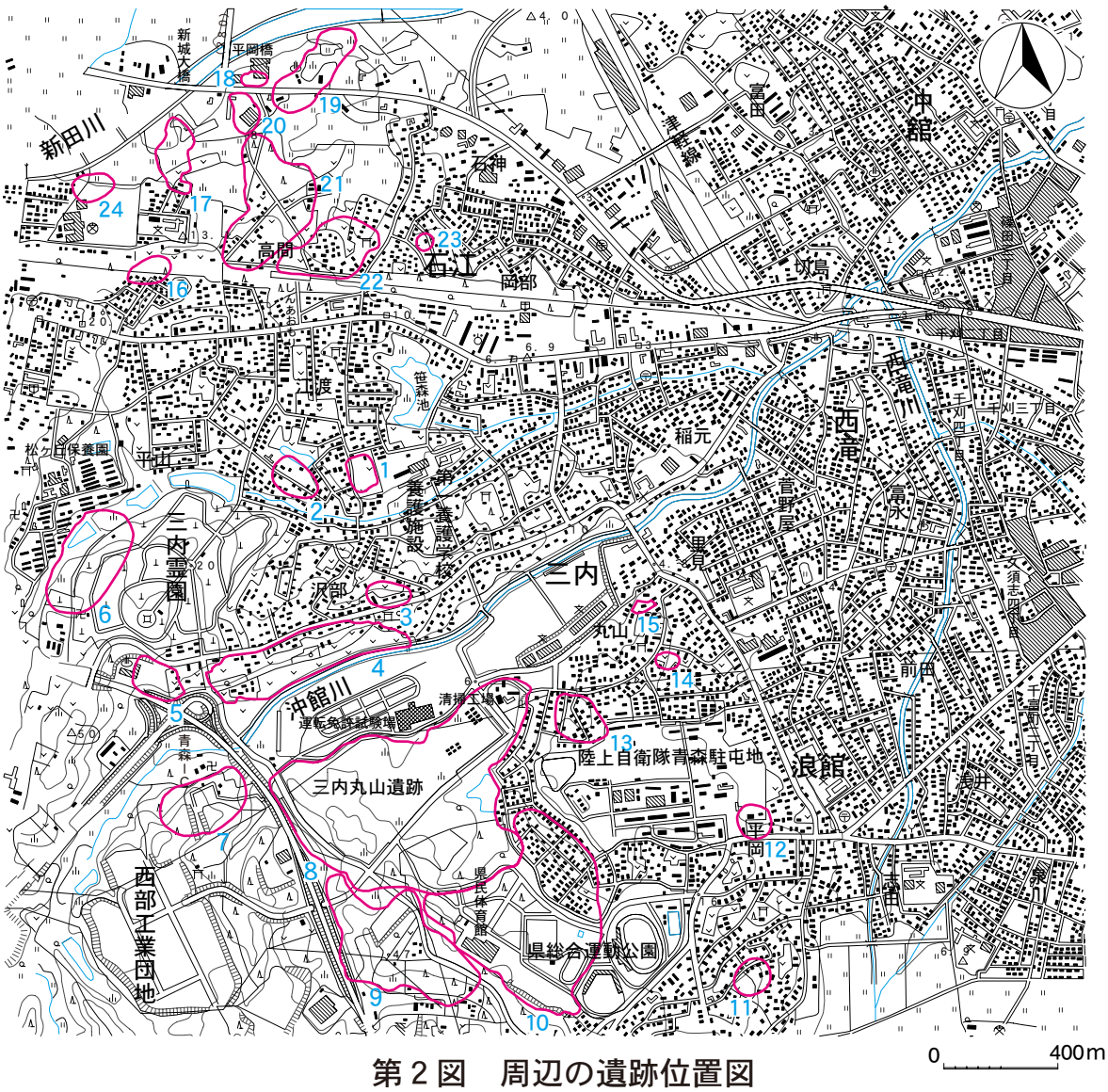
縄文時代中期の資料について他に、三内沢部遺跡の北西側に立地する三内霊園遺跡で昭和３６年に調査が青森市教育委員会により実施されている。部分的な調査で報告されている内容についても不明な点が多いが、土坑状の掘り込みが６基検出し、円筒上層ａ式を主体とした縄文時代前・中期の遺物が出土したと記載されている。

平成１２年度から当委員会による試掘・確認調査による対応が増加しており、沖館川左岸に面した丘陵地上に立地する三内沢部（３）遺跡でも民間業者による開発行為に伴う確認調査が実施されている。調査の結果、縄文時代中期の土坑や平安時代の竪穴住居跡等が確認されているが、開発が中止になり、具体的な内容が把握されていない。また、当委員会の調査地点より西側の地点では東北新幹線路線建設関係に伴う発掘調査が埋文センターにより平成１５年度に実施されており、縄文時代中期の住居跡や古代末期以降の竪穴住居跡等を検出している。

前述したとおり本遺跡周辺の遺跡は、調査事例が少ないため不明な点が多い状態にあるのは否めないが、近年東北新幹線に伴う調査および新青森駅周辺の土地区画整理事業に伴う試掘・確認調査によって、この地区周辺の遺跡の内容が明らかになりつつある。本遺跡の西側に立地する石江遺跡については前節で触れたとおり、平成１６年度以降埋文センターによって、遺跡を縦断する形で調査が実施される予定であるし、それに加えて、石江遺跡からさらに新青森駅方向に向かって縦断する形で、試掘先行の調査が実施される計画である。これまで住宅地であり、現地表面からの調査が不可能であった部分について、その内容が明らかになるものと期待される。

現在の奥羽本線新青森駅より北側の部分については、平成１３・１４年度に当委員会による遺跡確認調査が実施されており、既存の遺跡１２遺跡について６遺跡に大幅に統廃合を行った。試掘調査の結果、縄文時代前期～晩期、平安時代、近世の遺構・遺物が確認されており、平成１５年度から土地区画整理事業に伴う本調査が新田（１）遺跡・高間（１）遺跡・新城平岡（４）遺跡で実施されている。新城平岡（４）遺跡は縄文時代中期円筒上層ｃ式に伴う竪穴住居跡３軒、後期十腰内Ｖ式期に伴う竪穴住居跡６軒、平安時代の擦文土器が伴う竪穴住居跡３軒をはじめとする遺構を検出しており、平野部に突出した海岸段丘上の丘陵地での集落構成を考える上で貴重な資料となりうるものと判断される。

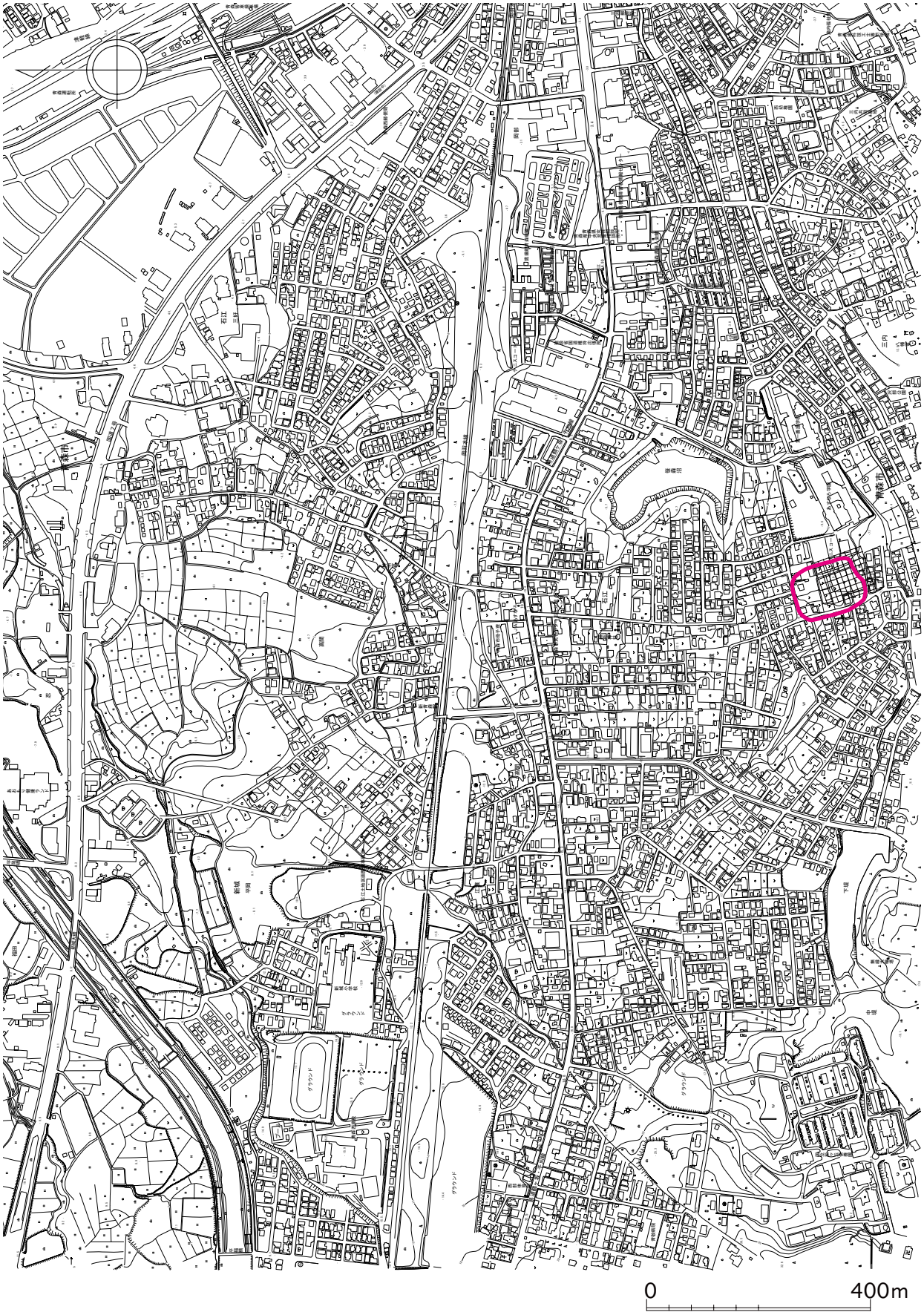
また、新田（１）遺跡では、１０世紀後半～１１世紀代を主体とする遺物が多量に出土する溝跡を多数検出しており、それに伴って数多くの木製品が出土している。また、それ以外に縄文時代前期表館式土器や１５世紀代の青磁・珠洲焼等複数の時代にわたる遺物も出土しており、現時点では整理中であるが、今後当地区の歴史を知る上で欠くことのできない資料となりうることが予察される。



第２図　周辺の遺跡位置図

第１表　遺跡一覧表

番号	台帳番号	遺　跡　名	種　別	所在地	時　　期	備　　考
1	163	江渡遺跡	集落跡	青森市石江字江渡	縄文（前～後）・平安・近代	
2	056	石江遺跡	散布地	青森市石江字平山	縄文（前）	
3	162	三内沢部（２）遺跡	散布地	青森市三内字沢部	縄文（中）	
4	239	三内沢部（３）遺跡	集落跡	青森市三内字沢部	縄文・平安	青森市教育委員会 2002
5	064	三内沢部遺跡	集落跡	青森市三内字沢部	縄文（早・前・中・後）	青森県教育委員会 1978
6	018	三内霊園遺跡	集落跡	青森市三内字沢部	縄文（前・中）	青森市教育委員会 1962
7	019	三内遺跡	集落跡	青森市三内字丸山	縄文・平安	青森県教育委員会 1978
8	021	三内丸山遺跡	集落跡	青森市三内字丸山	縄文・平安・中世	青森県教育委員会 1994 ほか
9	250	三内丸山（５）遺跡	集落跡	青森市三内字丸山	縄文（中～晩）	青森県教育委員会 1999
10	065	近野遺跡	集落跡	青森市安田字近野ほか	縄文（中）・平安	青森県教育委員会 1975 ほか
11	309	安田近野（２）遺跡	散布地	青森市安田字近野	縄文（前）	
12	012	浪館（２）遺跡	散布地	青森市浪館字平岡	縄文（前・晩）	
13	011	浪館（１）遺跡	散布地	青森市三内字丸山	縄文（前）	
14	248	三内丸山（３）遺跡	散布地	青森市三内字丸山	平安	平成 14 年度三内丸山（７）遺跡から変更
15	315	三内丸山（８）遺跡	集落跡	青森市三内字丸山	縄文・平安	平成 15 年度試掘調査により新規登録
16	069	新城平岡（２）遺跡	集落跡	青森市新城字平岡	縄文（後）・平安	石江土地区画整理事業関連
17	074	新城平岡（４）遺跡	集落跡	青森市新城字平岡	縄文（前～後）・平安・近世	石江土地区画整理事業関連
18	079	新城平岡（５）遺跡	散布地	青森市新城字平岡	平安	
19	078	新田（１）遺跡	集落跡	青森市新田字忍ほか	縄文（早・前・中・後）・平安・中世	石江土地区画整理事業関連
20	080	新田（２）遺跡	散布地	青森市新田字忍	平安	石江土地区画整理事業関連
21	070	高間（１）遺跡	集落跡	青森市石江字高間	縄文（前～後）・平安・近世・近代	石江土地区画整理事業関連
22	075	高間（６）遺跡	集落後	青森市石江字高間	縄文（中・後）・平安・近世	石江土地区画整理事業関連
23	076	岡部遺跡	散布地	青森市石江字岡部	縄文	
24	062	西高校遺跡	散布地	青森市新城字平岡	弥生・平安	



第３図　江渡遺跡位置図

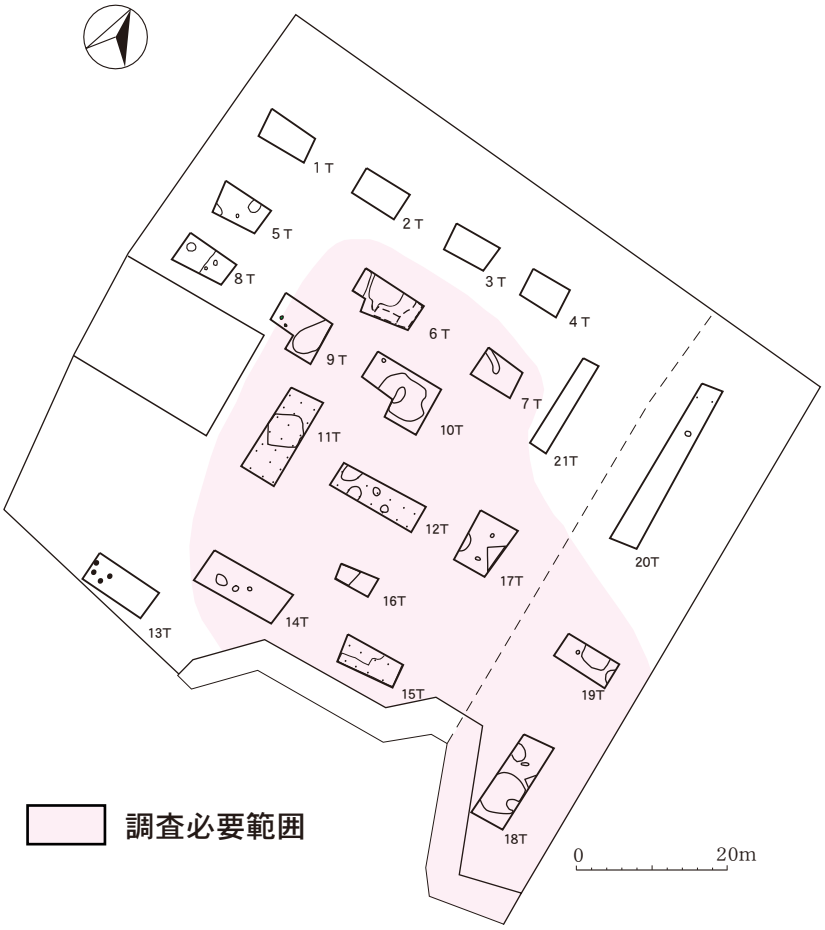
第Ⅲ章　調査の概要

第１節　範囲確認調査

範囲確認調査は、第Ⅰ章でも触れたが平成１５年度に当委員会が行った市内遺跡発掘調査事業の中で平成１５年４月１６～１８日の３日間で実施した。

造成予定地は現況が旧畑地であったことから作業が容易であったため、任意にトレンチを設定し、重機によるトレンチ掘りと人力による鋤簾がけで調査した。総トレンチ数は２１カ所で、調査面積は造成予定面積５，６５７㎡に対し約１４％にあたる７８３㎡であった。

調査の結果、丘陵頂部側であるトレンチ６・１１から平安時代の竪穴建物跡が、斜面下方のトレンチ１８から縄文時代の竪穴建物跡が確認され、その他土坑や落ち込み状の痕跡が確認された。トレンチ５・８・１３から小規模な土坑やピットが確認されたが、近代～現代の遺物が包含していた。トレンチ２０については大幅に掘削が行われた痕跡があり、地下の構築物が破壊されている状況であった。以上の結果、遺物の出土状況や遺構の検出状況を踏まえて、調査範囲については、トレンチ６・７・９・１０・１１・１２・１４・１５・１６・１７・１８・１９の範囲内の約２，７７０㎡が妥当であると判断した。



第４図　江渡遺跡範囲確認調査トレンチ配置図

第２節 本発掘調査

範囲確認調査の結果を受けて、大進建設との協議の結果、２，７７０㎡を調査対象面積として記録保存を前提とした発掘調査の実施することで合意した。発掘調査期間については、通常の遺構処理時間を基に算定したが、調査担当者の決定と日程調整及び作業員の募集等の事前準備を踏まえ、調査着手可能時期が平成１５年の８月上旬とすることとした。

第３節 調査方法

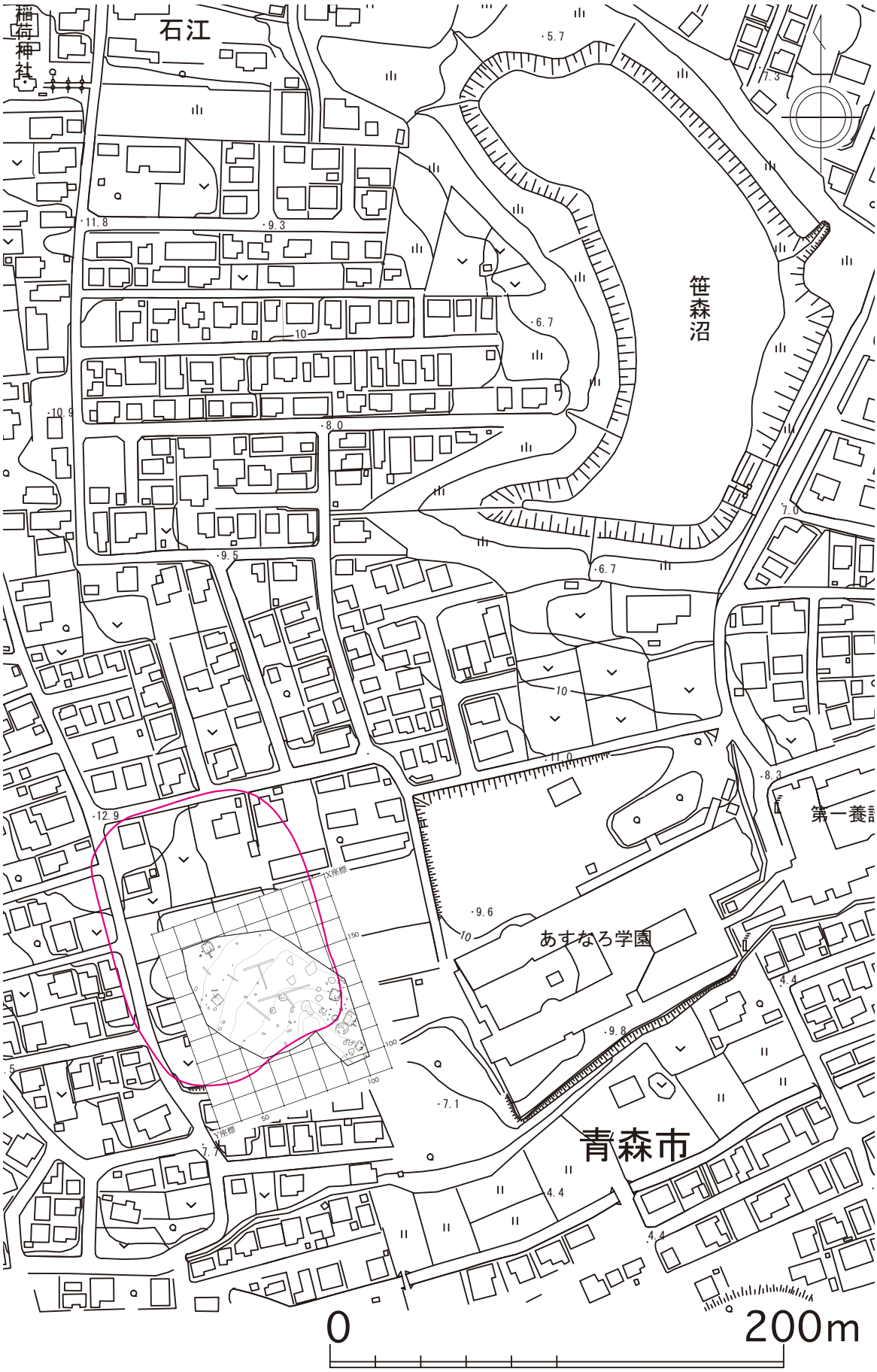
本調査にあたり、民間業者による開発行為であるため、具体的な基準点測量等の成果が存在しない状況であった。そのため、調査区内に即した任意の座標軸を設定し、調査に対応した。具体的には本書「凡例」の項目でも説明しているが、南北方向をＸ軸、東西方向をＹ軸とし、Ｘ軸については北方向へ向かうに従って、Ｙ軸については東へ向かうに従ってそれぞれ数字が増えるように設定した。現地での基準点の設置は、調査区の南東隅付近にＸ１００Ｙ１００の座標点を設け、北側へ４０ｍ移動した部分へＸ１４０Ｙ１００の杭を打設し、そこから１０ｍ単位でグリッドを展開した。水準点については、原因者に設定を依頼し、調査予定地隣接部分に仮Ｂ．Ｍ．（ｈ＝ 10.000 ｍ）を設定してもらい、そこから現地に打設した杭に水準を付与した。各杭の公共座標値については、整理作業時点で、ＣＡＤソフトウエアを用い公共座標値を導き出し、遺跡位置図等にプロットしている。

調査については範囲確認調査で堆積状況および土量を事前に把握していたことから、重機による表土処理を行い鋤簾がけにより遺構確認、遺構の掘削、精査という形を基本にして行った。調査地の現況は旧畑地であり、調査開始前に若干の草木があったが、委託者側で事前に除去していたため作業に対し特段支障をきたすような事態とはなりえなかった。調査によって排出された廃土は、基本的に確認調査により調査不要の部分に排出するようにし、乾燥や風による周囲の住宅地への飛散を防ぐためにブルーシートを用い廃土を覆うようにした。

また、調査範囲の把握のためと遺構の密度の関係から、試掘調査時から便宜的に沢地形の右岸（西側）と左岸（東側）について確認調査時には右岸がＡ区、左岸がＢ区と呼称していたが、本調査に際し、着手順に左岸をＡ区、右岸をＢ区として置き換えている。

各遺構の呼称については、竪穴建物（住居）跡にＳＩ、土坑にＳＫ、ピットにＳＰ、溝跡にＳＤ、埋設土器遺構にＳＣ、その他の遺構としてＳＸという略号を付し、帰属時期等は問わずに調査時に確認した順番で算用数字を組み合わせ遺構番号とした。具体的には第１号竪穴建物跡はＳＩ－０１という呼称で取扱った。

遺構の精査にあたり、竪穴建物跡は基本的に４分法で十字に土層観察ベルトを設け、土坑・ピット等は基本的に２分法で半裁し、セクション図を作成した。また、必要に応じ、エレベーション図等を作成した。平面図作成については、カマド等１／１０の拡図についてはセクションポイントを基準とした簡易遣り方測量による測量で、１／２０の平面図については、トータルステーションにソキア社のフィールドスケッチＰＲＯがインストールされたペンコンピュータを接続し測量した。このシステムについては、中国で行われた興隆溝遺跡の日中合同調査の測量でもＧＰＳ測量と併用して用いられているが、トータルステーション単独や電子野帳と異なり現地で多量の測点を視認しながら測量が継続できる利点があった。今回の調査の著しい進捗の成果については、この測量方法によるものが大きい。



第５図　江渡遺跡グリッド・遺構配置図

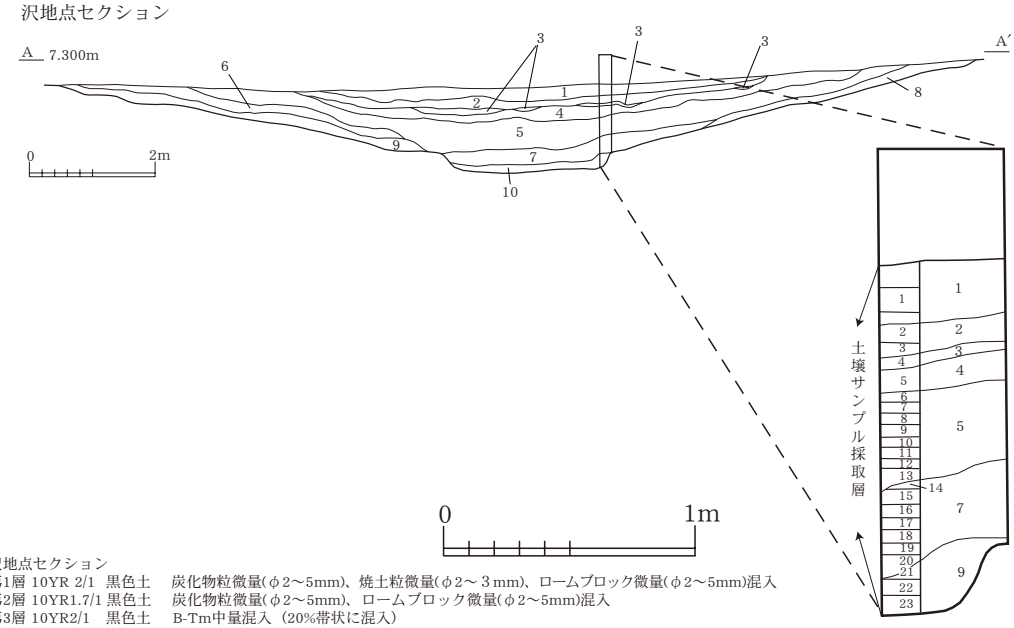
遺物の取り上げについては、遺構内の床面及び床面直上から出土した資料は基本的に測量により点上げし、堆積土出土のものは一括で取り上げ、遺構外出土資料は座標エリア毎に層一括で取り上げている。セクション図における土層の注記については『新版標準土色帖』に準拠した。

写真撮影については３５mmのモノクローム、リバーサルフィルムの各フィルムを併用し、作業の進展に伴い適宜行った。

第４節 地形と層序

本遺跡は、沖館川支流の左岸の丘陵上に立地する。丘陵の傾斜は基本的に南東方向へ傾斜している。今回の調査区は現況が旧畑地であったため、範囲確認調査の時点では、ほとんどが耕作土であったことから遺跡が形成された堆積土が確認できない状況であった。本調査の時点でも各調査地点では漸移層の直上部分の堆積は認められたが遺構の堆積土と比較しうる土層の堆積はあまり残存状況が良好ではなかった。しかしながら、便宜上の調査区であるＡ・Ｂ区を分けている沢地部分から良好な土層堆積が認められた。湧水および流水による影響も認められているが、サンプリングについて一部実施している。沢地部分からはほとんど遺物が出土しない状態であったが、第５層下付近から縄文土器の体部片が出土しており、縄文時代に浅い谷地形が存在したものと考えられる。平安時代の時点ではＢ－Ｔｍ火山灰がほぼ平行に堆積していることからほとんど微丘陵状に傾斜した地形であったことが推察される。沢地部分では平面的にＢ－Ｔｍ火山灰は確認されたが、Ｔｏ－ａ火山灰については、遺構内からブロック状に確認されたのみであり基本的に降灰の量は市内の他遺跡と同様の状況であったものと判断される。

基盤層である地山については、最上層については月見野火山灰で以下大谷火山灰、三内火山灰層と続くが、遺構の掘削はほとんどが月見野火山灰層直下の大谷火山灰層までしか及んでいない状況であった。



沢地点セクション
第1層 10YR 2/1 黒色土　炭化物粒微量(φ2～5mm)、焼土粒微量(φ2～３mm)、ロームブロック微量(φ2～5mm)混入
第2層 10YR1.7/1 黒色土　炭化物粒微量(φ2～5mm)、ロームブロック微量(φ2～5mm)混入
第3層 10YR2/1 黒色土　B-Tm中量混入（20%帯状に混入）
第4層 10YR2/3 黒褐色土 炭化物粒微量(φ2～3mm)、焼土粒微量(φ2～3mm)、ロームブロック微量(φ2～3mm)混入
第5層 10YR1.7/1 黒色土　炭化物粒微量(φ2～3mm)、焼土粒微量(φ2～5mm)、ロームブロック微量(φ2～3mm)混入
第6層 10YR2/2 黒褐色土 炭化物粒微量(φ2～5mm)、ロームブロック少量(φ2～5mm)、白色粒微量(φ2～3mm)
第7層 10YR1.7/1 黒色土　炭化物粒微量(φ2～3mm)、白色粒微量(φ1～2mm)、鉄分ブロック少量(φ5～10mm)
第8層 10YR2/2 黒褐色土 ロームブロック微量(φ2～3mm)、30％n割合で暗褐色の滲みが見られる
第9層 10YR3/3 暗褐色土 ロームブロック少量(φ2～15mm)、粘土ブロック少量(φ10～20mm下位等中量）、暗褐色土30%の割合で混入

第６図　沢地点セクション図

第５節　発掘調査経過（抄）

８月１日（金）発掘作業開始。環境整備、基準杭打設。Ａ区から鋤簾がけ開始。遺構確認の上、一部遺構について掘削開始。

８月４日（月）ＳＩ－０１セクション着手。ＳＩ－０２カマド１基着手。ＳＣ－０１セクション着手。Ａ区鋤簾がけと遺構確認終了。遺構掘削に従事している作業員以外はＢ区鋤簾がけ開始。

８月５日（火）ＳＣ－０１精査終了。ＳＫ・ＳＰ及びＳＸについては順次着手。ＳＩ－０４着手継続。ＳＩ－０２についてはカマド新旧２基確認。

８月６日（水）フィールドスケッチによる平面図作成開始。精査完了済のＳＩ－０５、ＳＫ－０１～０５、ＳＰ－０１～０３、ＳＸ－０１・０２について着手。

８月７日（木）ＳＩ－０１精査完了。

８月８日（金）盆休み前の最終日。雨天であったが、天候を見て調査可能時に調査継続。午後から雨が強くなり待機。

８月18日（月）盆休み明けで調査再開。Ｂ区のＳＩ－１１等についても掘り下げ開始。

８月19日（火）沢部分トレンチ掘削。予想以上に深度があり、掘削に難航する。また、遺構確認で空白部分についてはサブトレンチ（呼称にはアルファベットを使用）掘削開始。

８月20日（水）～22日（金）ＳＩ・ＳＫ等の精査継続とフィールドスケッチによる平面図作成。

８月25日（月）雨天により中止。

８月26日（火）雨天であったが、調査継続。

８月27日（水）～29日（金）雨天の時があったが、調査は順調に推移。

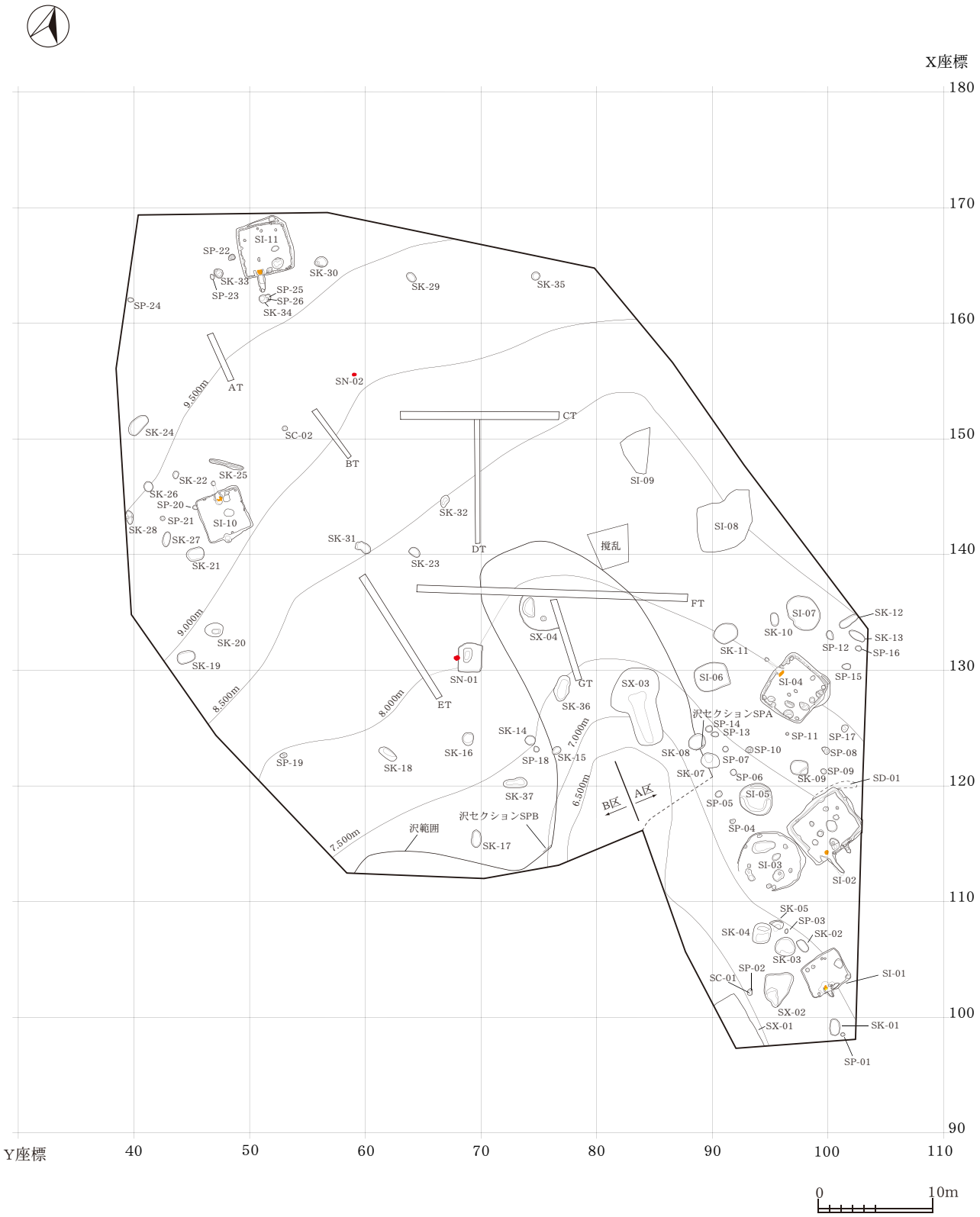
９月１日（月）～４日（木）　３日は雨天のため作業員は作業中止とし、測量に従事。

９月５日（金）午前中で精査および測量完了。午後、撤収のため後片付け及び機材搬出。調査終了。

第６節　整理作業および本書の編集について

整理作業は、すべて平成１５年度中に完了している。位置図等の図版については、青森市遺跡台帳に用いられている数値地図を用い、必要に応じて遺構図と加工合成している。遺構図のうち手作業で行ったセクション図及び１／１０の拡図については、スキャナで取り込み後、Adobe 社製 Illustrator でデジタルトレースを行い原図とした。また、１／２０のフィールドスケッチによる測量図についてはＤＸＦ形式のデータから Illustrator 形式のデータに変換し、データ編集をした後、各図を Illustrator 上で合成し図版を作成した。遺物については、水洗いした後、土器はすべて注記し、選別・接合・復元作業を行った後、再度選別し実測・断面実測・拓本作業を行っている。石器・石製品・土製品・鉄製品については、選別した後、実測作業を行っている。手作業で実測した後、実測図は Illustrator でデジタルトレースを行った。また、拓本についてもスキャナで線画形式で取り込んだ後、Adobe 社製 Photoshop によりレタッチを行い、トレース図及び拓本画像をそれぞれの必要な縮尺に縮小を行い、合成して図版とした。

報告書の組版および編集については Adobe 社製 InDesign2.0 を使用した。



第７図　江渡遺跡遺構配置図

第Ⅳ章　検出遺構

第１節　縄文時代の遺構

１.竪穴建物跡

ＳＩ－０３（図版７・８）

Ｘ１１３.５，Ｙ９８付近で検出した。確認調査時点トレンチ１８内で確認した円形のプランの建物跡である。平安時代の建物跡ＳＩ－０２と近接する形で検出した。調査時の掘削において南壁側部分の残存状況が悪く、形状が不整円形を呈することが判明した。残存部分の規模は長軸幅５８５ｃｍ、短軸幅５１０ｃｍ、深さ３０ｃｍ、面積（１６.４５２）㎡を測る。堆積土中において第３・４層中に平安時代に降灰したＢ－Ｔｍ火山灰の混入が認められ、炉跡部分から本遺構に帰属しないピットが検出されていることを考えると堆積土層のうち１～３層については、プライマリーな縄文時代の覆土でなく平安時代の土地利用における改変の状況を呈しているものと判断される。５層以下の堆積土については、建物跡の床面から検出した焼土・炭化物の影響が一部認められるが、沢部分で認められた第４層以下の土層と対比しうるものであり、堆積土の起源は概ね縄文時代に帰属しうるものであると判断される。柱穴と考えられるピットはＰｉｔ１・３～５・７～１０の８基で、柱穴配置については基本的には亀甲状の配置であると考えられるが、北～北東壁の部分がやや壁中央寄りに柱穴が掘られているのに対し、西壁～南壁寄り部分の柱穴は壁際に掘られている特徴がある。特に南壁側の部分については、一つの柱穴に近接する形でもう一つ柱穴が伴う形で検出している（Ｐｉｔ３・４、Ｐｉｔ７・８）。堆積土の土質と堆積状況等を考えると埋没過程でほぼ同時期に埋没した可能性があることから出入口等の施設が存在した可能性が考慮される。

炉跡は、西壁寄りの部分から１基検出した。ほぼ南北軸で、長軸幅１０６ｃｍ、短軸幅８４ｃｍ、深さ１８ｃｍを測る。前述したが、北壁寄りの部分で検出しているピットは本遺構に帰属しないもので、炉の構築物が掘り込みによって破壊されている。残存状況が不良であるが、壁面寄りの部分には安山岩等の自然礫が設置されており、底面には大木１０式併行期の深鉢が割られ二面にわたって敷かれた土器敷設石囲炉である。同一個体の破片の一部はＳＣ－０１の埋設土器に利用されている。焼土部分は土器敷設の面の間に堆積する部分に集中しており、破壊されている北壁寄りの箇所がやや被熱の度合が強い。

また、北壁寄りの部分からＳＫ－１を検出した。長軸幅１９８ｃｍ、短軸幅９０ｃｍ、深さ７０ｃｍを測る。平面形は不整長楕円形を呈し、断面形について東壁側が袋状を呈している。埋没が終了した時点の床面とほぼ同一の高さの部分で焼土面が６８×５０ｃｍの範囲で検出した。それ以外に床面から赤化した箇所が数カ所検出されている点と、後世の影響を受けているが、帰属した堆積土中に一定量の炭化物等の混入が認められることから本遺構について焼失の可能性が考えられる。

２.埋設土器遺構

ＳＣ－０１（図版１６）

Ｘ１０２.５，Ｙ９３.５付近で検出した。ＳＰ－０２と重複しており、本遺構の方が古い。掘り込み部分の規模は残存部で、５０×４０×２１ｃｍを測る。埋設された土器は、大木１０式併行期の深鉢土器で、前述のＳＩ－０３の炉跡から出土した土器と接合関係にある。ＳＣ－０１のものは、口縁部小片も一部含まれるが、主に文様モチーフのない体部下半にかけての部分を平行に打ち欠いて用いられている。本遺構

の構築時期はＳＩ－０３の炉跡の構築時期とほぼ同時期であることが判断される。

ＳＣ－０２（図版１６）

Ｘ１５１，Ｙ５３付近で検出した。確認時点で既に上部の一部が破壊されていたが、掘り込み部分の規模は、４５×４１×（１６）ｃｍを測る。掘り込みの部分に黒褐色土及び暗褐色土を充填したのち、最花式期の広口壺の口縁部および底部を打ち欠いた状態で設置し、さらにその内部には底部のみを打ち欠いた地紋が縄文のみの小型の深鉢形土器を入れ子状に設置している。

３.土坑

本遺跡内で検出した土坑は、形状・堆積土等から厳密に該期に帰属したと判定できるものが少なく、埋没過程での流入等の要因についても検討された。記述に際し、土層および出土遺物の下限時期を考慮しあくまでも上限資料としての取扱いとして本節内で取り扱うこととする。

ＳＫ－０１（図版１７）

Ｘ９９,Ｙ１００.６付近で検出した。規模は、１４５×８７×３５ｃｍを測る。平面形は楕円形を呈し、断面形はほぼ垂直に近い形で立ち上がる。堆積土中から縄文時代中期後半～末葉の縄文土器片が出土している。

ＳＫ－２５（図版１８）

Ｘ１４８，Ｙ４８で検出した。規模は、３０５×３７×８８ｃｍを測る。所謂溝状土坑（Ｔピット）で、上端の一部は撹乱により破壊されている。出土遺物は無いが、これまでの類例等から本節で取り扱った。

４.その他の遺構

ＳＸ－０１（第７図）

Ｘ９９，Ｙ９３付近で検出した。規模は調査区外へ延びているため不明であるが、５０１×（２００）×１０ｃｍを測る。斜面に面した浅い落ち込みで、堆積土中から中期後半～末葉の縄文土器片が出土している。

ＳＸ－０２（図版２１）

Ｘ１０３，Ｙ９５付近で検出した。規模は、２９０×２２７×３８ｃｍを測る。平面形は不整形で、断面形は凹凸を持つ。南壁側に不整長楕円形状の落ち込みを検出した。規模は１７４×１１０×１６ｃｍを測る。堆積状況は北壁側と南壁側と異なる埋没過程を呈しているが同一の土層が介在している。６層と取り扱った土層は漸移層で南壁側の壁面にあたる。堆積土中から縄文土器が出土している。

第２節　弥生時代以降の遺構

本節内で取り扱う遺構は土坑３基で、前節中で記述したように、本調査で検出した遺構は、明確に帰属時期の認定できないものが数多く存在する。また、遺物包含が認められるものについても埋没過程での混入の要素が含まれる。土層および出土遺物等を考慮しあくまでも上限資料としての取扱いとして本節内で取り扱うこととする。

１.土坑

ＳＫ－０３（図版１７）

Ｘ１０６，Ｙ９６付近で検出した。規模は、１７５×１６５×４０ｃｍを測る。風倒木を切る形で構築されており、平面形は不整円形を呈し、断面形はほぼ垂直に近い形で立ち上がる。堆積土中から

縄文土器中期後半～末葉の縄文土器片が出土している。また、弥生土器体部片１点が出土している。近接するＳＫ－０４からも円筒上層ｃ式期の口縁部片および中期後半～末葉の体部片等とともに弥生土器が出土しているが、本遺構出土資料と遺構間接合が認められた。本遺構出土の資料については摩滅・剥離等が著しく埋没過程での流入であると判断できる。

ＳＫ－０４（図版１７）

Ｘ１０７，Ｙ９４．５付近で検出した。規模は、１８０×１５０×５７ｃｍを測る。平面形は不整隅丸方形を呈し、断面形は緩やかに立ち上がる。ＳＫ－０３同様風倒木を切る形で構築されている。前節のＳＫ－０３中に記述したが、堆積土中に縄文土器とともに弥生土器が出土している。本遺構出土の弥生土器片は器面の摩耗が少ない。

ＳＫ－０５（図版１７）

Ｘ１０８，Ｙ９５．６付近で検出した。規模は、（９２）×（６５）×４７ｃｍを測る。平面形は不整形で、断面形は段状に立ち上がる。堆積土がＳＫ－０４と同質の土層が含まれ、出土遺物についても該期に帰属する遺物の出土があったことから本節で取り扱った。

第３節　古代の遺構

１.竪穴建物跡

ＳＩ－０１（図版１・２）

Ｘ１０３．８，Ｙ９９．８で検出した。規模は、長軸幅３６５ｃｍ、短軸幅３２０ｃｍ、深さ３０ｃｍ、面積９．９９６㎡を測る。平面形は長方形で、断面形は各壁とも緩やかに立ち上がる。斜面下方にあたる南東壁側が漸移層を掘り込む形で構築されており、やや脆弱な面を壁面としている。掘り方は基盤層である月見野火山灰層を掘り込む形で不整形に掘られており、そこに粒径の大きなロームブロックが多量混入する黒褐色土が充填され床面としている。また、図版１のセクション図上で、調査時に「掘りすぎ」と取り扱った北東・北西壁については、地山土であったため掘りすぎとして取り扱ったが、整理作業時の検討において、掘り方部分との立ち上がりとの非整合の要因が掘り方構築後の貼壁であったという可能性について否定はできない。壁溝は検出しておらず、ピットについては９基検出したが、Ｐｉｔ７と取り扱ったもの以外は十分な深さを呈しておらず、柱穴配置についての詳細は不明であるが、Ｐｉｔ１・２・７については柱穴として機能した可能性を有している。また、Ｐｉｔ８・９はカマド脇ピットである。

土層は１１層に分層されたが、このうち埋土として認定できるのは１～６層及び８・９層で、８・９層に関してはカマド周辺の影響による土層である。廃絶後、床面が４層により覆われ、斜面上位にあたる北東・北西壁側では３層によって埋没が完了している。３層上面には十和田ａ（Ｔｏ－ａ）火山灰がブロック状に堆積しており、さらにカマド部分には白頭山－苫小牧（Ｂ－Ｔｍ）火山灰が混入していることが確認されていることから、本遺構はＴｏ－ａ火山灰の降灰前に廃絶された建物跡であると認定できる。

カマドは、南東壁側のやや南よりの部分（３７：６３）の位置から検出しており、袖部幅７２ｃｍ、煙道長５６ｃｍを測る。主軸方位はＮ－１２８°－Ｅである。構造は半地下式で、煙道の短い簡易型に近い形状を呈している。土層は前庭部の硬化部分での赤化面の部分を含めて１９層に分層した。袖は、９～１１層で月見野火山灰層主体のパミス質な粘土を主体としており､左袖の部分がやや幅広の形状を呈する。支脚として土師器小甕が煙道の掘り込み部分よりやや南よりの軸線で倒位に設置されており、火床面につ

いても支脚設置箇所の前面を中心に被熱箇所が強い状態で確認されたことから、使用時点では構築部分の軸線とは異なる軸線で使用されていた可能性が持ち得ている。火床面と支脚の延長線上の軸線についてはＮ－１３０°－Ｅである。火床面は１６・１７層の上面で、１７層についてはロームブロックの充填箇所が被熱している。天井部については袖部と同様に月見野火山灰層主体の４・６層であると考えられ、崩落した状況で堆積していることから廃絶時点で破壊等の行為は行われていないものと考えられる。また、カマド構築部分を中心に硬化面が１５３×９４ｃｍの不整形な状態で確認された。カマド堆積土セクション中１５層と取り扱った赤化面は前庭部の被熱箇所として認定できる資料で、それ以外の部分については前述の建物跡堆積土８・９層に見られるように焼土ブロック・炭化物等の混入が認められることから、廃絶時の崩落による影響が考慮される。

ＳＩ－０２（図版３～６）

Ｘ１１６．５，Ｙ１０３で検出した。確認調査時点トレンチ１８内で確認した方形のプランの建物跡である。東端にあたる北東壁と南東壁が接するコーナーが調査区外のブロック塀にあたるため、調査不可能であったが、調査区内での規模は、長軸幅５７５ｃｍ、短軸幅４８５ｃｍ、深さ３２ｃｍ、面積１９．１１６㎡を測る。平面形は長方形で、断面形はほぼ垂直に近い形で立ち上がる。また、北西壁についてはＳＤ－０１（長さ約４ｍ、幅３５～６０ｃｍ、深さ１５ｃｍ）と接していたが、新旧関係等についての詳細は確認していない。掘り方はほぼ全面月見野火山灰層直下の粘質地山土まで掘削されており、ロームブロックの混入する暗褐色土が充填され床面としているが、調査時に最終段階の床面除去後、２２層直下の部分でピット（Ｐｉｔ６～１０）を検出し、前段階の床面の一部と思われる面を確認したことから本遺構は改築が行われたものと調査時に判断したが、整理作業時において出土遺物の接合関係からこれらのピット出土資料と最終段階に属した面から出土した遺物との間に接合関係が認められたことから、厳密な判断はできない。壁溝は最終段階に伴うものであり、カマド設置部分周辺を除く箇所から検出した。掘り方幅が北西～南西壁寄りの部分がやや広く最大幅５０ｃｍを測るが、褐色土等が充填されており、廃絶時点の埋土については焼土粒が帯状に上面で検出される状態であった。ピットは前述の前段階のピット５基を除く８基が最終段階の面から検出されたが、主柱穴として考えられるピットであるＰｉｔ１・３・４・１２の配置がかなり近接した長方形配置をしており、北東壁側部分から検出したＰｉｔ５・１３と同様にＰｉｔ１１とＰｉｔ１の西側の壁溝部分に柱穴状の落ち込みが認められることから柱穴配置の変更が行われた可能性がある。

土層は２４層に分層されたが、廃絶後の埋土については１～６、８～１０層で、７層についてはＳＩ－０１と同様に褐色土が充填されており、貼壁の可能性がある。床面から炭化物・焼土が検出していることから本遺構は最終段階で焼失にあったものと考えられるが、出土遺物の状況や主柱や腰板に相当する炭化材が検出しておらず、焼土や炭化材の出土範囲が各壁面寄りの部分のみから検出している状況をみると意図的な焼失の可能性を持ち得ている。その影響にある８層が床面全体を覆う形で堆積しているが、北東壁側にはＢ－Ｔｍ火山灰が微量混入する６層の堆積が見られ、その上位に焼土粒・炭化粒等が混入する５層が堆積した後、住居全面にＢ－Ｔｍ火山灰の二次堆積土である３・４層が堆積し、最終的に沢部分でＢ－Ｔｍ火山灰火山灰層直下に堆積している第４層と対比される１層が堆積して埋没が完了している。このことから付近の堆積土が自然崩落により遺構内に堆積し埋没したものと考えられる。Ｔｏ－ａ火山灰については、床面上からブロック状に確認している（図版６カマド２セクション図第１１層参照）。

出土遺物の構成（第Ｖ章参照）と遺構の状況が時期的な判断において異なることから検討も必要とされ

るが、ＳＩ－０１と同様の形状と軸線を有していることから、廃絶時期については明らかにＴｏ－ａ火山灰降灰以前であると判断される。

カマドは２地点から３基検出した。カマド２については火床面等の確認がなされなかったため、具体的使用については確証がないが、南東壁のほぼ中央４７：５３の位置から検出した。主軸方位はＳＩ－０１のカマドと同様にＮ－１２８°－Ｅである。煙道長は６６ｃｍを測り、煙道の構造も半地下式でＳＩ－０１のカマドと類似した形状を呈している。袖部のうち右袖の基部については、最終段階の検出時点でも確認している。最終段階でカマドとして機能していたのは、南壁の７５：２５の位置から検出したカマド１である。新旧２面存在しており、最終段階のものについて構造は半地下式で、主軸方位はＮ－１２５°－Ｅで、煙道長１７６ｃｍを測る。燃焼部のうち火床面については不明瞭で、袖部については左袖が欠落しており、右袖にかけて礫を含む多量の土器が散逸した状況で出土したことから最終的な廃絶時点で破壊の伴う廃棄が行われていたものと判断される。旧カマドについては主軸方位がＮ－１３１°－Ｅで、煙道長８６ｃｍを測る。構造は地下式で、煙道は燃焼部から１２°の角度で傾斜し、煙出奥壁は垂直に近い形で立ち上がる。火床面については本カマド時のものである。

ＳＩ－０４（図版９・１０）

Ｘ１２８，Ｙ９７．１で検出した。規模は、長軸幅５１０ｃｍ、短軸幅４８０ｃｍ、深さ５０ｃｍ、面積１７．７９６㎡を測る。平面形は隅丸長方形である。断面形は南・東壁部分が風倒木の影響が生じているが、壁上部の一部で緩やかに立ち上がる箇所がある。構築は、ＳＩ－０２と同様に月見野火山灰層直下の粘質土層まで不整形にほぼ全面掘削されており、月見野火山灰層起源のパミスブロックを混入する黒褐色土が充填され床面としている。壁溝は南東壁隅周辺部以外ほぼ全周する形で検出しており、カマド構築部分直下からも検出した。溝内は壁柱ないしは腰板の設置痕と考えられる落ち込みが確認されている。ピットは１６基検出したが、柱穴として機能した可能性を有するものはＰｉｔ１・２・３・７・１０・１２である。このうち２と１２については底面の傾斜がそれぞれ東側に傾斜する形で掘り込まれており、それぞれの軸線上（Ｐｉｔ１－３、Ｐｉｔ７－１２）の支柱として機能した可能性も考慮される。

土層は１３層に分層されたが、廃絶後の埋土は１～８層で、各壁際の部分で一部崩落が生じた後、パミスブロックが混入する黒褐色土を主体とする５層によって住居全面が覆われ、カマド設置壁寄りの部分で一部Ｔｏ－ａ火山灰が混入する堆積が見られるが、混入物がほとんど含まれない黒色土によって埋没が完了している。ピット１１の第１層中からＴｏ－ａ火山灰の二次堆積物が確認されていることから廃絶時期についてはＴｏ－ａ降灰より古い段階で埋没が開始しているものと判断される。

カマドは西壁側の５９：４１の位置から検出しており、袖部幅７２ｃｍ、煙道長１３２ｃｍを測る。主軸方位はＮ－６８°－Ｗである。構造は地下式で、燃焼部は火床面が左袖基部の延長線上をややはみ出した形で検出している。支脚設置位置から土師器坏２点が重なった状態で、その右脇の右袖部分から角柱状の自然礫１点が出土しているが、火床面直上に堆積している天井崩落土の一部である７層の上位に位置していることから廃絶時点で再配置された可能性を有している。煙道は燃焼部から１５°の角度で傾斜し、煙道部で再度角度を変え落ち込んでいる。煙道奥壁は壁途中で角度を変えているが垂直に近い形で立ち上がる。

ＳＩ－１０（図版１１・１２）

Ｘ１４３．４，Ｙ４７．８で検出した。確認調査でトレンチ１１から確認した隅丸方形の建物跡である。規模は、長軸幅４２０ｃｍ、短軸幅３９０ｃｍ、深さ４５ｃｍ、面積１３．７８８㎡を測る。南西壁部分

でＳＰ－２０と重複しているが、本遺構の方が古い。平面形は隅丸方形で、断面形は各壁ともほぼ垂直に近い形で立ち上がる。構築は、月見野火山灰層を掘り込み、部分的にロームブロックが混入する月見野火山灰層主体の地山土を充填しており、床面としている。壁溝は検出しておらず、ピットについても８基検出したが、配置上可能性を有するものはあるが、明確に柱穴として機能したと認定できないものである。床面中央及びカマド右袖脇の部分ではＳＸ－１・２と取り扱った月見野火山灰層起源の地山土によるやや盛り上がった硬化面が確認され、ＳＩ－０１カマドの前庭部と同様の状況を呈している。

堆積土は１１層に分層されたが、このうち、撹乱による影響が８～１０層に認められ、廃絶後の埋土については１～７層までである。床面直上をロームブロックが混入した７層が南壁側を除いた箇所を覆っており、北東方向から炭化粒・ローム粒が混入する６層が堆積し、Ｔｏ－ａ火山灰がブロック状に混入する５層が建物跡全体を埋没させている。５層直上に堆積する４層中からはＢ－Ｔｍ火山灰が含まれる４層が帯状に堆積しており、最終的に沢セクション第２層に対比される１層によって埋没が完了している。遺物の出土状況が床面周辺を中心としており、火山灰が介在した層からはほとんど出土していないことを考慮すると、Ｔｏ－ａ火山灰降灰後Ｂ－Ｔｍ火山灰降灰時期の間に本遺構には人的介在が皆無であったと判断できる。

カマドは北西壁側のほぼ中央（５１：４９）の位置から１基検出しており、煙道長１０６ｃｍを測る。主軸方位はＮ－３９°－Ｗである。構造は地下式で、燃焼部は浅い掘り込みを有し、火床面がその上に形成されている。また、袖部は左袖基部のみが残存しているが検出しておらず、構築土についてはかろうじて支脚設置部分のみから検出している。芯材設置箇所と考えられるそれぞれの部分に浅い溝状の掘り込みが確認され、その部分と火床面との位置関係については整合性が認められる。溝状の痕跡から推定される袖部幅は６６ｃｍである。支脚は軸線の中央に浅いピット状の掘り込みがなされ､その上位に角礫を置き、さらに土器片が３点重ねられたような状況で検出しているが、燃焼部の破壊状況と遺物の出土状況からカマド廃絶時に破壊の影響が生じていないとは認定できず、破壊後の再配置の結果としての位置である可能性も含んでいる。煙道は燃焼部から２０°の角度で傾斜し、緩やかに傾斜しながら煙道部へ向かう。煙道奥壁は垂直に近い形で立ち上がり、開口部上面でやや開き段状に立ち上がる。

ＳＩ－１１（図版１３～１５）

Ｘ１６５．５，Ｙ５１で検出した。確認調査でトレンチ６から確認した方形の建物跡である。規模は、長軸幅４８０ｃｍ、短軸幅４６５ｃｍ、深さ４５ｃｍ、面積は１６．１０４㎡を測る。平面形は方形であるが、北壁東隅側に棚状の段があり、突出したような形状を呈している。この部分の内側には壁溝があり、壁柱穴等が存在しているため、掘り方時の掘削痕の可能性もあったが、段上に機能したピットが認められた点と埋没時の堆積においても一連の堆積状況を呈していることから廃絶時においては建物内であったことが考えられる。断面形は各壁ともほぼ垂直に近い形で立ち上がる。構築はほぼ全面を不整形に掘り込み、月見野火山灰層と黒色土との混合土によって充填し、床面としている。壁溝はカマド構築部分以外全周する形で検出した。ＳＩ－０４と同様に腰板及び支柱設置として断続的に浅い掘り込みが繰り返す形で検出した。ピットは１４基検出したが、主柱穴としての機能はなく、壁溝側から検出したＰｉｔ１１・１２に見られるように壁寄りの部分に支柱穴状のピットが掘り込まれ、壁溝上に設置された支柱穴と組み合わされ上部構造が建ち得ていたものと考えられる。

その他南壁寄りの部分からＳＫ－１と取り扱った土坑１基を検出した。規模は９２×９０×３７ｃｍを測る。底面直上から礫１点、堆積土中から土器片が出土したが混入的な出土状況であった。床面とほぼ同

一面である１層の上面では雨水等の二次堆積によるＢ－Ｔｍ火山灰が検出している。

堆積土は９層に分層した。このうち埋土は１～５層で、７層については撹乱による影響である。壁際および中央に部分的に漸移層起源の５層が堆積し、崩落等の要因をもつロームブロックが混入した４層により建物全体の下半分が埋没している。その後上面に沢セクション第３層と比較される３層が堆積し、この３層については前述のＳＫ－１の箇所で落ち込んで堆積しており、その帰結が床面直上部分でのＢ－Ｔｍ火山灰の検出である。よってＳＫ－１は廃絶段階では開口しており、埋没に関しても自然堆積によるものである。建物そのものは最終的にＳＩ－１０と同様に沢セクション第２層に対比される１層により埋没が完了している。本遺構とＳＩ－１０は埋没過程においてＢ－Ｔｍ火山灰の検出は同様であるが、Ｔｏ－ａ火山灰の検出がＳＩ－１１からは認められず、またＢ－Ｔｍ火山灰の介在層についても埋没時点での堆積と二次堆積の影響が伴う時点という差が生じている。本遺構については後述するカマドの状況等も踏まえて、少なくともＳＩ－１０とは異なりＴｏ－ａ火山灰降灰後まで機能していた可能性がある。

カマドは南壁側の西壁寄り（６８：３２）の部分から１基検出したが、同一部分で３回作り替えが行われている。各段階のカマドとも堆積土中に火山灰は介在していない。最終段階のものについては半地下式で、袖部幅７２ｃｍ、煙道長１５０ｃｍを測る。主軸方位はＮ－１５０°－Ｅである。床面より若干高い位置に構築されており、燃焼部・煙道部・煙出部とも崩落した堆積状況を呈しているが、良好に残存している。煙道は燃焼部から緩やかに立ち上がった後、煙道部中央で煙出部へ向かってやや傾斜する。煙出部は底面が狭いピット状を呈し、煙出奥壁は６０°の角度で立ち上がる。二段階目のものについては、最終段階同様半地下式で、煙道長は１３５ｃｍを測り、袖部の基部は最終段階と同様であると考えられるが、右袖側が土圧により不整合な堆積を呈している。主軸方位はＮ－１５０°－Ｅと最終段階と同一の軸線である。一段階目のカマドの煙出中位部分辺りまで最大幅８４ｃｍ×１６２ｃｍの長方形状に掘り込み、月見野火山灰層主体の地山土を充填し煙道部を構築している。機能時点での煙道幅は最終段階とほぼ類似した幅であるが、燃焼部寄りの箇所が１０ｃｍ程幅広い形で機能していたようである。本段階の煙道底面では、燃焼部寄りの箇所から浅いピット状の落ち込みと煙道部と煙出部との境界付近から浅い溝状の落ち込みを検出している。煙出については煙道部分から約２０ｃｍの深さにピット状に掘り込んでいる。また、燃焼部からは支脚として機能した土製支脚が出土している。一段階目のカマドは、地下式で、袖部は基部のみであるが幅９４ｃｍ、煙道長１３６ｃｍを測る。主軸方位はＮ－１５２°－Ｅである。燃焼部には火床面部分に扁平な自然礫を並べその部分を火床面としている。煙道は燃焼部から２０°の角度でややいびつな形状で傾斜している。煙出は上部が欠落しているが、残存部分の奥壁は袋状に入り込んだ後、垂直に近い形で立ち上がっている。

２.土坑

ＳＫ－１７（図版１８）

Ｘ１１５.６，Ｙ６９.６付近で検出した。規模は、１５２×８５×２８ｃｍを測る。平面形は楕円形を呈し、断面形は緩やかに立ち上がる。１層中から鉄滓が少量出土している。

ＳＫ－３４（図版１４）

Ｘ１６２，Ｙ５１付近で検出した。規模は、７８×６６×４４ｃｍを測る。平面形は不整円形を呈し、断面形は垂直に近い形で立ち上がる。カマドの精査時に確認してセクションラインがＳＩ－１１のカマドのセクション面と同一ラインであったためカマドと併行して精査した。ＳＰ－２５・２６と重複しており、

確認当初抜き取り痕の可能性も持ち得ていたが、堆積土層との関係で、本遺構の方が新しいと判断した。土層番号についてカマドの堆積土と標記を分けるためアルファベットを用いたが、堆積層は６層に分層される。柱穴状の掘り方及び堆積状況を呈しており、構築時点での裏込層がＤ・Ｆ層にあたり、抜き取り時の堆積層がＥ層、抜き取り後の堆積層がＡ～Ｃにあたる。Ｂ層中にはＢ－Ｔｍ火山灰が粒状及び・ブロック状に堆積しており、ＳＩ－１１周辺に堆積した土層との関連が考慮される。堆積土中から土師器が出土している。

３.ピット

ＳＰ－２５（図版２０）

Ｘ１６２.２，Ｙ５１.６付近で検出した。規模は、（６０）×（４５）×２４ｃｍを測る。本遺構は前述のＳＫ－３４の記述のとおり、ＳＫ－３４とＳＰ－２６と重複しており、本遺構が最も古い。平面形は残存形で楕円形を呈し、断面形は垂直に近い形で立ち上がる。堆積状況は崩落等の要因を含む自然堆積である。

ＳＰ－２６（図版２０）

Ｘ１６２,Ｙ５１.５付近で検出した。規模は、(３３)×(３０)×２８ｃｍを測る。本遺構は前述のとおり、ＳＫ－３４とＳＰ－２５と重複しており、ＳＰ－２５＜ＳＰ－２６＜ＳＫ－３４の関係である。平面形は残存形で不整円形を呈し、断面形は擂鉢状に立ち上がる。土層セクションについて局所的にしか観察できなかったため、詳細については不明であるが、堆積土についてはＳＰ－２５同様崩落等の要因を含む自然堆積である。

第４節　時期不明の遺構

１.竪穴建物跡

ＳＩ－０５（図版１６）

Ｘ１１９,Ｙ９４付近で検出した。確認調査時点トレンチ１８内で確認した円形のプランの竪穴である。規模は、２８０×２７５×２５ｃｍ、面積は５.６０４㎡を測る。平面形は円形を呈し、断面形は緩やかに立ち上がる。北壁及び南壁側にテラス状の段を有する。堆積土中から縄文土器１片が出土したが、時期判別まで至らなかった。

ＳＩ－０６（図版１６）Ｘ１２９，Ｙ９０付近で検出した。規模は、２９５×２４０×１７ｃｍ、面積は５.４３６㎡を測る。平面形は隅丸長方形を呈し、断面形は緩やかに立ち上がる。

ＳＩ－０７（図版１６）Ｘ１３５，Ｙ９８付近で検出した。確認調査時点トレンチ１９内で確認した方形のプランの竪穴である。規模は、３２０×２６０×１５ｃｍ、面積は５.８９２㎡を測る。平面形は精査の結果、楕円形を呈し、断面形は緩やかに立ち上がる。南壁側がやや不整形を呈する。

ＳＩ－０８（第７図）Ｘ１４３，Ｙ９１付近で検出した。不整方形を呈する。確認時に黒褐色土の混合土が堆積したため精査を行ったが、撹乱等の要因が否めず明確な遺構として認定できなかった。

ＳＩ－０９（第７図）Ｘ１４９，Ｙ８３付近で検出した。ＳＩ－０８と同様の土質であったため、精査を実施したが、結果ＳＩ－０８と同様の状況で、遺構として認定できなかった。なお、第７図中配置図にカクランとして表示している竪穴状の落ち込みについてもＳＩ－０８・０９と同様の状況である。

２.土坑

ＳＫ－０２（図版１７）Ｘ１０６，Ｙ９８付近で検出した。規模は、１２２×７０×２５ｃｍを測る。平面形は楕円形を呈し、断面形は緩やかに立ち上がる。堆積土が近接するＳＫ－０３と同質であるが、出土遺物がないことから本節で取り扱った。

ＳＫ－０７（図版１７）Ｘ１２２.４，Ｙ８９.６付近で検出した。規模は、１５５×１３０×２７ｃｍを測る。平面形は不整円形を呈し、断面形は壁上部の一部で緩やかに立ち上がる。

ＳＫ－０８（図版１７）Ｘ１２４,Ｙ８８.５付近で検出した。規模は、１５０×１３０×２２ｃｍを測る。平面形は楕円形を呈し、断面形は緩やかに立ち上がる。

ＳＫ－０９（図版１７）Ｘ１２１.６，Ｙ９７.４付近で検出した。規模は、１５３×１２８×２２ｃｍを測る。平面形は隅丸方形を呈し、断面形は緩やかに立ち上がる。南東部分にテラスを持つ。

ＳＫ－１０（図版１７）Ｘ１３４.４，Ｙ９５.６付近で検出した。規模は、１１５×７０×１２ｃｍを測る。平面形は小判形を呈し、断面形は緩やかに立ち上がる。

ＳＫ－１１（図版１７）Ｘ１３３，Ｙ９１付近で検出した。規模は、２１５×１７５×１３ｃｍを測る。平面形は不整楕円形を呈し、断面形は緩やかに立ち上がる。

ＳＫ－１２（図版１８）Ｘ１３４,Ｙ１０１.２付近で検出した。規模は、１８５×６８×３０ｃｍを測る。平面形は小判形を呈し、断面形は垂直に立ち上がる。

ＳＫ－１３（図版１８）Ｘ１３２.８，Ｙ１０２.５付近で検出した。規模は、１５５×７０×１０ｃｍを測る。平面形は小判形を呈し、断面形は垂直に立ち上がる。

ＳＫ－１４（図版１８）Ｘ１２４，Ｙ７４付近で検出した。規模は、９０×８０×１５ｃｍを測る。平面形は不整円形を呈し、断面形は垂直近い形で立ち上がる。

ＳＫ－１５（図版１８）Ｘ１２３，Ｙ７６.６付近で検出した。規模は、８０×６０×１７ｃｍを測る。平面形は不整楕円形を呈し、断面形は垂直に立ち上がる。

ＳＫ－１６（図版１８）Ｘ１２４，Ｙ６８.９付近で検出した。規模は、１１０×９５×２５ｃｍを測る。平面形は不整円形を呈し、断面形は垂直に立ち上がる。

ＳＫ－１８（図版１８）Ｘ１２３，Ｙ６２付近で検出した。規模は、１６５×８０×４５ｃｍを測る。平面形は不整長楕円形を呈し、断面形は緩やかに立ち上がる。

ＳＫ－１９（図版１８）Ｘ１３１,Ｙ４３.４付近で検出した。規模は、１６０×１０４×２５ｃｍを測る。平面形は小判形を呈し、断面形は垂直に立ち上がる。

ＳＫ－２０（図版１８）Ｘ１３３.４,Ｙ４７付近で検出した。規模は、１５５×１２０×４５ｃｍを測る。平面形は不整楕円形を呈し、断面形は垂直に立ち上がる。底面中央付近に小判形の落ち込みがある。規模は３８×２２×１０ｃｍを測る。

ＳＫ－２１（図版１８）Ｘ１４０,Ｙ４５.２付近で検出した。規模は、１５３×１１０×３２ｃｍを測る。平面形は不整長楕円形を呈し、断面形は垂直に立ち上がる。

ＳＫ－２２（図版１８）Ｘ１４７，Ｙ４３.６付近で検出した。規模は、６７×４７×１７ｃｍを測る。平面形は楕円形を呈し、断面形は凹凸を持つ。

ＳＫ－２３（図版１８）Ｘ１４０.２，Ｙ６３付近で検出した。規模は、９２×８２×１５ｃｍを測る。平面形は不整楕円形を呈し、断面形は垂直に立ち上がる。

ＳＫ－２４（図版１８）Ｘ１５１,Ｙ４０.４付近で検出した。規模は、２０８×１１０×２０ｃｍを測る。

平面形は小判形を呈し、断面形は凹凸を持つ。
ＳＫ－２６（図版１８）Ｘ１４６，Ｙ４１付近で検出した。規模は、８５×８０×２０ｃｍを測る。平面形は円形を呈し、断面形は垂直に立ち上がる。
ＳＫ－２７（図版１９）Ｘ１４１，Ｙ４３付近で検出した。規模は、１３２×６５×２０ｃｍを測る。平面形は小判形を呈し、断面形は垂直に立ち上がる。
ＳＫ－２８（図版１９）Ｘ１４３，Ｙ３９．６付近で検出した。規模は、１２０×６２×２６ｃｍを測る。平面形は小判形を呈し、断面形は垂直に立ち上がる。
ＳＫ－２９（図版１９）Ｘ１６４，Ｙ６４付近で検出した。規模は、９２×６５×２０ｃｍを測る。平面形は楕円形を呈し、断面形はほぼ垂直に立ち上がる。
ＳＫ－３０（図版１９）Ｘ１６５．４，Ｙ５６付近で検出した。規模は、１１２×９０×２５ｃｍを測る。平面形は不整円形を呈し、断面形は段状に立ち上がる。
ＳＫ－３１（図版１９）Ｘ１３１．６，Ｙ５９．８付近で検出した。規模は、１４０×７０×２２ｃｍを測る。平面形は不整楕円形を呈し、断面形は垂直に立ち上がる。
ＳＫ－３２（図版１９）Ｘ１４４．６，Ｙ６７付近で検出した。規模は、１０８×６６×２８ｃｍを測る。平面形は不整楕円形を呈し、断面形は緩やかに立ち上がる。
ＳＫ－３３（図版１９）Ｘ１６４．４，Ｙ４７．２付近で検出した。規模は、８７×７２×１８ｃｍを測る。平面形は不整円形を呈し、断面形は柱穴状を呈する。南側部分にテラスを有する。
ＳＫ－３５（図版１９）Ｘ１６４，Ｙ７４．６付近で検出した。規模は、７３×７０×２０ｃｍを測る。平面形は円形を呈し、断面形は緩やかに立ち上がる。
ＳＫ－３６（図版１９）Ｘ１２８，Ｙ７８付近で検出した。規模は、２２８×１２５×４８ｃｍを測る。平面形は不整楕円形を呈し、断面形は緩やかに立ち上がる。
ＳＫ－３７（図版１９）Ｘ１２０．４，Ｙ７３付近で検出した。規模は、２０５×７８×５２ｃｍを測る。平面形は小判形を呈し、断面形は凹凸を持っている。

３．ピット
ＳＰ－０１（図版１９）Ｘ９８．５，Ｙ１０１．２付近で検出した。規模は、３７×３２×１２ｃｍを測る。平面形は円形を呈し、断面形は垂直に立ち上がる。
ＳＰ－０２（図版１６）Ｘ１０２．４，Ｙ９３．４付近で検出した。ＳＣ－０１と重複しており、本遺構の方が新しい。規模は、２４×１９×３０ｃｍを測る。平面形は隅丸方形を呈し、断面形は垂直に立ち上がる。
ＳＰ－０３（図版１９）Ｘ１０７．４，Ｙ９６．４付近で検出した。規模は、４０×２７×２０ｃｍを測る。平面形は楕円形を呈し、断面形は垂直に立ち上がる。
ＳＰ－０４（図版１９）Ｘ１１７，Ｙ９１．６付近で検出した。規模は、５０×３５×１０ｃｍを測る。平面形は不整楕円形を呈し、断面形は緩やかに立ち上がる。
ＳＰ－０５（図版１９）Ｘ１１９．４，Ｙ９０．４付近で検出した。規模は、６３×５２×２０ｃｍを測る。平面形は不整円形を呈し、断面形は段状に立ち上がる。
ＳＰ－０６（図版１９）Ｘ１２１，Ｙ９１．８付近で検出した。規模は、５５×５４×１３ｃｍを測る。平面形は円形を呈し、断面形は緩やかに立ち上がる。
ＳＰ－０７（図版１９）Ｘ１２３，Ｙ９１付近で検出した。規模は、５０×５０×１５ｃｍを測る。平面

形は円形を呈し、断面形は緩やかに立ち上がる。

ＳＰ－０８（図版１９）Ｘ１２３，Ｙ９９．９付近で検出した。規模は、７５×５０×３５ｃｍを測る。平面形は不整楕円形を呈し、断面形は段状に立ち上がる。２層が裏込土に相当し、柱穴設置面が東寄りに傾斜した掘り方を有している。

ＳＰ－０９（図版１９）Ｘ１２１．２，Ｙ９９．６付近で検出した。規模は、５２×４５×２５ｃｍを測る。平面形は不整円形を呈し、断面形は垂直に立ち上がる。

ＳＰ－１０（図版２０）Ｘ１２３，Ｙ９３．２付近で検出した。規模は、６５×５５×２７ｃｍを測る。平面形は不整円形を呈し、断面形は柱穴状を呈する。東壁寄りの部分が柱穴にあたり、西壁寄りの落ち込みは抜き取り痕であると考えられる。

ＳＰ－１１（図版２０）Ｘ１２４．５，Ｙ９５．５付近で検出した。規模は、２６×２５×２７ｃｍを測る。平面形は円形を呈し、断面形は垂直に立ち上がる。

ＳＰ－１２（図版２０）Ｘ１３３，Ｙ１００．２付近で検出した。規模は、８５×５６×２３ｃｍを測る。平面形は楕円形を呈し、断面形及び堆積状況が柱穴状を呈する。

ＳＰ－１３（図版２０）Ｘ１２４．４，Ｙ９０．２付近で検出した。規模は、６６×４５×１５ｃｍを測る。平面形は楕円形を呈し、断面形は緩やかに立ち上がる。

ＳＰ－１４（図版２０）Ｘ１２５，Ｙ８９．８付近で検出した。規模は、６２×５５×１８ｃｍを測る。平面形は不整円形を呈し、断面形は垂直に立ち上がる。

ＳＰ－１５（図版２０）Ｘ１３０．４，Ｙ１０１．５付近で検出した。規模は、７６×５０×２３ｃｍを測る。平面形は不整楕円形を呈し、断面形は垂直に立ち上がる。

ＳＰ－１６（図版２０）Ｘ１２４．５，Ｙ９５．５付近で検出した。規模は、５３×４５×１５ｃｍを測る。平面形は円形を呈し、断面形は垂直に立ち上がる。

ＳＰ－１７（図版２０）Ｘ１２５，Ｙ１０１．４付近で検出した。規模は、６５×５３×３０ｃｍを測る。平面図は落ち込み部のみを図化したが東側に不整楕円形の浅い段状の落ち込みを確認しており、堆積土は不整円形状の部分には３層のみが、浅い落ち込み状の部分には１・２層の堆積が認められた。

ＳＰ－１８（図版２０）Ｘ１２３，Ｙ７４．８付近で検出した。規模は、５０×４５×１２ｃｍを測る。平面形は不整円形を呈し、断面形は擂鉢状を呈する。

ＳＰ－１９（図版２０）Ｘ１２２．６，Ｙ５３付近で検出した。規模は、６３×４３×１８ｃｍを測る。平面形は不整楕円形を呈し、断面形は柱穴状を呈する。

ＳＰ－２０（図版２０）Ｘ１４４，Ｙ４５．３付近で検出した。ＳＩ－１０と重複しており、本遺構の方が新しいが、精査の関係で東側部分が欠落している。規模は、残存部分で（４０）×（３６）×１２ｃｍを測る。平面形は残存部分の形状から不整楕円形を呈しているものと考えられ、残存部分の断面形は垂直に立ち上がっている。

ＳＰ－２１（図版２０）Ｘ１４３，Ｙ４２．５付近で検出した。規模は、４０×４０×１６ｃｍを測る。平面形は円形を呈し、断面形は擂鉢状を呈する。

ＳＰ－２２（図版２０）Ｘ１６５．７，Ｙ４８．５付近で検出した。規模は、６０×５０×３０ｃｍを測る。平面形は不整楕円形を呈し、断面形は垂直近い形で立ち上がる。

ＳＰ－２３（図版２０）Ｘ１６４，Ｙ４５．８付近で検出した。規模は、５０×３５×１４ｃｍを測る。平面形は不整楕円形を呈し、断面形は緩やかに立ち上がる。

ＳＰ－２４（図版２０）Ｘ１６２，Ｙ３９．８付近で検出した。規模は、５４×４０×１２ｃｍを測る。平面形は不整楕円形を呈し、断面形は壁の一部で緩やかに立ち上がる。

４.焼土状遺構

ＳＮ－０１（図版２０）Ｘ１３１．２,Ｙ６９付近で検出した。規模は、２５５×２０５×１８ｃｍを測る。平面形は長方形を呈し、断面形は緩やかに立ち上がる。底面中央で不整楕円形の落ち込みを検出した。規模は１２４×７４×５ｃｍを測る。また、西壁外に焼土層が伴う浅い落ち込みを検出した。落ち込みの規模は５４×４３×６．７ｃｍを測り、焼土範囲は４５×３５ｃｍの範囲で検出している。堆積土中から縄文土器片が出土しているが、遺構の構造から該期に属したとは認定できず、流れ込み等による混入であると考えられる。

ＳＮ－０２（図版２０）Ｘ１５５．５，Ｙ５９付近で検出した。確認調査においてトレンチ１０で確認された焼土面であったが、精査の結果黒色土が焼成により焼土化した赤化面のみであることが判明した。規模は、４５×３５×１０ｃｍを測る。

５.その他の遺構

ＳＸ－０３（図版２１）Ｘ１２６，Ｙ８４付近で検出した。規模は、６９０×２５０×６５ｃｍを測る。平面形は不整形で、断面形は凹凸を持ちながら緩やかに立ち上がる。斜面上端部がやや幅広に広がった形状で、沢地形に平行した形で構築されている。沢セクションの第７・８層と比較できる土層堆積が認められたが、詳細については不明である。

ＳＸ－０４（図版２１）Ｘ１３５，Ｙ７５付近で検出した。北及び東側部分はサブトレンチにより破壊されており、全体形および規模についての詳細は不明である。残存部の規模は、（２９３）×（２８５）×３６ｃｍを測る。平面形は残存部分から円形状を呈した可能性が考えられる。断面形については残存する西・南壁はほぼ垂直に近い形で立ち上がる。西壁側から検出した不整楕円形の土坑は本遺構よりも新しい遺構であり、規模は１７０×１００×３０ｃｍを測る。中央よりやや南壁寄りのピットについても本遺構に帰属しない可能性を有しているが、詳細については不明である。規模は４５×４５×６．９ｃｍを測る。堆積土は、漸移層である暗褐色土主体である。

第Ｖ章　出土遺物

本調査で出土した遺物は段ボール箱で１１箱である。土器については総破片数２，８０４点で、縄文土器８０８点（全体の２８．８％）、弥生土器２２点（全体の０．７８％）、古代の土器が１，９７４点（全体の７０．３％）である。接合資料については縄文土器３８資料（４６７片接合、接合率５７．８％）、弥生土器６資料（１２片接合、接合率５４．５％）、古代の土器は１７４資料（１２３２片接合、接合率６２．４％）となった。縄文土器や弥生土器については古代の竪穴建物跡の堆積土中から混入して出土した例も多く、遺構に帰属しないものも含まれる。

本章は時代毎の遺物の取扱いとすることから土器の記述に関しては、出土した遺構単位を優先する。また、石器・石製品・土製品・鉄製品については出土点数が少ないことから時代毎に統括して記述した。

（木　村）

第１節　縄文時代の遺物

１.土器

ＳＩ－０１（図版２２－１）

古代の建物跡の堆積土に混入したものである。１は深鉢形土器の胴部である。ＲＬの斜行縄文を施文したものである。詳細な時期については不明である。

ＳＩ－０３（図版２２－２～図版２３－８）

本遺構は、縄文中期末葉に帰属する竪穴建物跡である。土器敷設石囲炉と堆積土中から出土したものである。炉出土の土器には、ＳＣ－０１出土のものと接合するもの（８ｂ・ｃ）もある。この炉とＳＣ－０１は同時期に構築されたものと考えられ、文様施文部分以下のものをＳＣ－０１に使用したと考えられる（一部口縁部片も含まれる）。２は、堆積土出土の胴部に丸みを持つキャリパー状を呈する深鉢形土器である。口縁部には突起と頚部にボタン状の貼り付けを施し、ボタン状貼り付けを弧を描く粘土紐でつないだ装飾が見られる。頚部は上下を沈線で区画し、ＬＲの斜行縄文が磨り消されている。頚部を区画する沈線は、上位が鋭角的な波状、下位が波濤状を呈し、その頂部には刺突のあるボタン状の貼り付けを施している。また内面には炭化物の付着が見られる。時期は大木１０式併行に位置づけられるものと考えられる。

３～４、８は土器敷設石囲炉から出土したものである。

３は、略完形の深鉢形土器である。底部から胴部中央付近にかけて緩やかに外傾し、口縁にかけてほぼ直立する器形である。口縁はいびつな平口縁を呈し、口唇部は外側につまみ出されている。無節の斜行縄文を地文とし、沈線による文様は、口縁下の波状を呈する沈線と、U字状文を２条の沈線で連結したモチーフ（反転させたＪ字状）と波濤状文を横位に展開したものである。また２条の沈線で区画された部分には２段の刺突列が施されている部分も見られる。時期は大木１０式併行に位置づけられるものである。

４ａ・ｂは土器敷設石囲炉の焼土下から出土した深鉢形土器である。胴部から口縁部にかけて緩やかにカーブを描きながら立ち上がり、口縁が外反する器形である。口縁は波状を呈し、頭頂部内面を指頭で両サイドからつまんで縦長の隆起部分を作り出している。ＬＲの斜行縄文を地文とし、沈線によるＪ字状文

と波濤状文の組み合わせで文様を構成している。Ｊ字状文は先の膨らんでいる部分も見られ、波濤状文は、頂部が斜め上方向に直線的に立ち上がるものとなっている。時期は大木１０式併行に位置づけられるものである。

８ａ～ｃは同一個体である。また８ｂ・ｃは南側に位置するＳＣ－０１埋設土器遺構のものと接合し、文様モチーフが描かれている部分は本遺構出土のものである。胴部から口縁部にかけて外傾しながら直線的に立ち上がる深鉢形土器である。口縁は平口縁を呈し、ＬＲの斜行縄文を地文とし、沈線による文様は、口縁の地文を磨り消した部分と地文部分を区画する横位の沈線から垂下させたＪ字状文と波濤状文を横位展開したものである。大木１０式併行に位置づけられるものである。

５～７は堆積土出土の深鉢形土器の胴部である。５は柱穴（Ｐｉｔ２）から出土したもので、底部に近い部分と考えられるものである。ＲＬの斜行縄文が施文されており、内面にはススが付着している部分も見られる。詳細な時期については不明である。

６、７は、単節の斜行縄文を地文とし、弧状に沈線を施文しているものである。大木１０式併行に位置づけられると考えられる。また６は内面が黒色を呈し、丁寧なミガキ調整が見られる。

ＳＩ－０４（図版２３－９～１３）

古代の竪穴建物跡の堆積土に混入したものである。９、１０、１２、１３は深鉢形土器の胴部である。９は、単軸絡条体を縦位に回転施文したものである。胎土に繊維の混入が見られる。時期は円筒下層式に位置づけられるものと考えられる。１０は、結束第１種を施文したものである。詳細な時期については不明である。１２、１３は単節の斜行縄文を地文とし、弧状の沈線を施文しているものである。時期は縄文中期後葉～末葉に位置づけられるものと考えられる。１１は壺形土器の頚部付近である。器形は胴部から頚部にかけて内傾するものである。ＲＬの斜行縄文を地文とし、頚部は地文を磨り消して無文部分を作り出している。頚部と胴部は平行沈線により区画され、胴部には弧状の沈線を施文しているものである。時期は破片のため明確ではないが、最花式に位置づけられるものと考えられる。

ＳＩ－１１（図版２４－１４・１５）

古代の竪穴建物跡の堆積土に混入したものである。１４ａ・ｂ、１５はいずれも深鉢形土器の胴部である。単節の斜行縄文を地文とし、３条ほどの沈線を縦位に施文したものである。１４ａ・ｂは同一個体と考えられるものである。時期は、３条１組の懸垂文をメルクマールとする最花式に位置づけられるものと考えられる。

ＳＫ－０１（図版２４－１６・１７）

１６、１７は深鉢形土器の胴部である。１６はＲＬの斜行縄文を地文とし、縦位に沈線を２条施文したものである。１７はＲＬの斜行縄文を施文したものである。時期は縄文中期後葉～末葉に位置づけられるものと考えられる。

ＳＫ－０３（図版２４－１８～２０）

本遺構からは、弥生土器が出土しており、提示している資料については混入したものと考えられる。１８～２０はともに深鉢形土器の胴部である。単節の斜行縄文を施文したものである。縄文施文のみであるため、詳細な時期については不明である。

ＳＮ－０１（図版２４－２１）

ＳＮ－０１焼土状遺構から出土したものであるが、本遺構は遺構の構造から該期に帰属するものとは言えず、本資料は混入によるものと考えられる。２１は底部で、底面に網代痕が施文されているものである。

詳細な時期については不明である。

ＳＸ－０１（図版２４－２２～２５）

２２～２４はいずれも深鉢形土器の胴部である。ＬＲの斜行縄文を地文とし、弧状の沈線を施文しているものである。２５は深鉢形土器の底部から胴部にかけての破片である。平底の底部から胴部にかけて外傾しながら立ち上がる器形である。ＬＲの斜行縄文を施文したものである。時期は、弧状の沈線が施文されていることから、縄文時代中期後葉～末葉に位置づけられるものと考えられる。

ＳＸ－０２（図版２４－２６）

２６は底部片である。底面に網代痕が見られるものである。詳細な時期については不明である。

また、図示していないが、ＳＸ－０１出土土器と接合する無文の深鉢形土器の胴部が出土している。時期は、縄文後期の十腰内Ｉ式に位置づけられるものと考えられる。

ＳＣ－０２（図版２４－２７・２８）

いずれも埋設土器遺構から出土した遺物である。２７、２８は、２７の中に２８が入った入子状態で出土したものである。２７は胴部下半を欠く略完形の壺形土器である。胴上部に最張部を持ち、頸部はほぼ垂直に立ち上がる器形である。ＬＲの斜行縄文を地文とし、頸部は地文が磨り消され無文となっている。また胴部と頸部の境には４単位の瘤状の貼り付けを施している。この瘤状の貼り付けには刺突を施していたようである。２８は、胴上部に最張部を持ち、口頸部が内傾する深鉢形土器である。底部を欠いており、口縁は波状を呈し、ＬＲの斜行縄文を施文している。

時期は、壺形土器が広口壺形を呈し、瘤状の貼り付けが施されていることから、最花式と考えられる。２８も出土状況や、器形について口頸部が内傾し、胴上部に最張部を持つ特徴から同じ最花式に位置づけられる。

遺構外出土土器（図版２４－２９～４１）

Ａ・縄文時代前期（２９～３４）

沢部分と遺構外のＸ１３０～１５８、Ｙ６７～８８にかけて出土したものである。２９～３１は深鉢形土器の口縁部である。２９は、口縁部文様帯にはＬの原体を７条横位に押圧施文している。胴部には口縁部押圧に使用した原体と同一の原体を縦位に回転施文している。また明確ではないが、口縁部文様帯と胴部の境が若干隆起しており、刺突を施しているようである。

３０は、口縁部文様帯にはＲの原体を４条横位に押圧施文している。口縁部文様体と胴部の境は若干隆起しており、隆起部分には横位に結束第１種を回転施文しており、その下には単軸絡条体を縦位に回転施文している。３１は、口縁部文様帯は、口唇に単軸絡条体を回転施文し、その下にはＬの原体を平行に押圧している。３２は深鉢形土器の口縁付近から胴部にかけての破片である。口縁部文様帯には横位の単軸絡条体の回転施文とＲＬの原体を押圧施文している。口縁部文様帯と胴部の境が若干隆起しており、胴部には口縁部とは異なる単軸絡条体を縦位に回転施文している。３３、３４は深鉢形土器の胴部片である。単軸絡条体を縦位に回転施文しているものである。３４には他にＲＬの原体も回転施文している。

これらの土器は、円筒下層ｄ$_1$式に位置づけられるものである。

Ｂ・縄文時代中期

１）円筒上層式（３５～４０）

沢部分と遺構外Ｘ１０５～１５０、Ｙ５０～９０にかけて出土したものである。３５～３７は竹管状工具による刺突がメルクマールである円筒上層ｃ式の波状口縁の破片である。３５、３６は口唇外面に貼り

付けられた隆帯に無節の原体を押圧施文しているものである。また３７は折り返し状の口唇外面に単軸絡条体を回転施文しているものである。３８は円筒上層ｄ式の口縁部の扇状突起部分である。口唇外面に隆帯の貼り付けとＬの原体を押圧施文しているものである。また突起部分には並列する２個の貫通孔とその間にボタン状の貼り付けの痕、平行した隆帯が見られる。３９は平口縁の破片である。口唇外面には無節の原体を押圧施文した鋸歯状の隆帯が貼り付けられている。口縁直下にはＬＲの斜行縄文を地文とし、無節の原体を押圧した隆帯が貼り付けられている。時期は円筒上層ｃ～ｄ式のものである。４０は胴部片である。ＬＲの斜行縄文を施文している。

これらの時期は、口縁部片が円筒上層ｃ～ｄ式に位置づけられるものであり、胴部片についても、それ以外の型式が見られないことから、同じ時期に位置づけられるものと考えられる。

２）榎林式（４１）

遺構外Ｘ１２１、Ｙ８９から出土した口縁部の破片である。４１は波状口縁を呈し、折り返し状の肥厚した口縁に幅広の沈線を１条巡らせている。欠損しているが、山形突起下にはおそらく円形もしくは環状の文様が施文されていたと考えられる。胴部にはＬＲの斜行縄文を施文している。口縁外面に巡らされている幅広の沈線は榎林式のメルクマールであり、この個体は榎林式土器と考えられる。

（相　馬）

２.石器（図版２５－４２～４４）

使用・調整痕の認められるもののみ３点図示した。そのうち４２・４３は古代の竪穴建物跡から出土している。４２はＳＩ－０１堆積土３層出土の凹基無茎鏃で、２８×１７×５mmを測り、重量は１.４ｇを量る。平面形状は二等辺三角形を呈し、側縁部がやや内側に湾曲する。基部の抉り込みは浅く、主要剥離面を残す。先端部がわずかに欠損している。石質は頁岩である。４３はＳＩ－０１堆積土４層上出土の不定形石器で、３４×３０×８mmを測り、重量は３.８ｇを量る。素材剥片自体の形状を、著しく変えるような二次加工は施されていない。刃部角度は右側縁で４０～６６度、左側縁で３６度である。削器的機能を持つと考えられる。二辺が鋭角を形作る尖頭状を呈しており石錐の可能性も考えられたが、先端部がやや厚さに欠け明瞭な使用痕跡が認められなかったため、不定形石器とした。石質は頁岩である。４４は、確認調査トレンチ１８で、本調査時にＳＩ－０３相当位置から出土した磨製石斧で、１２１×４７×２２mmを測り、重量は１８０ｇを量る。側縁の稜は部分的に形成されるが明瞭ではない。上端部に敲打痕が見られる。裏面は被熱で赤化し、大きく剥離している。石質は凝灰岩である。

（松　橋）

第２節　弥生時代の遺物

１.土器

ＳＩ－０１（図版２５－４５～４９）

古代の竪穴建物跡の堆積土に混入したものである。４５～４８は鉢形土器の口縁部である。口縁形状は小波状口縁と波状口縁が見られ、口縁が内傾するもの、外傾するもの、外反するものがある。４５ａ・ｂは同一個体で、小波状口縁端部が内・外面ともに隆起している。小波状口縁の成形は、平口縁を抉ることで、小波状を作り出しているものと考えられる。胴部にはＲＬの斜行縄文を施文しており、口縁付近と胴部では施文方向に違いが見られる。４６はＬＲの斜行縄文を地文とし、沈線を施文したものである。４７は口

唇が先細りするものである。内・外面ともにミガキ調整が見られる。４８は鉢形土器の頸部から胴部にかけてのものである。胴部は無文で、頸部はＲＬの斜行縄文を地文とし、沈線を施文したものである。４９は、甕形土器の頸部から肩部にかけてのものである。頸部はほぼ直立し、肩部が膨らむ器形を呈する。肩部に平行沈線を施文しているものである。いずれも二枚橋式に位置づけられるものと考えられる。

ＳＫ－０４（図版２５－５０～５３）

５０～５２は鉢形土器の胴部である。全て別個体である。胴部が外傾する器形を呈し、ＬＲの斜行縄文を施文しているものである。

５３は甕形土器の口縁部から肩部にかけてのものである。ＳＫ－０３出土のものと接合した。ＳＫ－０３出土のものは断面の磨耗の度合が強いことから、本遺構から混入したものと考えられる。頸部はほぼ直立し、肩部が膨らむ器形を呈し、口縁は外反するものである。口唇外面に刻目を施し、頸部上位には３条の平行沈線、肩部にも平行沈線を施している。また口縁内面にも沈線を１条巡らせている。内・外面ともにミガキ調整が見られる。いずれも二枚橋式に位置づけられるものと考えられる。

ＳＫ－０５（図版２５－５４）

５４は甕形土器の口縁部である。肩部に丸みを持ち、口縁部が内傾する器形を呈する。ＲＬの斜行縄文を地文とし、頸部に平行沈線を４条巡らせている。二枚橋式に位置づけられるものと考えられる。

遺構外出土土器（図版２５－５５～５７）

遺構外Ｘ１１０～１２０、Ｙ７０～１０１にかけて出土した。３点出土しており、いずれも鉢形土器である。５５は口縁部から胴部にかけてのものである。肩部に丸みを持ち、口縁が外反する器形である。口唇は幅広の作りとなっている。口縁部、頸部は無文である。胴部にはＬＲの斜行縄文を施文している。５６は口縁部である。平行沈線を施文しているものである。５７は胴部である。胴部が外傾する器形を呈し、ＬＲの斜行縄文を施文しているものである。いずれも二枚橋式に位置づけられるものと考えられる。

（相　馬）

第３節　古代の遺物

１.土器

ＳＩ－０１（図版２６－５８～６４）

出土破片数７７片、接合資料７資料中７点図示した。５８はＰｉｔ８堆積土１層及び２層から出土した須恵器坏で、口径１３.７ｃｍ、器高５.０ｃｍ、底径６.４ｃｍ、器高指数３６.４、底径指数４６.７を測る。内外面とも灰黄色を基調とし、口縁部の一部で観察される重ね焼き痕の部分は黒灰色～淡黒灰色を呈する。やや粘りの弱い胎で、粒度のきめ細かい長石及び石英ならびに赤色粒が微量混入しているが、赤色粒はやや茶褐色に近い色調を呈している。海綿骨針については極微量観察されるのみである。器形は、体部下半から口縁部直下にかけて稜段が顕著であるが、体部中半は口縁部の外反のため、意図的なロクロナデにより調整され、その結果内面部分については体部下半と上半との明瞭な差となり、外面はやや窪んだ形状を呈している。見込み部分は、中央を潰すような形で成形している。底部切離しは右回転糸切で、切離し後、箆起し痕が浅く観察される。また、糸切部分の中央を箆により数回撫でられた痕跡が観察された。使用痕については見込部分がやや摩耗を受けた痕跡は確認できるが、顕著な光沢面等は観察されなかった。欠損部の破断面は摩耗が著しく、二次被熱により淡褐色に変色している。５９は堆積土出土の土師器坏で、底径４.８ｃｍを測る。欠損資料で破断面の摩耗は著しい。色調は浅黄橙色～にぶい黄橙色を呈

する。やや粘りのある胎で、長石・石英等が少量、赤色粒については顕著に観察され、粒径の大きなものについては２０mm大のものも含まれる。残存部の器形は体部下半にかけて浅い稜を形成しているが、体部上半は稜が顕著でなく、延ばしあげるように形成されている。焼成時内面体部中半に混入した礫周辺にひびが入っており、外面側部分には火膨れが生じている。底部切離しは右回転糸切で、切離し後、一度幅広の篦状工具により、工具の進入方向から左側辺が入り込む形で起こされた後、若干角度を変え、単位の細い工具により３条（１単位？）入れることにより篦起しがなされている。また、底部の端面の一部は押しつぶされており、体部最下端まで及んでいる。６０は支脚相当位置から出土した土師器小甕で、口径１２．０ｃｍ、器高９．６ｃｍ、底径７．１ｃｍを測る。色調は燃焼部に面していた側の部分が二次被熱により変色しているが、にぶい橙色～橙色を呈する。粘りのある胎で、石英・長石・輝石等が中量、３０ｍｍ大の摩耗や剥離が生じた小礫が微量混入している。輪積み成形で、口唇部は上端を平滑にして浅い凹線を一条入れている。外面の器面調整は、口縁部を横方向に撫で、局所的に段状に作り出しているが、体部の調整の縦方向の篦によるナデにより区画が明瞭でない状況である。また体部の篦によるナデは、局所的に集中している箇所がミガキ状に重なっており、光沢を帯びている。しかしながら、調整によって輪積み痕は十分に消されていない面があり、体部について６条（７段）残存して観察される。内面の器面調整は、横方向及び斜め方向の指ナデによる調整で、外面とは異なり体部にかけてほとんど輪積み痕は撫で消されているが、口縁部直下は局所的に輪積み痕が観察される。また、図示した図面上には表現されていないが、口縁部は、部分的な付け足しを除いて２段の粘土紐により成形されている。底部については篦による調整で、外面の部分的な器面調整と同様、ミガキ状に複数回工具により調整され光沢を帯びている。６１はカマド崩落土中である６層から出土した土師器甕の口縁部片で、口径２０．６ｃｍを測る。外面が若干摩滅しており、煤や付着物の影響により色調に影響が生じているが、内面等の色調からもともとは浅黄橙色を呈していたものと考えられる。やや粘りのある胎で、長石・針状輝石・石英等の砂粒、粒度の細かい風化した赤色粒及び浸食により球状に摩耗した赤色粒を中量含む。口唇部を平滑に外傾させており、口縁部は内外面とも横方向のナデによる調整で、欠損資料のため、局所的であったが、頸部の体部との境界に近い箇所であると推定される部分については篦状の工具により横方向に撫でられ、体部の調整であると考えられる縦方向の篦が観察された。６２はカマド堆積土出土資料とＳＩ－０２カマド煙道底面、堆積土、ＳＩ－０２内Ｐｉｔ９堆積土１層から出土した破片が遺構間接合した口縁部下端から体部上半にかけての土師器甕である。接合関係は上端からＳＩ－０２Ｐｉｔ９出土＋ＳＩ－０１カマド出土＋ＳＩ－０２堆積土出土＋ＳＩ－０２カマド煙道底面出土の関係である。ＳＩ－０１出土資料については外面の器面の摩滅が著しく、ＳＩ－０２出土資料についてはＰｉｔ９出土資料の摩耗が著しく、カマド煙道底面出土の資料が最も器面の残存状況がいい状態である。それぞれの破片は摩耗・摩滅が著しく、さらに二次被熱の色調についてもＳＩ－０２堆積土出土とカマド底面出土資料には連続性が認められたが、それ以外のものについては非連続であることから破片化した状況でかなりの流動が生じていたものと考えられる。やや粘りのある胎で、石英と風化した赤色粒がやや顕著に含む。調整は、口縁部については横方向のナデであり、体部との境界相当位置の箇所は、指オサエによる指頭圧痕が浅く観察されるが、明確な境界は生じておらず体部の張りも弱い。頸部の端部には補修孔が１つ外面側から穿たれていた。６３・６４は３層及び堆積土一括出土の鉢形状の土師器で、同一個体の可能性も有するが接合関係が認められず、調整手法に差異があったことから別々に図示した。口径については残存率の良好であった６４については２０．８ｃｍを測る。いずれの資料も粘りのある胎で、小礫を微量・赤色粒を中量含み器面にピッチの付着が観察される。６３の

資料はやや砂粒の量が６４に比べ多く、海綿骨針が少量含まれ、６４の資料には鉄滓が含まれるという差異がある。器壁が厚く器形は不規則な波状口縁を呈し、口縁部はやや直立気味体部上半がやや張る形状を呈する。外面調整はいずれも口縁部が横方向のナデ、体部上半が横～斜め方向のハケメ、体部下半が横方向のヘラケズリが施されるのに対し、内面調整について６３は口縁部～体部中半までがナデで、体部中半～下半にかけてヘラケズリ状を呈するが、６４の調整は６３の手法が行われたのち、口縁部～体部下半まで指によるナデが施され、前段の調整が撫で消されている。

ＳＩ－０２（図版２６－６５～図版２８－８６）

出土破片数８２７片､接合資料７２資料中２２点図示した。６５は堆積土下層から出土した須恵器坏で、口径１３．３ｃｍ、器高５．６ｃｍ、底径６．６ｃｍ、器高指数４２．１、底径指数４９．６を測る。色調は内外面とも灰白色を呈し、口縁部直下に観察される重ね焼き痕は２．５Ｙ６／１～５／１の黄灰色を呈する。やや粘りのある胎であるが軽質で、凝灰質の小礫を微量、石英・針状輝石・輝石等が中量、海綿骨針を微量含み、赤色粒については極微量しか含んでいない。器形はＳＩ－０１出土の５８にも類似しているが、やや角度を持ち立ち上がる。稜段は５８に比べ浅く、やや幅が狭い点が特徴である。底部切離しは右回転糸切で、切離し後の篦起し痕は浅い単位が１条観察されるのみである。使用痕については顕著ではないが内面の口縁部付近に若干摩耗が確認できる。６６は堆積土下層及び建物跡堆積土から出土した須恵器坏の口縁部片で、口径１３．４ｃｍを測る。色調及び胎土の特徴は６６と類似したものであるが、石英がやや多量含まれている。また、煤状の付着物が外～断面～内面にかけて付着していることから破片化した状態で、遺構の焼失に介在したものと考えられる。６７は床面及び堆積土出土の須恵器坏の口縁部片で口径（１２．６）ｃｍを測る。本遺構出土の須恵器資料の中で唯一胎土の特性が異なり、きめ細やかで粘りのある胎で、やや青みがかる色調を帯び、重ね焼き痕部分もＮ３／０の濃灰色を呈する。混入物については粒度の細かい石英・長石等が微量含まれているが、赤色粒は含まれておらず、φ１０～２０ｍｍの鉄分状の黒色粒が微量含まれている。器壁が他の資料にくらべやや肉厚で、口縁部付近をつまみ返すように軽く外反させている。本資料は３片接合した資料であるが、各破片とも被熱及び煤状の付着物が破断面付近を中心に観察されたことから６６と同様の状況であったことが考えられる。６８は床直出土の須恵器坏口縁部片で口径（１３．４）ｃｍを測る。内外面とも灰白色が基調であるが、二次被熱の影響なのかやや白味がかった色調を呈しており、重ね焼き痕も淡い灰黄色を呈する部分が局所的に観察されるのみで顕著ではない。やや粘りのある胎で、長石・輝石のほか不透明鉱物等が多く、赤色粒についてもかなり粒度はきめ細かいが中量含まれる。器形は６５・６６に類似した浅い稜段をもつタイプで、口縁部をやや直立気味につまみ上げるように軽く外反させている。６９は堆積土出土の須恵器坏口縁部片で、口径（１３．０）ｃｍを測る。本資料も前述の資料同様二次被熱により変色及び煤状の付着物が各破片非整合に付着しており、前述の影響に置かれた資料であると判断される。色調は被熱の影響により白味がかった灰白色を基調としている。やや粘りのある胎で、石英・輝石のほか凝灰質小礫、不透明鉱物等を多量含む。器形は稜段が目立たない椀状に近いタイプで６７ほど顕著ではないが軽くつまみ返すように外反させている。７０は北側コーナー付近の堆積土から出土した土師器坏で、口径１２．７ｃｍ、器高４．９ｃｍ、底径５．２ｃｍ、器高指数３８．５、底径指数４０．９を測る。色調は内外面とも橙色を基調とするが、カマド支脚設置部分から出土する坏・椀によく見受けられる馬蹄円形状の二次被熱痕や土器焼成の際、倒位に製品を立てかけた結果重ね焼き痕として観察される馬蹄形状の痕跡と同質のものが観察され、その箇所のみ色調が灰白色

（１０ＹＲ８／１）～褐灰色（１０ＹＲ６／１）を呈する。堆積土中位という出土位置から遺構の焼失時の二次被熱についての影響について消極的な評価となる。内面の器面についても外面に対応した色調を呈していることから焼成時点での影響の可能性を含んでいる。粒度のきめ細かい砂質がかったザラザラした質感を有する胎で、かなり粒度のきめ細かな長石や輝石が少量、海綿骨針が多量含まれるほか、粒度の粗い（最大φ７０mm）赤色粒が多量混入されている。底部切離しは右回転糸切であるが、切離し時点で、やや回転にムラが生じている。器壁は肉厚で、器形は丸みを帯び、口縁部は軽くつまみ返すように外反させている。また、口唇部に打ち欠き痕が１カ所観察された。その位置は前述の色調の灰白色がかった箇所を中心に打ち欠かれている。使用痕は見込み部分を中心に摩滅した箇所が観察された。７１は堆積土出土の土師器坏口縁部片で、口径１２．３ｃｍを測る。本資料は前述の須恵器片同様破片化した状態で二次被熱を受けた資料と認定できる資料で、色調についても影響が生じているが、にぶい橙色を基調としている。胎は７０と類似した質感ではあるが７１の方がやや粘りを持ち、混入物等についてもほぼ同質であるが、赤色粒の粒径がφ１mm前後と小さい。器壁の肥厚や器形についても７０とほぼ同質である。７２は堆積土出土の非ロクロの黒色土器坏で底径４．７ｃｍを測る。焼成時に黒色化させた部分以外に、二次的な影響による煤等の付着箇所もあるため、色調についても影響があると考えられるが、外面の色調は黒色～灰黄褐色、内面は黒色を呈する。粘りのある胎で、石英等の透明鉱物を多量に含む。輪積みによる成形で、内外面及び底面をヘラミガキにより調整しているが、甕と同様に外面の一部に輪積み痕の残存が観察される。７３はＳＰ－０７・０８・０９及び貼床ならびにカマド１堆積土等から出土した土師器甕で口径２２．２ｃｍを測る。破片化した状態で各遺構内に埋没している状態で、器面の状態が出土地点毎に大きく差異が生じているが、にぶい橙色～橙色を基調としている。粘りのある胎で、川砂等の小礫を微量、石英・長石・輝石等の砂粒を多量、海綿骨針を中量含む。口縁部に最大径を有し、口唇部の器壁がやや厚く丸みを帯びながら外反するのが特徴で、頸部は横ナデによる調整で体部との境界は体部の縦方向のヘラミガキによる調整が頸部の一部に不均一に及んでおり不明瞭である。内面の調整は横方向の箆によるナデで、局所的に木口痕が観察される箇所が見受けられる。本資料は、輪積みによる成形であるが、輪積み痕は内外面ともほとんど調整により消されていて、内面の口縁部直下の一部分で観察されるのみである。７４はＰｉｔ２・６・８堆積土・貼床・カマド１堆積土出土の土師器甕で、口径２０．４ｃｍを測る。破片毎に色調は異なっており、Ｐｉｔ内出土資料については煤が付着しており、色調が黒褐色（１０ＹＲ３／２）を呈するものが多いが、橙色を基調としている。各破片の破断面は摩滅しており、他の資料と同様破片化した段階で流動していたものと考えられる。粘りのある胎で、川砂起源の小礫を微量、石英・輝石・針状輝石・長石を多量に含み、海綿骨針についても微量含まれる。器形は頸部幅が比較的短いタイプで、口唇部は若干つまみ返すように外反させている。口縁部は横ナデにより調整されており、頸部を若干強く平行に撫でることによって括れを作出している。体部の調整は斜め方向のヘラケズリが施された後、体部中半は縦方向のヘラケズリが再度施され、口縁部直下及び体部中半の一部では、縦方向及び横方向のヘラミガキにより調整されている。さらに体部上半には箆の一側辺が若干深めに斜め方向に入り込んでいる。口縁部の横ナデ部分に工具がやや雑然と及んでおり、明確な境界は存在しない。内面の口縁部の調整は、横方向のナデで、体部の調整は横方向の浅いハケメが施された後、横方向及び斜め方向のナデにより調整されている。７５はＰｉｔ８・９堆積土から出土した土師器甕で口径２０．４ｃｍを測る。浸食等の影響により若干退色している箇所も見られるが、色調は明赤褐色を基調とする。外面の口縁部～体部上半にかけて二次被熱痕が楕円形状に観察されるが、破片間で連続性は保たれている。やや粘りのある胎であるが、φ０．５

mm前後の石英・輝石等の砂粒が多量に含まれることと浮石が含まれており、本資料は素地の胎土に遺跡の基盤層である月見野火山灰層の介在の可能性が考慮される。素地における月見野火山灰層の介在は青森市南部の遺跡内では粘質の大谷火山灰層とその上位に堆積している浮石質の月見野火山灰層が土器胎土として用いられている。本資料は海綿骨針が含まれることから基本の素地として本遺跡及び周辺の石江地区内の基盤層である海成起源の岡町層の介在が考慮される。器形は口縁部と肩部の最大径がほぼ同じもしくは若干肩部に最大径がくるタイプで、口唇部を平滑に外傾させている。口縁部は横方向のナデで、中位の部分でやや折り返すように外反させている。外面の体部の調整は斜め方向のハケメで、局所的に口縁部まで及んでいる。内面の口縁部の調整は外面と同様横方向のナデで、体部の調整は横方向のハケメで内外面とも同一の工具が使用されている。また、ハケメ調整の後、工具の側辺を斜めに流して篦描き状に痕跡がついた箇所が一カ所観察された。７６はＰｉｔ６・８堆積土・カマド１堆積土・建物跡堆積土から出土した土師器甕の底部資料で、底径５．４ｃｍを測る。色調は明赤褐色～橙色を呈し、Ｐｉｔ８出土資料片がハジケや被熱の度合が強い。７４と類似した胎の特徴を有し、調整手法についても類似した特徴を有する。底面の調整は体部の調整手法と同様にヘラケズリされた後ヘラミガキが施されている。７７はＰｉｔ７堆積土及び建物跡堆積土出土の土師器甕で、口径（２７．４）ｃｍを測る。色調は明赤褐色を基調とするが、各破片間で退色の度合が異なり摩滅が著しい。やや粘りのある胎で、河川起源の小礫及び浮石の混入が顕著である。器形は有段口縁を持ち、口唇部は平滑に外傾させているが、端部については丸みを帯びている。口縁部はハケメ調整がされた後、横ナデにより調整されており、中位で折り返すように外反させている。体部との境界に幅広の沈線を二条やや雑に施して区画している。その沈線直上から沈線上にかけてややルーズな鋸歯状の篦描きが施されている。体部は摩滅により局所的にしか観察されなかったが、ヘラミガキが斜め方向に施されている。内面の調整は、口縁部上半は横ナデの後、横～斜め方向のヘラミガキ、段部は綾杉状のハケメ、体部は横方向のハケメである。７８はＰｉｔ８底面・Ｐｉｔ９堆積土１層・カマド１煙道底面から出土した土師器甕で口縁部の上半は沈線に沿う形で欠損している。色調は橙色を呈するが器面の摩滅･剥離が著しい。器形は口縁部上半が欠損しているため詳細は不明であるが、頸部の括れが甘く、体部の張りも顕著ではない器形であると考えられる。頸部は残存部分で平行沈線を６条施し体部との境界を明確にしている。体部の調整は上半が横方向、中半が斜め方向のハケメによるもので内面は外面に用いられた工具よりやや条線間の間隔が広い横方向のハケメが口縁部～体部にかけて施されている。７９はカマド１堆積土及びＳＩ－０１堆積土との遺構間接合資料の土師器甕で、口径２５．５ｃｍを測る。色調は各破片間で異なり、煤の付着等の連続性が認められない箇所が多く観察されたが、橙色～明黄褐色を基調とする。ＳＩ－０１出土資料については浸食により退色・摩滅が著しい資料で流動的混入であったことが考えられる。また、ＳＩ－０２堆積土出土資料については二次被熱により硬化している箇所が観察された。やや粘りのある胎で、φ３mm前後の浮石の混入が認められる。頸部に浅い段を持つ器形で、口唇部は側面を平滑にして上端部を内側からつまみ上げるように立ち上げている。口縁部は横ナデによる調整で、体部との境界はやや強く撫でることに外反させている。体部の調整は倒位の状態で左下がりの篦による調整が行われた後、右下がりのハケメにより調整されているが、口縁部直下までハケメが及んでいる。一次調整の篦の痕跡は粘土のよれによって残存が確認できる。内面の調整は、口縁部は横方向のナデ、体部については横方向のハケメによるものである。８０はカマド１堆積土・建物跡堆積土出土の土師器甕で、口縁部上端が欠損している。二次被熱及び浸食による退色が顕著で、外面の色調は明赤褐色、内面は橙色を基調とする。やや粘りのある胎で、河川起源の小礫及び浮石の混入が顕著である。器形は７７に類似した形

状を呈すると考えられるがやや括れが甘く、上端の器壁はやや厚くなる。口縁部は横ナデによる調整で、体部との境界は７７と同様ルーズな平行沈線を２条施している。体部の調整は縦方向のヘラケズリ及びヘラミガキによる調整である。内面の調整は口縁部～体部にかけて横方向のハケメで口縁部には放射状の篦描きが３条観察される。８１はカマド１堆積土及び建物跡堆積土出土の土師器甕で、口径２２．０ｃｍを測る。油分状の付着物が認められる箇所が多いが、外面の色調は橙色、内面の色調はにぶい黄橙色を基調とする。やや粘りのある胎で、他の甕と同様に石英・輝石・針状輝石等の砂粒を多く含み、浮石についてもφ３～５mm大の混入が認められた。器形は砲弾形を呈し、口縁部直下に平行沈線を５条施しているが、最下端の１条は全周していない。外面の調整は、口縁部が横方向のヘラミガキ、体部が斜め方向のヘラミガキによる調整でストロークの長さが長い。内面の調整は口縁部が外面と同様横方向のヘラミガキ、体部上半は外面と同様斜め方向のヘラミガキ、体部中半～下半は木口の幅がある横方向のハケメである。８２はカマド１出土の土師器甕で、口径２２．３ｃｍ、器高３１．８ｃｍ、底径７．８ｃｍを測る。各破片とも色調が異なっており、二次被熱を受けた箇所や黒化した箇所や浸食を受けた箇所等破片化した状態で二次的な影響を受けているが、内外面とも橙色を基調としている。器形は体部が砲弾状、口縁部がラッパ状を呈する器形で口縁端部を平滑に外傾させており、端面直下を篦状の工具を使い横方向に平滑に撫でて段を形成している。さらに頸部は直立気味の段状を呈し、体部との境界に平行沈線を２条施し境界としている。外面の調整は口縁部が浅い角度の斜め方向のハケメ、体部の平行沈線直下の部分は横方向のヘラミガキ、体部は下半が縦方向のハケメが残存して観察されることから一次調整にハケメが施された後斜め上がりのヘラミガキが施されていたものと考えられる。内面は口縁部の一部にヘラミガキが認められるが、横方向のハケメを基調とする。８３は床直及び堆積土出土の土師器甕底部で、底径８．６ｃｍを測る。色調は破片単位で二次被熱等を受けているため一定ではないが、外面は明赤褐色、内面は橙色を基調とする。やや粘りのある胎で、砂粒を多量に含み、海綿骨針についても他の資料同様微量含まれる。体部の調整は底部～体部方向へのヘラケズリで、内面は横方向の篦による調整である。また底面については無調整で、底部の端面が一部打ち欠かれている。８４は床直及び堆積土出土の土師器鉢状の小甕で、口径（１５．８）ｃｍを測る。色調は二次被熱により一部退色しているが、外面は褐色、内面は橙色を基調としている。やや粘りのある胎で、他の甕と同質の混入状況を持ち得ている。器形は括れが甘く、口縁部についても頸部を短めに軽く外反させた程度の作りである。調整は外面の口縁部が横方向のナデ、体部がヘラケズリで、口縁部との境界はルーズである。内面の調整は口縁部がナデで、体部が横方向の篦によるナデである。８５は堆積土出土の土師器甕で、口径（２１．０）ｃｍを測る。色調はにぶい橙色～橙色を呈する。やや粘りのある胎で、他の甕と同質の混入状況を持ち得ている。器形は緩やかに外反するタイプで、口唇部をやや丸みを帯びさせつまみ返すように外反させている。外面の調整は、口縁部は横方向のナデ、体部は篦による縦方向の浅いナデで、粘土が頸部の部分に寄せられている箇所が数カ所観察される。内面はナデによる調整である。体部の一部に黒斑が観察される。８６は堆積土出土のロクロ小甕で口径１２．０ｃｍを測る。二次被熱により大きく変質しており、色調はにぶい橙色～橙色を呈する。浮石等を多量に含むやや粘りに欠ける胎で、パサパサした質感を有する。調整は内外面ともロクロナデで、口縁端部は鍔状を呈している。

ＳＩ－０４（図版２８－８７～図版２９－９５）

出土破片数１７５片、接合資料１５資料中１０点図示した。８７はカマド支脚相当位置から出土した土師器坏で、口径１３．２ｃｍ、器高５．３ｃｍ、底径５．６ｃｍ、器高指数４０．１、底径指数４２．４を測る。

二次被熱により変色・ハジケが生じており器面に影響が生じているが、内外面ともにぶい黄橙色を基調としている。やや粘りのある胎で、粒度の細かい砂粒を多量、海綿骨針を微量含む。また、φ１～３mm前後の浮石粒が中量混入している。器形は体部下半からやや膨らみを持ちながら立ち上がり、口縁部付近で軽くつまみ返すように立ち上がっている。底部切離しは右回転糸切で、切離し後、平滑な幅の広い工具により篦起しがなされている。口縁部の内外面には、煤と油分状の付着物が観察され、内面見込み部分は煤状の付着物とハジケが観察される。８８は７層出土の土師器坏で、口径１１．５ｃｍ、器高５．１５ｃｍ、底径５．０ｃｍ、器高指数４４．７、底径指数４３．４を測る。器面の浸食の影響が著しく内外面とも変色した状況ではあるが、明黄褐色を基調とする。やや粘りに欠けるザラザラした質感を有する胎で、海綿骨針を微量、茶褐色状の赤色粒が中量含まれる。椀状の器形で、体部下半～底部にかけてやや肉厚な器壁で、体部上半から延ばし上げるように浅く外反させている。底部切離しは右回転糸切で、底面中央がやや窪んだ形状を呈している。また、外面の口縁部付近には粘土が付着している。８９は７層及び５層出土の土師器坏で、口径１３．６ｃｍ、器高５．０ｃｍ、底径５．２ｃｍ、器高指数３６．７、底径指数３８．２を測る。器面は摩滅しており、特に底面の摩滅が著しい。色調は橙色を基調としている。粘りに欠けるザラザラした質感を有する胎で、海綿骨針を微量、赤褐色のφ１～４mm大の赤色粒が多量含まれる。８８と同様に体部中半～下半にかけて器壁に厚みを持っているが、体部上半～口縁部にかけても厚みを持ちながら開き気味に外反している。底部切離しは右回転糸切であるが、摩滅が著しいため篦起し痕等は観察されなかった。体部上半に正位の状態で「六」の墨書が正位に記入されており、また墨書位置から左側に約９０°の口唇部上に打ち欠き痕が観察される。９０は床直及び５層出土の土師器坏で、口径１３．２ｃｍ、器高５．６ｃｍ、底径５．４ｃｍ、器高指数４２．４、底径指数４０．９を測る。８９と同質のやや粘りに欠けるザラザラした質感を有する胎で、色調は内外面とも橙色を呈する。混入物等についても８９とほぼ同質である。椀状の器形を有し、８９と同様の器壁の厚さを持つが、丸みを帯びながら立ち上がり、口縁部付近をつまみ返すように外反させている。底部切離しは右回転糸切で、８９と類似した切離し形状を呈している。内面の見込み部分～体部下半にかけて黒斑が観察された。９１はカマド５層出土の土師器小甕の口縁部片で、口径（１６．０）ｃｍを測る。色調はにぶい橙色～橙色を呈する。やや粘りのある胎で、粒度の細かい浮石の混入率が高い。口縁部の調整は横方向のナデで、体部に近い箇所から折り返すように外反させている。口唇部は玉縁状の作り出しをしており、つまみ返すように外反させている。体部の調整は縦方向の篦による調整で、篦そのものが頸部まで及んでおり、明瞭な境界は存在しない。内面の調整はナデによるものであるが、接合痕が十分に撫で消されていない。９２は床直及び５層出土の土師器甕で、口径２１．８ｃｍを測る。一部の破片で煤の付着が見られるが破片間の連続性は認められず非整合である。色調はにぶい橙色～浅黄橙色を基調とする。やや粘りのある胎で、河川起源の小礫を中量、金雲母を含めた砂粒が多量、海綿骨針が微量含まれる。口縁部に最大径を持ち、体部上半がやや膨らみを持つ器形で、口縁部は横方向のナデで、「く」字状に外反する。口唇部は平滑を意識しているがややルーズで、崩れた凹線状の沈線が１条施されたように窪ませている。外面の体部の調整は縦方向のヘラケズリで、体部方向から口縁部に向かって工具が動かされている。頸部付近で寄り返すような動きがなされているが粘土が寄り固まるような箇所は観察されない。内面の調整は、口縁部は外面と同様に横方向のナデで、体部は横方向のハケメである。９３は床直及び５層ならびにＳＩ－０２堆積土との遺構間接合の土師器甕で、口径２１．３ｃｍを測る。５層出土の破片は二次被熱を受けており、器面が浸食や変色を受けており、ＳＩ－０２出土資料については同様に二次被熱を受けており、内面側が暗褐色（１０ＹＲ３／３）に変色しているが、明赤褐色～明褐

色を基調とする。やや粘りのある胎で、河川起源の小礫を微量、金雲母を含めた砂粒が多量、海綿骨針が微量、赤色粒が多量含まれる。頸部は浅い段状を呈し、横方向のやや強いナデにより外反させている。口唇部は９２と類似した形状を持つが、側辺を平滑にしてつまみ上げるように外反させている。また、端面は局所的に凹線状を呈している。外面の体部はヘラケズリによる調整で、頸部の中半まで及んでいる箇所がある。内面の口縁部の調整は横方向のナデで、体部の調整は横方向のハケメである。９４はＰｉｔ３堆積土上層と床直と建物跡堆積土５層とＳＩ－０２Ｐｉｔ８堆積土上層及び建物跡堆積土とＳＩ－０１堆積土との遺構間接合の土師器甕の体部～底部にかけての資料である。底径は８．６ｃｍを測る。本遺構出土の資料については器面の摩滅・剥離が著しく、ＳＩ－０２出土の資料は被熱により器面に煤状の付着物が認められ、ＳＩ－０１の資料は底部の一破片のみで破断面の摩耗が著しい。色調は浸食・摩滅による影響が認められるが、外面はにぶい橙色、内面は赤灰色を基調とする。やや粘りのある胎で、河川起源の小礫を少量、砂礫を多量、海綿骨針を微量、浮石を少量、赤色粒を多量含む。体部下半でやや膨らみを持ちながらやや直立気味に立ち上がる器形を持つ。外面の調整は縦方向のヘラケズリで、底部側から頸部方向に向かって削られている。内面の調整は横方向のハケメで見込み部分にも残存している。底面は砂底で、中央が側縁にくらべやや砂粒の付着量が少ない。９５はカマド支脚相当位置及び５層ならびにＳＩ－０２堆積土との遺構間接合の土師器甕の体部～底部にかけての資料である。底径は９．４ｃｍを測る。本遺構出土の資料は底部付近を中心に出土しているが、５層出土の資料の一部は体部片が含まれ、ＳＩ－０２出土の部分と接合関係が認められており、破片化した状態で流動した資料も含まれている。支脚相当位置から出土した資料が外面の器面が二次被熱により変色している状態で、摩滅が著しい。外面の色調はにぶい黄橙色を基調とし、内面は赤灰色を呈しているが、焼成時の影響により内面のほとんどが褐灰色を呈している。やや粘りのある胎で、９４とほぼ同質である。器形については、底部が横方向のハケメによる調整で台状を呈しており、体部は若干開き気味に立ち上がっている。調整は内外面とも同一の工具によるハケメで、外面の底部付近は斜め方向及び横方向で、体部は縦方向及び斜め方向で、体部中～上半にかけては縦方向が多い。また内面は横方向及び斜め方向で斜め方向が最後に施されている。ハケメの間隔がやや幅を持っている特徴がある。底面についても同様の工具による調整で、側縁を最初に調整した後中央付近を複数の方向から調整している。９６は５層出土の資料とＳＩ－０２堆積土出土資料との遺構間接合資料の土師器甕底部片で、底径９．８ｃｍを測る。内外面とも剥離が著しくＳＩ－０２出土資料については二次被熱によりハジケが生じている。色調についても影響が生じているが、外面はにぶい黄橙色、内面は浅黄橙色を呈する。内外面とも器面の情報は剥落により詳細は不明で、底面は網状脈の木葉痕である。

ＳＩ－１０（図版２９－９７～図版３０－１０５）

出土破片数２６０片、接合資料３２資料中９点図示した。９７は床直出土の土師器坏で口径（１１．８）ｃｍを測る。器面は浸食による影響があり、色調は内外面とも浅黄橙色を基調とする。やや粘りのある胎で、小礫を少量、砂粒を微量、φ１～３ｍｍの赤色粒を中量含む。椀状の器形で、やや直立気味に立ち上がり口縁部付近はやや強めに撫で上げ、軽くつまみ返すように外反させている。９８は床直出土の土師器坏で口径（１２．０）ｃｍを測る。にぶい黄橙色を基調とする。９７と同質の胎で、風化した赤色粒が中量含まれている。９７と同様やや直立気味に立ち上がる器形で浅い稜段が外面側に観察される。９９は床直出土の非ロクロ土師器坏で口径１５．４ｃｍを測る。色調は外面がにぶい黄橙色、内面は灰黄褐色を呈する。内外面とも黒斑が観察される。粘りのある胎で、かなり粒度のきめ細かい金雲母片や針状輝石、海綿骨針

等を含む。器形はやや直立気味の器形で口縁部を横方向のナデにより軽く外反させている。外面は縦方向のヘラケズリを施した後、体部中半から口縁部直下にかけて横方向のヘラミガキによる調整で、内面は横方向のヘラミガキが施されている。外面の口縁部直下の箇所には輪積み痕が残存して観察される。１００はカマド堆積土、床直、堆積土下層出土の土師器甕の口縁部資料で、口径（２４．４）ｃｍを測る。色調は内外面とも橙色を呈し、器壁の一部は浸食により影響を受けている。やや粘りのある胎で、小礫の他、石英を主体として金雲母等も含む砂粒を中量、海綿骨針、赤色粒を微量含む。器形は「く」字状を呈しているが、外面の頸部を横方向のナデにより浅い段を有している器形で、口縁部は中位の位置から横方向のナデにより外反を強めている。外面の調整は、口縁部付近では斜め方向のハケメが施された後、横方向のナデにより撫で消されており、体部は横～斜め方向のハケメが施された後、斜行気味のハケメにより調整されている。内面の口縁部は横方向のナデで、体部は条痕状の工具による横方向のハケメである。１０１はカマド煙道、床直、堆積土出土の土師器甕で口径２１．８ｃｍ、器高３１．８ｃｍ、底径８．４ｃｍを測る。色調は外面の肩部～体部下半にかけて煮沸時の影響による煤や付着物があり、底部下半については二次被熱により剥落等も生じており影響を受けているが、内外面とも橙色を基調としている。やや粘りのある胎で、１００と同質の混入物である。頸部幅の長い砲弾状を呈する器形で頸部は体部上半からの内傾から横方向の調整により若干角度を変え直立気味に内傾しながら立ち上がり、口縁端部で折り返すように外反している。口唇の端面は端部が丸みを帯びながらも面取りされている。調整は口縁部が横方向のハケメ、体部上半が横方向のヘラミガキ、体部中半から下半にかけては斜め方向のヘラミガキによる調整で、内面について口縁部は横方向のハケメが施された後、横方向のヘラミガキ、体部については横方向のハケメが施されている。底面については無調整である。１０２はカマド堆積土及び床直出土の土師器甕の口縁部資料で、口径（２２．０）ｃｍを測る。色調は二次被熱により影響を受けているが、にぶい黄橙色～橙色を基調とする。やや粘りの弱い胎で、針状輝石を主体とする砂粒を中量、粒度の細かい赤褐色を呈する赤色粒を多量含む。１０１と類似した器形であるが、外面の口縁部は横方向のナデによる調整で、口唇部は丸みを帯びた形状を呈する。体部については縦方向のハケメで、剥離が著しい。内面の口縁部は横方向のナデで、接合痕が残存して観察される。体部は横方向のハケメであるが、摩滅と二次被熱による影響が著しい。１０３は床直及びカマド床直出土の土師器小甕で、口径１５．６ｃｍを測る。破片毎の色調が浸食等により影響を受けており、接合間で非連続な状況であるが、明赤褐色～にぶい橙色を基調とする。やや粘りのある胎で、小礫を中量、浮石等を含む砂粒が多量、海綿骨針及び赤色粒を微量含む。口縁部に最大径を持つが肩部付近もほぼ類似した径を有するタイプで、頸部の括れが甘く直立気味に外反する。口唇部は１０１と同様に端部を平滑な面と作出しているが、１０１が内傾なのに対し、１０３は外傾の作り出しをしている。外面の調整は１０１と同様に口縁部が横方向のハケメで、横方向のナデにより再調整されているが、撫で消しが甘くハケメ痕が残存して観察される。また、頸部に一条の沈線を施し、体部との境界を明確にしている。口縁部直下が横方向のヘラミガキで、体部は縦方向及び斜め方向のヘラミガキによる調整である。内面は口縁部～体部にかけて横方向のハケメである。１０４はカマド床直及び堆積土とＳＩ－１１カマド堆積土との遺構間接合の土師器甕で口径２５．０ｃｍを測る。ＳＩ－１１出土資料は砕片のみで主たる破片はＳＩ－１０出土資料に帰属する。器面が浸食等の影響を受けて摩滅しており、一部の資料は二次被熱を受けている。やや粘りに欠ける胎で、粒度のきめ細かい石英・長石・輝石・不透明鉱物が多量、海綿骨針が微量含まれ、赤色粒については茶褐色状の風化したものが含まれる。器形は基本的に１０１と類似した形状であるが、頸部下半は体部と明瞭に分けられるものではなく、明確な境界は存在しない。口

縁部は横方向に二段強く撫でることによって外反させており、口唇部は丸みを帯びた形状を呈する。外面の調整は、口縁部が横方向のナデで、体部の斜め方向のハケメが括れ部分に及んでいる。体部上半は横～斜め方向のハケメが施された後、縦方向のヘラミガキによる調整である。内面は摩滅が著しいがナデによる調整である。１０５はカマド床直出土の土師器甕底部で、底径１０．０ｃｍを測る。二次被熱により一部変色・変質が生じているが、外面は明赤褐色、内面は橙色を基調としている。やや粘りのある胎で、河川起源の小礫を多量、石英を主体とする砂粒を多量、海綿骨針を微量、赤色粒を少量含む。ＳＩ－０４出土の９５と類似した器形で､外面の底部付近は横方向のハケメとヘラケズリにより括れを作り出している。体部については斜め方向のヘラミガキによる調整である。内面は横方向のハケメによる調整である。底面は砂底で底面中央が若干窪んだ状態で、砂粒の付着状況が側縁に比べ少ない状況である。

ＳＩ－１１（図版３０－１０６～図版３２－１２２）

出土破片数６０１片、接合資料４７資料中１８点図示した。１０６は堆積土出土の土師器坏で、口径１２．８ｃｍを測る。器壁は浸食等による影響を受けており、内面は剥落が著しい状況で、色調についても影響が生じており灰白色を呈する。やや粘りのある胎で、風化した赤色粒が多量に含まれる。器形は丸みを帯び緩やかに外反しており、口唇部は先細りの形状を呈している。１０７はＳＫ－１堆積土２層から出土した土師器坏で、口径１３．５ｃｍ、器高５．８ｃｍ、底径５．６ｃｍ、器高指数４２．９、底径指数４１．４を測る。二次被熱により外面の剥落が著しく、色調についても影響が生じているが、橙色を基調としている。やや粘りのある胎で、砂礫・赤色粒を多量含み、浮石粒についても混入している。椀形の器形で、口縁部を若干強くつまみ返すように外反させている。口唇部は丸みを帯びた形状である。底部切離しは、右回転糸切で剥落により篦起し痕等の情報は観察できなかった。１０８はＳＫ－１堆積土２層から出土した土師器坏で、口径１２．５ｃｍ、器高６．６ｃｍ、底径５．６ｃｍ、器高指数５２．８、底径指数４４．８を測る。二次被熱による影響を受けており、内面側が剥落している。色調についても影響が生じており、内外面ともにぶい黄橙色を呈する。粘りのある胎で、浮石質の小礫、石英等の砂粒を少量、赤色粒を微量含む。巻き上げ成形によるもので、粘土紐の巻き上げ痕が底部周辺と口縁部直下に観察される。調整はロクロナデによるもので、底部切離しについても右回転糸切によるものである。１０９は床直出土の非ロクロの黒色土器椀で、高台径６．２ｃｍを測る。外面の口縁部直下及び内面が黒色処理によって黒色化しており、外面の体部～底部にかけてにぶい黄橙色を呈する。やや粘りのある胎で、石英を主体とする砂粒を少量、赤色粒を微量含む。器形は直立気味の高台部を有する椀形で、高台部は内外面とも回転ナデにより調整されている。畳付部分は浅い凹線が一条入れられている。外面体部の調整は、横方向のヘラミガキおよび縦方向の篦によるナデで、口縁部直下であると考えられる黒色化した部分は特にヘラミガキが密であり、体部下半は指によるナデが顕著である。内面は横方向のヘラミガキによる調整である。１１０はカマド堆積土１７層出土の土師器小甕で、口径（１６．０）ｃｍ、器高１４．６ｃｍ、底径８．２ｃｍを測る。色調は外面がにぶい黄橙色、内面がにぶい橙色を呈するが、外面の体部～底部にかけて煤が付着しており、内面の口縁部～頸部には煮沸痕が観察される。粘りのある胎であるが、焼きが甘く、砂粒が多量混入している関係でザラザラした質感を有する。調整は外面体部が縦方向のヘラケズリで、局所的にハケメ状の痕跡が残存している箇所が存在する。口縁部は横方向のナデで、布等を使用していたのか平行する条線状の痕跡が観察される。内面の調整は口縁部が外面と同様のナデ、体部は横方向のハケメ及び板目の木口による篦によるナデである。１１１はカマド上面及び堆積土出土の土師器甕底部で､底径７．４

ｃｍを測る。色調は外面が灰黄褐色、内面が褐灰色を呈するが、堆積土出土の資料は二次被熱により破断面も含めて煤等の付着が観察される。粘りのある胎で、粒度の細かい砂粒を多量、赤色粒を中量含む。外面の調整は縦方向のハケメで、内面の調整は横方向のハケメで、底面は無調整である。１１２はカマド堆積土２層・３層下・１７層、ＳＫ－１堆積土２層、建物跡堆積土出土の土師器甕で、底径８．０ｃｍを測る。カマド１７層出土の破片は外面の剥落が著しく、カマド３層下出土資料は内面の器壁が剥落している。外面の色調はにぶい黄橙色、内面の色調はにぶい橙色を呈する。やや粘りのある胎で、浮石質の小礫を微量、石英・輝石を主体とする砂粒を中量、海綿骨針を微量、赤色粒を少量含む。開き気味に立ち上がる器形で、外面体部の調整はヘラケズリによるもので、底部付近を横方向に撫でている。内面は横方向のヘラケズリによる調整である。底面は一部ヘラケズリによる調整が行われているがほとんどが無調整であり、中央付近に植物起源の円環状の浅い刺突痕が観察される。１１３はカマド１層下出土の土師器甕で、口径１９．８ｃｍを測る。色調は外面がにぶい橙色、内面がにぶい黄橙色を呈する。やや粘りに欠ける胎で、浮石を主体とする小礫を少量、砂粒を少量、赤色粒を中量含む。口縁部は粘土紐の接合箇所を支点として折り返したのみの器形で、体部は直胴気味の形状を呈する。調整は外面口縁部がナデで、粘土の接合箇所を篦により複数回撫でつけた箇所が局所的に観察される。体部は篦によるナデで、頸部を超えた箇所まで篦が及んでいる。内面の口縁部は横方向のナデで、体部は浅い斜め方向のハケメで一部はその上を篦により再調整している。１１４はカマド煙道堆積土及び建物跡堆積土出土の土師器小甕で口径１６．２ｃｍを測る。外面体部中半は二次被熱により変色・剥落が著しく、内面の口縁部には煮沸痕及び炭化物付着が観察される。二次被熱等の影響がない部分での外面の色調はにぶい橙色､内面は浅黄橙色を基調とする。やや粘りのある胎で、凝灰質の小礫を微量、針状輝石・石英・長石等の砂粒を中量、海綿骨針を微量、赤色粒を微量含む。また、かなり粒度の細かい炭化物についても胎土中に混入している。器形は、口縁部を横方向のナデにより緩やかに外反させている。口唇部は丸みを帯びた形状を呈する。外面の体部の調整は縦方向のハケメで、体部上半の一部が篦により撫でられている。内面の口縁部の調整は横方向のナデで、体部は横方向のハケメが施された後、ナデによりハケメを撫で消している。１１５はカマド構築前段階の堆積層である「あ層」とカマドの南側遺構外から出土した土師器小甕で、口径１５．６ｃｍを測る。外面の色調はにぶい橙色を、内面の色調は煮沸痕が口縁部～頸部に観察されるが、灰白色を基調とする。粘りのある胎で、浮石質の小礫を微量、砂粒を少量、海綿骨針を微量、赤色粒を微量含む。体部上半に最大径を持つ器形で、口縁部は横方向の強いナデにより外反されており、頸部付近で浅い段状を呈する。体部との境界は横ナデにより境界を明確にしている。外面の口縁部付近の調整は体部の縦方向の篦による調整が行われた後に再度行われており、体部の調整は頸部には及んでいない。内面については口縁部が横方向のナデ、体部が横方向のハケメの後、ナデにより撫で消されている。１１６は床直出土の土師器甕で、口径（２１．２）ｃｍを測る。内外面とも剥落が生じており、特に内面の剥落が著しい。色調についても浸食による影響を受けており、外面は明赤褐色、内面はにぶい橙色を呈する。やや粘りのある胎で、石英を主体とする砂粒を多量、海綿骨針を微量、赤色粒を微量、浮石粒を少量含む。器形は肩部に膨らみを持ち、口縁部を「く」字状に外反させているが､外反が強く潰れた形状を呈する。口縁部の調整は横方向のナデで、体部は縦方向の篦によるナデで、頸部のナデが最終段階に行われており、体部の調整が口縁部に及んでいない。内面は剥落が著しいが口縁部～体部にかけてナデによる調整である。１１７はカマド煙出２５層及び２７層、建物跡堆積土ならびにカマド南側の遺構外出土の土師器小甕で、口径１１．８ｃｍを測る。二次被熱により外面の口縁部付近が剥落しており、内面の口縁部～頸部は煮沸痕及び炭化物付着が観察され

る。色調は二次被熱等の影響を除く部分では外面がにぶい褐色、内面がにぶい橙色を呈する。やや粘りのある胎で、小礫を微量、石英・不透明鉱物を主体とする砂粒を多量、海綿骨針を微量、赤色粒を微量、粒度の細かい浮石を微量含む。器形は頸部相当位置付近が若干窪んでいるが直胴形を呈し、口縁部は外反していない。口唇部は平滑に外傾させており、浅い凹線が一条施されている。外面の調整は摩滅が著しいが体部付近が縦方向の篦によるナデで、内面の口縁部付近は横方向のナデ、体部が横方向のハケメが施されている。１１８は堆積土出土の土師器小甕で、口径１５．８ｃｍを測る。外面の色調はにぶい橙色、内面の色調は灰白色を呈する。内外面及び破断面に白色粘土の付着が、内面の口縁部付近に煮沸痕及び炭化物付着が観察される。粘りのある胎で、粒度のきめ細かい金雲母片を含む砂粒が少量、海綿骨針を微量、赤色粒を微量含む。器形は口縁部の括れが甘く、横方向のナデにより軽く外反されている。外面体部の調整は篦によるナデ及びヘラミガキによる調整で、内面はナデによる調整である。１１９は堆積土及びカマド南側遺構外出土の土師器甕で、口径１８．８ｃｍを測る。外面の頸部～体部上半にかけて煤が付着しており、器面の汚れが著しい。内外面ともにぶい黄橙色を呈する。やや粘りに欠ける胎で、浮石質の小礫を少量、砂粒を少量、赤色粒を少量含み、１１３と類似した構成である。器形についても１１３に類似した形状を持ち、外面の口縁部には輪積み痕が顕著に残存しており、雑な印象を受ける。外面の調整は体部のみ篦による雑なナデにより調整されており、指頭圧痕が顕著である。内面の口縁部～体部上半は横方向のナデで、体部は斜め方向のハケメによる調整である。１２０はＳＫ－１堆積土及び建物跡堆積土出土の土師器甕で、口径２０．８ｃｍを測る。一部二次被熱により剥落・変色が生じているが、内外面ともにぶい橙色を基調としている。粘りの弱い胎でザラザラした質感を有する。凝灰質の小礫を微量、粒度の細かい砂粒を多量、浮石粒を中量、海綿骨針を微量、赤色粒を微量含む。器形は長胴甕で、頸部は浅い「く」字状に外反しており、口唇端部は平滑に作り出されており、端面には浅い凹線が一条施されている。外面の調整は口縁部が横方向のナデで、体部は倒位にした状態で、体部下半から口縁部付近まで篦により長いストロークで撫でられており、頸部を超えた部分まで粘土が寄せられている箇所が観察される。内面の口縁部の調整は横方向のナデで、体部上半は横方向の篦によるナデ、体部中半～体部下半については横方向のハケメである。１２１は堆積土出土の土師器甕で、口径２２．０ｃｍを測る。口縁部付近が二次被熱により変色し、内外面とも体部に煤の付着が認められ、器面の摩滅が著しい状態であるが、外面の色調はにぶい黄橙色、内面の色調は灰白色を呈する。やや粘りのあるパサパサした質感を有する胎で、凝灰質の小礫・石英や浮石粒を主体とする砂粒、風化した赤色粒を多量含む。肉厚な器壁を持つ資料で、口縁部はやや頸部が長く、口縁端部を軽く外反させている。口唇端面は平滑に作り出している部分と丸みを帯びた箇所があり、やや作りが雑である。外面の口縁部の調整は横方向のナデで、体部の調整は縦方向のヘラケズリで、頸部を超えて粘土が寄せられている箇所が観察される。内面の口縁部の調整は外面と同様横方向のナデで、体部の調整は横方向のハケメ状の痕跡を持つ篦による浅いナデで、ほとんどが撫で消されている。１２２は堆積土出土の土師器小甕で、口径１８．０ｃｍ、器高１６．０ｃｍ、底径７．８ｃｍを測る。底部付近が褐灰色に変色しており、体部下半が二次被熱により変色・剥落が生じており、さらに口縁部の一部も二次被熱により変色している箇所がある。また、内面の口縁部～体部上半にかけて煮沸痕があり煤及び炭化物の付着が観察される。色調は前述の影響が各破片に生じているため、部分的な要素を含んでいるが、外面の色調はにぶい黄橙色、内面の色調は橙色を呈する。やや粘りのある胎で、河川起源の摩耗した小礫を多量、石英等の砂粒を多量、粒度の細かい浮石粒を少量、赤色粒を多量含む。口縁部に最大径を持つタイプで、口縁部は横方向のナデにより緩やかに外反している。外面体部の調整は縦方向及び斜め方向のヘラケ

ズリで、頸部直下まで一部及んでいる箇所がある。内面の口縁部は横方向のナデで、体部は横方向のハケメによる調整である。底面は網状脈の木葉痕で、部分的に篦により撫でられている。１２３は堆積土出土の土師器甕で、口径２４．８ｃｍを測る。外面の口縁部～体部上半にかけて煤が付着しており、体部付近についても付着物が全体的に認められ、色調には影響があるが、影響のない部分と考慮される部分については内外面とも褐灰色を呈する。焼きが甘く、断面が黒褐色を呈している。やや粘りのある胎で、浮石質の小礫を微量、石英等の砂粒を少量、赤色粒を中量含む。口縁部に最大径を持つ器形で、頸部が緩やかに長く、口縁部は緩やかに外反している。口唇部は平滑に面取りされており、端面に凹線を１条入れている。また、体部との境界部分に浅い平行沈線を２条入れている。調整は口縁部～体部にかけて横～斜め方向のハケメが施された後、口縁部付近は横方向のヘラミガキ、体部は縦方向ヘラミガキが施された後横方向のヘラミガキがなされ、さらに斜め方向のヘラミガキが施されている。内面の調整は外面と同様横方向のハケメが施された後、口縁部は横方向のヘラミガキ、体部は縦方向のヘラミガキが施される。

ＳＫ－３４

図示はしていないが土師器砕片６点が出土した。内訳は土師器坏口縁部１点、土師器甕口縁部２点、土師器甕体部片３点である。隣接するＳＩ－１１等にも関連づけができるが、資料の接合関係は認められなかった。

遺構外出土土器（図版３２－１２４・１２５）

遺構外出土資料については縄文土器の比率が多く、古代の土器については２８点のみの出土で図化可能な資料は２点のみであった。１２４は沢包含層出土の土師器坏で、口径（１３．６）ｃｍを測る。色調は浅黄橙色～黄橙色を呈する。良く水肥されたきめ細かい胎で、長石･赤色粒等が若干混入するのみである。体部に浅い稜段が認められる。１２５はＸ１１６，Ｙ７０付近出土の土師器坏底部片で、底径５．６ｃｍを測る。粉っぽい胎で、粒径の大きな（φ８mm大）赤色粒や石英主体とする砂粒を中量含む。底部切離しは右回転糸切である。

２.鉄製品・鉄滓（図版３３－１２６～１３３）

確認調査の資料を含め８点図示した。１２６はＳＩ－０２堆積土下層出土の鉄製品で、１１×５．５×３．５mmを測り、重量は１．３ｇを量る。棒状の形状を呈しているが各端部は錆により富化しており、詳細については不明である。１２７はＳＩ－１１堆積土出土の鉄製品で、３９×４×３mmを測り、３．５ｇを量る。刀子の基部にあたり、柄にあたる木質部がその周辺に残存している。１２８はＳＫ－１７堆積土上層出土の鉄滓で、２３×２２×１４mmを測り、５．７ｇを量る。砕片化した鍛冶滓で、やや磁着する。１２９はＳＣ－０２堆積土上層出土の鉄製品で、３３×４×３．５mmを測り、２．９ｇを量る。刀子の基部にあたると思われるが、本遺構は縄文時代中期の埋設土器遺構の上面にあたり、直接本遺構に帰属する製品ではない。１３０は確認調査トレンチ６から出土した鉄製品で、１１×５，５×３．５mmを測り、１．３ｇを量る。１２９と類似した断面形を有するが、残存率が低いため詳細については不明である。１３１はトレンチ６から出土した鉄製品で、３９×３×３mmを測り、２．６ｇを量る。鉄釘で、基部は折釘状に延ばしており、先端部は潰れ曲がっている。１３２はトレンチ１８出土の鉄製品で、３０×４×４mmを測り、１．３ｇを量る。断面形が棒状を呈し、先端部を尖らせた形状を呈しているが詳細については不明

である。１３３は表面採集品の鉄製品で、４０×５×４mmを測り、４．７ｇを量る。メタル度及び磁着度が高く、本製品については比較的新しい製品である。

３．土製品（図版３３－１３４～１４１）

確認調査の資料を含め８点図示した。１３４～１３９はＳＩ－０２出土資料である。１３４は床直出土の完形品の土製紡錘車で、７．７×７．５×１．８ｃｍを測る。断面形は台形状を呈しており、中央に孔径８mmの孔が一方向から穿たれている。胎土には浮石粒や砂礫を多く含むものが使用されており、堅く焼きしまっている。各面の調整はヘラケズリによる調整である。側縁部～片面側に黒斑が観察される。１３５は堆積土出土の土製紡錘車で、欠損資料であるため復元値であるが、直径（６．０）ｃｍ、厚さ２．６ｃｍを測る。孔径については直径（１．３）ｃｍ前後であったものと推定される。断面形はほぼ円柱状を呈していたものと考えられ、胎土については１３４に比べやや粘りのあるものが使用されており、金雲母片が混入している。各面は基本的にヘラケズリによる調整であるが、側縁の上下でヘラケズリとヘラミガキが分けられて調整されている。１３６は堆積土出土の焼成粘土塊で、３．３×３．５×１．９ｃｍを測る。胎土に金雲母片を微量含み、形は球状に作られたものが半分欠損したもので、棒状の工具によるナデが数カ所で観察される。１３７は堆積土出土の焼成粘土塊で、３．２×２．８×２．３ｃｍを測る。金雲母片を微量、赤色粒を中量含み、形は指で撫でつけたような粘土の塊をそのまま焼成したものである。１３８は堆積土出土の焼成粘土塊で、２．１×２．７×１．５ｃｍを測る。胎土に金雲母片が極微量含まれ、側縁に棒状工具で刺突したような痕跡が残存している。１３９は堆積土出土の焼成粘土塊で、３．１×２．１×１．５ｃｍを測る。１３８と同質の胎で、焼成状況も類似した状況である。１４０はＳＩ－１１堆積土１７層下から出土した土製支脚で、上部径８．８ｃｍ、器高１３．４ｃｍ、底径１０．６ｃｍを測る。輪積みによる成形で、器面は内外面とも指頭圧痕が残存して観察される。製作時の底面にあたる上面には砂底土器と同様に砂粒が付着しており、指や工具により側縁部をいびつに押しつけており、中央には孔が空いていない。使用時の底部にあたる部分はアーチ状の切り込みが二個一対で作られているがやや扁平がかっている。１４１は確認調査トレンチ１４から出土した羽口の破片で、３．６×３．３×２．７ｃｍを測る。具体的な形状については不明である。熔結した鉄分が付着しており、磁着度がある。

４．石製品（図版３３－１４２）

ＳＩ－１０堆積土出土の砥石１点のみである。１６９×５７×４６mmを測り、５８６ｇを量る。柱状を呈し、各面とも使用頻度は高い状態であり、長さ２１mm、幅４mm、深さ１mmほどの擦り切り痕が観察される面もある。また、欠損以外の敲打痕は一面のみに確認できる。石質は細粒凝灰岩である。

（木　村）

第２表　江渡遺跡竪穴建物跡観察表

図版番号	遺構番号	位　置	重　複	規　模(cm)			面積(m²)	平面形	断面形	柱穴	ピット	土坑	壁溝	その他	堆積土層	埋土	火山灰	備　考
				長軸	短軸	深さ												
図版 1・2	SI-01	X103.8Y99.8	－	365	320	30	9.996	長方形	d	－	9	－	－	－	11	8	To-a,B-Tm	
図版 3 ～ 6	SI-02	X116.5Y103	SD-01	575	485	32	(19.116)	長方形	a	長方形	8+5	－	a	－	24	9	To-a,B-Tm	二段階
図版 7・8	SI-03	X113.5Y98	－	585	510	30	(16.452)	不整円形	d	亀甲状	9	1	－	－	9	6	(B-Tm)	石囲炉 長軸 106cm. 短軸 84cm. 深さ 18cm, 土器敷
図版 9・10	SI-04	X128Y97.1	－	510	480	50	17.796	隅丸長方形	c	－	16	－	b	－	13	8	To-a	
図版 16	SI-05	X119Y94	－	280	275	25	5.604	円形	d	－	－	－	－	－	5	5	－	
図版 16	SI-06	X129Y90	－	295	240	17	5.436	隅丸長方形	d	－	－	－	－	－	1	1	－	
図版 16	SI-07	X135Y98	－	320	260	15	5.892	方形	d	－	－	－	－	－	1	1	－	
図版 11・12	SI-10	X143.4Y47.8	SP-20	420	390	45	13.788	隅丸方形	a	－	8	－	－	2	11	7	To-a,B-Tm	SX-1 長軸 (60)cm. 短軸 55cm, SX-2 長軸 85cm. 短軸 62cm
図版 13 ～ 15	SI-11	X165.5Y51	－	480	465	45	16.104	方形	a	－	14	1	a	－	10	5	B-Tm	

第３表　江渡遺跡土坑観察表

図版番号	遺構番号	位　置	重　複	規　模(cm)			平面形	断面形	特記事項	備　考
				長軸	短軸	深さ				
図版 17	SK-01	X99Y100.6	－	145	87	35	f	a	－	縄文土器出土
図版 17	SK-02	X106Y98	－	122	70	25	f	d	－	
図版 17	SK-03	X106Y96	－	175	165	40	e	a	－	縄文土器・弥生土器出土
図版 17	SK-04	X107Y94.5	－	180	150	57	e	d	－	縄文土器・弥生土器出土
図版 17	SK-05	X108Y95.6	－	(92)	(65)	47	e	e	－	
図版 17	SK-07	X122.4Y89.6	－	155	130	27	e	c	－	
図版 17	SK-08	X124Y88.5	－	150	130	22	f	d	－	
図版 17	SK-09	X121.6Y97.4	－	153	128	22	c	d	－	
図版 17	SK-10	X134.4Y95.6	－	115	70	12	g	d	－	
図版 17	SK-11	X133Y91	－	215	175	13	e	d	－	
図版 18	SK-12	X134Y101.2	－	185	68	30	g	a	－	
図版 18	SK-13	X132.8Y102.5	－	155	70	10	g	a	－	
図版 18	SK-14	X124Y74	－	90	80	15	e	a	－	
図版 18	SK-15	X123Y76.6	－	80	60	17	e	a	－	
図版 18	SK-16	X124Y68.9	－	110	95	25	e	a	－	
図版 18	SK-17	X115.6Y69.6	－	152	85	28	f	d	－	鉄滓出土
図版 18	SK-18	X123Y62	－	165	80	45	e	d	－	
図版 18	SK-19	X131Y43.4	－	160	104	25	g	a	－	
図版 18	SK-20	X133.4Y47	－	155	120	45	e	i	－	
図版 18	SK-21	X140Y45.2	－	153	110	32	e	a	－	
図版 18	SK-22	X147Y43.6	－	67	47	17	f	i	－	
図版 18	SK-23	X140.2Y63	－	92	82	15	e	a	－	
図版 18	SK-24	X151Y40.4	－	208	110	20	g	i	－	
図版 18	SK-25	X148Y48	－	305	37	88	g	j	－	
図版 18	SK-26	X146Y41	－	85	80	20	h	a	－	
図版 19	SK-27	X141Y43	－	132	65	20	g	a	－	
図版 19	SK-28	X143Y39.6	－	120	62	26	g	a	－	
図版 19	SK-29	X164Y64	－	92	65	20	f	a	－	
図版 19	SK-30	X165.4Y56	－	112	90	25	e	e	－	
図版 19	SK-31	X131.6Y59.8	－	140	70	22	e	a	－	
図版 19	SK-32	X144.6Y67	－	108	66	28	e	d	－	
図版 19	SK-33	X164.4Y47.2	－	87	72	18	e	j	－	
図版 14	SK-34	X162Y51	SP-25・26	78	66	44	e	a	B-Tm	SP-25<SP-26<SK-34, 柱穴状の堆積 , 土師器出土
図版 19	SK-35	X164Y74.6	－	73	70	20	h	d	－	
図版 19	SK-36	X128Y78	－	228	125	48	e	d	－	
図版 19	SK-37	X120.4Y73	－	205	78	52	g	i	－	

第４表　江渡遺跡ピット観察表

図版番号	遺構番号	位　置	重　複	規　模 (cm)			平面形	断面形	備　考
				長軸	短軸	深さ			
図版 19	SP-01	X98.5Y101.2	－	37	32	12	h	a	
図版 16	SP-02	X102.4Y93.4	SC-01	24	19	30	c	a	SC-01<SP-02
図版 19	SP-03	X107.4Y96.4	－	40	27	20	f	a	
図版 19	SP-04	X117Y91.6	－	50	35	10	e	d	
図版 19	SP-05	X119.4Y90.4	－	63	52	20	e	e	
図版 19	SP-06	X121Y91.8	－	55	54	13	h	d	
図版 19	SP-07	X123Y91	－	50	50	15	h	d	
図版 19	SP-08	X123Y99.9	－	75	50	35	e	e	
図版 19	SP-09	X121.2Y99.6	－	52	45	25	e	a	
図版 20	SP-10	X123Y93.2	－	65	55	27	e	j	
図版 20	SP-11	X124.5Y95.5	－	26	25	27	h	a	
図版 20	SP-12	X133Y100.2	－	85	56	23	f	j	
図版 20	SP-13	X124.4Y90.2	－	66	45	15	f	d	
図版 20	SP-14	X125Y89.8	－	62	55	18	e	a	
図版 20	SP-15	X130.4Y101.5	－	76	50	23	e	a	
図版 20	SP-16	X124.5Y95.5	－	53	45	15	h	a	
図版 20	SP-17	X125Y101.4	－	65	53	30	e	i	
図版 20	SP-18	X123Y74.8	－	50	45	12	e	h	
図版 20	SP-19	X122.6Y53	－	63	43	18	e	j	
図版 20	SP-20	X144Y45.3	SI-10	(40)	(36)	12	e	a	SI-10<SP-20
図版 20	SP-21	X143Y42.5	－	40	40	16	h	h	
図版 20	SP-22	X165.7Y48.5	－	60	50	30	e	a	
図版 20	SP-23	X164Y45.8	－	－	35	14	e	d	
図版 20	SP-24	X162Y39.8	－	54	40	12	e	c	
図版 20	SP-25	X162.2Y51.6	SK-34 SP-26	(60)	(45)	24	f	a	SP-25<SP-26<SK-34
図版 20	SP-26	X162.2Y51.6	SK-34 SP-25	(33)	(30)	28	e	h	SP-25<SP-26<SK-34

第５表　江渡遺跡埋設土器遺構観察表

図版番号	遺構番号	位　置	重　複	規模 (cm)			平面形	備　考
				長軸	短軸	深さ		
図版 16	SC-01	X102.5Y93.5	SP-02	50	40	21	e	土器・一部 SI-03 炉跡土器と接合 , 大木 10 式 ,SC-01<SP-02
図版 16	SC-02	X151Y53	－	45	41	(16)	h	入れ子状 , 最花式

第６表　江渡遺跡焼土状遺構・その他の遺構観察表

図版番号	遺構番号	位　置	重　複	規模 (cm)			平面形	断面形	備　考
				長軸	短軸	深さ			
図版 20	SN-01	X131.2Y69	－	255	205	18	b	d	東壁に焼土範囲　45 × 35cm, 縄文土器出土
図版 20	SN-02	X155.5Y59	－	45	35	10	f	i	焼土面
第７図	SX-01	X99Y93	－	501	(200)	10	－	－	縄文土器出土 ,15 年度調査区外へ延びている
図版 21	SX-02	X103Y95	－	290	227	38	e	i	南壁側に不整長楕円形　174 × 110 × 16cm, 縄文土器出土
図版 21	SX-03	X126Y84	－	690	250	65	e	h	
図版 21	SX-04	X135Y75	－	(293)	(285)	36	e	a	西壁側から不整楕円形　170 × 100 × 30cm

第７表　江渡遺跡出土土器観察表

図版番号	番号	遺構番号	調査区	層　位	種別	器種	口径	器高	底径	色調外面	色調内面	焼成	礫	砂	骨	赤	遺存率（口縁）	遺存率（底部）	外面調整	内面調整	底部調整	備　考	整理番号
図版２２	1	SI-01	A	堆積土 P-X, 床直 P-1	縄文	深鉢	-	-	-	7.5YR5/6	10YR4/2	並	中	中	-	微			RL	ナデ			N-7
図版２２	2	SI-03	A	堆積土 P-9.P-X	縄文	深鉢	12.8	-	-	7.5YR4/2	10YR4/2	並	微	中	微	少	6/12		ボタン状貼付 , 隆帯 , 刺突 ,LR, 沈線	ミガキ / ナデ			D-91
図版２２	3	SI-03	A	石囲炉焼土直下 P-22.23.24.25.27.28. 29.30.32. 35.36.37.40.41.44.48.59, 石囲炉堆積土 P-19.21.P-X,SI-04 堆積土 P-X	縄文	深鉢	21.6	33.4	10.0	10YR6/4	10YR6/4	良	微	少	-	中	8/12	4/12	沈線 ,L, 刺突	ミガキ		スス付着	D-90
図版２２	4a	SI-03	A	石囲炉焼土直下 P-43.45,SP-01 堆積土 P-X	縄文	深鉢	-	-	-	2.5YR5/3	10YR5/2	良	少	微	微	微			LR/ 沈線	ナデ		スス付着 ,C-6 と同一個体	C-7
図版２２	4b	SI-03	A	石囲炉焼土直下 P-41.42	縄文	深鉢	-	-	-	2.5YR6/4	10YR5/2	良	少	微	微	微			LR/ 沈線	ナデ		スス付着 ,C-7 と同一個体	C-6
図版２２	5	SI-03	A	SP-02 堆積土 P-X	縄文	深鉢	-	-	-	7.5YR6/4	7.5YR7/2	並	微	少	-	微			RL	ナデ		スス付着	C-3
図版２２	6	SI-03	A	SK- 堆積土中位 P-X	縄文	深鉢	-	-	-	10YR6/4	10YR3/1	並	少	微	-	微			LR/ 沈線	ミガキ			C-4
図版２２	7	SI-03	A	堆積土 P-13	縄文	深鉢	-	-	-	10YR6/3	10YR7/2	良	微	微	-	微			RL/ 沈線	ミガキ			C-5
図版２３	8a	SI-03	A	石囲炉 1.2.6.7.8.12.16 堆積土 ,SC-01 堆積土 P-7	縄文	深鉢	-	-	-	10YR8/4	10YR8/3	良	中	中	微	微			LR/ 沈線	ミガキ		スス付着 ,E-11・15 と同一個体	E-13
図版２３	8b	SI-03	A	石囲炉 3.4.8.11.12.13 堆積土 , 石囲炉焼土直下 P-31, SC-01 堆積土 P-8	縄文	深鉢	-	-	-	10YR7/4	7.5YR7/3	良	多	多	-	少			LR/ 沈線	ミガキ		スス付着 ,E-15・13 と同一個体	E-11
図版２３	8c	SI-03	A	石囲炉 9.10 堆積土 SP-01 堆積土 P-X,SC-01 堆積土 P-6.9.P-X	縄文	深鉢	-	-	-	10YR8/4	10YR7/3	良	多	多	-	微			LR/ 沈線	摩耗のため不明		スス付着 ,E-11・13 と同一個体	E-15
図版２３	9	SI-04	A	堆積土 P-X	縄文	深鉢	-	-	-	7.5YR3/2	7.5YR5/4	良	微	少	-	微			単軸絡条体第１種 R	ナデ			Y-7
図版２３	10	SI-04	A	堆積土 P-X	縄文	深鉢	-	-	-	7.5YR5/3	10YR5/3	良	中	中	微	少			結束第１種	ミガキ			Y-5
図版２３	11	SI-04	A	堆積土 P-X	縄文	壷	-	-	-	10YR4/2	7.5YR4/2	良	少	中	-	微			ナデ /RL/ 沈線	ミガキ			Y-6
図版２３	12	SI-04	A	堆積土 P-X	縄文	深鉢	-	-	-	10YR7/3	2.5Y4/1	良	-	微	-	微			LR/ 沈線	ナデ			Y-9
図版２３	13	SI-04	A	堆積土 P-X	縄文	深鉢	-	-	-	10YR7/3	2.5Y7/3	並	微	微	-				RL/ 沈線	摩耗のため不明			Y-8
図版２４	14a	SI-11	B	カマド 17 層下 P-19 脇 ,X124Y60 包含層 P-X	縄文	深鉢	-	-	-	5YR7/4	7.5YR7/4	良	中	中	微	少			LR/ 沈線	摩耗のため不明		E-3 と同一個体	E-5
図版２４	14b	SI-11	B	カマド 17 層下 P-19 脇	縄文	深鉢	-	-	-	7.5YR7/4	7.5YR7/4	良	多	多	-	微			LR/ 沈線	摩耗のため不明		E-5 と同一個体	E-3
図版２４	15	SI-11	B	カマド 17 層下 P-19 脇	縄文	深鉢	-	-	-	5YR7/6	5YR7/4	良	多	多	-	微			RL/ 沈線	摩耗のため不明			E-4
図版２４	16	SK-01	A	堆積土 P-X	縄文	深鉢	-	-	-	5YR6/6	5YR3/2	良	多	中	微	微			RL/ 沈線	ナデ		スス付着 , 炭化物付着	E-6
図版２４	17	SK-01	A	堆積土 P-X	縄文	深鉢	-	-	-	7.5YR6/6	7.5YR5/4	良	多	中	-	微			RL	ミガキ			E-7
図版２４	18	SK-03	A	堆積土 P-X	縄文	深鉢	-	-	-	7.5YR7/4	10YR7/4	良	中	中	-	微			LR	ミガキ			E-9
図版２４	19	SK-03	A	堆積土 P-X	縄文	深鉢	-	-	-	7.5YR7/6	7.5YR6/6	良	中	中	-	微			RL	ナデ			E-10
図版２４	20	SK-03	A	堆積土 P-X	縄文	深鉢	-	-	-	2.5YR5/6	5YR5/6	良	中	少	少	微			LR	ナデ			E-8
図版２４	21	SN-01	B	堆積土 P-X	縄文	深鉢	-	-	-	7.5YR6/4	(10YR5/4)	並	微	微	-	微			-	剥離	網代痕		C-8
図版２４	22	SX-01	A	堆積土 P-X	縄文	深鉢	-	-	-	10YR5/3	10YR6/4	良	微	少	-	微			LR/ 沈線	ミガキ			Y-11
図版２４	23	SX-01	A	堆積土 P-X	縄文	深鉢	-	-	-	10YR6/4	7.5YR6/4	良	微	少	-	微			LR/ 沈線	ミガキ			Y-12
図版２４	24	SX-01	A	堆積土 P-X	縄文	深鉢	-	-	-	7.5YR6/5	5YR5/5	並	少	中	微	微			LR/ 沈線	ミガキ			Y-13
図版２４	25	SX-01	A	堆積土 P-X	縄文	深鉢	-	-	-	5YR6/4	10YR6/2	良	微	少	-	微			LR	ミガキ			Y-10
図版２４	26	SX-02	A	堆積土 P-X	縄文	深鉢	-	-	12.8	10YR7/4	2.5YR8/2	並	微	中	微	微		6/12	RL	摩耗のため不明	網代痕		Y-14
図版２４	27	SC-02	B	1 層 P-3.4,2 層 P-1.2.5.6.7.8.9.11 下 .12 下 .13.14.15.16.17.18.19.20.21.22.23. 24.25.31.32.33.34.35.36.37.38.39.40.4 1.42.43.44.45.46.47.48.49. 50.51.52.5 3.54.58.71.72.73.74.75.76.77.80.84, 3 層内側 P-X,5 層外側 P-X, 堆積土上層 P-X, トレンチ P-X	縄文	壷	-	-	-	7.5YR6/4	7.5YR5/4	良	微	中	-	少			ナデ /LR/ 瘤状貼付	ミガキ			D-89
図版２４	28	SC-02	B	2 層 P-26.27.28.29,3 層内側 P-X, 3 層 30.55.56.57.59.60.61.62.63.64.65 .66.67.68. 69.70.78.79.81.82.83.85.86 .87.88	縄文	深鉢	17.4	-	-	10YR6/4	10YR4/2	良	微	少	-	少	11.5/12		LR	ミガキ , 円形の剥離多数		炭化物付着	D-88
図版２４	29	遺構外	B	X150Y70 包含層 P-X	縄文	深鉢	-	-	-	7.5YR5/2	7.5YR5/4	良	中	中	-	微			LR 側面圧痕 /LR/ 刺突	ナデ			N-13
図版２４	30	遺構外	B	X132Y78 包含層 P-X	縄文	深鉢	-	-	-	10YR6/4	10YR7/4	並	中	多	微	-			R 側面圧痕 / 結束第１種 / 単軸絡条体第１種 R	ミガキ / ナデ			N-11
図版２４	31	遺構外	B	X158Y67 包含層 P-X	縄文	深鉢	-	-	-	10YR4/2	7.5YR7/6	並	中	中	-	微			単軸絡条体第１種 L,L 側面圧痕	ナデ			N-14
図版２４	32	遺構外	A	X130Y88 包含層 P-X	縄文	深鉢	-	-	-	2.5YR3/2	10YR6/2	並	-	少	微	微			単軸絡条体第１種 R/RL 側面圧痕 / 単軸絡条体第１種 L	ナデ			Y-18
図版２４	33	沢	B	包含層 P-X	縄文	深鉢	-	-	-	10YR7/4	10YR7/4	良	少	中	-	微			単軸絡条体第１種 L	ミガキ			E-17
図版２４	34	沢	B	包含層 P-X	縄文	深鉢	-	-	-	7.5YR4/3	7.5YR7/4	良	多	多	微	微			単軸絡条体第１種 R/LR	ナデ			E-16
図版２４	35	遺構外	A	X105Y90 包含層 P-X	縄文	深鉢	-	-	-	7.5YR7/4	10YR7/4	並	中	中	-	微			L 側面圧痕 / 隆帯 / 刺突	ナデ			N-10

図版番号	番号	遺構番号	調査区	層　位	種別	器種	口径	器高	底径	色調外面	色調内面	焼成	礫	砂	骨	赤	遺存率（口縁）	遺存率（底部）	外面調整	内面調整	底部調整	備　考	整理番号
図版２４	36	遺構外	A	X105Y90 包含層 P-X	縄文	深鉢	-	-	-	2.5Y3/1	10YR4/1	良	中	中	-	微			L 側面圧痕 / 隆帯 / 刺突	ミガキ			N-9
図版２４	37	遺構外	B	X150Y50 包含層 P-X	縄文	深鉢	-	-	-	10YR4/3	5YR5/6	並	中	多	-	微			単軸絡条体第１種 L/ 刺突	ナデ			N-12
図版２４	38	遺構外	A	X130Y80 包含層 P-X	縄文	深鉢	-	-	-	10YR6/2	7.5YR6/3	並	少	少	-	微			L 側面圧痕 / 隆帯 / 貫通孔	ミガキ			Y-17
図版２４	39	遺構外	A	X105Y90 包含層 P-X	縄文	深鉢	-	-	-	10YR6/2	10YR7/3	並	中	中	-	微			L 側面圧痕 / 隆帯 /LR	ミガキ			N-8
図版２４	40	沢	B	包含層 P-X	縄文	深鉢	-	-	-	7.5YR5/4	7.5YR6/8	並	多	多	微	微			LR	摩耗のため不明			E-18
図版２４	41	遺構外	A	X121Y89 包含層 P-X	縄文	深鉢	-	-	-	2.5Y4/1	10YR6/3	良	微	中	-	微			幅広沈線 /LR	ミガキ			Y-15
図版２５	45a	SI-01	A	堆積土 P-X,3 層 P-X	弥生	鉢	-	-	-	5YR5/4	7.5YR5/3	良	中	中	-	微			RL	ミガキ		スス付着 ,N-4 と同一個体	N-6
図版２５	45b	SI-01	A	堆積土 P-X,3 層 P-X	弥生	鉢	-	-	-	2.5YR5/6	7.5YR5/3	良	中	少	-	-			RL	ミガキ		スス付着 ,N-6 と同一個体	N-4
図版２５	46	SI-01	A	堆積土 P-X	弥生	鉢	-	-	-	7.5YR4/2	7.5YR5/4	並	少	微	-	微			LR/ 沈線	ナデ		スス付着	C-10
図版２５	47	SI-01	A	堆積土 P-X	弥生	鉢	-	-	-	7.5YR5/3	7.5YR6/4	並	微	少	-	微			ミガキ	ミガキ / ナデ			C-9
図版２５	48	SI-01	A	堆積土 P-X	弥生	鉢	-	-	-	5YR6/6	5YR5/6	良	微	微	-	微			RL/ 沈線	ナデ			C-11
図版２５	49	SI-01	A	堆積土 P-X	弥生	甕	-	-	-	7.5YR7/4	7.5YR5/2	並	多	中	中	微			沈線 / ナデ	ナデ / ヘラ		スス付着	N-5
図版２５	50	SK-04	A	堆積土 P-X	弥生	鉢	-	-	-	7.5YR6/4	7.5YR4/1	並	微	微	-	微			LR	ミガキ			C-16
図版２５	51	SK-04	A	堆積土 P-X	弥生	鉢	-	-	-	10YR7/3	10YR7/4	並	微	微	-	微			LR	ナデ			C-15
図版２５	52	SK-04	A	堆積土 P-X	弥生	鉢	-	-	-	7.5YR6/3	10YR7/4	並	微	少	-	微			LR	ナデ		スス付着	C-17
図版２５	53	SK-03・04	A	SK-03 堆積土 P-X,SK-04 堆積土 P-X,	弥生	甕	17.6	-	-	7.5YR6/4	10YR6/3	良	微	少	微	中	1.5/12		刻目 / ミガキ / 沈線	ミガキ			D-92
図版２５	54	SK-05	A	堆積土 P-X	弥生	甕	-	-	-	10YR6/3	10YR7/3	並	微	微	-	微			RL/ 沈線	ナデ			C-13
図版２５	55	遺構外	B	X120Y70 包含層 P-X	弥生	鉢	-	-	-	10YR5/2	10YR7/3	良	微	微	-	少			LR	ナデ			C-19
図版２５	56	遺構外	B	X110Y101 包含層 P-X	弥生	鉢	-	-	-	10YR7/3	10YR5/3	良	微	微	-	-			沈線	沈線 / ミガキ			C-18
図版２５	57	遺構外	B	X120Y70 包含層 P-X	弥生	鉢	-	-	-	2.5YR6/2	2.5YR3/2	並	微	微	-	微			LR	ナデ			C-20
図版２６	58	SI-01	A	Pit8 堆積土 1 層 P-1,2 層 P-2, 堆積土 P-X	須恵器	坏	13.7	5.0	6.4	2.5Y7/2	2.5Y7/2	良	-	微	極微	微	7.7/12	12/12	ロクロナデ	ロクロナデ	右回転糸切	重ね焼き痕 , ヘラオコシ痕有	I-5
図版２６	59	SI-01	A	堆積土 P-X	土師器	坏	-	-	4.8	10YR8/4	10YR7/4	並	-	少	微	中		12/12	ロクロナデ	ロクロナデ	右回転糸切	ヘラオコシ痕有	I-8
図版２６	60	SI-01	A	カマド P-2	土師器	小甕	12.0	9.6	7.1	7.5YR7/6	10YR7/4	良	微	中	-	中	12/12	12/12	ナデ / ヘラ	ナデ	ヘラ	輪積痕 , 粘土付着	D-95
図版２６	61	SI-01	A	カマド 6 層 P-1	土師器	甕	20.6	-	-	10YR6/3	10YR8/4	並	微	少	-	中	3.6/12		ナデ / ハケメ + ヘラミガキ	ナデ		スス付着 , 付着物有	D-100
図版２６	62	SI-01・02	A	SI-01 カマド 1 堆積土 P-16,SI-02 カマド煙道底面 P-33, 堆積土 1P-X,Pit9 堆積土 1 層 P-X	土師器	甕	-	-	-	5YR6/8	2.5YR5/8	並	少	中	-	中			ナデ / ハケメ	ナデ / ハケメ		補修孔 1 有	Y-21
図版２６	63	SI-01	A	3 層 P-X, 堆積土 P-X	土師器	鉢	-	-	-	7.5YR7/4	7.5YR7/6	並	微	中	少	中	9/12		ナデ / ハケメ / ヘラ	ナデ / ヘラケズリ		ピッチ付着	D-110
図版２６	64	SI-01	A	3 層 P-X, 堆積土 P-X	土師器	鉢	20.8	-	-	7.5YR7/4	7.5YR8/4	並	微	少	-	中	3.5/12		ナデ / ハケメ / ヘラケズリ+ナデ	ナデ		輪積痕 , ピッチ付着 , 鉄滓が粒状に混入	D-102
図版２６	65	SI-02	A	堆積土下層 P-5, 堆積土 P-9, 堆積土 P-X	須恵器	坏	13.3	5.6	6.6	2.5Y8/1	2.5Y8/1	良	微	中	微	極微	7.1/12	9/12	ロクロナデ	ロクロナデ	右回転糸切	重ね焼き痕有	I-7
図版２６	66	SI-02	A	堆積土下層 P-9, 堆積土 P-X	須恵器	坏	13.4	-	-	10YR7/1	10YR7/1	並	-	やや多	-	-	2.6/12		ロクロナデ	ロクロナデ		二次被熱 , 重ね焼き痕有 , スス付着	I-14
図版２６	67	SI-02	A	床面 P-11, 堆積土 P-X	須恵器	坏	(12.6)	-	-	5Y6/1	5Y6/1	並	-	微	微	中	1.5/12		ロクロナデ	ロクロナデ		二次被熱 , 重ね焼き痕有 , スス付着	I-15
図版２６	68	SI-02	A	床直 P-8	須恵器	坏	(13.4)	-	-	2.5Y7/1	2.5Y7/1	並	-	少	微	中	1.6/12		ロクロナデ	ロクロナデ		二次被熱？ , 重ね焼き痕有	I-17
図版２６	69	SI-02	A	堆積土 P-X	須恵器	坏	(13.0)	-	-	2.5YR8/1	2.5YR8/1	並	-	多	-	-	1.5/12		ロクロナデ	ロクロナデ		二次被熱 , 重ね焼き痕有 , スス付着	I-16
図版２６	70	SI-02	A	堆積土 P-X	土師器	坏	12.7	4.9	5.2	7.5YR7/6	7.5YR6/6	良	-	微	多	多	9.7/12	12/12	ロクロナデ	ロクロナデ	右回転糸切		I-1
図版２６	71	SI-02	A	Pit7 堆積土 P-X, 堆積土 P-X	土師器	坏	12.3	-	-	7.5YR7/4	7.5YR6/4	やや不良	-	少	少	中	2.7/12		ロクロナデ	ロクロナデ		二次被熱 , スス付着	I-13
図版２６	72	SI-02	A	堆積土 P-X	黒色土器	坏	-	-	4.7	N2/0 ～ 10YR5/2	N2/0	並	-	多	-	-		12/12	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	スス付着	I-24
図版２６	73	SI-02	A	貼床 P-56, カマド 1 堆積土 P-9,24,57,P-X, 堆積土 P-27, P-X,Pit7 堆積土 P-64,68,73,P-X,Pit8 床面 P-4,5,1 層 P-50,52,2 層 P-47, 堆積土 P-X,Pit9 堆積土 1 層 P-X	土師器	甕	22.2	-	-	7.5YR6/6	7.5YR6/4	並	微	多	中	少	5.6/12		ナデ / ヘラミガキ	ナデ / ヘラナデ		スス付着	I-20
図版２７	74	SI-02	A	床直 P-29, カマド 1 堆積土 P-15, 堆積土 P-25,Pit2 堆積土 P-X,Pit6 堆積土 P-40,Pit8 堆積土上層 P-1,Pit8 脇貼床 堆積土 P-8	土師器	甕	20.4	-	-	5YR6/6	5YR6/6	並	少	多	微	少	3.7/12		ナデ / ヘラケズリ+ヘラミガキ	ナデ / ハケメ		スス付着	I-18
図版２７	75	SI-02	A	Pit8 堆積土 1 層 P-48, 床面 P-51,Pit9 堆積土 1 層 P-X	土師器	甕	23.2	-	-	2.5YR5/6	2.5YR5/6	並	-	多	-	少	1.8/12		ナデ / ハケメ	ナデ / ハケメ		二次被熱	I-21
図版２７	76	SI-02	A	カマド 1 堆積土 P-4,30,31, 堆積土 P-X,Pit6 堆積土 P-40,Pit8 堆積土上層 P-2,1 層 P-7, 堆積土 P-44	土師器	甕	-	-	5.4	5YR5/6	5YR6/6	並	微	多	微	少		4.5/12	ヘラケズリ / ヘラミガキ	ナデ / ハケメ	ヘラケズリ / ヘラミガキ		I-19

図版番号	番号	遺構番号	調査区	層　位	種別	器種	口径	器高	底径	色調外面	色調内面	焼成	礫	砂	骨	赤	遺存率（口縁）	遺存率（底部）	外面調整	内面調整	底部調整	備　考	整理番号
図版２７	77	SI-02	A	堆積土北壁付近 P-X,Pit6P-X,Pit7 堆積土 P-43.65.67	土師器	甕	(27.4)	-	-	2.5YR5/6	2.5YR5/6	並	-	多	-	少	1.5/12		ナデ / ハケメ / ヘラミガキ / ヘラナデ	ナデ / ヘラミガキ / ハケメ		スス付着	I-22
図版２７	78	SI-02	A	カマド１煙道底面 P-33,Pit8 底面 P-54,Pit9 堆積土１層 P-X	土師器	甕	-	-	-	5YR7/6	5YR6/6	並	微	多	少	少			平行沈線 / ハケメ	ハケメ		二次被熱	Y-20
図版２７	79	SI-02・01	A	SI-02 カマド１堆積土 P-3.20.23.25.28, カマド１直下堆積土 P-23, 堆積土 P-X,SI-01 堆積土 P-X	土師器	甕	25.5	-	-	7.5YR6/6	10YR6/6	並	少	多	微	微	6.6/12		ナデ / ハケメ＋ヘラ	ナデ / ハケメ		スス付着	I-11
図版２７	80	SI-02	A	カマド１堆積土 P-13.P-X, 堆積土 P-X	土師器	甕	-	-	-	5YR5/6	7.5YR7/6	並	少	多	少	少			ナデ / 沈線 / ヘラケズリ・ヘラミガキ	ハケメ		二次被熱 , スス付着	Y-19
図版２８	81	SI-02	A	カマド１P-2.17.18.19. 堆積土 P-X, 堆積土 P-X	土師器	甕	22.0	-	-	5YR6/8	10YR6/4	並	少	多	微	少	10.9/12		ナデ / ヘラミガキ	ヘラミガキ / ハケメ		スス付着	I-12
図版２８	82	SI-02	A	カマド P-1.4.6.9.11.14.15.19.21.22.25 .47.127, カマド床直 P-3,P-X	土師器	甕	22.3	31.8	7.8	5YR6/8	7.5YR6/6	良	少	中	少	中	12/12	12/12	ナデ / ハケメ	ヘラミガキ / ハケメ＋ヘラミガキ	ヘラ	炭化物付着	D-98
図版２８	83	SI-02	A	床直 P-26.27, 堆積土 P-X	土師器	甕	-	-	8.6	5YR5/6	7.5YR7/6	並	微	多	微	少		3.7/12	ヘラケズリ	ヘラナデ / ハケメ / ナデ	無調整	二次被熱 , ピッチ付着	I-23
図版２８	84	SI-02	A	床直 P-2, 堆積土 P-X	土師器	小甕	(15.8)	-	-	7.5YR4/6	5YR6/6	並	微	多	微	微	1.7/12		ヘラケズリ	ナデ / ヘラナデ		二次被熱	I-26
図版２８	85	SI-02	A	堆積土 P-X	土師器	甕	(21.0)	-	-	7.5YR6/4	7.5YR7/6	並	-	少	微	微	1/12		ナデ / ヘラ	ナデ		黒斑有 , 輪積痕有	I-27
図版２８	86	SI-02	A	堆積土 P-X	土師器	小甕	12.0	-	-	5YR6/4	5YR6/6	並	-	多	-	少	3.2/12		ロクロナデ	ロクロナデ			I-28
図版２８	87	SI-04	A	カマド５層 P-1	土師器	坏	13.2	5.3	5.6	10YR6/4	10YR7/4	良	微	多	微	微	11.9/12	12/12	ロクロナデ	ロクロナデ	右回転糸切	二次被熱 , スス付着 , 使用痕有 , 油痕付着	I-2
図版２８	88	SI-04	A	7 層 P-18	土師器	坏	11.5	5.15	5.0	10YR7/6	10YR7/6	やや不良	-	中	微	中	4.8/12	12/12	ロクロナデ	ロクロナデ	右回転糸切	粘土付着	I-9
図版２８	89	SI-04	A	5 層 P-6.16,7 層 P-19, 堆積土 P-X	土師器	坏	13.6	5.0	5.2	7.5YR7/6	7.5YR6/6	良	-	少	微	極多	9.7/12	12/12	ロクロナデ	ロクロナデ	右回転糸切	墨書土器「六」, スス付着 , 打ち欠き痕	I-3
図版２８	90	SI-04	A	5 層 P-9, 床直 P-14.15	土師器	坏	13.2	5.6	5.4	7.5YR7/6	7.5YR7/6	良	-	微	微	多	6/12	12/12	ロクロナデ	ロクロナデ	右回転糸切	黒斑	I-4
図版２９	91	SI-04	A	カマド５層 P-37	土師器	小甕	(16.0)	-	-	7.5YR6/4	7.5YR6/6	並	-	少	-	少	1.7/12		ナデ / ヘラ	ナデ		輪積痕有	I-29
図版２９	92	SI-04	A	5 層 P-29.30.33, 床直 P-3	土師器	甕	21.8	-	-	7.5YR7/4	10YR8/4	並	中	多	微	多	1.5/12		ナデ / ヘラ一部ハケメ	ナデ / ハケメ		スス付着 , 金雲母片混入	D-101
図版２９	93	SI-04・02	A	SI-04 堆積土５層 P-33.35, 床直 P-4,SI-02 堆積土 P-X	土師器	甕	21.3	-	-	5YR5/6	7.5YR5/6	並	微	多	微	微	4.1/12		ナデ / ヘラケズリ	ナデ / ヘラケズリ			I-25
図版２９	94	SI-04・01・02	A	SI-04 床直 P-5.6, 堆積土５層 P-27.28.31.32,Pit3 堆積土上層 P-X,SI-01 堆積土 P-X,SI-02 堆積土 P-X,Pit8 堆積土上層 P-3,Pit9 堆積土上層 P-3	土師器	甕	-	-	8.6	7.5YR6/4	2.5Y6/1	並	少	多	微	多		8/12	ヘラ	ハケメ	砂底	スス付着	D-94
図版２９	95	SI-04・02	A	SI-04 カマド５層 P-24.38,6 層 P-2,SI-02 堆積土 P-X	土師器	甕	-	-	9.4	10YR6/3	2.5Y5/1	良	少	少	微	少		12/12	ハケメ / ナデ	ハケメ	ハケメ	二次被熱 , 摩滅 (底)	D-93
図版２９	96	SI-04・02	A	SI-04 堆積土５層 P-17,SI-02 堆積土 P-X	土師器	甕	-	-	9.8	10YR6/4	7.5YR8/6	良	中	中	-	少	4.7/12		剥落	剥落	木葉痕	二次被熱	Y-3
図版２９	97	SI-10	B	床直 P-28.29	土師器	坏	(11.8)	-	-	10YR8/4	10YR8/4	並	少	微	-	中	0.5/12		ロクロナデ	ロクロナデ		粘土付着	K-4
図版２９	98	SI-10	B	床 P-62, 堆積土 P-X	土師器	坏	(12.0)	-	-	10YR7/4	10YR7/4	並	微	少	-	中	1/12		ロクロナデ	ロクロナデ			K-5
図版２９	99	SI-10	B	床直 P-37.42	土師器	坏	15.4	-	-	10YR7/4	10YR6/2	並	-	少	少	少	2.5/12		ナデ / ヘラミガキ / ヘラ	ナデ / ヘラミガキ		輪積痕有 , 黒斑 , 金雲母片混入	D-109
図版２９	100	SI-10	B	カマド堆積土 P-24, 下層 P-22 下 , 床直 P-22	土師器	甕	(24.4)	-	-	7.5YR7/6	5YR6/6	良	少	中	微	微	1.2/12		ハケメ＋ナデ / ハケメ	ナデ / ハケメ (条痕状)		浸食 , 金雲母片混入	K-12
図版３０	101	SI-10	B	堆積土 P-1.X, 床直 P-3.4.8.14.15.16. 27.29.30.31.32.35.38.39.56, 床 P-70, カマド煙道 P-X	土師器	甕	21.8	31.8	8.4	7.5YR7/6	5YR6/6	良	微	中	微	少	7.3/12	11/12	ナデ / ハケメ / ヘラミガキ	ヘラミガキ / ハケメ	無調整	付着物有 , スス付着 , 二次被熱	K-3
図版３０	102	SI-10	B	床直 P-21.23.24.26.27, カマド堆積土 P-23	土師器	甕	(22.0)	-	-	10YR7/4	7.5YR7/6	並	微	中	微	多	0.8/12		ナデ / ハケメ	ナデ / ハケメ		煮炊痕有 , 被熱により剥離	K-11
図版３０	103	SI-10	B	床直 P-17.22 下 .23.25, カマド床直 P-20	土師器	小甕	15.6	-	-	5YR5/6	7.5YR6/4	良	中	多	微	微	2/12		ハケメ＋ナデ / ヘラミガキ	ハケメ		同一個体床直 P-18 ＋ P-25.P-32	K-2
図版３０	104	SI-10・11	B	SI-10 床直 P-21, カマド床直 P-16, 堆積土 P-25, SI-11 カマド堆積土 P-X	土師器	甕	25.0	-	-	10YR7/3	7.5YR7/4	良	少	多	微	少	3.2/12		ナデ / ハケメ＋ヘラミガキ	ナデ		一部被熱	K-1
図版３０	105	SI-10	B	カマド床直 P-6(S-1)	土師器	甕	-	-	10.0	2.5YR5/6	7.5YR7/6	良	多	多	微	少	3/12		ハケメ / ヘラケズリ / ヘラミガキ	ハケメ	無調整 / 砂底		K-8
図版３０	106	SI-11	B	堆積土 P-X	土師器	坏	12.8	-	-	10YR8/2	10YR8/2	並	多	少	-	多	2.7/12		ロクロナデ	ロクロナデ		剥落大 , 赤色粒粒径大 (φ 5mm),2.0/12 同一個体別破片	K-9
図版３０	107	SI-11	B	SK-01 堆積土２層 P-X	土師器	坏	13.5	5.8	5.6	7.5YR6/6	7.5YR6/6	並	微	多	微	少	4.9/12	12/12	ロクロナデ	ロクロナデ	右回転糸切	スス付着 , 摩滅 . 剥離	I-6
図版３０	108	SI-11	B	SK-01 堆積土 2P-1,2 層 P-X	土師器	坏	12.5	6.6	5.6	10YR7/3	10YR6/3	並	少	少	-	微	2.9/12	5.5/12	ロクロナデ	ロクロナデ	右回転糸切	輪積痕有	I-10
図版３０	109	SI-11	B	床直 P-20	黒色土器	高台椀	-	-	6.2 (高台)	10YR7/4	N1.5/0	良	-	少	-	微		12/12	ヘラミガキ / ヘラ / ナデ	ヘラミガキ	回転ヘラナデ / ナデ	黒色処理	K-10

図版番号	番号	遺構番号	調査区	層　位	種別	器種	口径	器高	底径	色調外面	色調内面	焼成	礫	砂	骨	赤	遺存率（口縁）	遺存率（底部）	外面調整	内面調整	底部調整	備　考	整理番号
図版３１	110	SI-11	B	カマド 17 層下 P-9.10.13.17.18.19 脇 .21, カマド 17 層下 S-3, 堆積土 P-X	土師器	小甕	(16.0)	14.6	8.2	10YR7/4	7.5YR6/4	やや不良	微	多	-	少	0.4/12	12/12	ナデ / ヘラケズリ , ハケメ	ナデ / ハケメ , ヘラ	ヘラ	炭化物付着 , 煮炊痕有	D-97
図版３１	111	SI-11	B	カマド上 P-13, 堆積土 P-X	土師器	甕	-	-	7.4	10YR6/2	10YR4/1	並	少	多	-	中		3/12	ハケメ	ハケメ	無調整	二次被熱 , スス付着	N-16
図版３１	112	SI-11	B	2 層 P-X,3 層下 P-16,17 層 P-15, カマド上 P-35, 堆積土 P-X,SK-1 堆積土 P-X,2 層 P-X	土師器	甕	-	-	8.0	10YR7/3	7.5YR6/4	並	微	中	-	少		9/12	ヘラ / ナデ	ヘラ	一部ヘラケズリ ⁉		D-104
図版３１	113	SI-11	B	カマド I 層下 P-2.4	土師器	甕	19.8	-	-	7.5YR6/4	10YR6/3	並	少	少	-	中	2.5/12		ナデ / ヘラ	ナデ / ハケメ一部ヘラ		スス付着 , 輪積痕有	D-106
図版３１	114	SI-11	B	堆積土 P-2.P-X, カマド煙出堆積土 P-X	土師器	甕	16.2	-	-	7.5YR6/4	10YR8/4	並	微	中	少	微	2/12		ナデ / ヘラ / ハケメ	ナデ / ハケメ		スス付着 , 煮炊痕 . 輪積痕 . 指頭圧痕 , 剥離	D-105
図版３１	115	SI-11	B	カマド (ア)P-X, 外カマド南 P-X	土師器	甕	15.6	-	-	7.5YR6/4	10YR8/1	並	微	少	微	微	1.5/12		ナデ / ヘラ	ナデ / ハケメ		スス付着 . 煮炊痕有 , 付着物有	D-108
図版３１	116	SI-11	B	床直 P-28	土師器	甕	(21.2)	-	-	5YR5/6	7.5YR6/4	並	-	多	微	微	0.8/12		ナデ / ヘラ	ナデ			I-31
図版３１	117	SI-11	B	堆積土 P-11.P-X, カマド P-25.27.P-X, 外カマド南 P-X	土師器	甕	11.8	-	-	7.5YR5/3	7.5YR6/4	並	-	多	微	微	2.2/12		ナデ / ヘラ	ナデ / ヘラ / ハケメ		炭化物付着 , スス付着 , 輪積痕有	I-32
図版３１	118	SI-11	B	堆積土 P-18	土師器	甕	15.8	-	-	7.5YR6/4	7.5YR5/2	並	-	少	微	微	2.1/12		ナデ / ヘラ / ヘラミガキ	ナデ		炭化物付着 , 煮炊痕有 . 輪積痕有 , 金雲母片混入	I-33
図版３１	119	SI-11	B	堆積土 P-5.23.P-X, 外カマド南 P-X	土師器	甕	18.8	-	-	10YR6/3	10YR7/3	並	少	少	-	微	4.5/12		ナデ / ヘラ	ナデ / ハケメ		スス . 粘土付着 , 輪積痕 . 指頭圧痕有	D-103
図版３２	120	SI-11	B	堆積土 P-2.3.P-X,SK-01 堆積土 P-X	土師器	甕	20.8	-	-	7.5YR6/4	7.5YR6/4	並	微	少	微	微	2.1/12		ナデ / ヘラケズリ	ナデ / ヘラ / ハケメ			I-30
図版３２	121	SI-11	B	堆積土 P-10.25.26.P-X	土師器	甕	18.0	16.0	7.8	10YR7/4	7.5YR6/5	良	中	多	-	多	12/12	12/12	ナデ / ヘラ / ヘラミガキ	ナデ / ハケメ	木葉痕網状脈	粘土 . スス付着 , 煮炊痕有	D-96
図版３２	122	SI-11	B	堆積土 P-4	土師器	甕	22.0	-	-	10YR7/3	10YR8/2	並	微	中	-	多	5/12		ナデ / ヘラ	ナデ / ハケメ		摩滅 , スス付着	D-107
図版３２	123	SI-11	B	堆積土 P-7.8.9.13.21.22.P-X	土師器	甕	24.8	-	-	7.5YR4/1	10YR5/1	並	微	少	-	中	4.3/12		ハケメ + ヘラミガキ	ハケメのちヘラミガキ		スス付着 , 沈線	D-99
図版３２	124	遺構外	B	沢 , 包含層 P-X	土師器	坏	(13.6)	-	-	10YR8/4	10YR8/6	良	-	微	-	少	0.5/12		ロクロナデ	ロクロナデ		火ダスキ痕 , 粉っぽい , よく水肥されている	K-6
図版３２	125	遺構外	B	X116Y70 包含層 P-X	土師器	坏	-	-	5.6	10YR8/6	10YR8/6	良	少	中	-	中		1.5/12	ロクロナデ	ロクロナデ	右回転糸切	赤色粒かなり大きい	K-7

第８表　江渡遺跡出土石器･石製品観察表

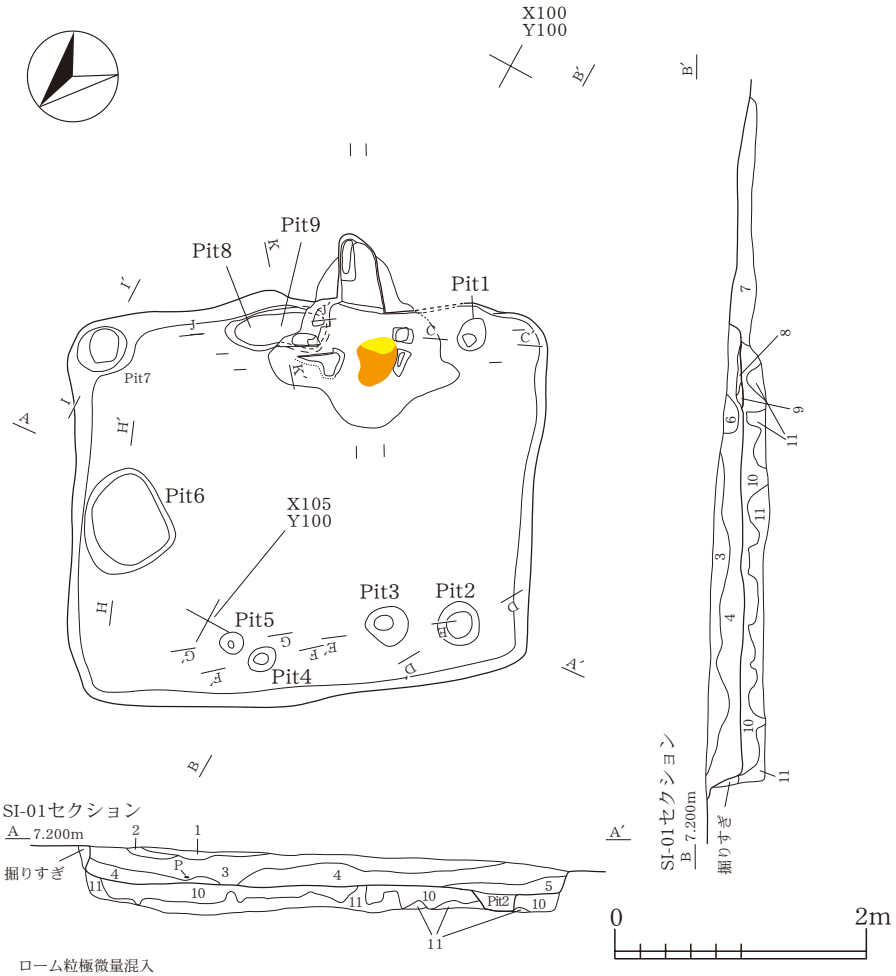
図版番号	番号	遺構名	層　位	種　別	計測値				石　質	備　考	整理番号
					長さ（㎜）	幅（㎜）	厚さ（㎜）	重さ(g)			
図版 25	42	SI-01	３層 S-X	石鏃	28	17	5	1.4	頁石		O-2
図版 25	43	SI-01	４層上 S-2	不定形	34	30	8	3.8	頁石		O-3
図版 25	44	トレンチ 18 建物跡（縄文）	堆積土上層 S-X	磨製石斧	121	47	22	180	凝灰岩		K-4
図版 33	142	SI-10	堆積土 S-8	砥石	169	57	46	586	細粒凝灰岩		K-3

第９表　江渡遺跡出土土製品観察表

図版番号	番号	遺構名	層位	器種	法量（㎝）			色調		焼成	礫	砂	骨	赤	金雲母	残存率	調整		備　考	整理番号
					長さ（上辺径）	幅（高さ）	厚さ（底径）	外面	内面								外面	内面		
図版３３	134	SI-02	床直 P-14	紡錘車	7.7	7.5	1.8	10YR8/6	10YR8/3	良	微	多	微	少	－	12/12			側面ケズリ・一部黒斑，繊維痕有，孔径 0.8 ㎜	S-22
図版３３	135	SI-02	堆積土 P-X	紡錘車	(6.0)	-	2.6	5YR6/6	10YR4/1	良	微	多	－	微	少	6/12			側面ケズリ	S-24
図版３３	136	SI-02	堆積土 P-X	焼成粘土塊	3.3	3.5	1.9	7.5YR6/6		良	微	多	－	微	微					S-25
図版３３	137	SI-02	P-X	焼成粘土塊	3.2	2.8	2.3	7.5YR8/6		並	－	少	－	中	微					S-26
図版３３	138	SI-02	P-X	焼成粘土塊	2.1	2.7	1.5	10YR8/3		並	－	少	－	少	極微				ピッチ微量付着	S-27
図版３３	139	SI-02	堆積土 P-X	焼成粘土塊	3.1	2.1	1.5	10YR8/3		並	－	少	－	少	微					S-28
図版３３	140	SI-11 カマド	17 層下 P-6	土製支脚	8.8	13.4	10.6	10YR8/4	5YR6/6	良	中	多	－	中	微	11/12	ユビナデ / 指頭痕	ユビナデ / 指頭痕	輪積痕，工具痕，ピッチ微量付着	S-29
図版３３	141	トレンチ 14	堆積土上層	羽口	3.6	3.3	2.7	2.5Y6/3	5YR5/6	並	微	多	－	－	－					S-5

第 10 表　江渡遺跡出土鉄製品観察表

図版番号	番号	遺構名	層位	種　別	長さ×幅×厚さ（㎜）	重量（ｇ）	滋着度	メタル度	備　考	整理番号
図版 33	126	SI-02	堆積土下層	鉄製品	32 × 4 × 4	2.9	5	△		S-1
図版 33	127	SI-11	堆積土	刀子	39 × 4 × 3	3.5	3	△		S-2
図版 33	128	SK-17	堆積土上層	鉄滓	23 × 22 × 14	5.7	1	△		S-3
図版 33	129	SC-02	堆積土上層	刀子	33 × 4 × 3.5	2.9	4	△		S-4
図版 33	130	トレンチ 6	堆積土上層	鉄製品	11 × 5.5 × 3.5	1.3	4	△		S-15
図版 33	131	トレンチ 6	堆積土	釘	39 × 3 × 3	2.6	4	○		S-16
図版 33	132	トレンチ 18	包含層	鉄製品	30 × 4 × 4	1.3	4	△		S-17
図版 33	133		表採	鉄製品	40 × 5 × 4	4.7	6	◎		S-18



SI-01

第1層	10YR2/1	黒色土	ローム粒極微量混入
第2層	10YR2/3	黒褐色土	ローム粒極微量、炭化物極微量混入
第3層	10YR2/2	黒褐色土	ロームブロック(φ10mm)少量、焼土粒微量混入、To-a火山灰層上部でブロック状に(φ10mm)極微量混入
第4層	10YR2/2	黒褐色土	ロームブロック(φ10～50mm)中量、炭化粒微量、焼土粒極微量混入
第5層	10YR3/2	黒褐色土	ロームブロック(φ10～30mm)中量、炭化粒極微量、焼土粒極微量混入
第6層	10YR3/2	黒褐色土	ローム粒微量混入
第7層	10YR4/3	にぶい黄褐色土	ロームブロック(φ10～30mm)中量混入(漸移層)
第8層	5YR4/6	赤褐色土	炭化粒微量、焼土ブロック(φ10～20mm)多量混入
第9層	10YR4/6	褐色土	ロームブロック(φ10mm)、焼土粒微量混入 カマドローム層？
第10層	10YR3/1	黒褐色土	ロームブロック(φ10～100mm)多量、炭化粒微量混入(掘り方)
第11層	10YR6/8	明黄褐色土	混入物なし

Pit1
C 7.000m C′

Pit2
D 7.000m D′

Pit1
第1層 10YR3/3 暗褐色土 ロームブロック(φ50mm)少量、焼土粒微量

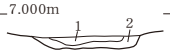
Pit2
第1層 10YR2/3 黒褐色土 ロームブロック(φ10～50mm)多量、炭化粒微量
第2層 10YR4/6 褐色土 ロームブロック

Pit3
E 7.000m E′

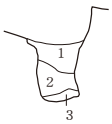
Pit4
F 7.000m F′

Pit5
G 7.000m G′

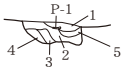
Pit6
H 7.000m H′



Pit7
I 7.000m I′



Pit8
J 7.000m J′



Pit9
K 7.100m K′

Pit3
第1層 10YR2/3 黒褐色土 ロームブロック(φ10～30mm)中量、炭化粒微量、焼土粒少量

Pit4
第1層 10YR2/3 黒褐色土 ロームブロック(φ10～20mm)中量

Pit5
第1層 10YR2/3 黒褐色土 ロームブロック(φ50mm)多量、炭化粒微量

Pit6
第1層 10YR2/3 黒褐色土 ロームブロック(φ10mm)中量
第2層 10YR2/2 黒褐色土 ローム粒・炭化粒微量

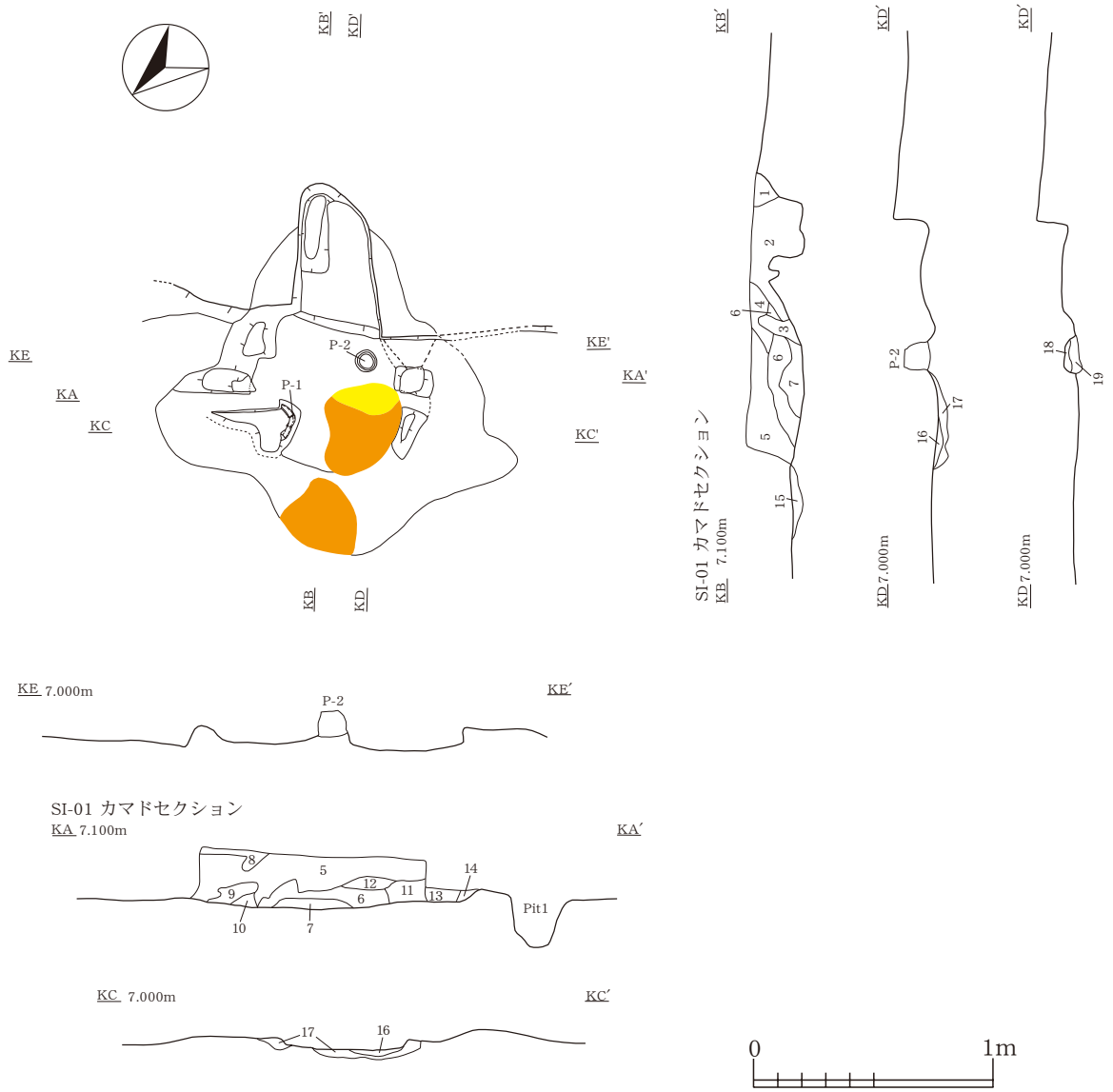
Pit7
第1層 10YR2/3 黒褐色土 ロームブロック(φ30mm)極微量炭化粒微量
第2層 10YR2/2 黒褐色土 ロームブロック(φ20～40mm)少量、炭化粒微量
第3層 10YR2/2 黒褐色土 ロームブロック(φ50mm)微量

Pit8
第1層 10YR2/2 黒褐色土 ローム粒(φ5mm)中量、炭化粒微量
第2層 10YR3/3 暗褐色土 ロームブロック(φ15mm)中量、焼土粒微量
第3層 10YR5/6 黄褐色土 炭化粒微量、焼土ブロック(φ10mm)少量
第4層 10YR3/2 黒褐色土 ロームブロック(φ40mm)多量
第5層 10YR5/8 黄褐色土 混入物なし

Pit9
第1層 10YR3/3 暗褐色土 炭化粒・焼土粒微量
第2層 10YR7/6 明黄褐色土 黒色土(10YR2/1)少量混入
第3層 5YR4/8 赤褐色土 ロームブロック(φ20mm)少量
第4層 10YR5/6 黄褐色土 ローム粒・炭化粒少量

図版 1　SI-01-1

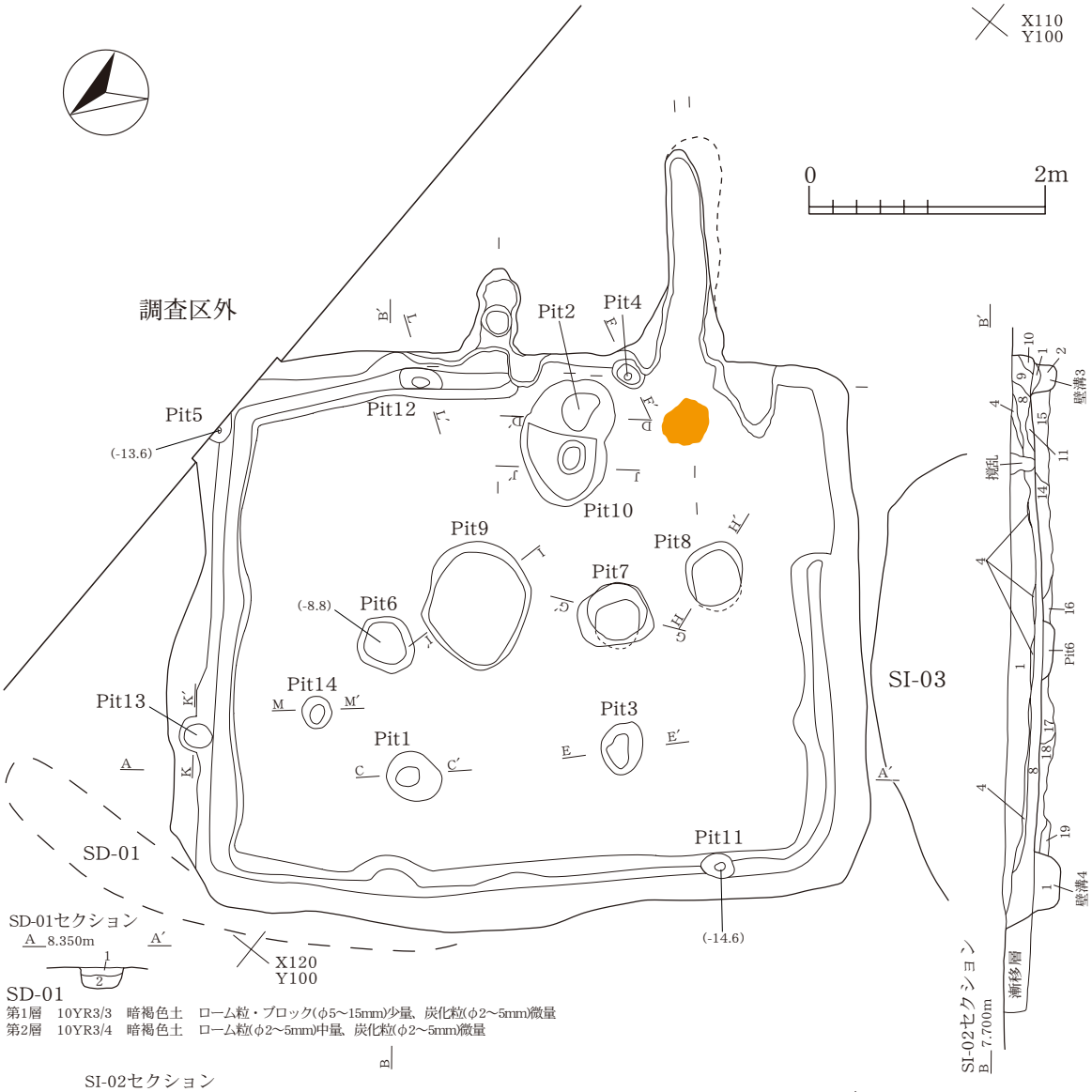
SI-01カマド



SI-01 カマド

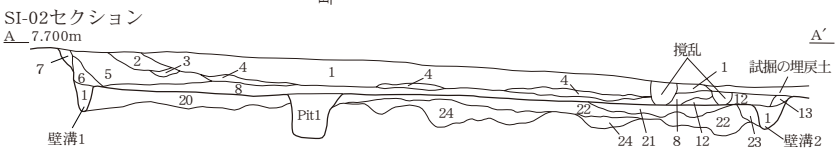
第1層　10YR3/2 黒褐色土　ローム粒微量
第2層　10YR3/3 暗褐色土　ローム粒少量
第3層　10YR3/4 暗褐色土　ロームブロック(φ20mm)・焼土粒微量
第4層　10YR6/8 明黄褐色土 炭化粒微量、カマド崩落土
第5層　10YR2/2 黒褐色土　ロームブロック(φ10mm)少量、炭化粒・焼土粒微量(建物堆積土4層）、To-a火山灰層上部にブロック状に混入
第6層　10YR5/8 黄褐色土　焼土粒少量混入、カマド崩落土
第7層　10YR4/6 褐色土　ロームブロック(φ10～20mm)多量
第8層　10YR2/1 黒色土　ローム粒少量(建物堆積土1層）、B-Tm火山灰(φ40mm)層上部に混入
第9層　10YR6/4 黄褐色土　炭化粒微量混入(袖？）、焼土ブロック(φ20mm)微量
第10層 10YR5/6 黄褐色土　ローム粒・焼土粒微量(袖？）
第11層 5YR4/6　赤褐色土　焼土粒・ローム粒少量、黒色土(根による影響）微量混入(袖？）
第12層 10YR7/6 明黄褐色土 焼土ブロック多量混入(被熱受けた？）
第13層 10YR5/8 黄褐色土　ローム粒少量
第14層 10YR3/3 暗褐色土　ローム粒・焼土粒微量
第15層 5YR4/8　赤褐色土
第16層 5YR4/8　赤褐色土　火床面
第17層 5YR3/4　暗赤褐色土 ロームブロック(φ20mm)微量
第18層 5YR4/6　赤褐色土　炭化粒・焼土粒極微量
第19層 10YR3/4 暗褐色土　ロームブロック(φ10mm)極微量

図版 2　SI-01-2



SD-01

第1層　10YR3/3　暗褐色土　ローム粒・ブロック(φ5～15mm)少量、炭化粒(φ2～5mm)微量
第2層　10YR3/4　暗褐色土　ローム粒(φ2～5mm)中量、炭化粒(φ2～5mm)微量



SI-02

第1層　10YR2/3 黒褐色土 炭化粒(φ2～3mm)微量、焼土粒(φ2～5mm)微量
第2層　10YR4/4 褐色土　炭化粒(φ2～3mm)微量、焼土粒(φ1～2mm)少量
第3層　10YR4/4 褐色土　B-Tm火山灰中量混入
第4層　10YR3/3 暗褐色土 焼土粒(φ2～3mm)微量、B-Tm火山灰(φ10～30mm)中量
第5層　10YR3/3 暗褐色土 ローム粒(φ2～3mm)微量、炭化粒(φ2～5mm)少量、焼土粒(φ2～5mm)中量
第6層　10YR3/3 暗褐色土 ローム粒(φ2～3mm)微量、炭化粒(φ2～5mm)少量、焼土粒(φ2～5mm)中量、B-Tm火山灰微量
第7層　10YR4/6 褐色土　ローム粒(φ2～3mm)微量、炭化粒(φ2～3mm)微量
第8層　10YR3/4 暗褐色土 ローム粒(2～5mm)中量、炭化粒(φ2～5mm)中量、焼土粒(φ2～5mm)中量
第9層　10YR3/3 暗褐色土 炭化粒(φ2～5mm)少量、焼土粒(φ2～5mm)中量
第10層 10YR3/3 暗褐色土 ロームブロック(φ10～30mm)多量、焼土粒(φ2～3mm)中量
第11層 10YR3/4 暗褐色土 ローム粒(φ2～3mm)微量、焼土粒(φ2～9mm)中量
第12層 10YR4/6 褐色土　ローム粒(φ5～9mm)少量、炭化粒・炭化物(φ5～20mm)中量、焼土粒(φ2～3mm)少量
第13層 10YR4/6 褐色土　ロームブロック10～20mm)多量、焼土粒(φ5～9mm)中量

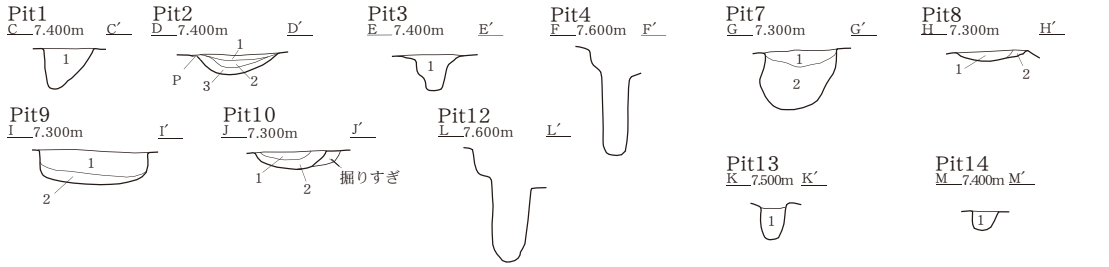
貼床

第14層 10YR5/6 黄褐色土　ロームブロック(φ10～30mm)多量、炭化粒(φ2～5mm)中量
第15層 10YR5/6 黄褐色土　ロームブロック(φ10～30mm)多量、炭化粒(φ2～9mm)少量
第16層 10YR6/8 明黄褐色土 褐色土中量含む
第17層 10YR3/3 暗褐色土　ロームブロック(φ10～40mm)多量、炭化粒(φ5～9mm)少量
第18層 10YR4/4 褐色土　ロームブロック(φ10～30mm)中量、炭化粒(φ5～9mm)少量
第19層 10YR4/4 褐色土　ロームブロック(φ10～40mm)多量、黒褐色土中量
第20層 10YR4/4 褐色土　ローム粒・ブロック(φ5～30mm)多量、炭化粒(φ5～9mm)少量、粘土ブロック(φ10～30mm)中量
第21層 10YR4/4 褐色土　ロームブロック(φ10～40mm)多量、炭化粒(φ5～9mm)少量
第22層 10YR3/3 暗褐色土　ロームブロック(φ10～30mm)多量、炭化粒(φ5～9mm)少量
第23層 10YR4/6 褐色土　ロームブロック(φ10～40mm)中量、炭化粒(φ5～9mm)微量
第24層 10YR3/4 暗褐色土　ロームブロック(φ10～40mm)多量、炭化粒(φ5～9mm)微量、粘土ブロック(φ10～40mm)中量

壁溝

壁溝1 第1層 10YR3/3 暗褐色土 ローム帯状に混入、焼土粒(層上位に帯状に混入)中量
壁溝2 第1層 10YR4/4 褐色土　ローム粒・ブロック(φ2～50mm)多量 、炭化粒・炭化物(φ5～15mm)少量
壁溝3 第1層 10YR3/3 暗褐色土 ローム粒・ブロック(φ5～10mm)中量、炭化粒(φ2～3mm)少量
　　第2層 10YR3/3 暗褐色土 ローム粒(φ2～3mm)微量、炭化粒(φ2～3mm)微量
壁溝4 第1層 10YR3/4 暗褐色土 炭化粒(φ2～5mm)少量、焼土ブロック(φ30mm)微量

図版 3　SI-02-1



Pit1
第1層 10YR2/2 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック(φ5～15mm)・炭化粒(φ5～9mm)少量、焼土粒(φ5～6mm)微量

Pit2
第1層 10YR3/3 暗褐色土 炭化粒(φ5～9mm)少量、焼土粒・ブロック(φ5～20mm)中量
第2層 10YR3/4 暗褐色土 炭化粒(φ5～9mm)微量、焼土ブロック(φ10～30mm)多量
第3層 10YR3/4 暗褐色土 炭化粒(φ2～3mm)微量、ローム帯状に多量混入

Pit3
第1層 10YR2/2 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック(φ5～15mm)・炭化粒(φ5～9mm)少量

Pit7
第1層 10YR5/6 黄褐色土 ロームブロック(φ10～30mm)多量、炭化粒・炭化物(φ5～15mm)少量
第2層 10YR3/4 暗褐色土 ロームブロック(φ10～20mm)多量、炭化粒・炭化物(φ5～20mm)・焼土粒・焼土ブロック(φ5～20mm)中量

Pit8
第1層 5YR5/6 明赤褐色土 ローム粒・ブロック(φ5～20mm)少量、炭化粒(φ5～9mm)中量、橙色焼土粒(5YR6/2) ・ブロック(φ5～20mm)多量
第2層 10YR3/4 暗褐色土 ローム粒・ブロック(φ5～15mm)中量、炭化粒(φ5～9mm)少量

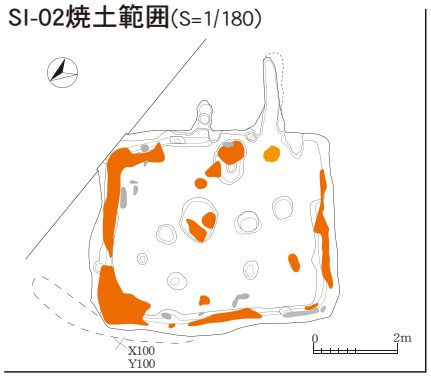
Pit9
第1層 10YR4/4 褐色土 ローム粒・ブロック(φ5～30mm)多量、炭化粒・炭化物(φ5～15mm)・焼土粒・ブロック(φ5～20mm)中量
第2層 10YR5/6 黄褐色土 炭化粒・炭化物(φ5～30mm)少量、褐色土が帯状に極多量混入

Pit10
第1層 10YR4/6 褐色土 ローム粒・ブロック(φ2～30mm)中量、炭化粒(φ2～9mm)少量
第2層 10YR4/6 褐色土 ロームブロック(φ10～30mm)多量、炭化粒(φ2～9mm)少量

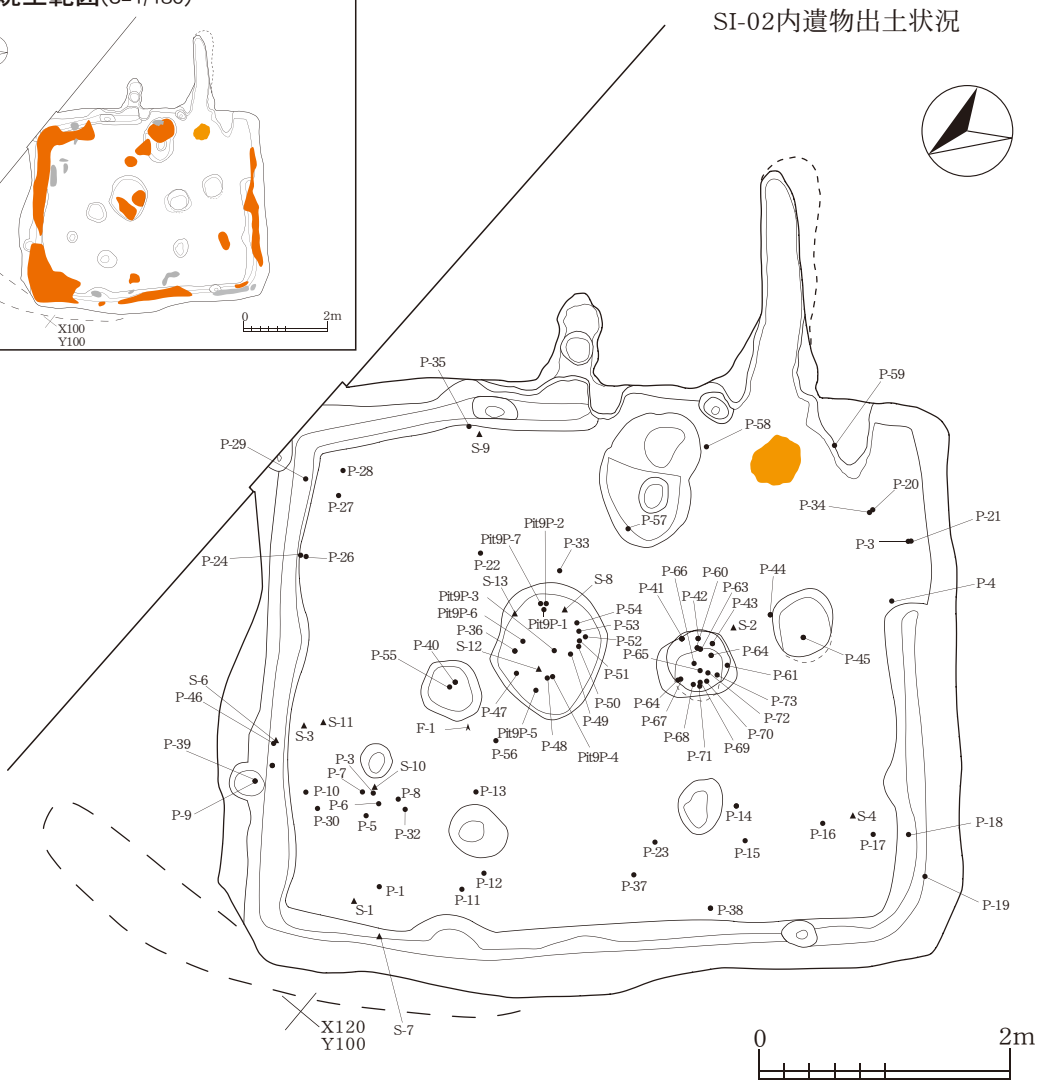
Pit12
第1層 10YR2/2 黒褐色土 ローム粒・ブロック(φ5～40mm)多量、炭化粒(φ2～9mm)中量、焼土粒(φ2～3mm)微量

Pit14
第1層 10YR2/2 黒褐色土 ローム粒・ブロック(φ2～15mm)中量、炭化粒(φ2～5mm)微量

SI-02焼土範囲(S=1/180)

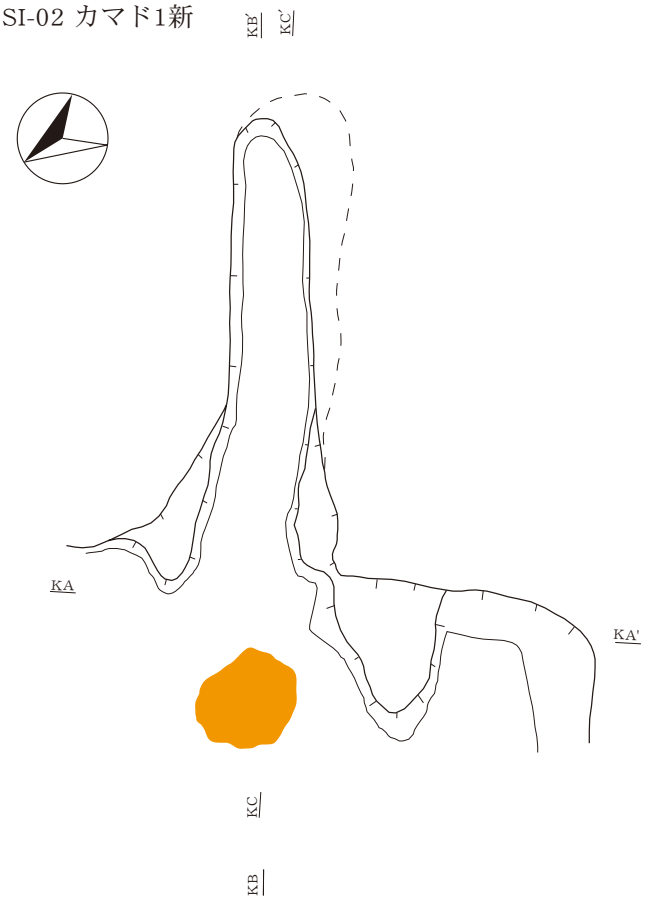


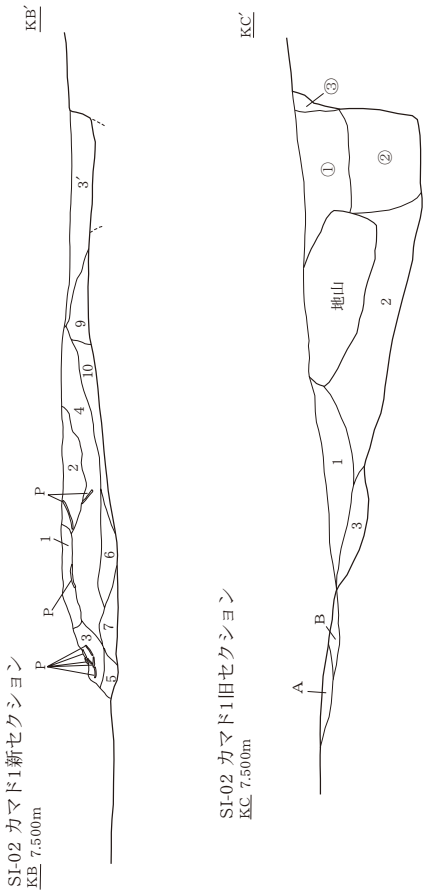
SI-02内遺物出土状況



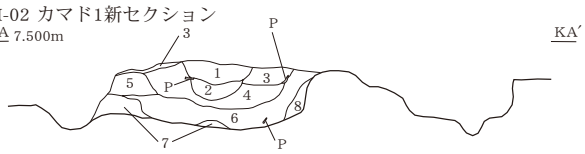
図版 4　SI-02-2

SI-02 カマド1新

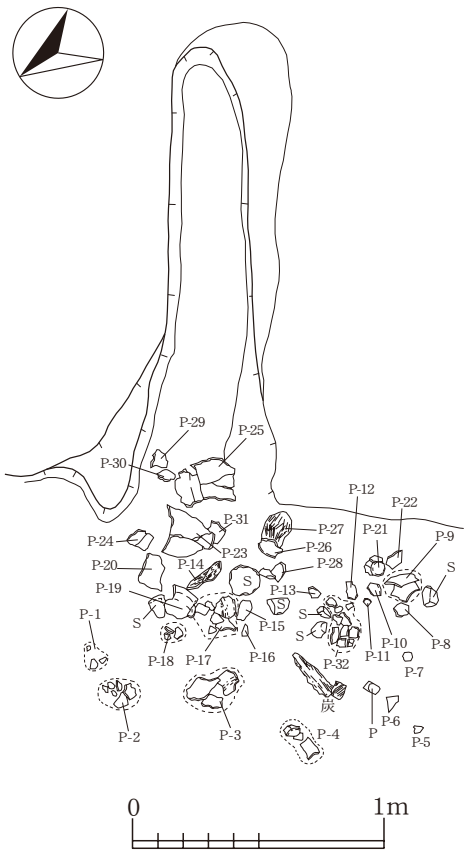




SI-02 カマド1新セクション
KA 7.500m



SI-02カマド１新遺物出土状況



SI-02 カマド1新

第1層	7.5YR5/6	明褐色土	炭化粒(φ5～9mm)中量、焼土ブロック多量
第2層	10YR5/4	にぶい黄褐色土	炭化粒(φ5～9mm)少量、焼土粒(2～5mm)中量
第3層	10YR4/6	褐色土	炭化粒(φ3～5mm)・焼土粒(φ2～5mm)微量
第3′層	10YR3/3	暗褐色土	ローム粒(φ2～3mm)微量
第4層	7.5YR5/6	明褐色土	焼土ローム、炭化粒(φ2～3mm)微量
第5層	7.5YR6/6	褐色土	粘土層、炭化粒(φ3～5mm)・焼土粒(3～5mm)微量
第6層	10YR4/4	褐色土	ローム粒(φ5～7mm)少量、炭化粒(φ5～7mm)・焼土粒(φ5～9mm)微量
第7層	10YR3/3	暗褐色土	ローム粒(φ5～9mm)・炭化粒(φ2～3mm)・焼土粒(φ5～7mm)微量
第8層	10YR4/4	褐色土	ローム粒(φ5～9mm)少量、炭化粒(φ2～3mm)・焼土粒(φ5～7mm)微量
第9層	10YR4/6	褐色土	ローム粒(φ2～9mm)中量、炭化粒(φ2～3mm)微量
第10層	10YR2/3	黒褐色土	ローム粒(φ5～9mm)少量、炭化粒微量(φ2～3mm)

SI-02 カマド1旧煙道

第1層	10YR3/4	暗褐色土	ローム粒(φ5～9mm)・炭化粒(φ2～5mm)微量
第2層	10YR3/3	暗褐色土	ローム粒・ブロック(φ5～20mm)中量、炭化粒(φ2～3mm)微量
第3層	10YR4/4	褐色土	ローム粒(φ5～9mm)中量、炭化粒(φ2～5mm)・焼土粒・ブロック(φ5～15mm)少量

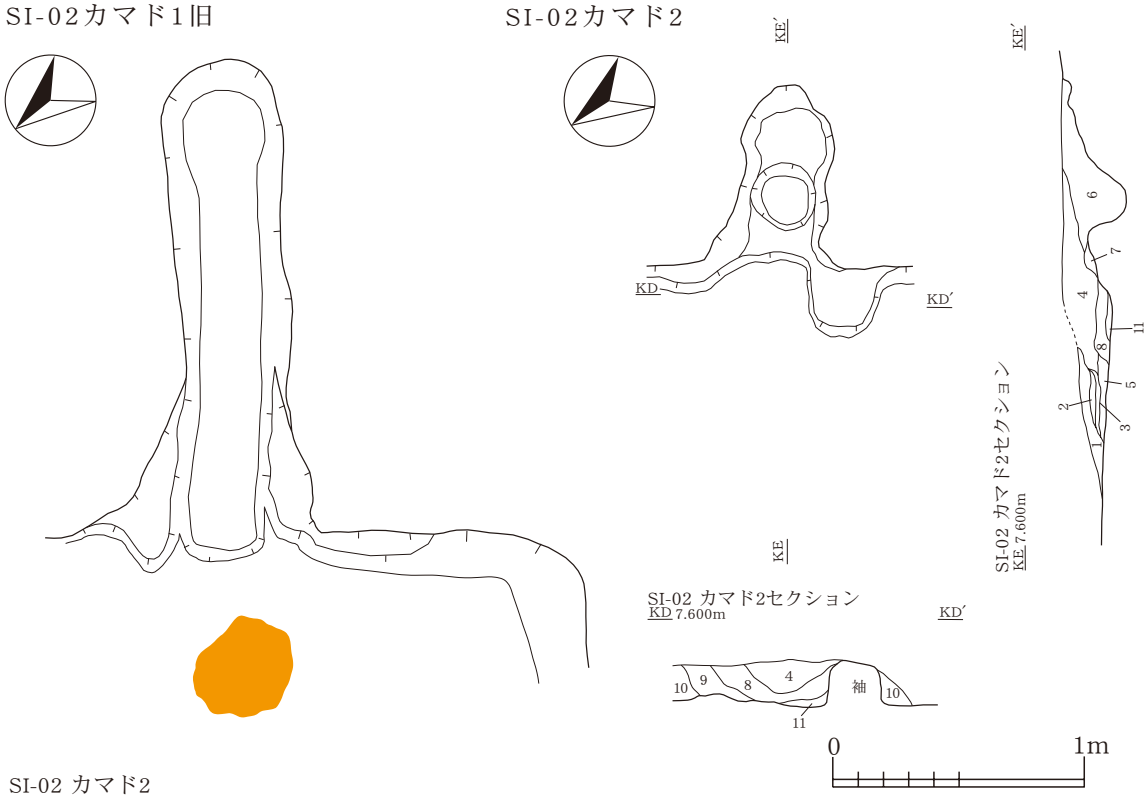
SI-02 カマド1旧煙出

第①層	10YR3/4	暗褐色土	ロームブロック(φ10～30mm)多量、炭化粒(φ5～9mm)微量
第②層	10YR3/4	暗褐色土	ローム粒(φ5～7mm)・炭化粒(φ5～2mm)微量
第③層	10YR3/3	暗褐色土	ローム粒(φ5～9mm)中量、炭化粒(φ2～5)mm・焼土粒・ブロック(φ5～15mm)少量

SI-02 カマド1旧火床面

第A層	5YR5/8	明赤褐色土	焼土層、ローム粒(φ2～5mm)微量
第B層	10YR4/6	褐色土	ローム粒(φ2～9mm)多量

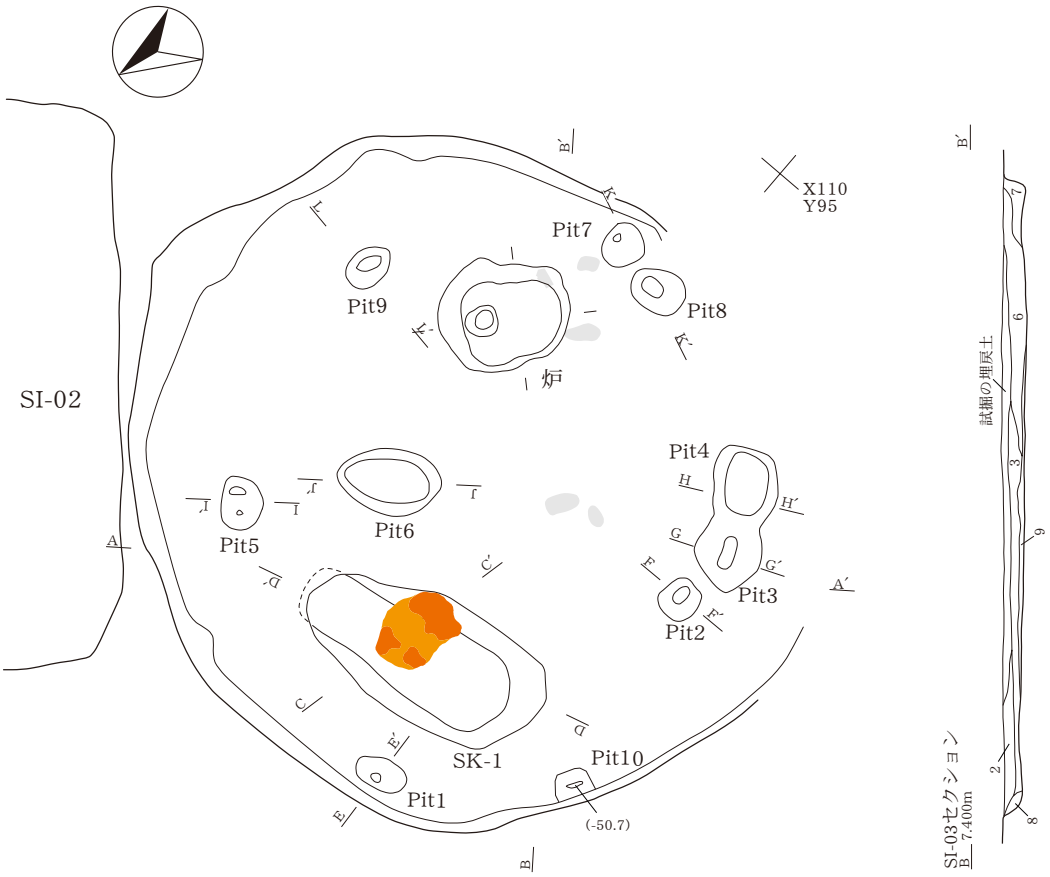
図版 5　SI-02-3

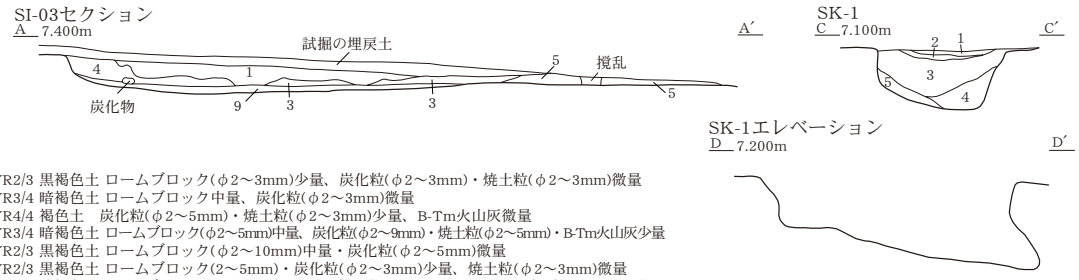


SI-02 カマド2

第1層	10YR4/4	褐色土	ローム粒(φ2～5mm)・炭化粒(φ5～9mm)・焼土粒(φ2～5mm)少量
第2層	10YR4/4	褐色土	炭化粒(φ5～9mm)少量・焼土多量
第3層	10YR4/4	褐色土	炭化物多量、焼土粒(φ2～3mm)少量
第4層	10YR3/4	暗褐色土	ローム粒(φ2～5mm)少量、炭化粒(φ5～8mm)中量、焼土粒・ブロック(φ5～15mm)多量
第5層	10YR4/4	褐色土	ローム粒(φ2～5mm)中量、炭化粒(φ5～9mm)微量
第6層	10YR4/4	褐色土	第1層同質
第7層	10YR4/4	褐色土	ロームブロック多量に含む、炭化粒(φ2～3mm)微量
第8層	10YR3/4	暗褐色土	炭化粒(φ2～5mm)・焼土粒(φ2～3mm)微量
第9層	10YR4/6	褐色土	ローム粒(φ2～3mm)中量、炭化粒(φ5～9mm)少量
第10層	10YR3/4	暗褐色土	ローム粒(φ2～3mm)・炭化粒・炭化物(φ5～15mm)少量
第11層	10YR3/4	暗褐色土	ローム粒(φ2～5mm)少量、炭化粒(φ2～3mm)微量、To-a火山灰ブロック(φ20mm)微量

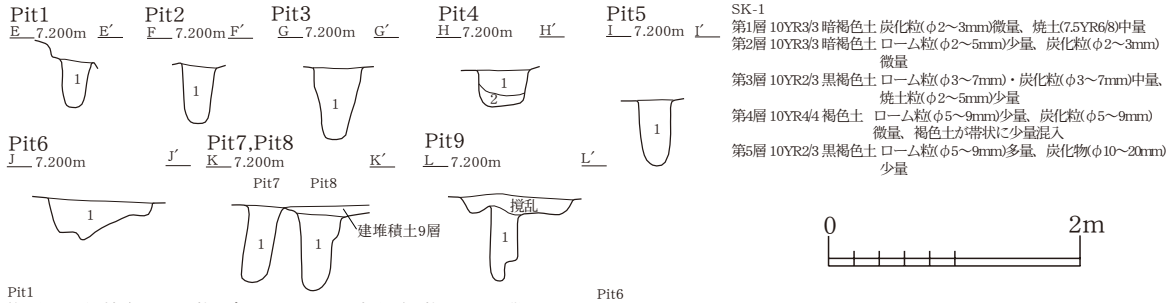
図版 6　SI-02-4





SI-03

第1層 10YR2/3 黒褐色土 ロームブロック(φ2～3mm)少量、炭化粒(φ2～3mm)・焼土粒(φ2～3mm)微量
第2層 10YR3/4 暗褐色土 ロームブロック中量、炭化粒(φ2～3mm)微量
第3層 10YR4/4 褐色土　炭化粒(φ2～5mm)・焼土粒(φ2～3mm)少量、B-Tm火山灰微量
第4層 10YR3/4 暗褐色土 ロームブロック(φ2～5mm)中量、炭化粒(φ2～9mm)・焼土粒(φ2～5mm)・B-Tm火山灰少量
第5層 10YR2/3 黒褐色土 ロームブロック(φ2～10mm)中量・炭化粒(φ2～5mm)微量
第6層 10YR2/3 黒褐色土 ロームブロック(2～5mm)・炭化粒(φ2～3mm)少量、焼土粒(φ2～3mm)微量
第7層 10YR3/4 暗褐色土 ロームブロック(φ2～5mm)多量、炭化粒・炭化物(φ5～15mm)少量、焼土粒(φ2～3mm)微量
第8層 10YR3/4 暗褐色土 ローム粒(φ2～3mm)中量
第9層 10YR3/4 暗褐色土 ローム粒・ブロック(φ5～30mm)中量、炭化粒(φ2～9mm)中量、焼土粒(φ2～5mm)少量



SK-1
第1層 10YR3/3 暗褐色土 炭化粒(φ2～3mm)微量、焼土(7.5YR6/8)中量
第2層 10YR3/3 暗褐色土 ローム粒(φ2～5mm)少量、炭化粒(φ2～3mm)微量
第3層 10YR2/3 黒褐色土 ローム粒(φ3～7mm)・炭化粒(φ3～7mm)中量、焼土粒(φ2～5mm)少量
第4層 10YR4/4 褐色土 ローム粒(φ5～9mm)少量、炭化粒(φ5～9mm)微量、褐色土が帯状に少量混入
第5層 10YR2/3 黒褐色土 ローム粒(φ5～9mm)多量、炭化物(φ10～20mm)少量

Pit1
第1層 10YR3/3 暗褐色土 ローム粒・ブロック(φ5～20mm)中量、炭化粒(φ2～5mm)微量

Pit2
第1層 10YR2/2 黒褐色土 ローム粒・ブロック(φ5～20mm)多量、炭化粒(φ2～5mm)少量

Pit3
第1層 10RY2/3 黒褐色土 ローム粒(φ2～5mm)中量、炭化粒(φ2～5mm)・B-Tm火山灰粒(φ2～3mm)微量

Pit4
第1層 10YR3/4 暗褐色土 ローム粒(φ2～5mm)少量、炭化粒(φ2～3mm)微量
第2層 10YR4/4 褐色土　ローム粒(φ5～9mm)少量、黒色土(φ5～10mm)微量

Pit5
第1層 10YR2/1 黒色土　ローム粒(φ5～9mm)・炭化粒(φ5～9mm)中量、ロームブロックが壁面近くに中量混入

Pit6
第1層 10YR4/4 褐色土　ローム粒・ブロック(φ5～20mm)中量、炭化粒(φ2～5mm)少量

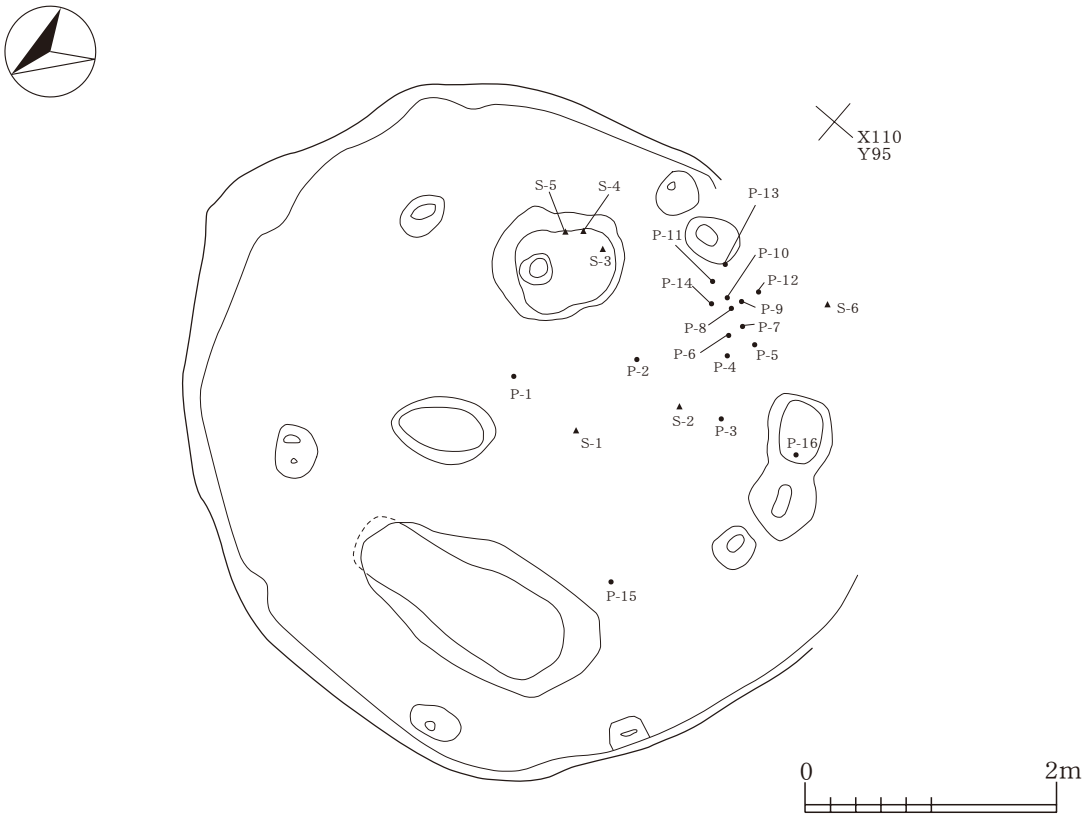
Pit7
第1層 10YR3/3 暗褐色土 ローム粒・ブロック(φ5～30mm)多量、炭化粒(φ2～9mm)中量

Pit8
第1層 10YR3/3 暗褐色土 ローム粒・ブロック(φ5～30mm)中量、炭化粒(φ2～9mm)少量

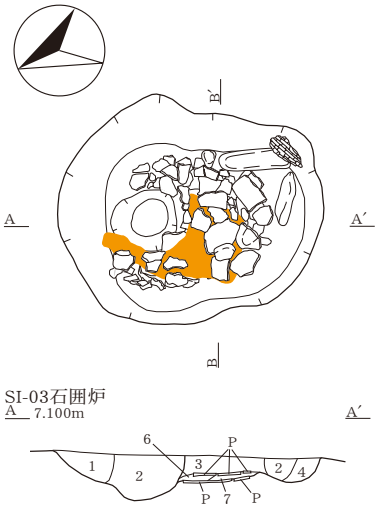
Pit9
第1層 10YR4/4 褐色土　ローム粒・ブロック(φ5～30mm)多量、炭化粒(φ2～9mm)中量、焼土粒(φ2～5mm)少量

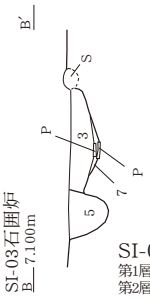
図版 7　SI-03-1

SI-03遺物出土状況



SI-03石囲炉

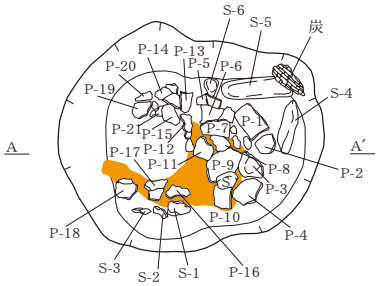




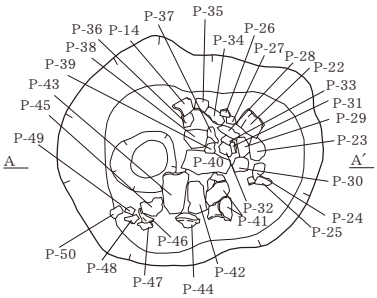
SI-03 石囲炉

第1層 10YR3/4　暗褐色土　ロームブロック中量(φ5～10mm)、炭化物少量(φ2～5mm)
第2層 10YR2/2　黒褐色土　ロームブロック微量(φ2～3mm)、炭化物微量(φ2～3mm)
第3層 10YR3/4　暗褐色土　ロームブロック少量(φ2～5mm)、炭化物少量(φ2m～10m)、焼土粒少量(φ２～5mm)
第4層 10YR3/4　暗褐色土　ロームブロック多量(全体の50%)
第5層 10YR4/4　褐色土　ロームブロック少量(φ2～3mm)、ローム柱状に20%混入、炭化物少量(φ5～7mm)
第6層 10YR5/8　明暗褐色土　ロームブロック少量(φ2～5mm)、炭化物少量(φ2～5mm)※焼土層
第7層 10YR5/6　明褐色土　ロームブロック少量(φ2～5mm)、炭化物少量(φ2～10mm)、焼土粒中量(φ5～20mm)

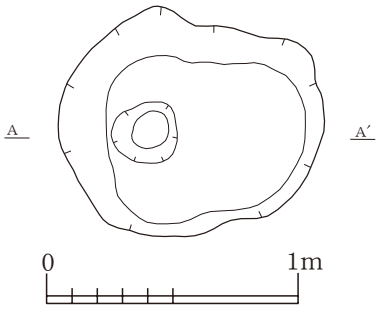
SI-03石囲炉 焼土直上遺物出土状況



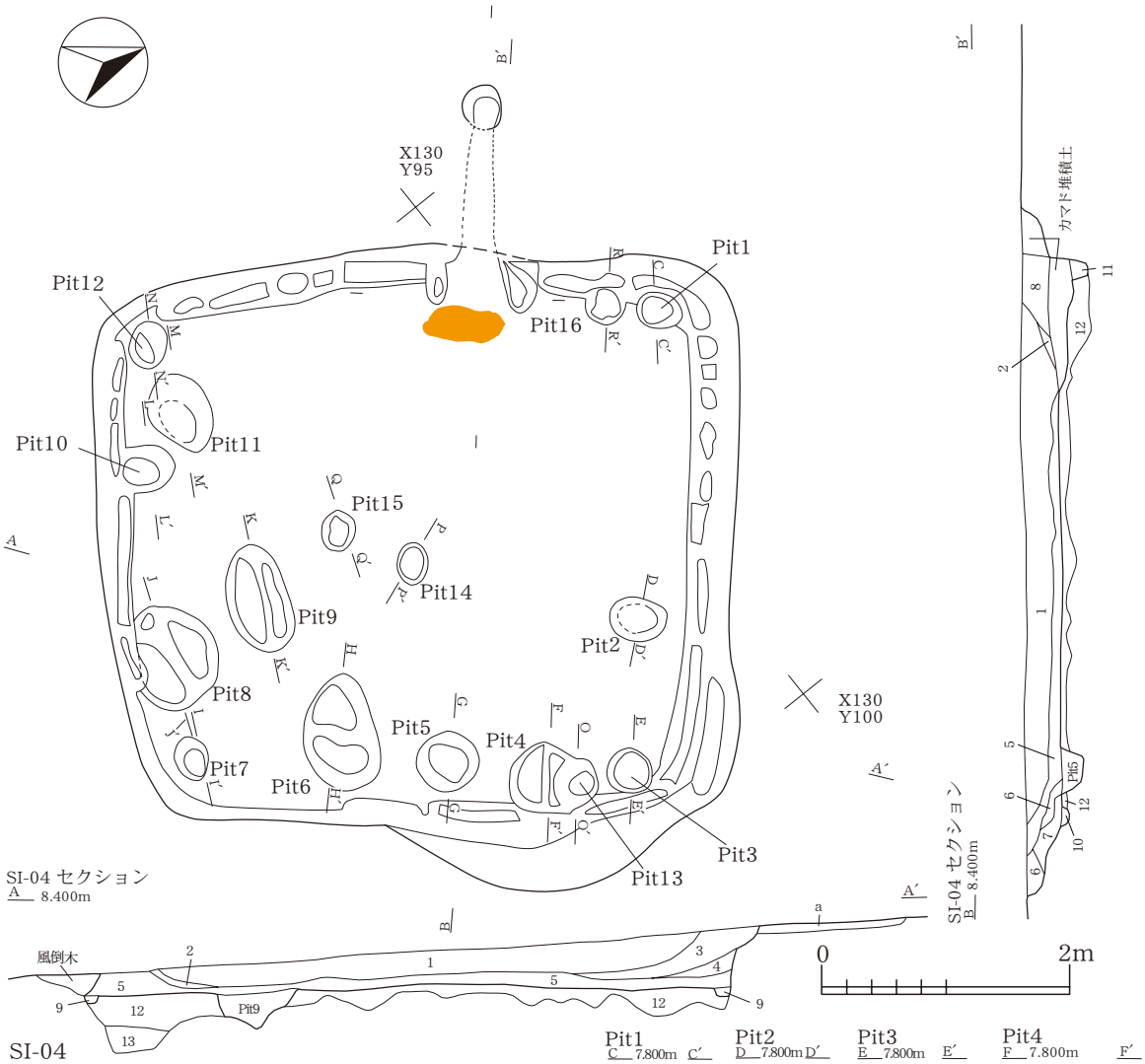
SI-03石囲炉 焼土直下遺物出土状況



SI-03石囲炉 掘り方

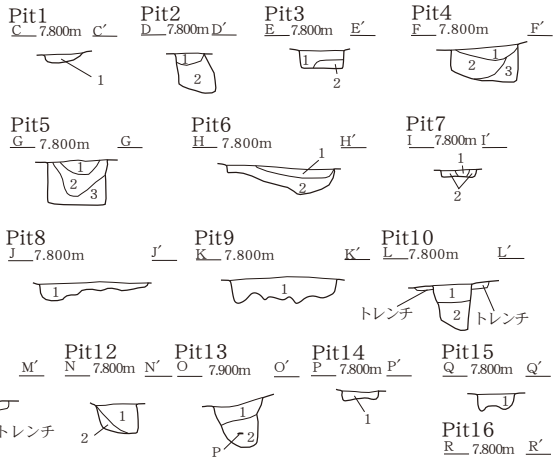


図版 8　SI-03-2



SI-04

第1層 10YR1.7/1 黒色土　ローム粒・ブロック(φ10mm)微量
第2層 10YR2/3 黒褐色土　ローム粒・ブロック(φ30～50mm)微量
第3層 10YR3/3 暗褐色土　ローム粒多量、ロームブロック(φ10mm)少量、炭化粒微量
第4層 10YR4/6 褐色土　ローム粒多量、ロームブロック(φ10～20mm)少量、炭化粒微量
第5層 10YR2/3 黒褐色土　ローム粒少量、ロームブロック(φ10～30mm)微量
第6層 10YR3/4 暗褐色土　ローム粒多量、ロームブロック(φ10～20mm)少量、炭化粒微量
第7層 10YR2/3 黒褐色土　ローム粒多量、炭化粒微量、焼土粒少量
第8層 10YR2/3 黒褐色土　ローム粒多量、炭化粒微量、焼土粒少量、To-a火山灰(φ10mm)微量
第9層 10YR3/4 暗褐色土　ローム粒・ブロック(φ10mm)少量
第10層 10YR2/3 黒褐色土　ロームブロック(φ10～30mm)少量
第11層 10YR3/3 暗褐色土　ローム粒・ブロック(φ10～20mm)少量
第12層 10YR3/2 黒褐色土　ローム粒多量、ロームブロック(φ10～50mm)少量
第13層 10YR4/3 にぶい黄褐色土 ローム粒少量、ロームブロック(φ50～80mm)多量
第a層 10YR3/4 暗褐色土　ローム粒微量



Pit1
第1層 10YR2/3 黒褐色 ローム粒少量

Pit2
第1層 10YR3/4 暗褐色土　ロームブロック(φ30～50mm)多量
第2層 10YR4/6 褐色土　ロームブロック(φ30mm)少量

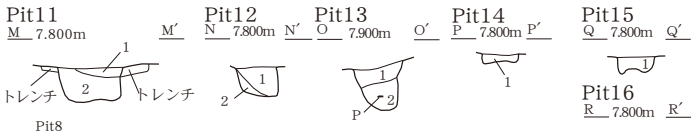
Pit3
第1層 10YR4/4 褐色土 ローム粒多量、ロームブロック(φ10～50mm)微量
第2層 10YR4/6 褐色土 ロームブロック(φ10～30mm)微量

Pit4
第1層 10YR2/2 黒褐色土 ローム粒多量、ロームブロック(φ10～30mm)少量
第2層 10YR5/6 黄褐色土 ロームブロック(φ10～20mm)微量、黒褐色土(10YR2/2)ブロック(φ10～30mm)少量
第3層 10YR4/6 褐色土　ロームブロック(φ10～30mm)微量

Pit5
第1層 10YR2/3 黒褐色土 ローム粒多量
第2層 10YR2/3 黒褐色土 ロームブロック(φ10～30mm)多量、炭化粒微量
第3層 10YR4/6 褐色土　ロームブロック(φ10～30mm)少量

Pit6
第1層 10YR3/4 暗褐色土 ロームブロック(φ10～20mm)多量
第2層 10YR2/3 黒褐色土 ローム粒・ブロック(φ10～30mm)・焼土ブロック(φ10mm)少量、炭化粒微量

Pit7
第1層 10YR2/3 黒褐色土 ローム粒微量
第2層 10YR3/4 暗褐色土 ロームブロック(φ10～30mm)少量



Pit8
第1層 10YR3/4 暗褐色土 ローム粒少量、ロームブロック(φ10～30mm)少量

Pit9
第1層 10YR2/3 黒褐色土 ローム粒・ブロック(φ10～30mm)少量

Pit10
第1層 10YR3/4 暗褐色土 ローム粒・ブロック(φ10～50mm)少量
第2層 10YR3/3 暗褐色土 ローム粒少量、ロームブロック(φ10～50mm)微量、バミスブロック(φ10～50mm)微量

Pit11
第1層 10YR2/1 黒色土　ローム粒少量、To-a火山灰(φ10～30mm)微量
第2層 10YR3/4 暗褐色土 ローム粒多量、ロームブロック(φ10～30mm)少量

Pit12
第1層 10YR3/3 暗褐色土 ロームブロック(φ10～50mm)少量
第2層 10YR4/6 褐色土　ロームブロック(φ10～30mm)少量

Pit13
第1層 10YR2/2 黒褐色土　ローム粒多量、ロームブロック(φ10～20mm)少量
第2層 7.5YR4/6 褐色土　ローム粒少量、焼土粒微量

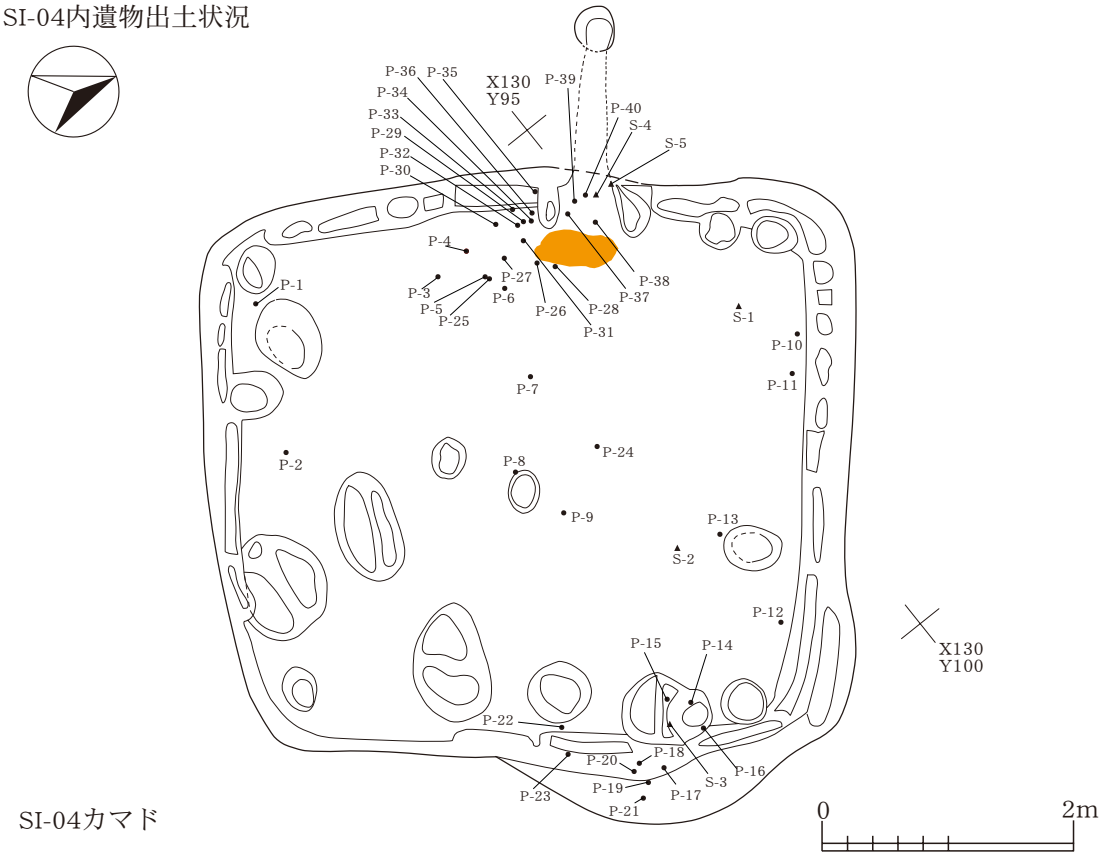
Pit14
第1層 10YR4/4 褐色土 ローム粒少量

Pit15
第1層 10YR3/4 暗褐色土 ローム粒少量

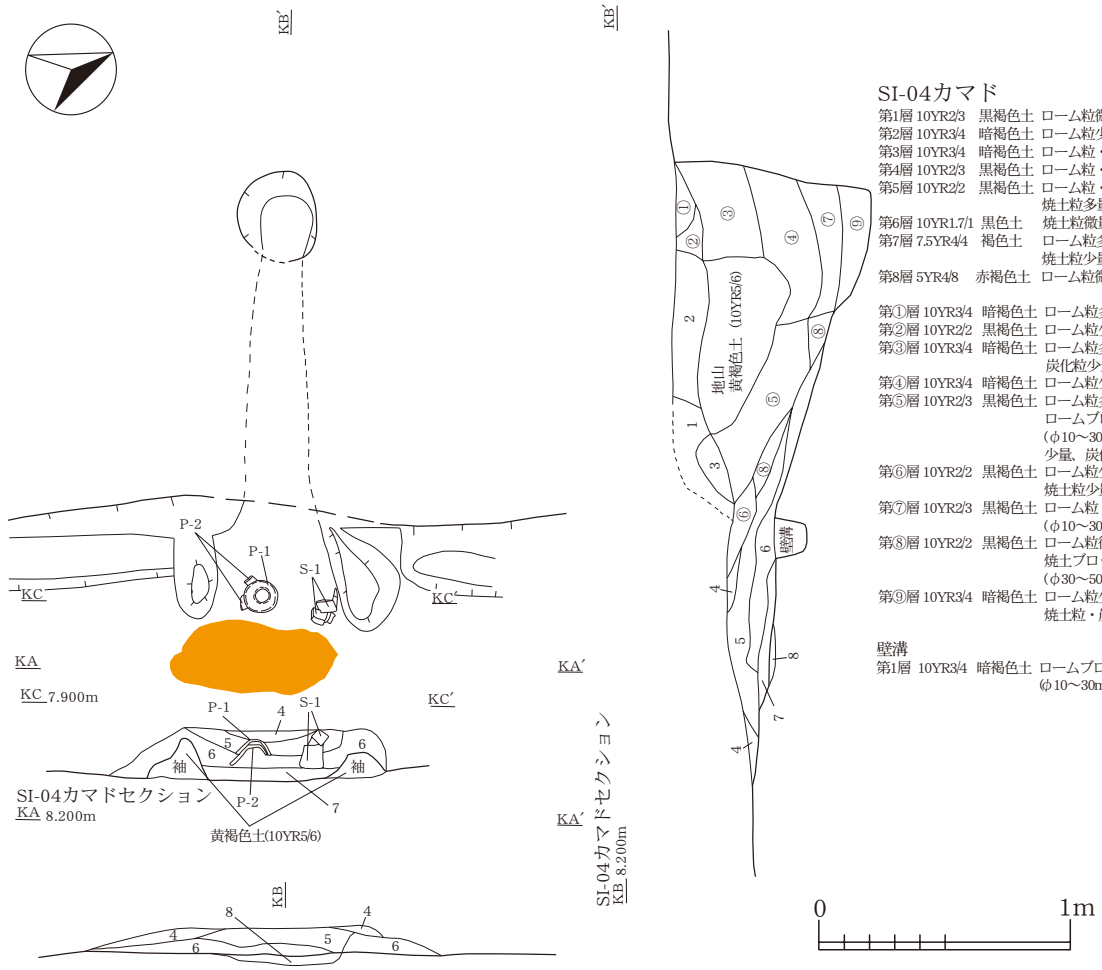
Pit16
第1層 10YR2/3 黒褐色土 ローム粒少量
炭化粒・焼土粒微量

図版 9　SI-04-1

SI-04内遺物出土状況



SI-04カマド



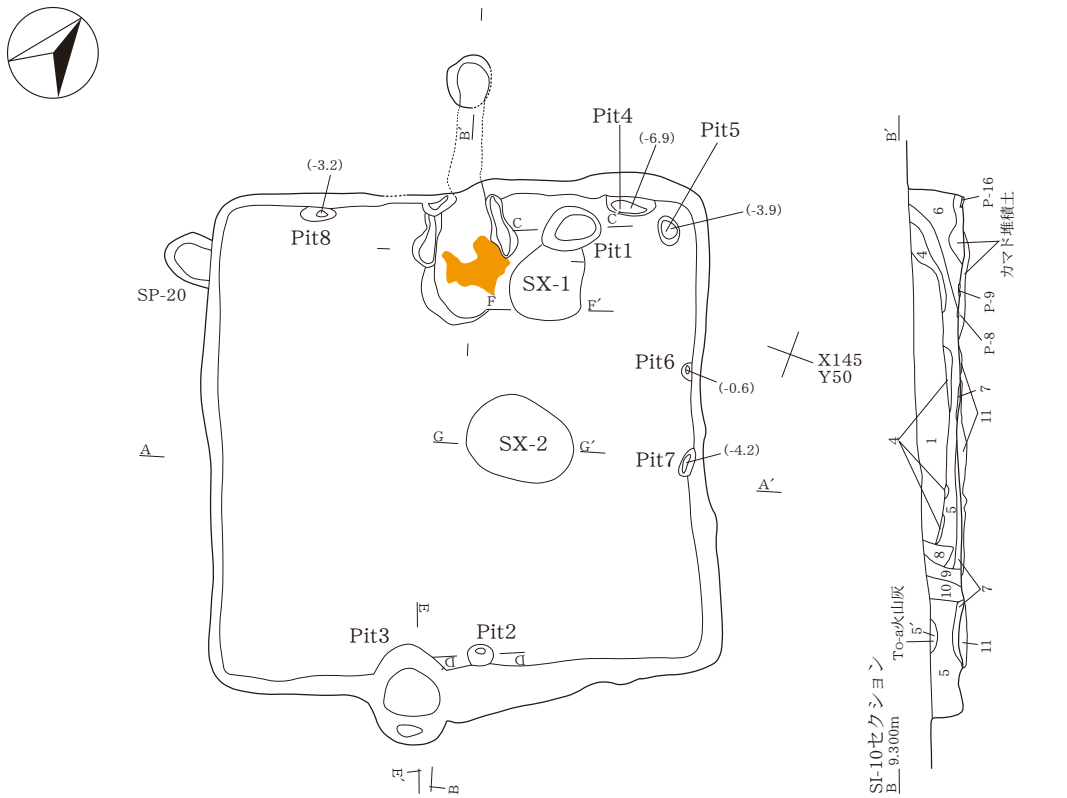
SI-04カマド

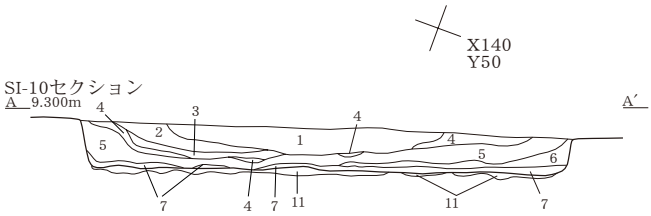
第1層 10YR2/3　黒褐色土　ローム粒微量
第2層 10YR3/4　暗褐色土　ローム粒少量
第3層 10YR3/4　暗褐色土　ローム粒・炭化粒微量
第4層 10YR2/3　黒褐色土　ローム粒・焼土粒少量
第5層 10YR2/2　黒褐色土　ローム粒・炭化粒少量、焼土粒多量
第6層 10YR1.7/1　黒色土　焼土粒微量
第7層 7.5YR4/4　褐色土　ローム粒多量、焼土粒少量
第8層 5YR4/8　赤褐色土　ローム粒微量

第①層 10YR3/4　暗褐色土　ローム粒多量
第②層 10YR2/2　黒褐色土　ローム粒少量
第③層 10YR3/4　暗褐色土　ローム粒多量、炭化粒少量
第④層 10YR3/4　暗褐色土　ローム粒少量
第⑤層 10YR2/3　黒褐色土　ローム粒多量、ロームブロック（φ10～30mm）少量、炭化粒微量
第⑥層 10YR2/2　黒褐色土　ローム粒少量、焼土粒少量
第⑦層 10YR2/3　黒褐色土　ローム粒・ブロック（φ10～30mm）少量
第⑧層 10YR2/2　黒褐色土　ローム粒微量、焼土ブロック（φ30～50mm）少量
第⑨層 10YR3/4　暗褐色土　ローム粒少量、焼土粒・炭化粒微量

壁溝
第1層 10YR3/4　暗褐色土　ロームブロック（φ10～30mm）少量

図版 10　SI-04-2





SI-10

第1層	10YR1.7/1	黒色土	ロームブロック(φ20mm)微量、炭化物極微量
第2層	10YR3/3	暗褐色土	ローム粒少量、炭化粒極微量
第3層	10YR2/1	黒色土	ローム粒微量
第4層	10YR3/3	暗褐色土	ローム粒・炭化粒微量、B-Tm火山灰帯状に混入
第5層	10YR3/2	黒褐色土	ローム粒少量、炭化物微量、To-a火山灰ブロック状に混入
第5′層	10YR3/2	黒褐色土	To-a火山灰二次堆積ブロックの層
第6層	10YR2/3	黒褐色土	炭化粒・ローム粒微量
第7層	10YR3/4	暗褐色土	ロームブロック(φ20mm)多量、炭化粒微量
第8層	10YR2/1	黒色土	黒色土(10YR1.7/1)ブロック状に微量混入
第9層	10YR2/2	黒褐色土	ロームブロック(φ20～50mm)多量
第10層	10YR2/1	黒色土	撹乱(?)ローム粒微量混入、しまりなし
第11層	10YR6/8	明黄褐色土	ロームブロック(φ10～50mm)多量混入(掘り方)

Pit1

第1層	10YR2/3	黒褐色土	パミス粒(φ1～9mm)少量、パミスブロック(φ25mm)微量、炭化粒(φ1～9mm)微量、炭化物(φ20mm)極微量

Pit2

第1層	10YR2/3	黒褐色土	パミス粒(φ1～5mm)少量

Pit3

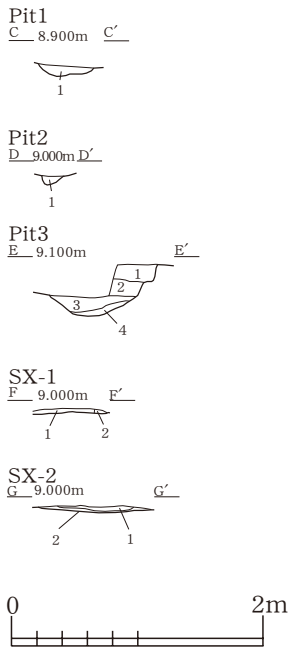
第1層	10YR4/3	にぶい黄褐色土	
第2層	10YR2/2	黒褐色土	パミスブロック(φ30mm)微量
第3層	10YR3/2	黒褐色土	パミスブロック(φ50mm)多量
第4層	10YR3/2	黒褐色土	パミス粒(φ10mm)少量

SX-1

第1層	10YR2/3	黒褐色土	パミス粒(φ1～3mm)・ブロック(φ20mm)多量、炭化粒(φ1～9mm)多量、炭化物(φ10～30mm)極多量
第2層	10YR5/6	黄褐色土	下層に10YR4/3にぶい黄褐色混入

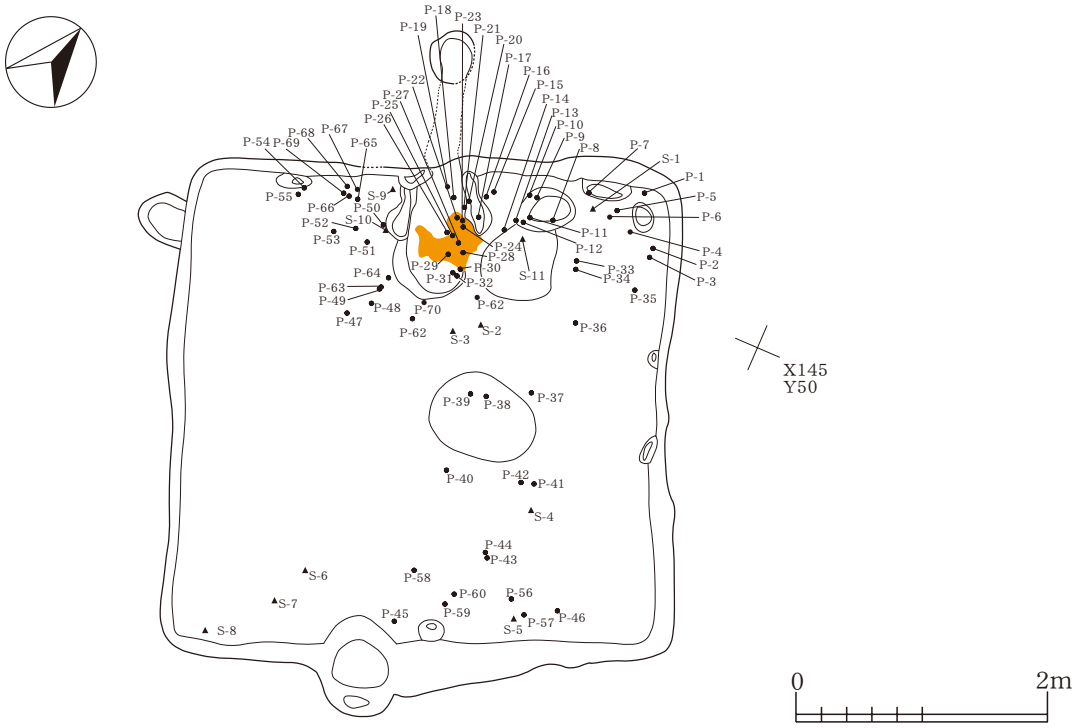
SX-2

第1層	10YR5/6	黄褐色土	
第2層	10YR2/3	黒褐色土	パミス粒(φ1～9mm)中量、炭化粒(φ1～9mm)少量

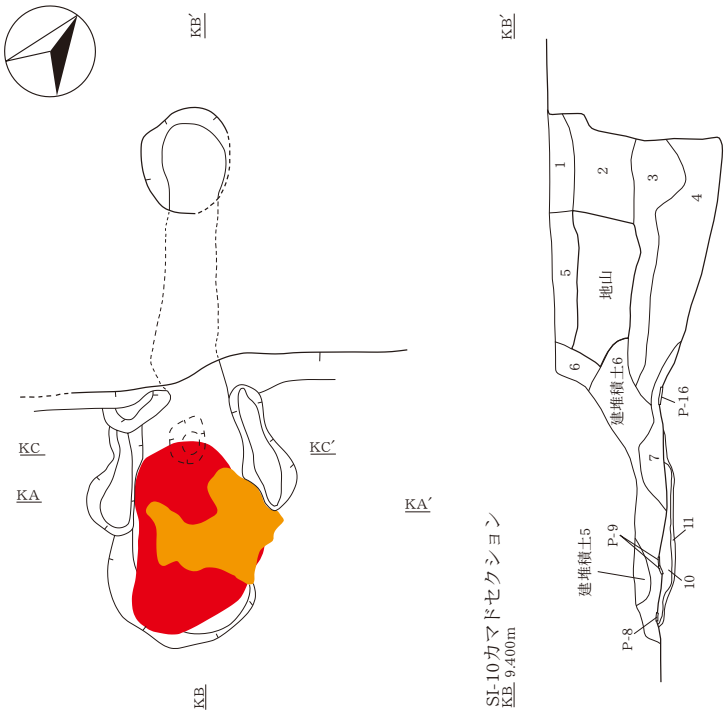


図版 11　SI-10-1

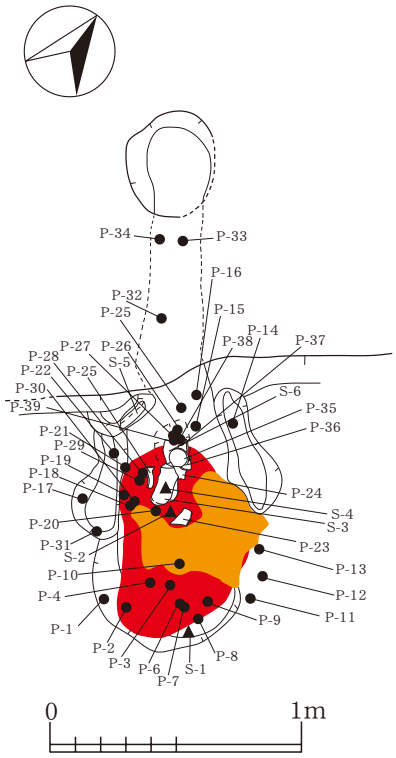
SI-10遺物出土状況



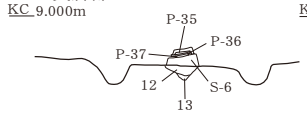
SI-10カマド



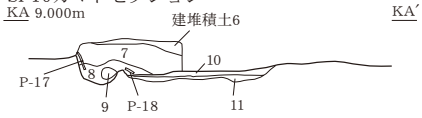
SI-10カマド遺物出土状況



SI-10支脚部エレベーション



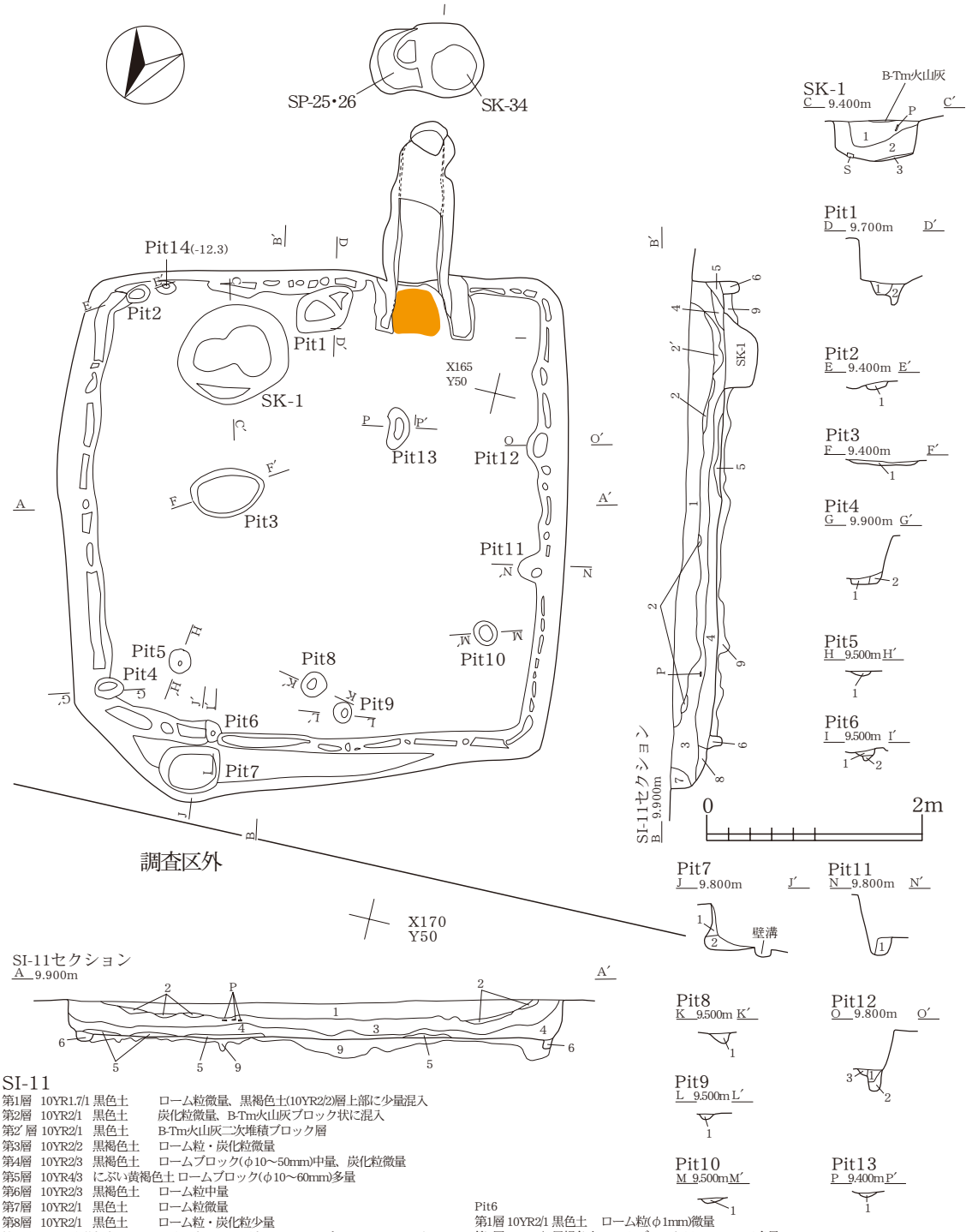
SI-10カマドセクション



SI-10カマド

第1層	10YR3/4	暗褐色土	ローム粒中量
第2層	10YR3/3	暗褐色土	ローム粒少量、炭化粒微量
第3層	10YR3/2	黒褐色土	ローム粒微量、他の層に比べしまりなし
第4層	10YR2/2	黒褐色土	ロームブロック(φ50mm)少量、焼土ブロック(φ70mm)極微量
第5層	10YR3/4	暗褐色土	ローム粒・炭化粒微量
第6層	10YR2/3	黒褐色土	ローム粒極微量
第7層	10YR4/4	褐色土	ロームブロック(φ20mm)・炭化粒少量、焼土粒微量
第8層	10YR4/3	にぶい黄褐色土	ローム粒中量、炭化粒微量
第9層	10YR4/3	にぶい黄褐色土	ローム粒、炭化粒極微量
第10層	5YR5/3	にぶい赤褐色土	焼土ブロック(φ50mm)極微量、炭化ブロック(φ30mm)微量
第11層	5YR4/6	赤褐色土	層上部が鉄分まじりで固くしまっている、炭化粒極微量
第12層	10YR2/2	黒褐色土	ローム粒・炭化粒少量
第13層	10YR4/4	褐色土	ローム粒・焼土粒微量

図版 12　SI-10-2



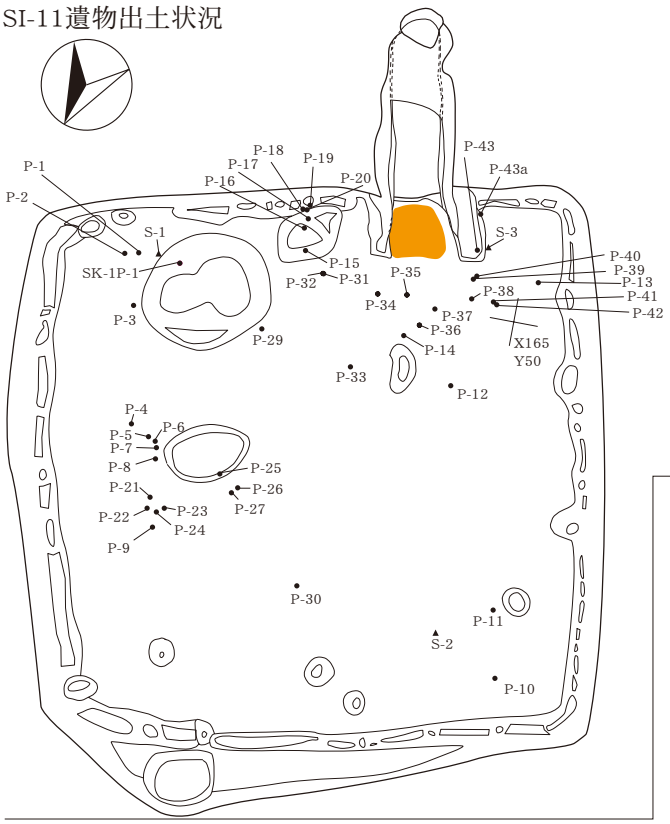
SI-11

第1層　10YR1.7/1 黒色土　　ローム粒微量、黒褐色土(10YR2/2)層上部に少量混入
第2層　10YR2/1　黒色土　　炭化粒微量、B-Tm火山灰ブロック状に混入
第2′層 10YR2/1　黒色土　　B-Tm火山灰二次堆積ブロック層
第3層　10YR2/2　黒褐色土　ローム粒・炭化粒微量
第4層　10YR2/3　黒褐色土　ロームブロック(φ10～50mm)中量、炭化粒微量
第5層　10YR4/3　にぶい黄褐色土 ロームブロック(φ10～60mm)多量
第6層　10YR2/3　黒褐色土　ローム粒中量
第7層　10YR2/1　黒色土　　ローム粒微量
第8層　10YR2/1　黒色土　　ローム粒・炭化粒少量
第9層　10YR5/6黄褐色土と10YR2/1黒色土との混合土、ロームブロック(φ50mm)多量

SK-1
第1層 10YR2/2 黒褐色土　ローム粒(φ9mm)少量、上面にB-Tm火山灰二次堆積
第2層 10YR3/2 黒褐色土　ロームブロック(φ30～50mm)多量
第3層 10YR5/2 灰黄褐色土
Pit1
第1層 10YR2/3 黒褐色土　ローム粒(φ1mm)・ブロック(φ10～70mm)少量
第2層 10YR2/3 黒褐色土　ローム粒・ブロック(φ1～30mm)極多量
Pit2
第1層 10YR2/1 黒色土　　ローム粒・ブロック(φ1～20mm)微量
Pit3
第1層 10YR2/2 黒褐色土　ロームブロック(φ10～50mm)中量
Pit4
第1層 10YR2/1 黒色土　　ローム粒(φ1～5mm)微量
第2層 10YR2/2 黒褐色土　ローム粒(φ1～9mm)・ブロック(φ10～20mm)少量
Pit5
第1層 10YR2/2 黒褐色土　ロームブロック(φ50mm)多量
Pit6
第1層 10YR2/1 黒色土　　ローム粒(φ1mm)微量
第2層 10YR2/2 黒褐色土 ロームブロック(φ20～30mm)多量
Pit7
第1層 10YR3/3 暗褐色土 ローム粒・ブロック(φ1～30mm)中量
第2層 10YR2/1 黒褐色土 ロームブロック(φ20mm)微量
Pit8
第1層 10YR2/2 黒褐色土 ローム粒・ブロック(φ1～30mm)多量
Pit9
第1層 Pit8と同一
Pit10
第1層 10YR3/2 黒褐色土 ロームブロック(φ50mm)多量
Pit11
第1層 10YR2/1 黒色土　　ローム粒・ブロック(φ1～30mm)多量
Pit12
第1層 10YR2/2 黒褐色土 ローム粒(φ1mm)中量、ロームブロック(φ15mm)極微量
第2層 10YR3/2 黒褐色土 ローム粒(φ1～9mm)・ブロック(φ20～30mm)中量
第3層 10YR2/1 黒色土　　ロームブロック(φ40mm)極微量
Pit13
第1層 10YR2/1 黒色土　　ローム粒(φ1～9mm)少量、ロームブロック(φ20mm)極微量

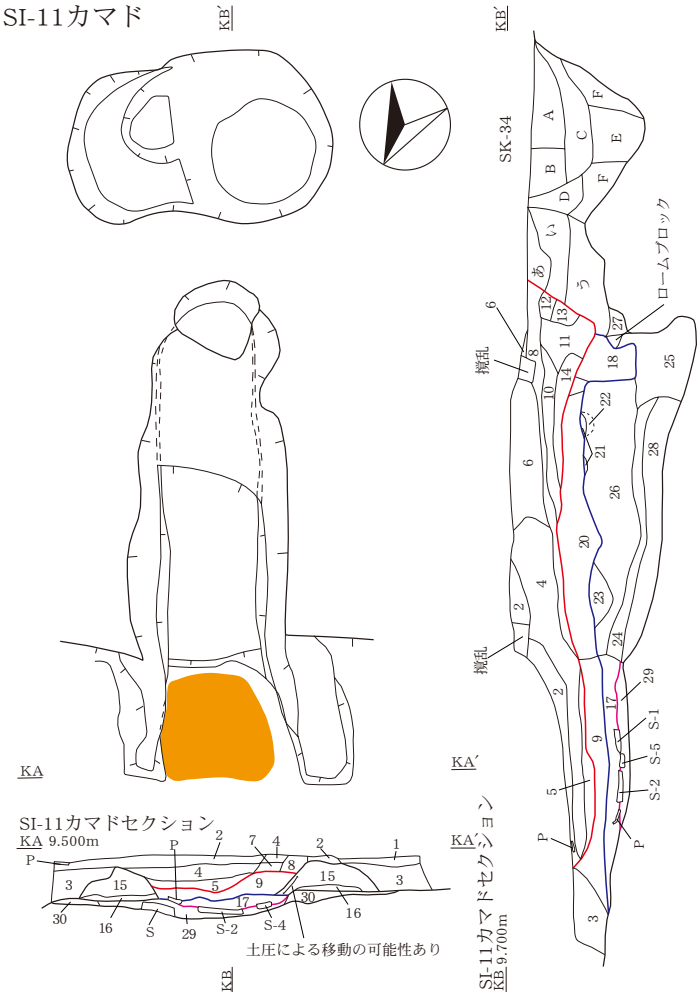
図版 13　SI-11-1

SI-11遺物出土状況



0 2m

SI-11カマド



SI-11カマドセクション

0 1m

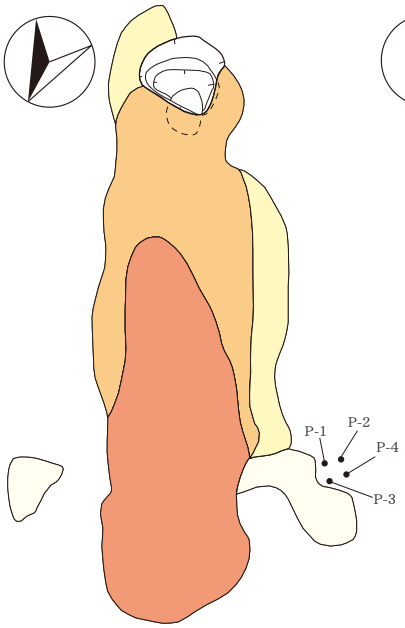
SI-11カマド

第1層 5YR4/6 赤褐色土 焼土とロームブロック(φ10～30mm)の混合土
第2層 7.5YR4/3 褐色土 ローム粒(φ1～9mm)中量、ロームブロック(φ30～50mm)やや多量、炭化粒(φ5～10mm)中量、炭化物(φ20～30mm)少量、焼土粒・ブロック(φ1～50mm)やや多量
第3層 10YR2/2 黒褐色土 ローム粒(φ5mm)少量、ロームブロック(φ10～50mm)多量
第4層 5YR5/8 明赤褐色土 煙道側については焼土ブロック(φ30～50mm)中量含(天井)
第5層 5YR4/8 赤褐色土 焼土層(被熱部分)
第6層 10YR5/4 にぶい黄褐色土 焼土ブロック(φ30～50mm)微量(天井)
第7層 7.5YR5/6 明褐色土 焼土ブロック(φ20mm)微量
第8層 10YR3/2 黒褐色土 ローム粒(φ1～9mm)少量
第9層 10YR2/2 黒褐色土 ローム粒(φ1～9mm)・焼土粒(φ5～9mm)少量、焼土ブロック(φ10～30mm)微量
第10層 10YR3/3 暗褐色土 パミス粒(φ1～9mm)中量、パミスブロック(φ15～20mm)多量、白色ロームブロック(φ15mm)微量
第11層 10YR3/4 暗褐色土 基本的に第10層同質であるがパミス粒に加えローム粒(φ1～9mm)が多量含まれる。
第12層 10YR4/3 にぶい黄褐色土 第10.11層と同質である。パミスの粒径がφ10mm前後とやや小さい。
第13層 10YR2/3 黒褐色土 ローム粒(φ1mm)微量
第14層 10YR4/6 褐色土 パミスブロック(φ10～15mm)少量(天井崩落の一部か前段階使用時からの作り換えの可能性)
第15層 10YR2/1 黒色土 ロームブロック(φ10～20mm)少量
第16層 10YR5/2 灰黄褐色土 白色粘土層(前段階の基部)
第17層 10YR4/2 灰黄褐色土 ローム粒(φ1～9mm)中量、炭化粒(φ1～5mm)微量、焼土粒・ブロック(φ1～50mm)多量
第18層 10YR2/1 黒色土 ロームブロック(φ40mm)極微量
第19層 10YR3/2 黒褐色土 ロームブロック(φ10～20mm)多量
第20層 10YR2/1 黒色土 基本的に第18層と同質、ロームブロック(φ30～50mm)少量
第21層 10YR1.7/1 黒色土
第22層 10YR4/3 にぶい黄褐色土 ローム粒(φ10mm)少量
第23層 10YR2/2 黒褐色土 ローム粒・ブロック(φ1～30mm)多量
第24層 10YR2/1 黒色土 ローム粒(φ1～9mm)少量
第25層 10YR1.7/1 黒色土 ローム粒(φ1～5mm)少量
第26層 10YR4/6 褐色土 天井崩落土(前段階)
第27層 10YR5/8 黄褐色土 黒褐色土粒(10YR3/2)中量
第28層 10YR5/8 黄褐色土
第29層 7.5YR4/4 褐色土 炭化粒(φ5～9mm)中量、焼土粒(φ1～9mm)多量、焼土ブロック(φ50～100mm)少量、灰少量
第30層 10YR7/4 にぶい黄褐色土 黄色ロームパミス(10YR4/4・5/6)多量
第あ層 10YR2/1 黒色土 ロームブロック(φ30mm)少量
第い層 10YR2/2 黒褐色土 ローム粒・ブロック(1～50mm)多量
第う層 10YR1.7/1 黒色土 ロームブロック(φ20～50mm)やや多量

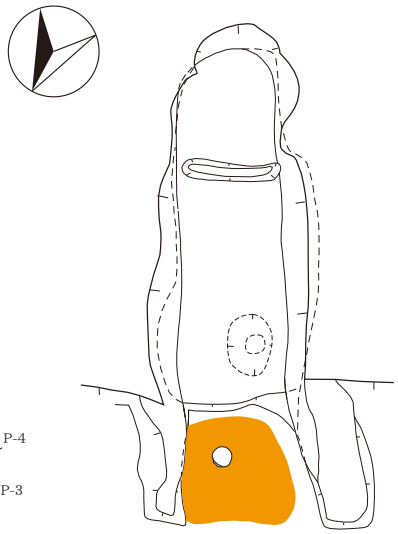
SK-34

第A層 10YR2/1 黒色土 ロームブロック(φ10～50mm)少量、焼土粒(φ1～9mm)微量
第B層 10YR2/1 黒色土 B-Tm火山灰粒・ブロック(φ1～10mm)多量
第C層 10YR1.7/1 黒色土 ローム粒(φ1～9mm)微量
第D層 10YR2/2 黒褐色土 ロームブロック(φ30～50mm)多量、焼土粒(φ9mm)微量
第E層 10YR3/2 黒褐色土 ローム粒・ブロック(φ1～20mm)少量
第F層 10YR2/2 黒褐色土 ローム粒・ブロック(φ1～30mm)中量

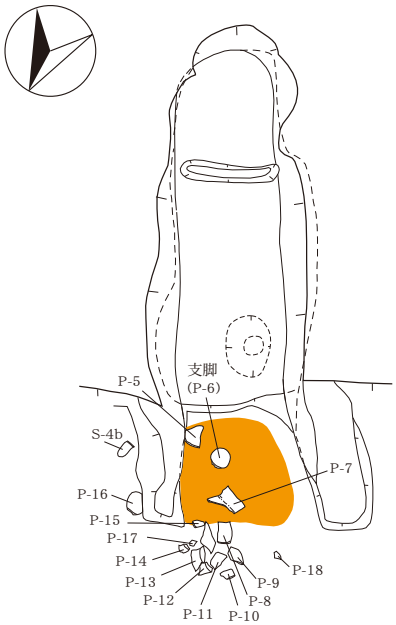
SI-11カマド確認時粘土範囲



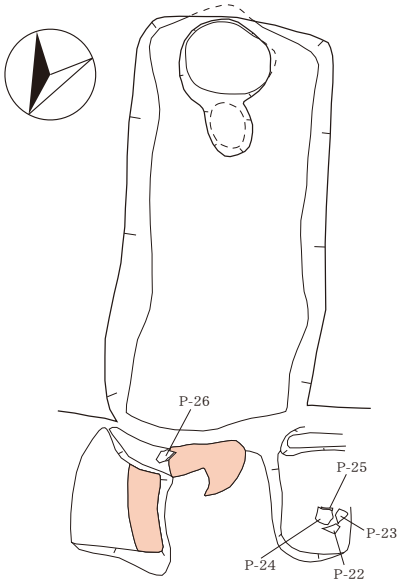
SI-11カマド二面目



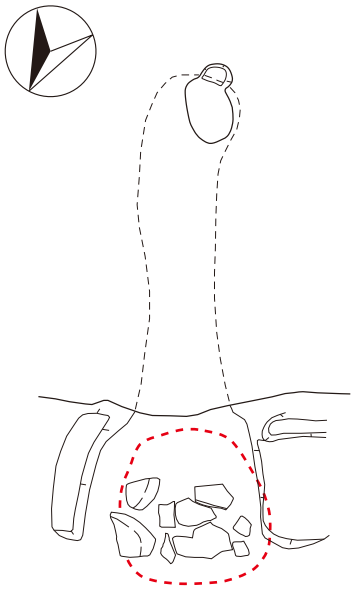
SI-11カマド二面目遺物出土状況



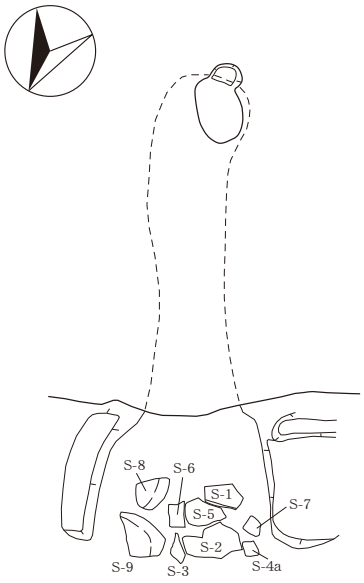
SI-11カマド二面目掘り方・遺物出土状況



SI-11カマド三面目



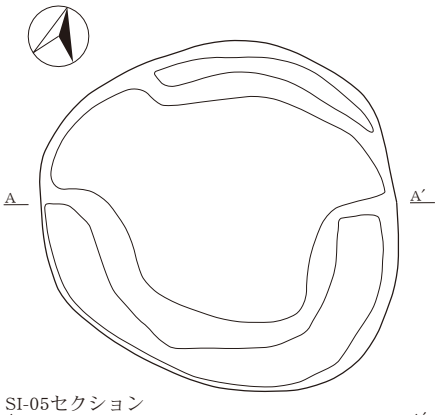
SI-11カマド三面目遺物出土状況



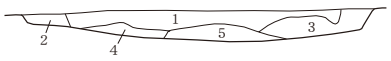
0 1m

図版 15　SI-11-3

SI-05

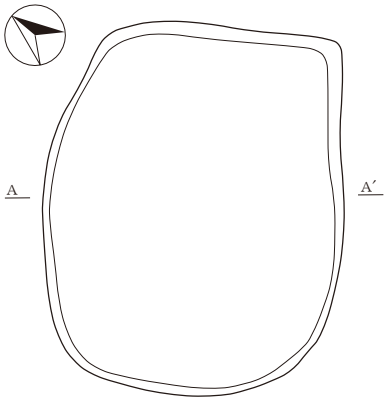


SI-05セクション
A 7.500m A′



SI-05
第1層 10YR2/1 黒色土　ローム粒・ブロック(φ10～50mm)少量、焼土粒微量
第2層 10YR3/3 暗褐色土　ローム粒・ブロック(φ10mm)微量
第3層 10YR3/4 暗褐色土　ローム粒・ブロック(φ10～30mm)少量
第4層 10YR4/4 褐色土　ローム粒多量、ローム粒・ブロック(φ30～50mm)微量
第5層 10YR3/3 暗褐色土　ローム粒・ブロック(φ1～20mm)多量

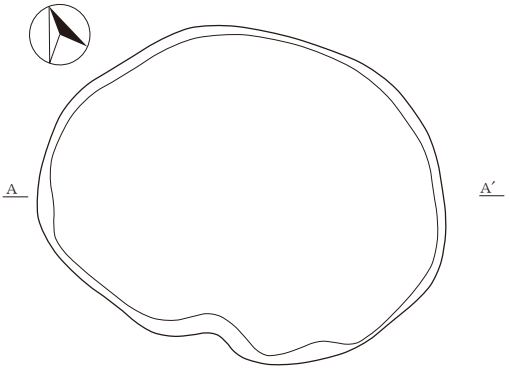
SI-06



SI-06セクション
A A′

SI-06
第1層 10YR2/2 黒褐色土 ローム粒少量、炭化粒微量

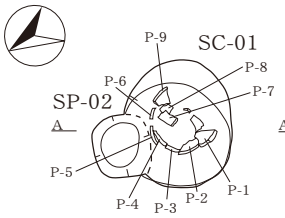
SI-07



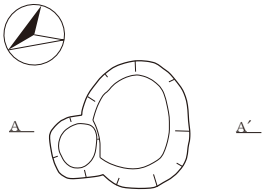
SI-07セクション
A 8.400m A′

SI-07
第1層 10YR2/3 黒褐色土　ローム粒微量、ローム粒・ブロック(φ10mm)微量

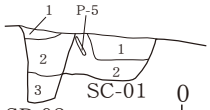
SC-01,SP-02



SC-01掘り方



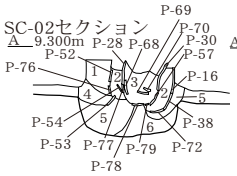
SC-01,SP-02セクション
A 6.800m A′



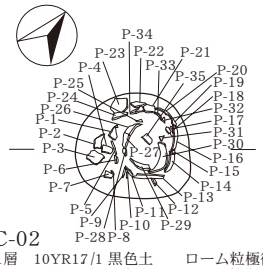
SC-01
第1層　10YR2/3　黒褐色土　ローム粒微量
第2層　10YR4/4　褐色土　ローム粒多量、ローム粒・ブロック(φ10mm)微量
SP-02
第1層　10YR3/3　暗褐色土　ローム粒微量
第2層　10YR3/4　暗褐色土　ローム粒多量
第3層　10YR4/4　褐色土　ローム粒・ブロック(φ10mm)少量

SC-02

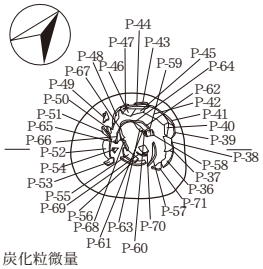
SC-02セクション
A 9.300m A′



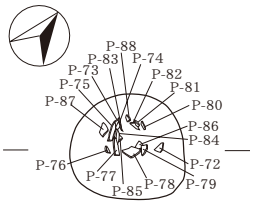
SC-02遺物出土状況１



SC-02遺物出土状況２

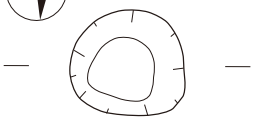


SC-02遺物出土状況３

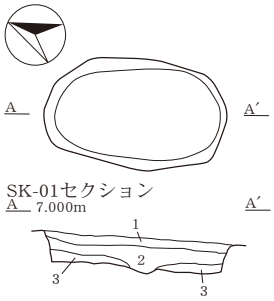


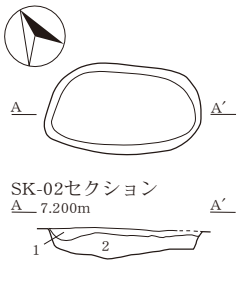
SC-02
第1層　10YR17/1 黒色土　ローム粒極微量、炭化粒微量
第2層　10YR2/1　黒色土　ローム粒微量
第3層　10YR2/2　黒褐色土　ローム粒微量、炭化粒極微量
第4層　10YR2/3　黒褐色土　ローム粒微量
第5層　10YR3/1　黒褐色土　ローム粒少量、炭化粒微量
第6層　10YR3/4　暗褐色土　ローム粒・ブロック(φ10mm)極微量、炭化粒極微量

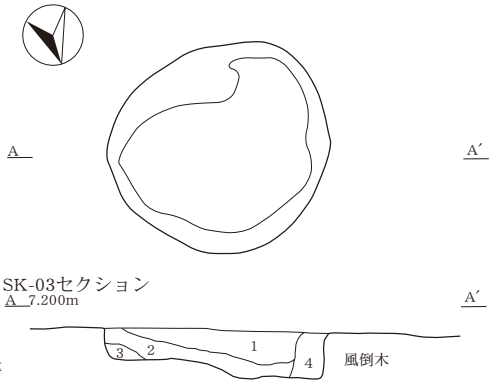
SC-02掘り方



図版 16　SI-05 ～ 07,SC-01・02





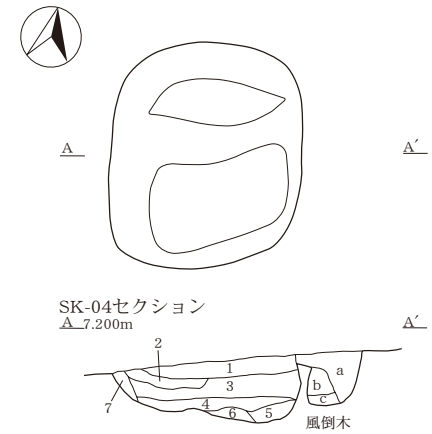


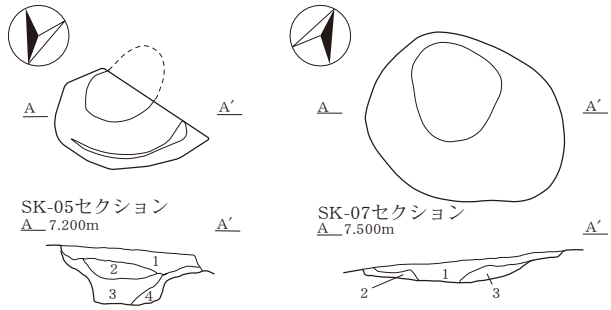
SK-01
第1層　10YR2/3　黒褐色土　　ローム粒微量
第2層　10YR3/4　暗褐色土　　ローム粒(φ1～9mm)少量、ロームブロック(φ10～15mm)微量
第3層　10YR6/6　明黄褐色土　ローム粒・ブロック(φ1～30mm)少量

SK-02
第1層　10YR4/3　にぶい黄褐色土　パミス粒(φ5mm)少量、黒褐色土ブロック(φ10～30mm)中量
第2層　10YR4/3　にぶい黄褐色土　パミスブロック(φ20～30mm)多量

SK-03
第1層　10YR3/2　黒褐色土　パミス粒(φ5mm)中量、パミスブロック(φ20～30mm)少量
第2層　10YR3/3　暗褐色土　パミスブロック(φ50～100mm)中量
第3層　10YR4/3　にぶい黄褐色土
第4層　10YR4/3　にぶい黄褐色土　パミス混合層(風倒木)弱量

SK-04
第1層　10YR3/3　暗褐色土　パミスブロック(φ10mm)少量、炭化粒(φ5mm)極微量
第2層　10YR2/3　黒褐色土　パミス粒(φ1mm)少量
第3層　10YR2/2　黒褐色土　パミス粒(φ1～9mm)少量、炭化物(φ10mm)極微量
第4層　10YR2/2　黒褐色土　パミス粒(φ1～9mm)・ブロック(φ10～200mm)多量
第5層　10YR2/3　黒褐色土　パミス粒(φ1～9mm)・ブロック(φ10～30mm)中量
第6層　10YR3/4　暗褐色土　パミス粒(φ1～9mm)・ブロック(φ10～500mm)多量
第7層　10YR4/3　にぶい黄褐色土　パミス粒(φ1～9mm)・ブロック(φ10～20mm)少量
風倒木
第a層　10YR4/4　褐色土　　パミスブロック(φ10～40mm)微量
第b層　10YR3/3　暗褐色土　パミス粒(φ1～9mm)・ブロック(φ10～50mm)多量
第c層　10YR5/8　黄褐色土　暗褐色土(10YR3/4)少量

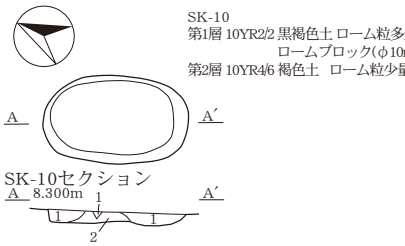


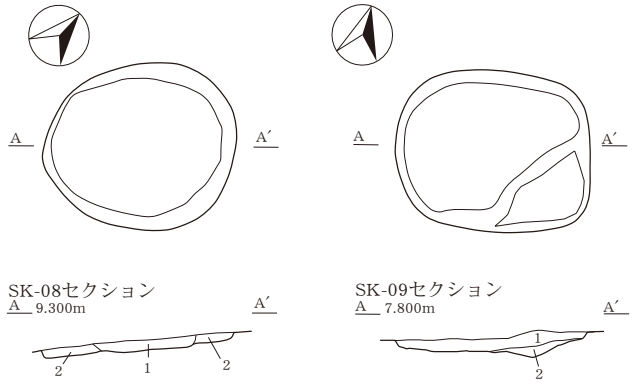


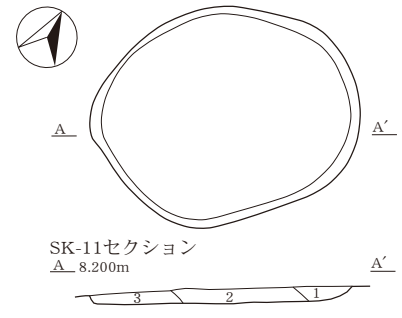
SK-05
第1層　10YR2/3　黒褐色土　パミス粒(φ1～9mm)中量、炭化粒(φ5mm)少量
第2層　10YR3/3　暗褐色土　パミスブロック(φ10mm)少量
第3層　10YR4/3　にぶい黄褐色土　パミス粒(φ1～9mm)・パミスブロック(φ10～30mm)多量
第4層　10YR4/4　褐色土　　パミス粒(φ1～9mm)・ブロック(φ10～60mm)多量

SK-07
第1層　10YR2/2　黒褐色土　ローム粒・ブロック(φ10mm)微量
第2層　10YR2/2　黒褐色土　ローム粒少量
第3層　10YR3/4　暗褐色土　ローム粒少量、ロームブロック(φ10mm)微量

SK-10
第1層 10YR2/2 黒褐色土 ローム粒多量、ロームブロック(φ10mm)微量
第2層 10YR4/6 褐色土　ローム粒少量、炭化粒微量



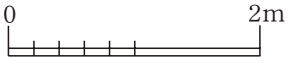




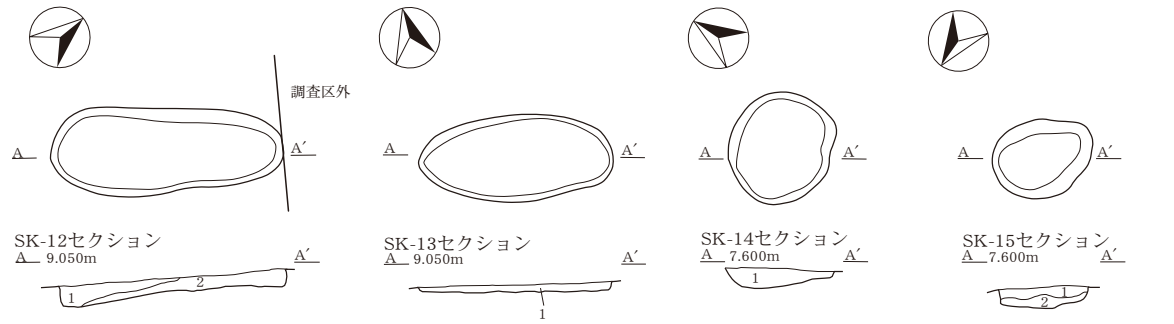
SK-08
第1層　10YR1.7/1　黒色土　　ローム粒少量、ロームブロック(φ10mm)微量
第2層　10YR2/3　　黒褐色土　ローム粒微量

SK-09
第1層　10YR2/2　黒褐色土　ローム粒少量、ロームブロック(φ10～30mm)微量
第2層　10YR2/1　黒色土　　ローム粒微量、ロームブロック(φ10～30mm)少量

SK-11
第1層 10YR2/3　黒褐色土 ローム粒少量、炭化粒微量
第2層 10YR1.7/1　黒色土　ローム粒少量
第3層 10YR3/4　暗褐色土 ローム粒多量、ロームブロック(φ10mm)微量



図版 17　SK ①

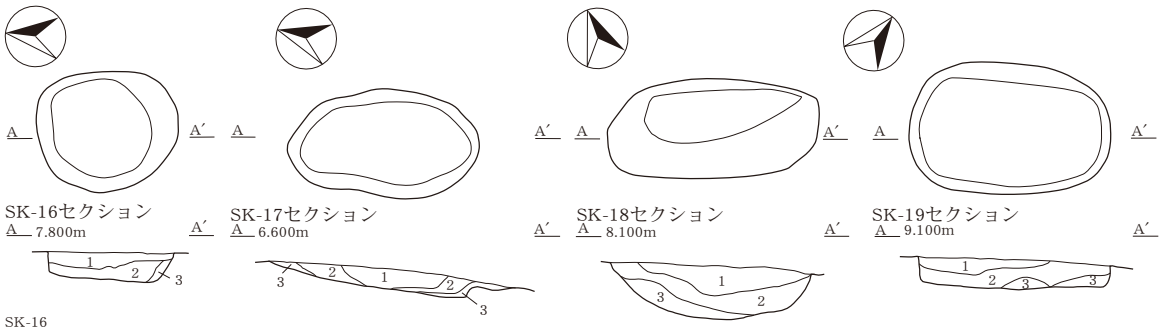


SK-12
第1層　10YR3/4　暗褐色土　ローム粒微量
第2層　10YR3/4　暗褐色土　ローム粒多量、ロームブロック(φ10mm)微量

SK-13
第1層　10YR3/4　暗褐色土　ローム粒少量

SK-14
第1層　10YR2/3　黒褐色土　ローム粒多量、ロームブロック(φ10mm)微量

SK-15
第1層　10YR1.7/1　黒色土　ローム粒微量、ロームブロック(φ10～30mm)少量
第2層　10YR3/4　暗褐色土　ローム粒・ブロック(φ10～50mm)少量

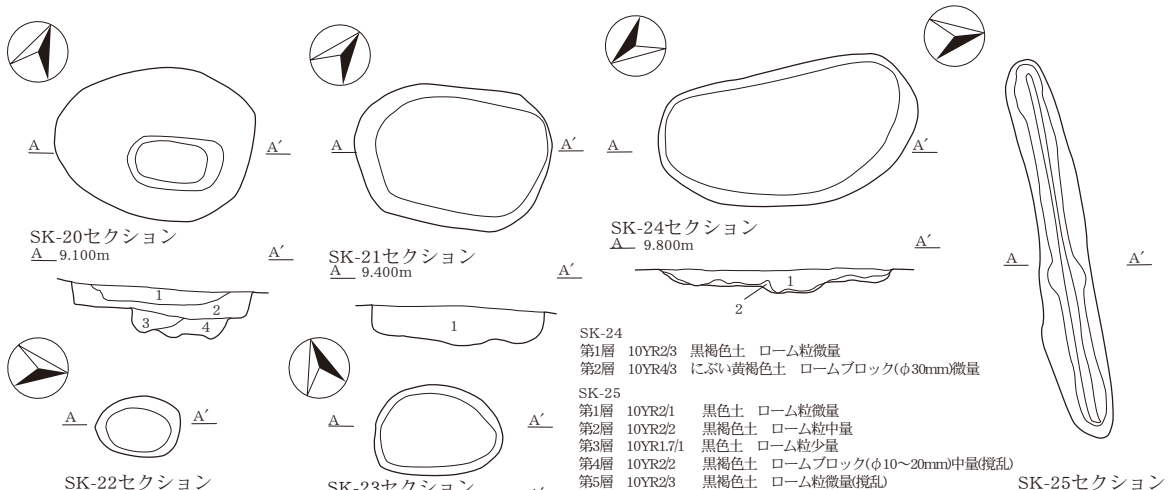


SK-16
第1層　10YR1.7/1　黒色土　ローム粒微量
第2層　10YR2/2　黒褐色土　ローム粒少量、ロームブロック(φ10mm)微量
第3層　10YR3/4　暗褐色土　ローム粒多量、ロームブロック(φ10mm)微量

SK-17
第1層　10YR1.7/1　黒色土　ローム粒・ブロック(φ10mm)微量、
上部・下部に鉄滓微量出土、炭化物(φ10mm)少量
第2層　10YR2/2　黒褐色土　ローム粒多量、ロームブロック(φ10mm)微量、
炭化物(φ10mm)少量
第3層　10YR3/4　暗褐色土　ローム粒少量、炭化粒微量

SK-18
第1層　10YR2/3　黒褐色土　ローム粒微量
第2層　10YR1.7/1　黒色土　ローム粒・ブロック(φ10mm)微量
第3層　10YR3/4　暗褐色土　ローム粒・ブロック(φ10～30mm)少量

SK-19
第1層　10YR2/3　黒褐色土　ローム粒少量
第2層　10YR3/4　暗褐色土　ローム粒多量、ロームブロック(φ10mm)微量
第3層　10YR3/4　暗褐色土　ローム粒多量、ロームブロック(φ10～30mm)少量



SK-24
第1層　10YR2/3　黒褐色土　ローム粒微量
第2層　10YR4/3　にぶい黄褐色土　ロームブロック(φ30mm)微量

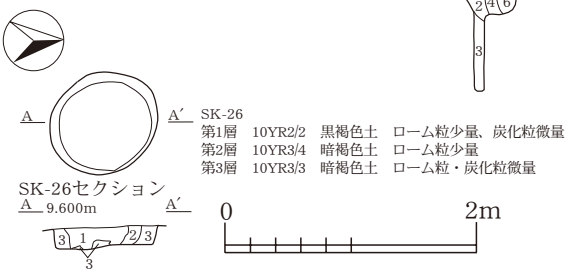
SK-25
第1層　10YR2/1　黒色土　ローム粒微量
第2層　10YR2/2　黒褐色土　ローム粒中量
第3層　10YR1.7/1　黒色土　ローム粒少量
第4層　10YR2/2　黒褐色土　ロームブロック(φ10～20mm)中量(撹乱)
第5層　10YR2/3　黒褐色土　ローム粒微量(撹乱)
第6層　10YR2/1　黒色土　ロームブロック(φ10mm)極微量(撹乱)

SK-20
第1層　10YR1.7/1　黒色土　ローム粒少量、炭化粒微量
第2層　10YR2/3　黒褐色土　ローム粒多量、ロームブロック(φ10～20mm)少量
第3層　10YR4/4　褐色土　ローム粒少量
第4層　10YR2/2　黒褐色土　ローム粒多量、ロームブロック(φ10～25mm)少量

SK-21
第1層　10YR2/3　黒褐色土　ローム粒少量、ロームブロック(φ10～50mm)・炭化粒微量

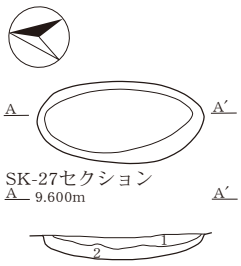
SK-22
第1層　10YR3/4　暗褐色土　ローム粒・ブロック(φ10mm)微量

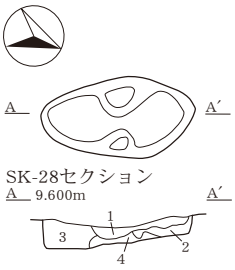
SK-23
第1層　10YR2/1　黒色土　ロームブロック(φ30mm)極微量
第2層　10YR2/3　黒褐色土　焼土粒微量、ローム粒少量
第3層　10YR3/3　暗褐色　ロームブロック(φ50mm)中量

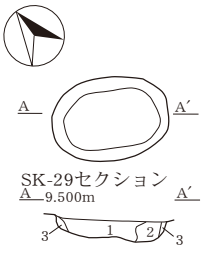


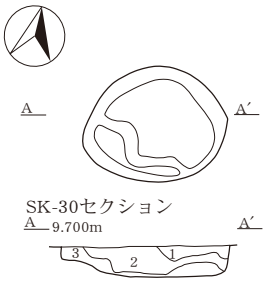
SK-26
第1層　10YR2/2　黒褐色土　ローム粒少量、炭化粒微量
第2層　10YR3/4　暗褐色土　ローム粒少量
第3層　10YR3/3　暗褐色土　ローム粒・炭化粒微量

図版 18　SK ②







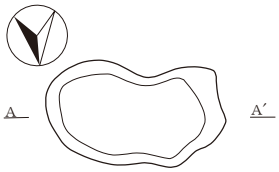


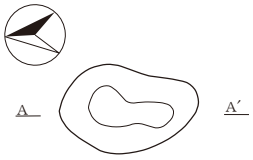
SK-27
第1層　10YR2/3　黒褐色土　ローム粒・炭化粒微量
第2層　10YR2/2　黒褐色土　ロームブロック(φ50mm)・炭化粒極微量

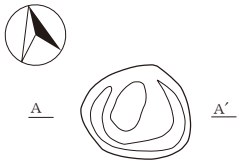
SK-28
第1層　10YR2/2　黒褐色土　ロームブロック(φ10～40mm)少量、炭化粒微量
第2層　10YR3/3　暗褐色土　ローム粒少量
第3層　10YR3/4　暗褐色土　ロームブロック(φ10mm)微量
第4層　10YR5/8　黄褐色土　ロームブロック(φ50～100mm)多量

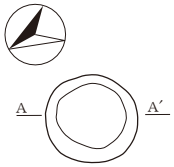
SK-29
第1層　10YR2/1　黒色土　ロームブロック(φ20～50mm)中量
第2層　10YR2/2　黒褐色土　ロームブロック(φ60mm)極微量、(φ10～20mm)少量
第3層　10YR4/3　にぶい黄褐色土　ローム粒多量

SK-30
第1層　10YR1.7/1　黒色土　ローム粒微量、炭化粒極微量
第2層　10YR2/2　黒褐色土　ローム粒多量
第3層　10YR2/3　黒褐色土　ローム粒中量







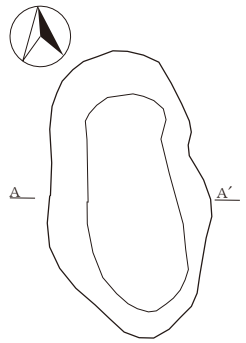


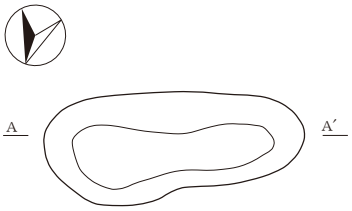
SK-31
第1層　10YR2/1　黒色土　ローム粒中量
第2層　10YR2/3　黒褐色土　ロームブロック(φ30mm)少量

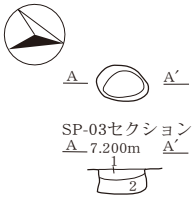
SK-32
第1層　10YR2/1　黒色土　ローム粒多量
第2層　10YR2/3　黒褐色土　ロームブロック(φ15mm)少量
第3層　10YR3/2　黒褐色土　ロームブロック(φ20mm)少量、炭化粒微量

SK-33
第1層　10YR1.7/1　黒色土　ローム粒微量
第2層　10YR2/3　黒褐色土　ローム粒少量、ロームブロック(φ10mm)微量

SK-35
第1層　10YR1.7/1　黒色土　ローム粒少量
第2層　10YR2/2　黒褐色土　ローム粒少量
第3層　10YR3/4　暗褐色土　ローム粒・ブロック(φ10mm)微量

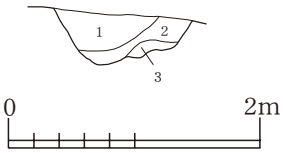






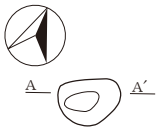
SP-01
第1層　10YR2/3　黒褐色土　ローム粒少量

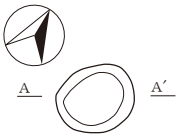
SP-03
第1層　10YR2/3　黒褐色土　パミス粒(φ5mm)・パミスブロック(φ20mm)少量
第2層　10YR3/3　暗褐色土　パミス粒(φ1～5mm)中量、パミスブロック(φ50mm)微量



SK-36
第1層　10YR1.7/1　黒色土　ローム粒少量
第2層　10YR3/3　暗褐色土　ローム粒微量
第3層　10YR3/4　暗褐色土　ローム粒・炭化粒微量

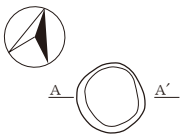
SK-37
第1層　10YR2/1　黒色土　ローム粒多量、ロームブロック(φ10～20mm)少量
第2層　10YR2/3　黒褐色土　ローム粒・ブロック(φ10～30mm)多量
第3層　10YR2/2　黒褐色土　ローム粒・ブロック(φ10～50mm)少量

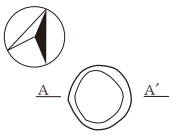


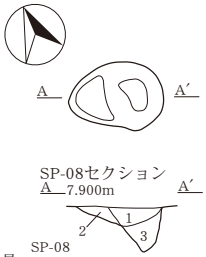


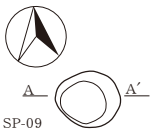
SP-04
第1層　10YR2/2　黒褐色土　ローム粒・ブロック(φ10～20mm)少量

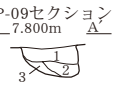
SP-05
第1層　10YR3/4　暗褐色土　ローム粒・ブロック(φ10mm)微量
第2層　10YR4/6　褐色土　ローム粒少量、ロームブロック(φ10mm)微量











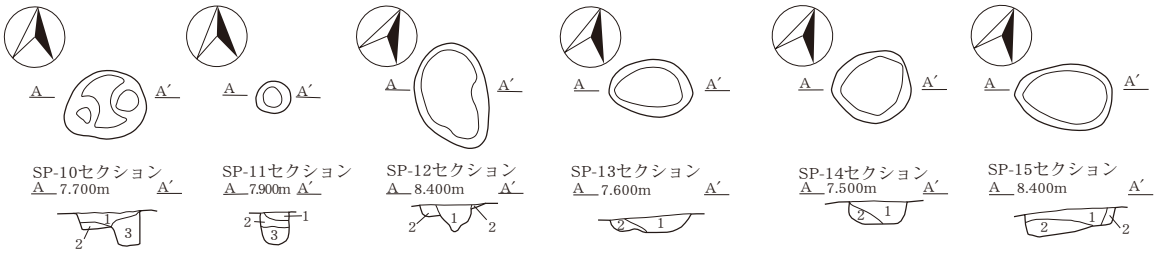
SP-06
第1層　10YR2/1　黒色土　ローム粒・ブロック(φ10～30mm)少量

SP-07
第1層　10YR2/2　黒褐色土　ロームブロック(φ10～30mm)少量

SP-08
第1層　10YR2/1　黒色土　ローム粒微量
第2層　10YR2/3　黒褐色土　ローム粒少量
第3層　10YR1.7/1　黒色土　ローム粒少量

SP-09
第1層　10YR1.7/1　黒色土　ローム粒微量
第2層　10YR2/3　黒褐色土　ローム粒・ブロック(φ10～15mm)少量
第3層　10YR3/4　暗褐色土　ロームブロック(φ30～50mm)少量

図版 19　SK ③ ,SP ①



SP-10
第1層　10YR2/2　黒褐色土　ローム粒微量
第2層　10YR4/4　褐色土　ローム粒少量
第3層　10YR3/4　暗褐色土　ローム粒多量、ロームブロック(φ10mm)少量

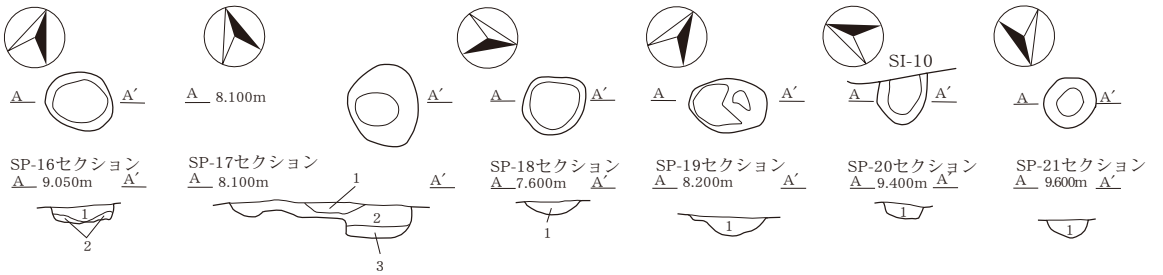
SP-11
第1層　10YR1.7/1　黒色土　ローム粒微量
第2層　10YR3/4　暗褐色土　ローム粒・ブロック(φ20～30mm)微量
第3層　10YR2/2　黒褐色土　ローム粒少量、ロームブロック(φ10mm)微量

SP-12
第1層　10YR2/3　黒褐色土　ローム粒多量、ロームブロック(φ10mm)微量
第2層　10YR3/4　暗褐色土　ローム粒少量、ロームブロック(φ10mm)微量

SP-13
第1層　10YR2/2　黒褐色土　ローム粒微量
第2層　10YR4/4　褐色土　ローム粒微量

SP-14
第1層　10YR2/3　黒褐色土　ローム粒・ロームブロック(φ10mm)微量
第2層　10YR3/3　暗褐色土　ローム粒微量、ロームブロック(φ10mm)少量

SP-15
第1層　10YR2/3　黒褐色土　ローム粒少量、ロームブロック(φ10mm)微量
第2層　10YR4/4　褐色土　ローム粒多量、ロームブロック(φ10～20mm)少量



SP-16
第1層　10YR3/4　暗褐色土　ローム粒少量、ロームブロック(φ10mm)微量
第2層　10YR4/6　褐色土　ローム粒多量、ロームブロック(φ10mm)微量

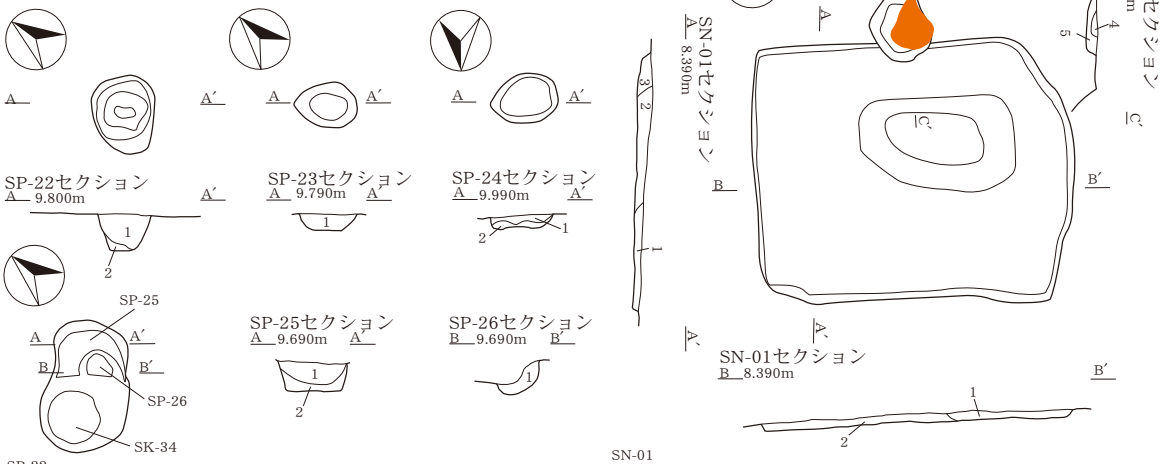
SP-17
第1層　10YR2/3　黒褐色土　ローム粒少量
第2層　10YR3/4　暗褐色土　ローム粒少量、ロームブロック(φ10mm)微量
第3層　10YR4/4　褐色土　ロームブロック(φ10mm)微量

SP-18
第1層　10YR2/2　黒褐色土　ローム粒・ブロック少量

SP-19
第1層　10YR2/3　黒褐色土　ローム粒多量、ロームブロック(φ10～20mm)少量

SP-20
第1層　10YR2/2　黒褐色土　ローム粒少量、ロームブロック(φ10mm)微量

SP-21
第1層　10YR2/1　黒色土　ロームブロック(φ40mm)少量



SP-22
第1層　10YR2/1　黒色土　ローム粒・ブロック(φ10mm)微量
第2層　10YR2/2　黒褐色土　ローム粒・ブロック(φ10～20mm)少量

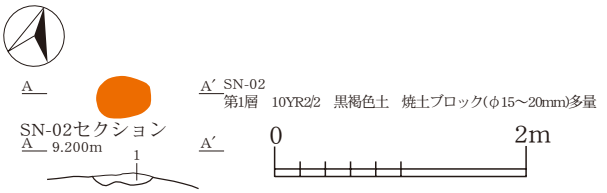
SP-23
第1層　10YR1.7/1　黒色土　ローム粒微量

SP-24
第1層　10YR1.7/1　黒色土　ローム粒微量
第2層　10YR3/4　暗褐色土　ローム粒微量

SP-25
第1層　10YR2/1　黒色土　ローム粒・ブロック(φ10mm)微量
第2層　10YR4/4　褐色土　ローム粒微量、ロームブロック(φ10～20mm)少量

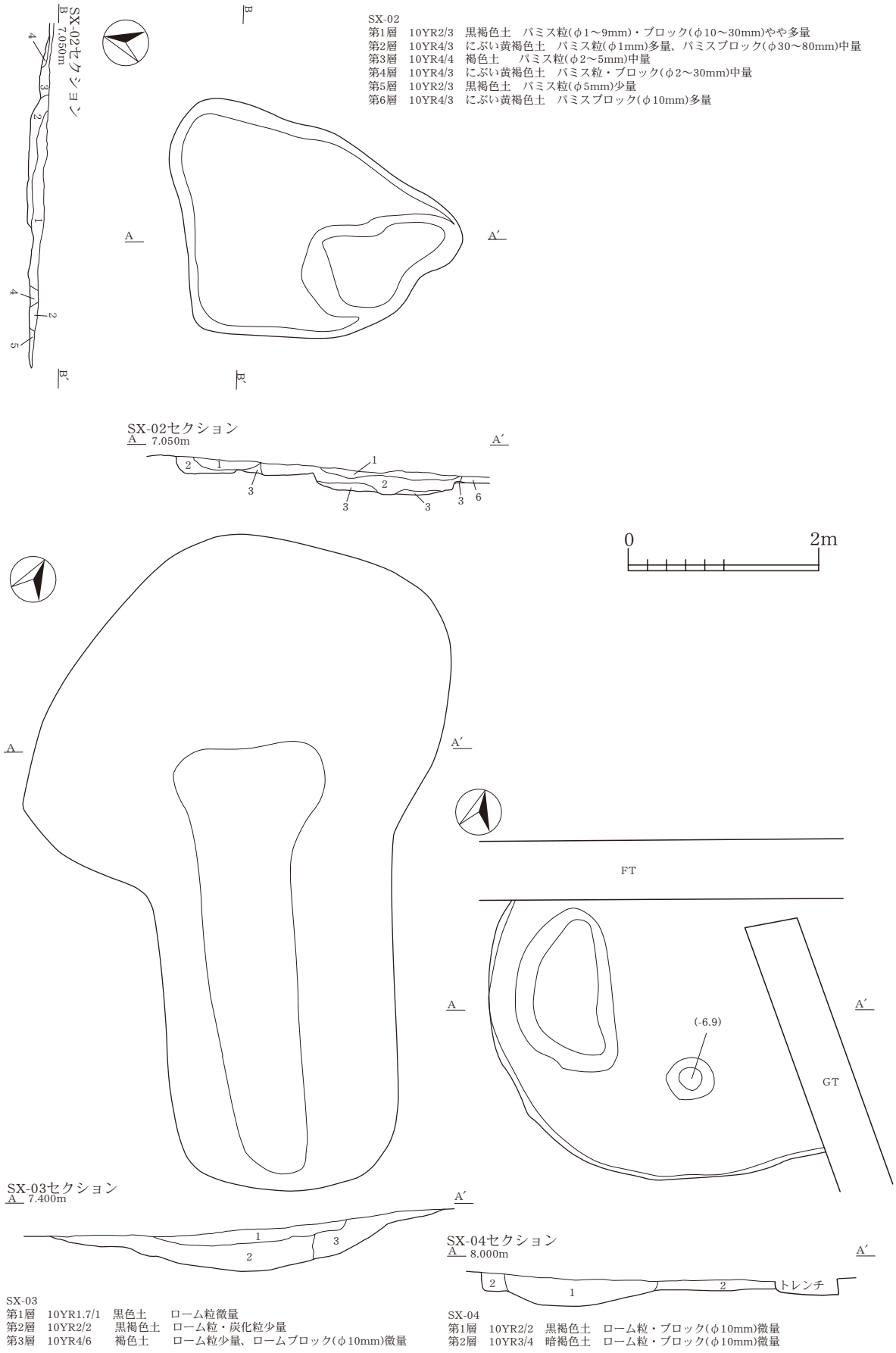
SP-26
第1層　10YR2/3　黒褐色土　ローム粒・ブロック(φ10mm)少量

SN-01
第1層　10YR2/2　黒褐色土　ローム粒微量、ロームブロック(φ10mm)微量
第2層　10YR3/3　暗褐色土　ローム粒少量、焼土粒微量
第3層　10YR2/2　黒褐色土　ローム粒微量、ロームブロック(φ10～20mm)少量
第4層　5YR4/8　赤褐色土　ローム粒微量
第5層　10YR3/4　暗褐色土　ローム粒少量、ロームブロック(φ10mm)微量



SN-02
第1層　10YR2/2　黒褐色土　焼土ブロック(φ15～20mm)多量

図版 20　SP ②，焼土状遺構

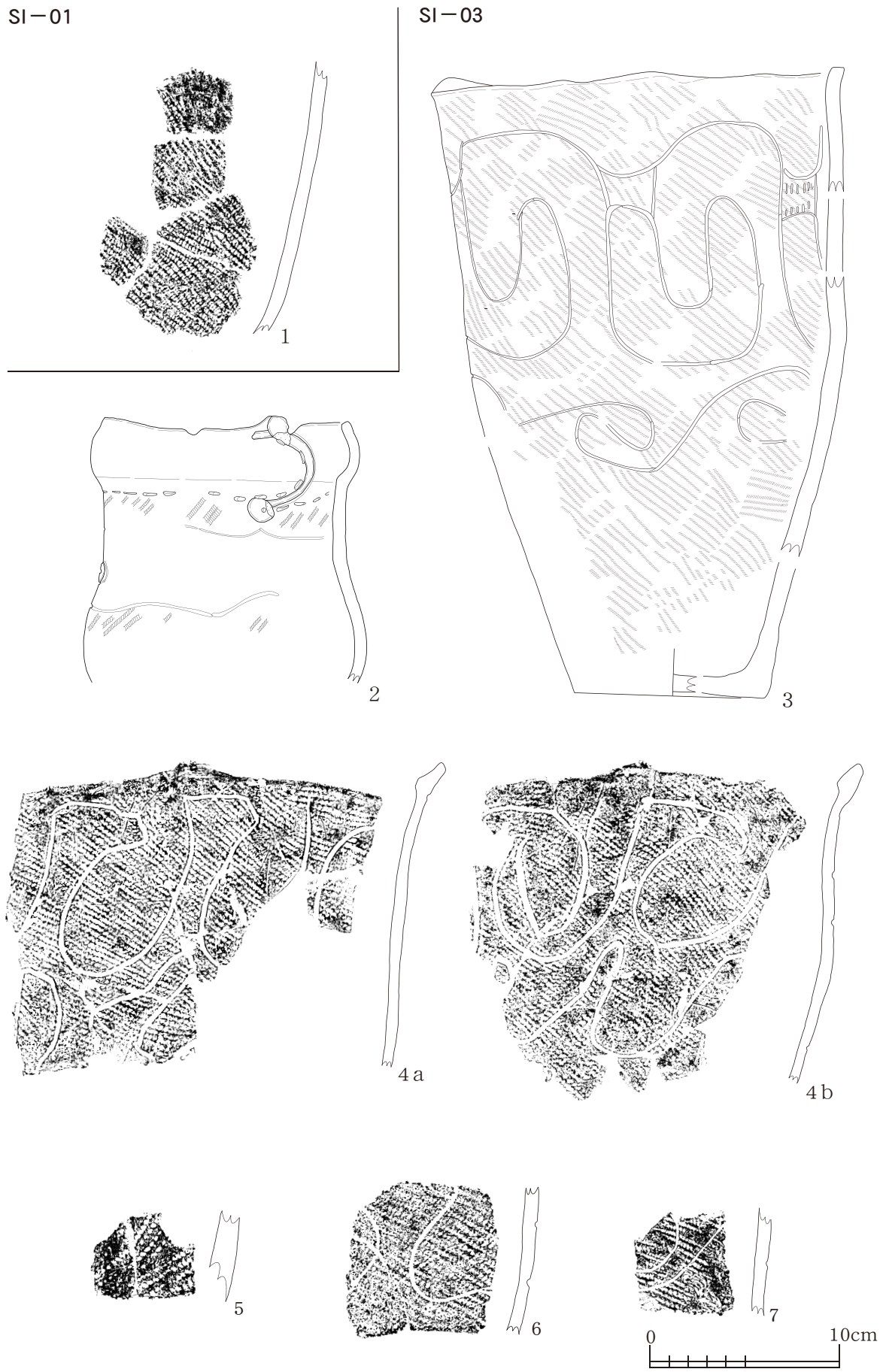


SX-02
第1層　10YR2/3　黒褐色土　パミス粒(φ1～9mm)・ブロック(φ10～30mm)やや多量
第2層　10YR4/3　にぶい黄褐色土　パミス粒(φ1mm)多量、パミスブロック(φ30～80mm)中量
第3層　10YR4/4　褐色土　パミス粒(φ2～5mm)中量
第4層　10YR4/3　にぶい黄褐色土　パミス粒・ブロック(φ2～30mm)中量
第5層　10YR2/3　黒褐色土　パミス粒(φ5mm)少量
第6層　10YR4/3　にぶい黄褐色土　パミスブロック(φ10mm)多量

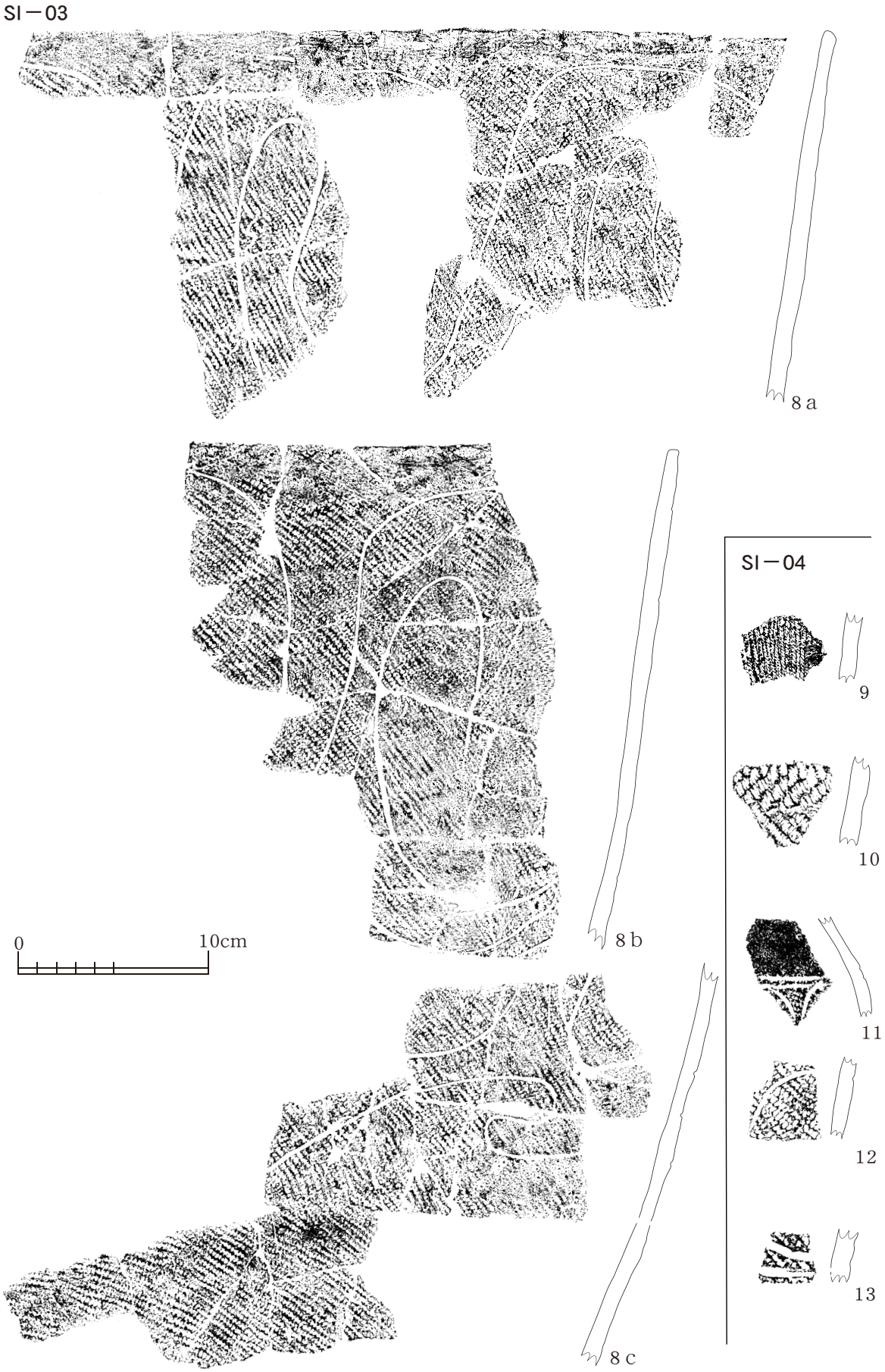
SX-03
第1層　10YR1.7/1　黒色土　ローム粒微量
第2層　10YR2/2　黒褐色土　ローム粒・炭化粒少量
第3層　10YR4/6　褐色土　ローム粒少量、ロームブロック(φ10mm)微量

SX-04
第1層　10YR2/2　黒褐色土　ローム粒・ブロック(φ10mm)微量
第2層　10YR3/4　暗褐色土　ローム粒・ブロック(φ10mm)微量

図版 21　その他の遺構



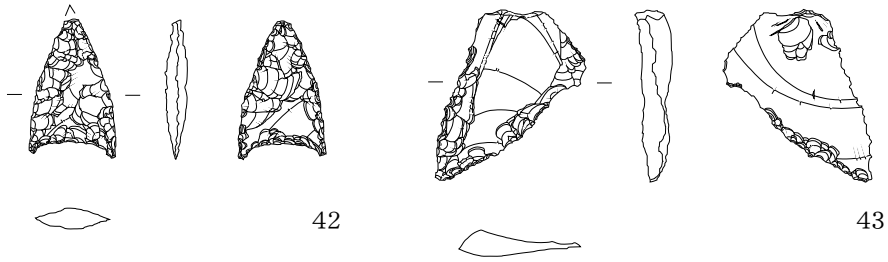
図版 22　縄文土器①

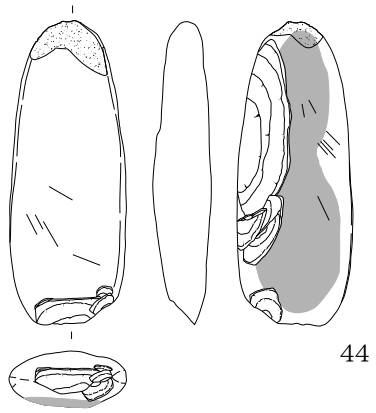


図版 23　縄文土器②

14a
14b
15
SI－11
16
17
SK－01
18
19
20
SK－03
21
SN－01
22
23
24
25
SX－01
26
SX－02
27
28
SC－02
29
30
31
32
33
34
縄文前期
0
10cm
35
36
37
38
39
40
41
縄文中期

図版 24　縄文土器③

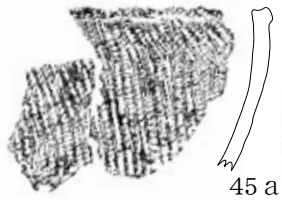


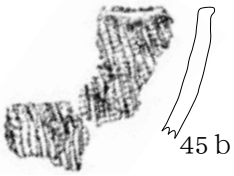


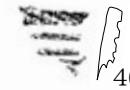
42・43 0 5cm

44 0 10cm

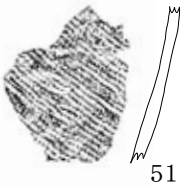
SI－01

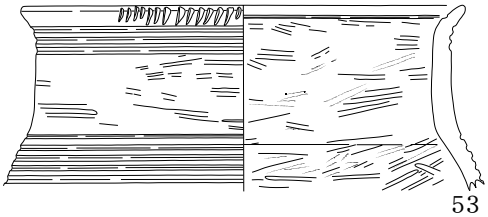






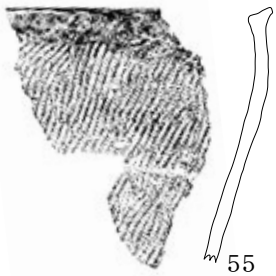
SK－04





SK－05

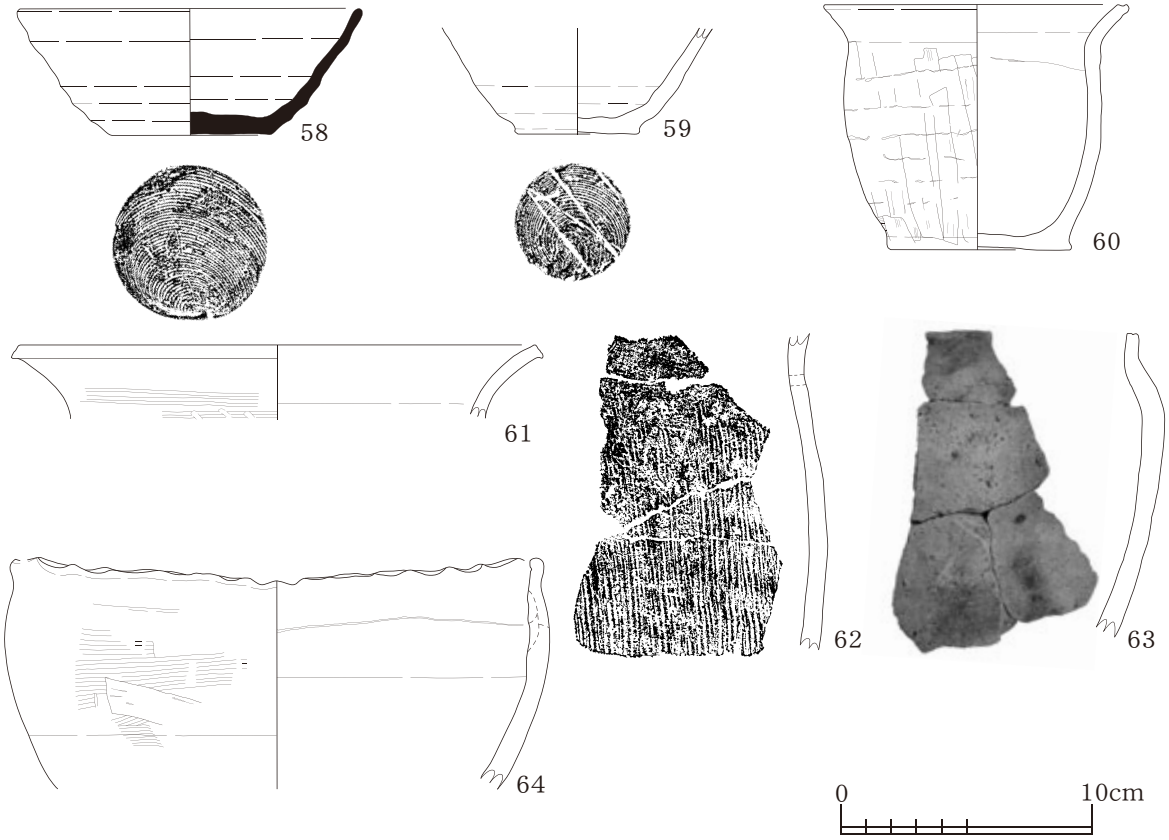
遺構外出土土器



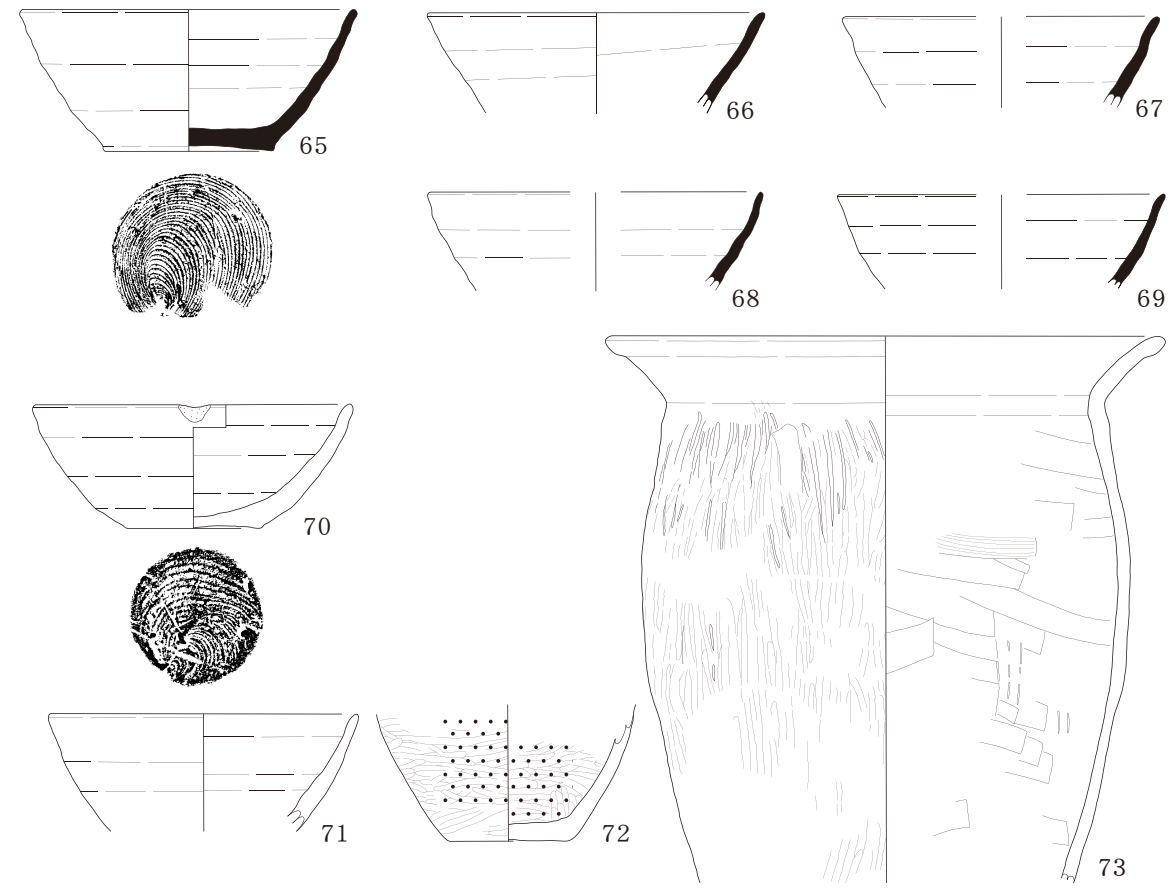
0 10cm

図版 25　石器・弥生土器

SI－01

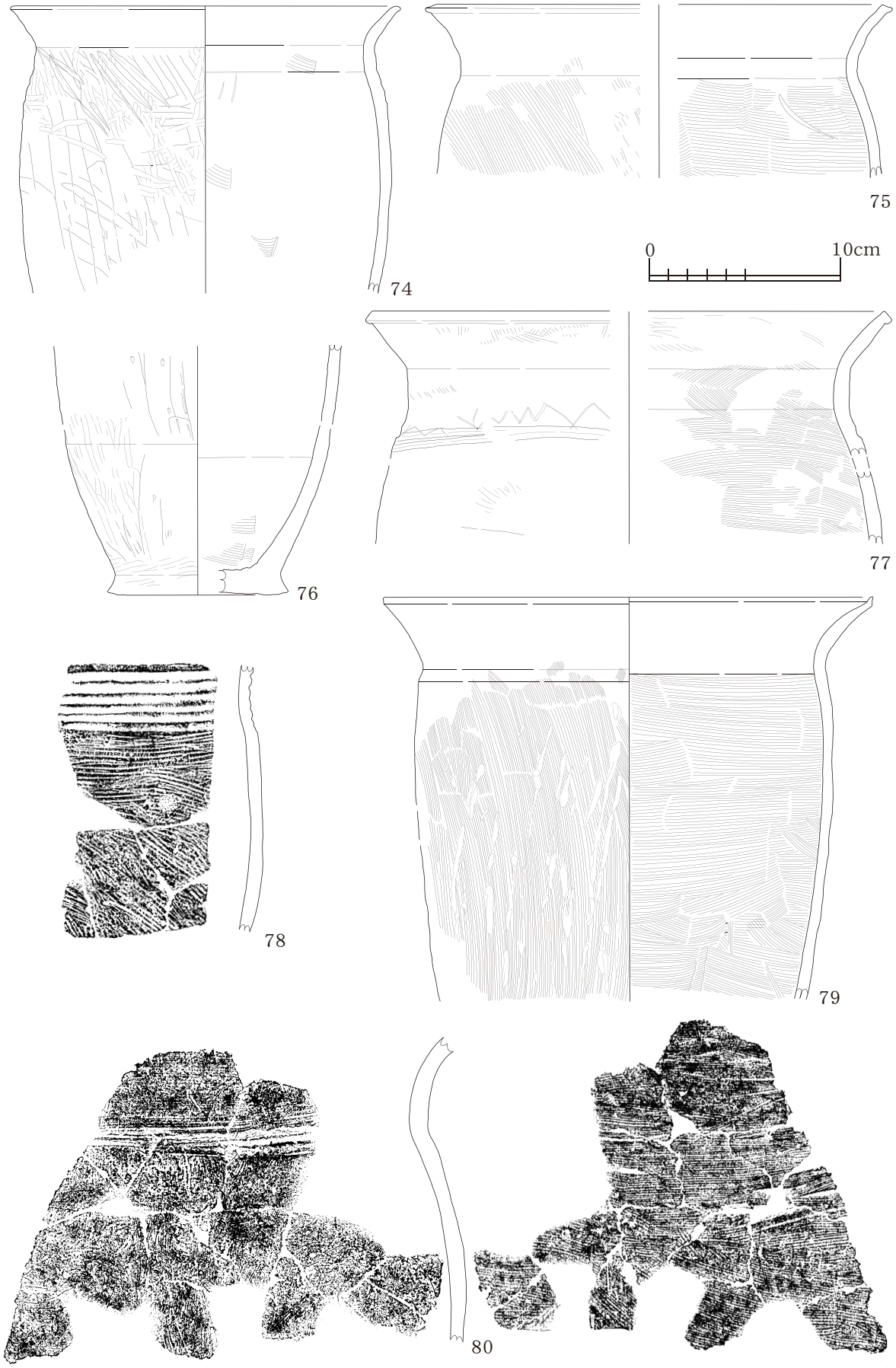


SI－02



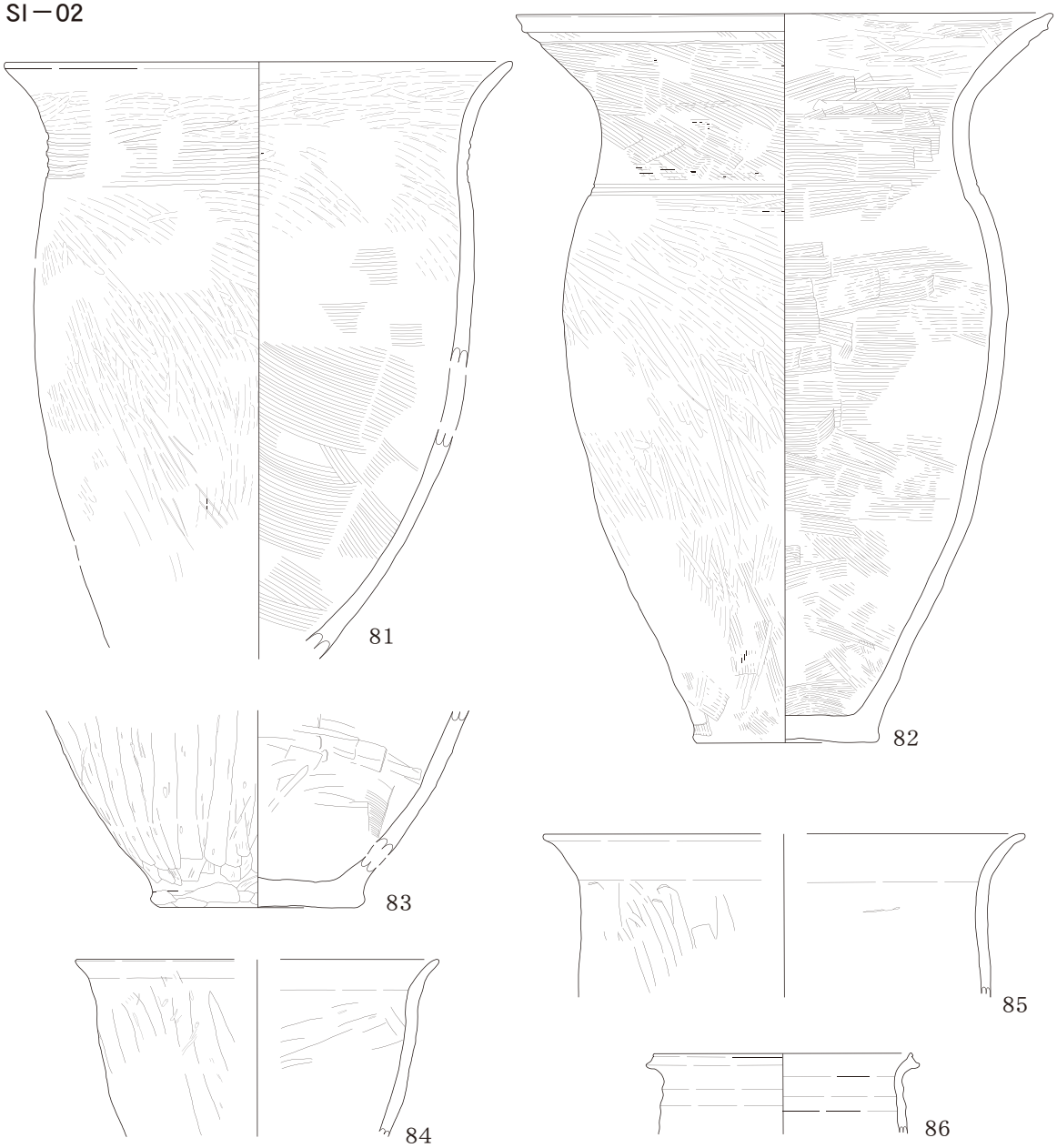
図版 26　SI-01,SI-02 ①

SI－02

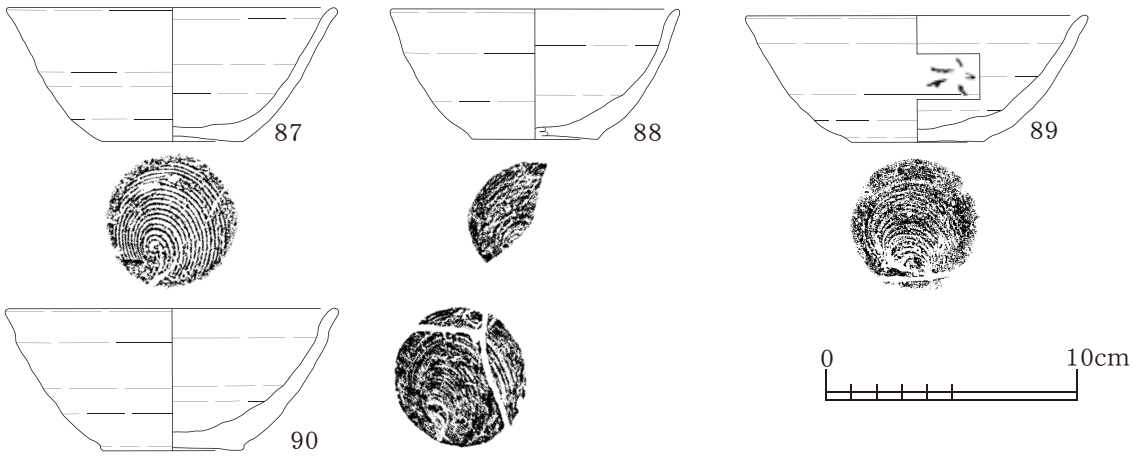


図版 27　SI-02 ②

SI－02

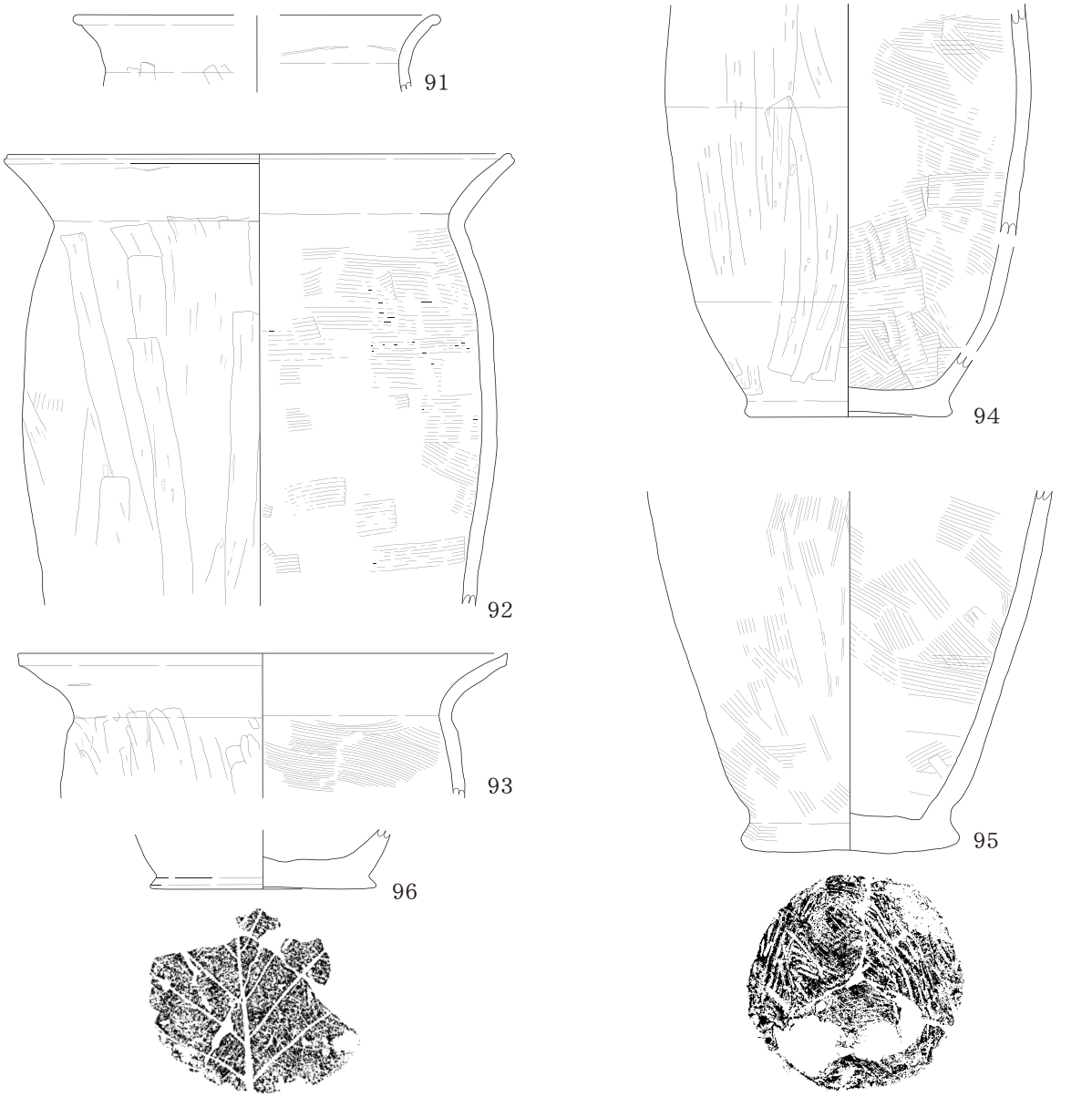


SI－04

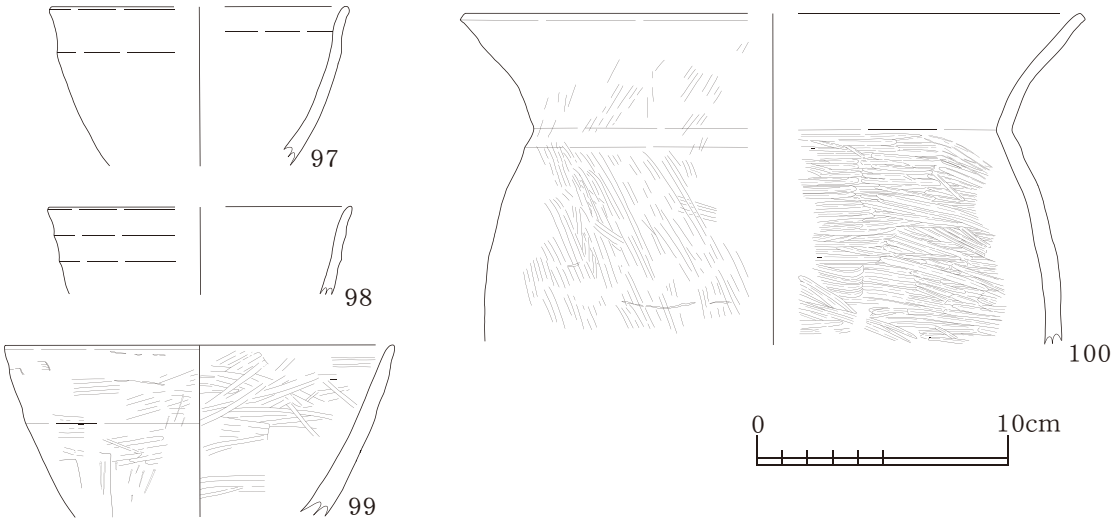


図版 28　SI-02 ③ ,SI-04 ①

SI－04

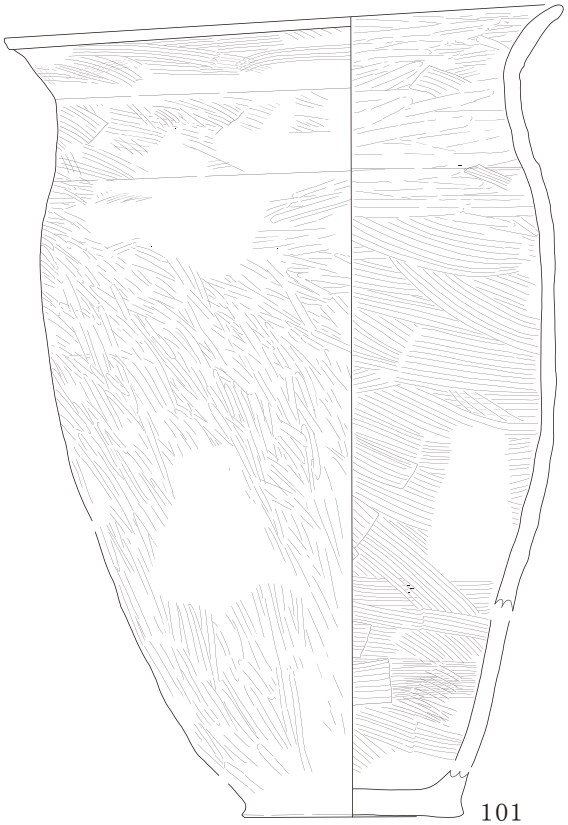


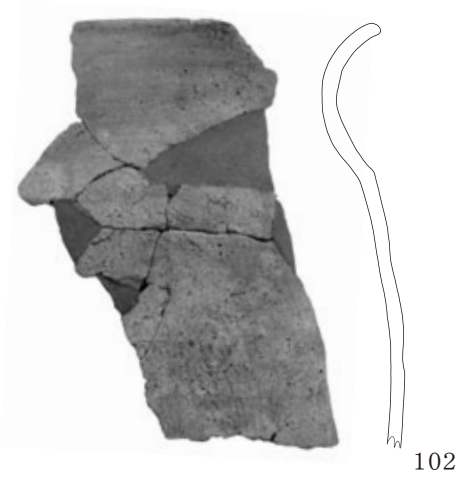
SI－10

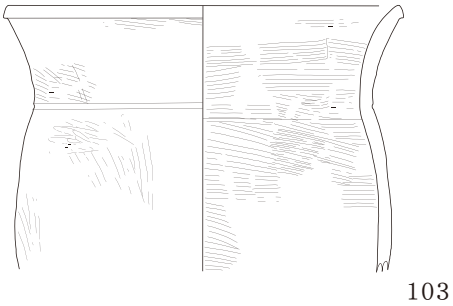


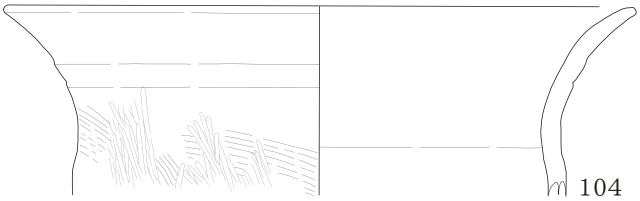
図版 29　SI-04 ② ,SI-10 ①

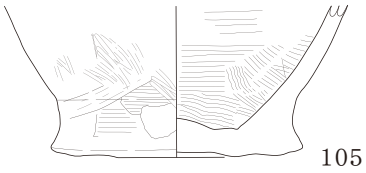
SI－10



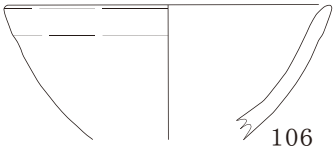


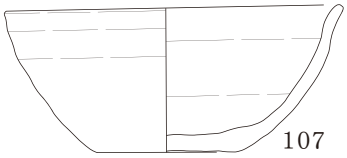


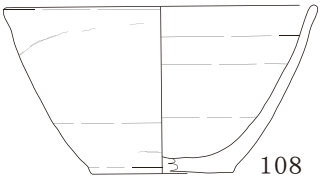


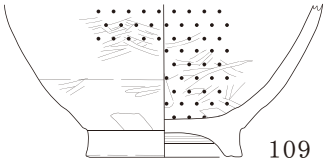


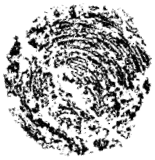
SI－11

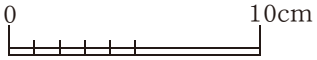






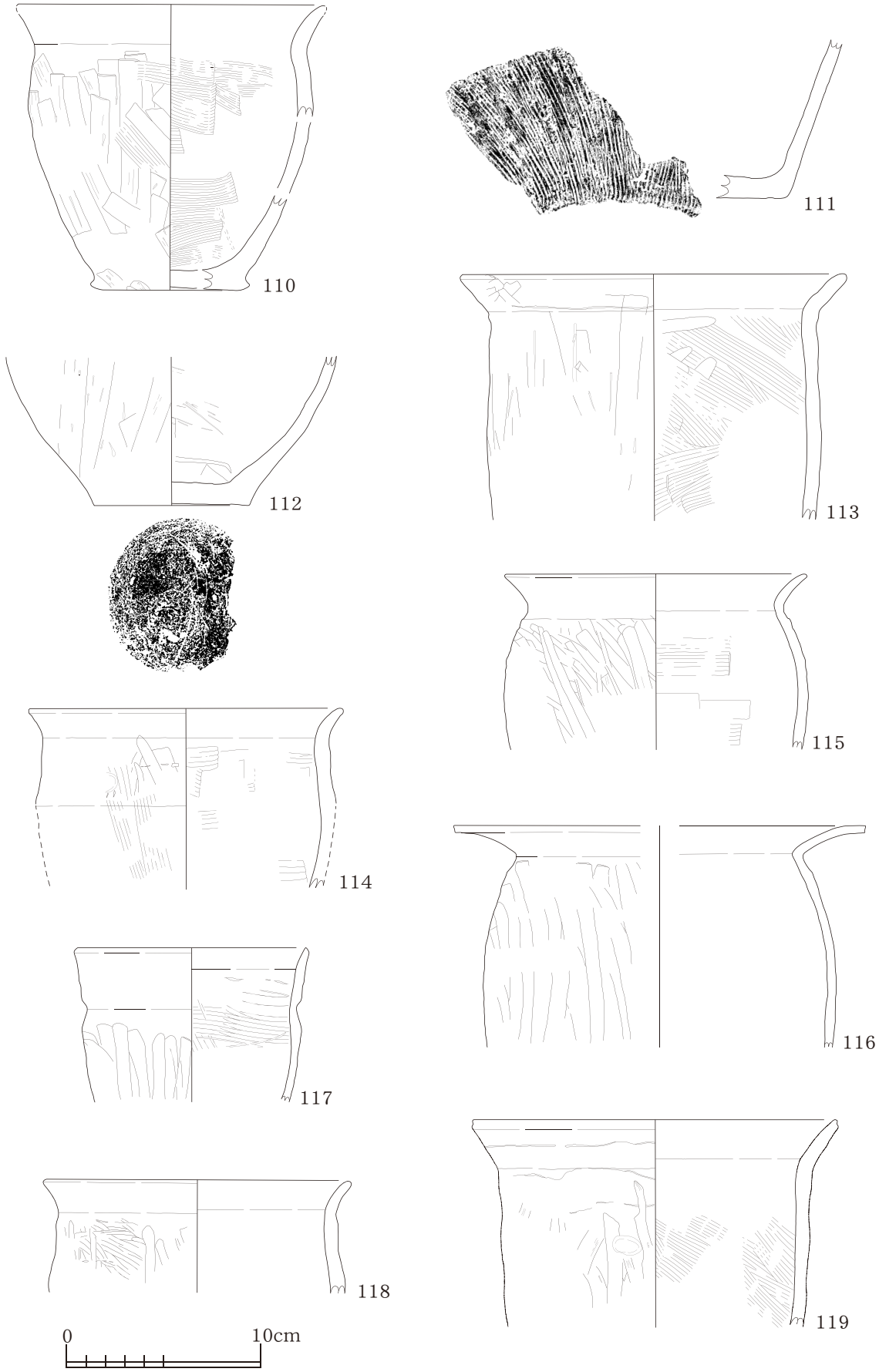






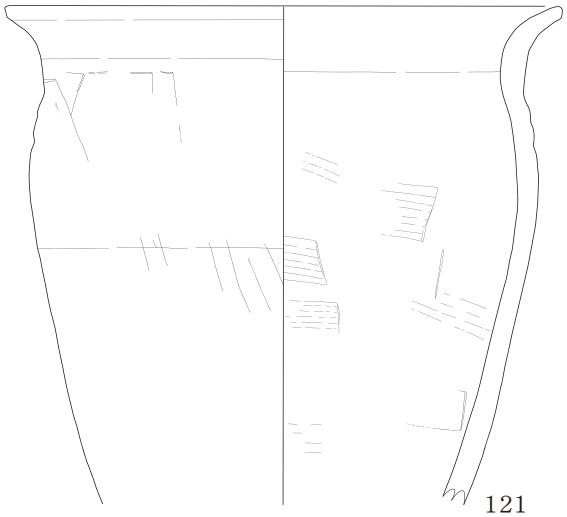
図版 30　SI-10 ② ,SI-11 ①

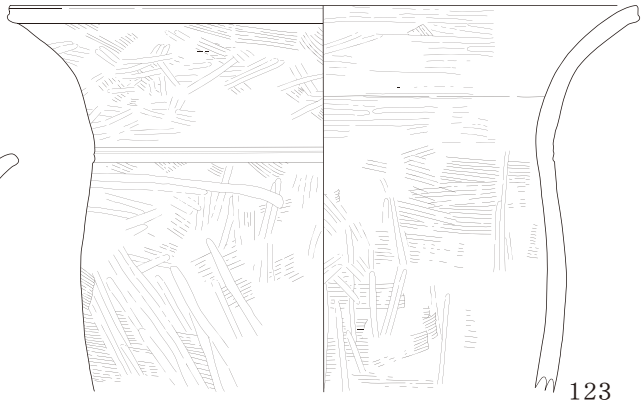
SI－11

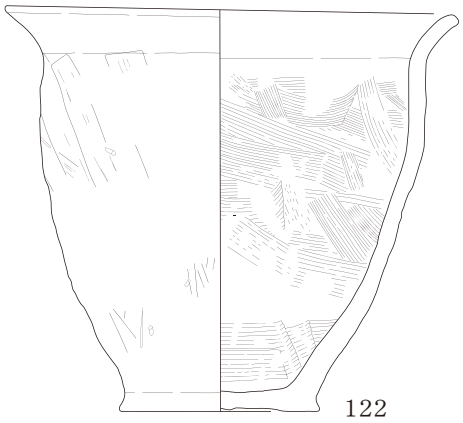


図版 31　SI-11 ②

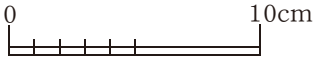
SI－11



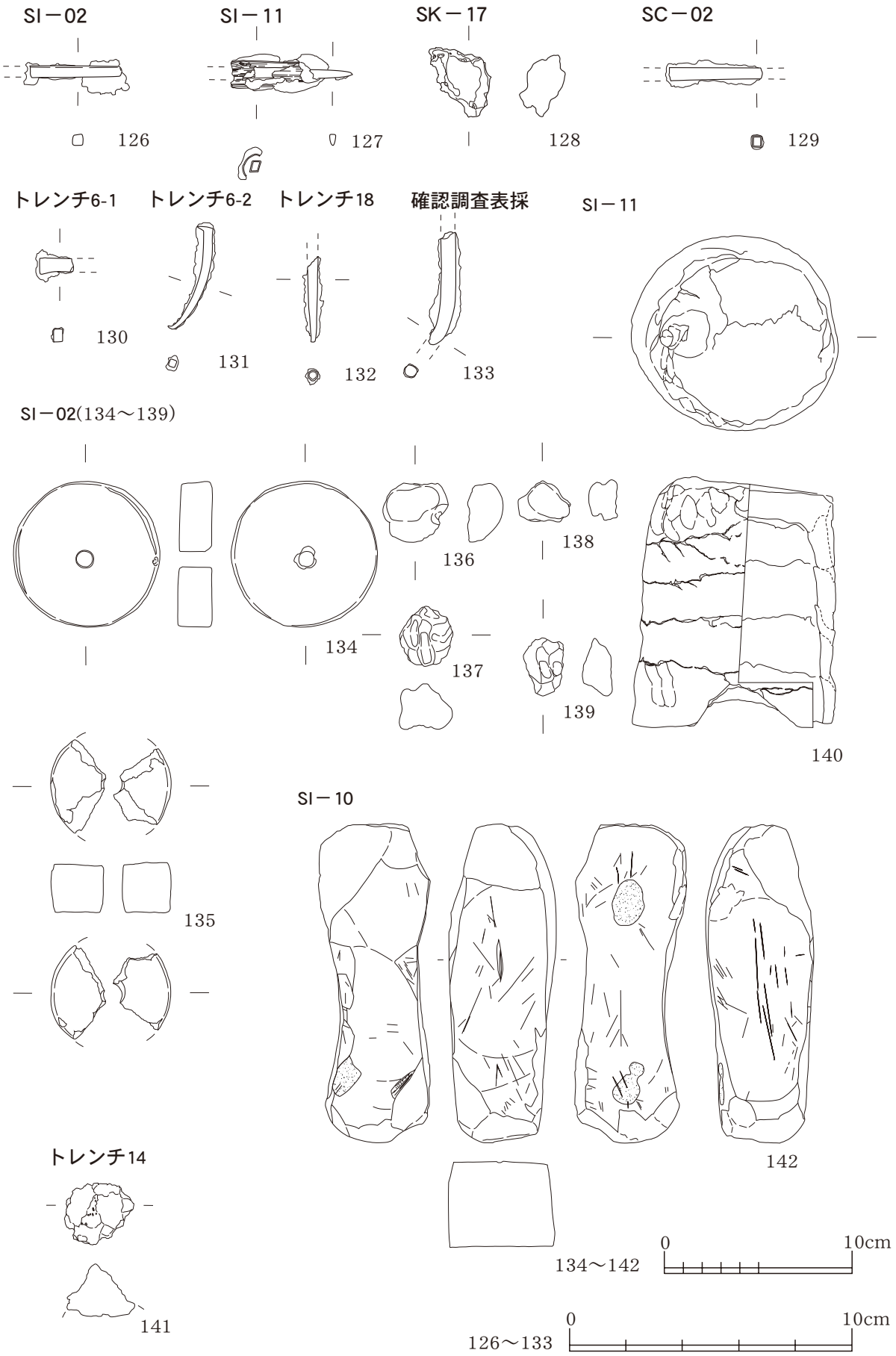




遺構外出土土器



図版 32　SI-11 ③ , 遺構外出土土器



図版 33　土製品，石製品，鉄製品

SI－01セクション（E→）

SI－01完掘（NW→）

SI－01カマドセクション（N→）

SI－01カマド完掘（NW→）

SI－02セクション（W→）

SI－02完掘（NW→）

SI－02掘り方完掘（NW→）

SI－02カマド1セクション（SW→）

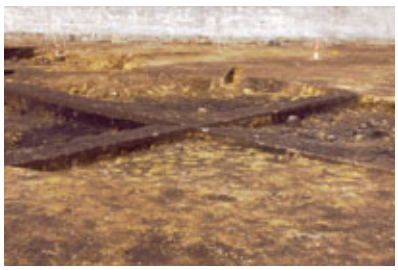
SI－02カマド1セクション2（NW→）

SI－02カマド1煙道（NW→）

SI－02カマド1完掘（NW→）

SI－02カマド2セクション（SW→）

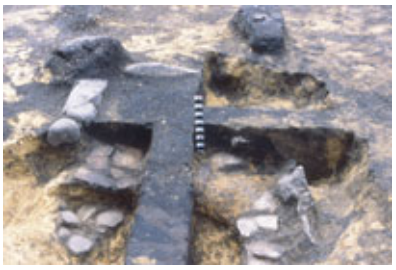
SI－02カマド2完掘（NW→）



SI－03セクション（SW→）

SI－03完掘（NW→）

SI－03炉セクション1（N→）



SI－03炉セクション2（E→）

SI－03炉土器出土状況（N→）

写真図版1

SI－03炉完掘（N→）

SI－04セクション（S→）

SI－04完掘（SE→）

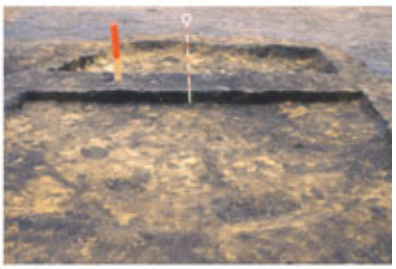
SI－04カマドセクション（SE→）

SI－04カマドセクション2（S→）

SI－04カマド完掘（SE→）

SI－05セクション（N→）

SI－05完掘（N→）


SI－06セクション（W→）

SI－06完掘（S→）

SI－07セクション（SW→）

SI－07完掘（N→）

SI－10セクション（E→）

SI－10セクション2（N→）

SI－10完掘（S→）

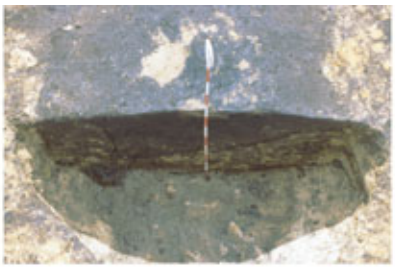
SI－10カマドセクション（E→）

SI－10カマド完掘（S→）

SI－11セクション（S→）

写真図版2

SI－11完掘（N→）



SI－11内SK－1セクション（W→）

SI－11カマドセクション（E→）

SI－11カマド検出状況（N→）

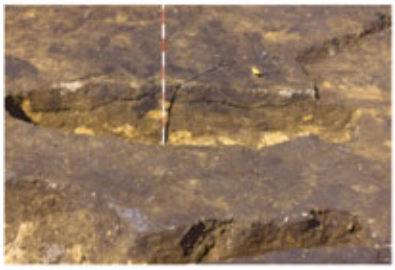
SI－11カマド一面目（N→）

SI－11カマド二面目（N→）

SI－11二面目掘り方（N→）

SK－01セクション（W→）

SK－01完掘（W→）



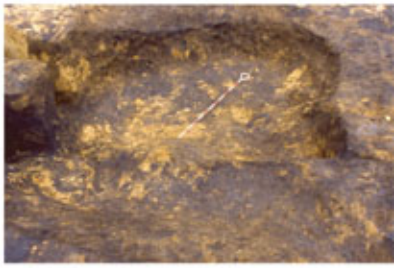
SK－02セクション（S→）

SK－02完掘（NW→）

SK－03セクション（N→）

SK－03完掘（NW→）

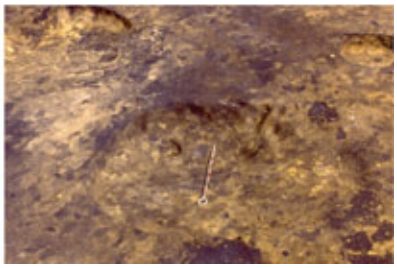
SK－04セクション（S→）



SK－04完掘（N→）

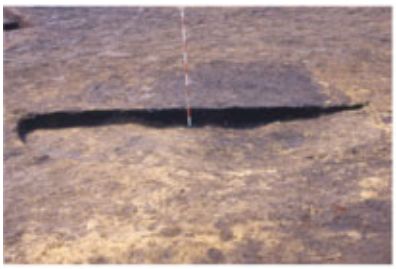
SK－05セクション（N→）

SK－07セクション（S→）

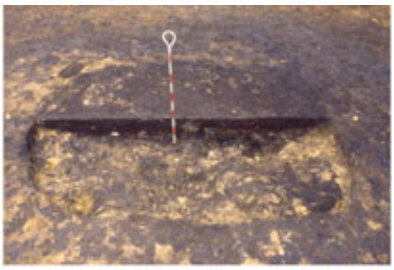


SK－07完掘（S→）

写真図版3

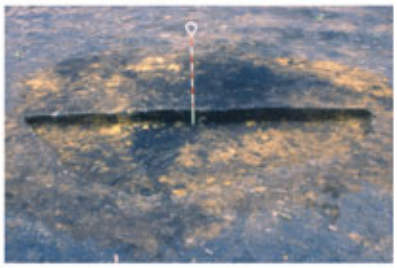

SK－08セクション（S→）

SK－08完掘（W→）


SK－09セクション（S→）

SK－09完掘（N→）

SK－10完掘（S→）


SK－11セクション（S→）

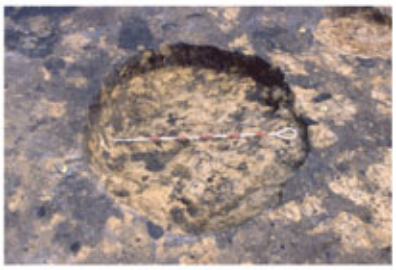
SK－11完掘（S→）

SK－12完掘（NW→）

SK－13セクション（S→）

SK－13完掘（S→）

SK－14セクション（W→）

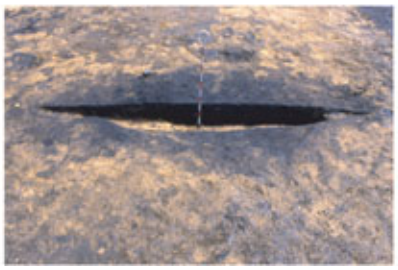

SK－14完掘（W→）

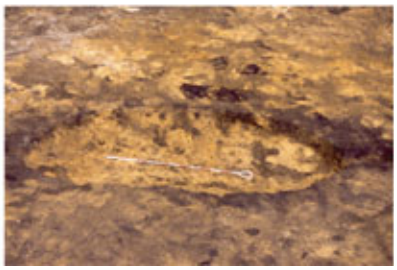
SK－15セクション（N→）

SK－15完掘（N→）

SK－16セクション（W→）

SK－16完掘（W→）

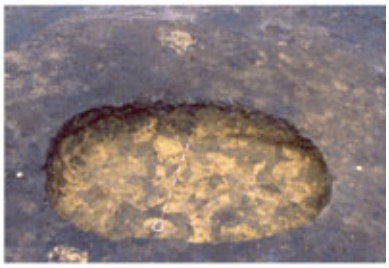

SK－17セクション（W→）


SK－17完掘（W→）

写真図版4

SK－18セクション（S→）

SK－19セクション（S→）


SK－19完掘（S→）

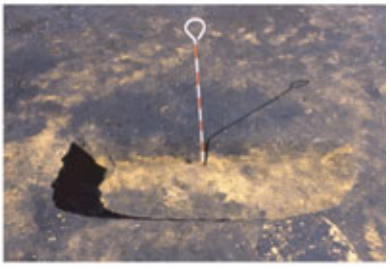
SK－20セクション（S→）

SK－20完掘（S→）

SK－21セクション（S→）

SK－21完掘（S→）

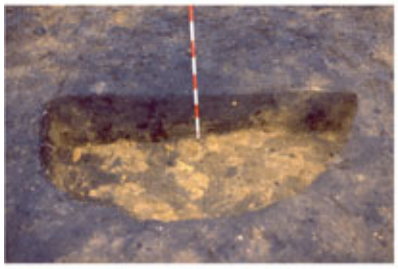
SK－22セクション（E→）


SK－23セクション（S→）

SK－23完掘（S→）

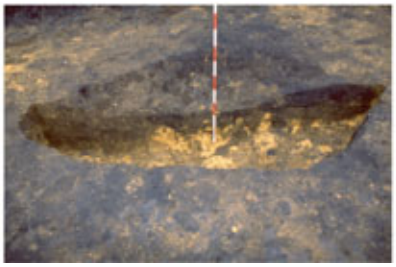
SK－25セクション（E→）

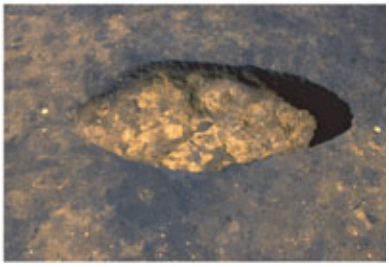
SK－25完掘（E→）


SK－26セクション（E→）

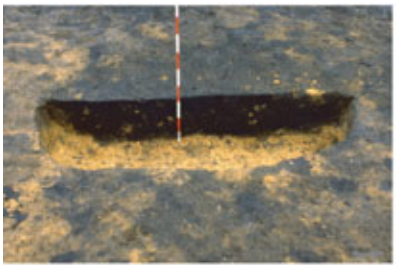
SK－26完掘（E→）

SK－27完掘（E→）


SK－28セクション（E→）


SK－28完掘（W→）

写真図版5


SK－29セクション（S→）

SK－29完掘（S→）

SK－30完掘（S→）

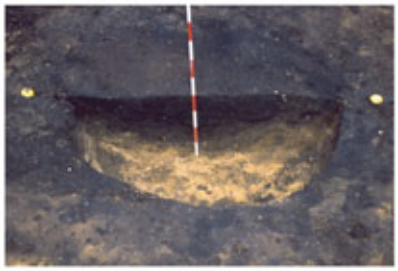
SK－31セクション（N→）

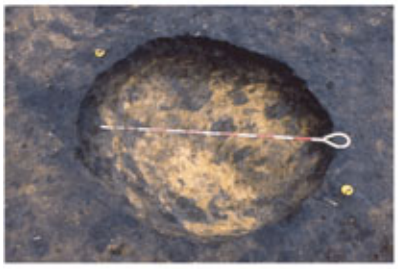
SK－31完掘（W→）

SK－32セクション（W→）

SK－33セクション（SW→）

SK－34完掘（E→）


SK－35セクション（NW→）

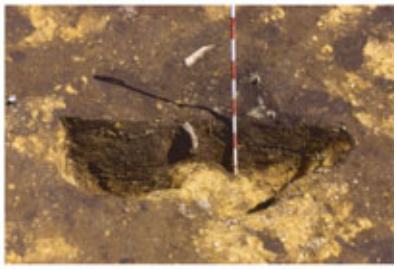

SK－35完掘（W→）

SK－36セクション（SW→）

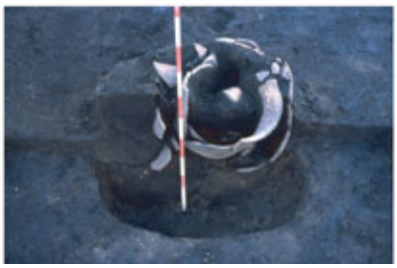
SK－36完掘（S→）

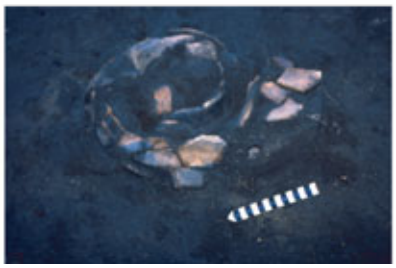
SK－37セクション（N→）

SK－37完掘（S→）


SC－01セクション（W→）

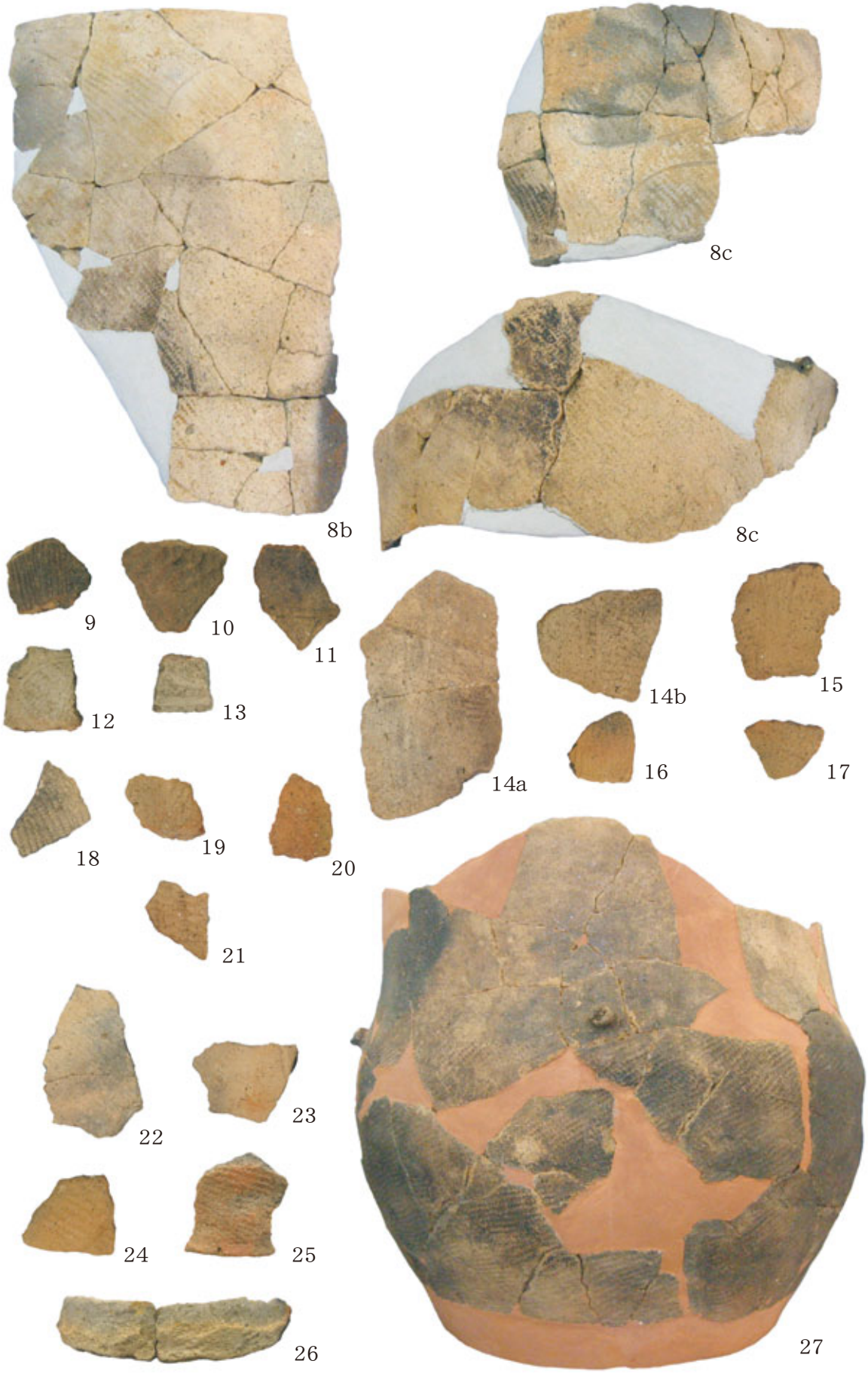
SC－01検出状況（W→）


SC－02セクション（S→）


SC－02遺物出土状況（S→）

写真図版6

写真図版 7



写真図版 8

28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45a
45b
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
65
66
67
69
70
71
72

写真図版 9

73

74

75

76

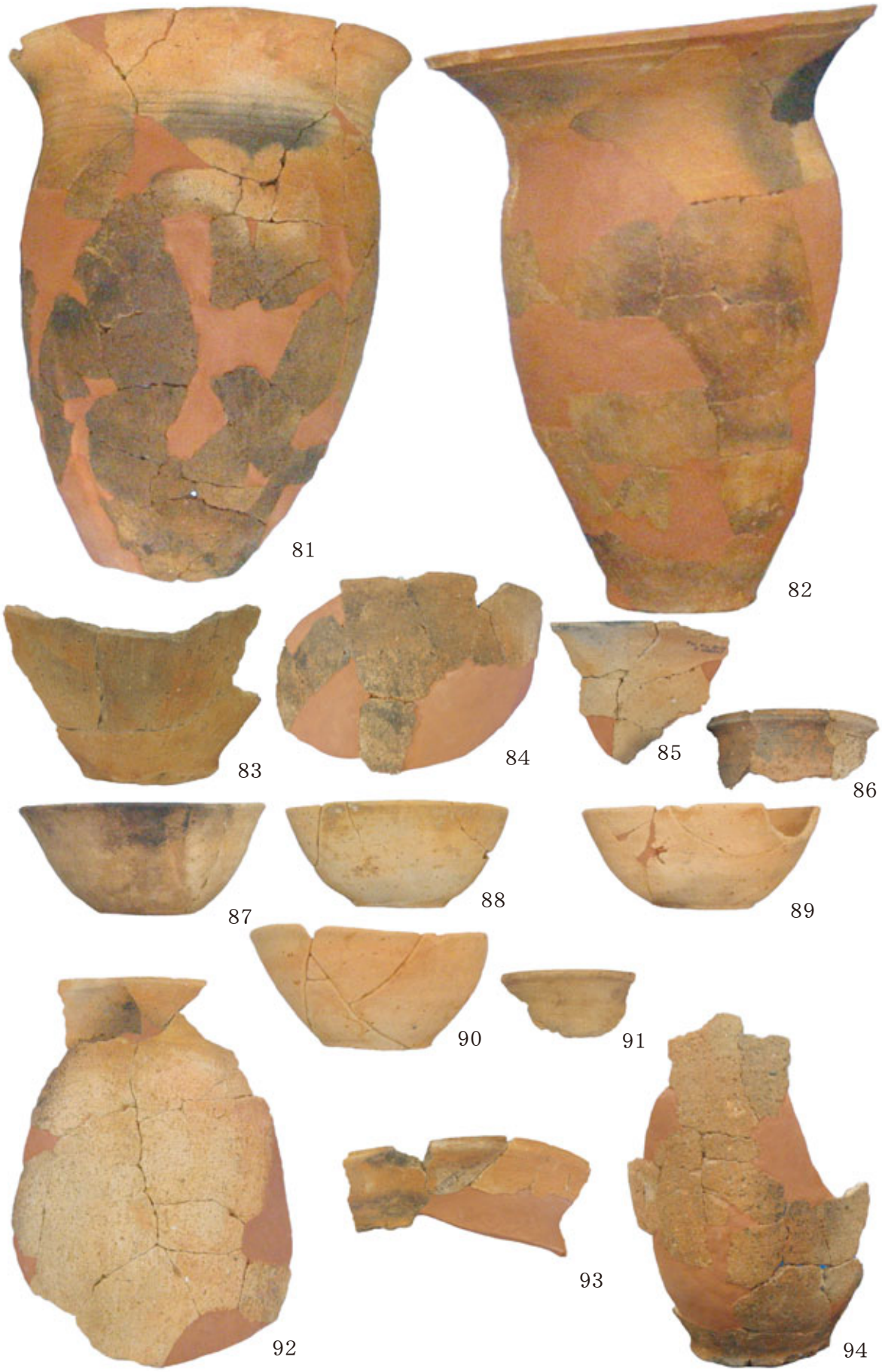
77

78

79

80

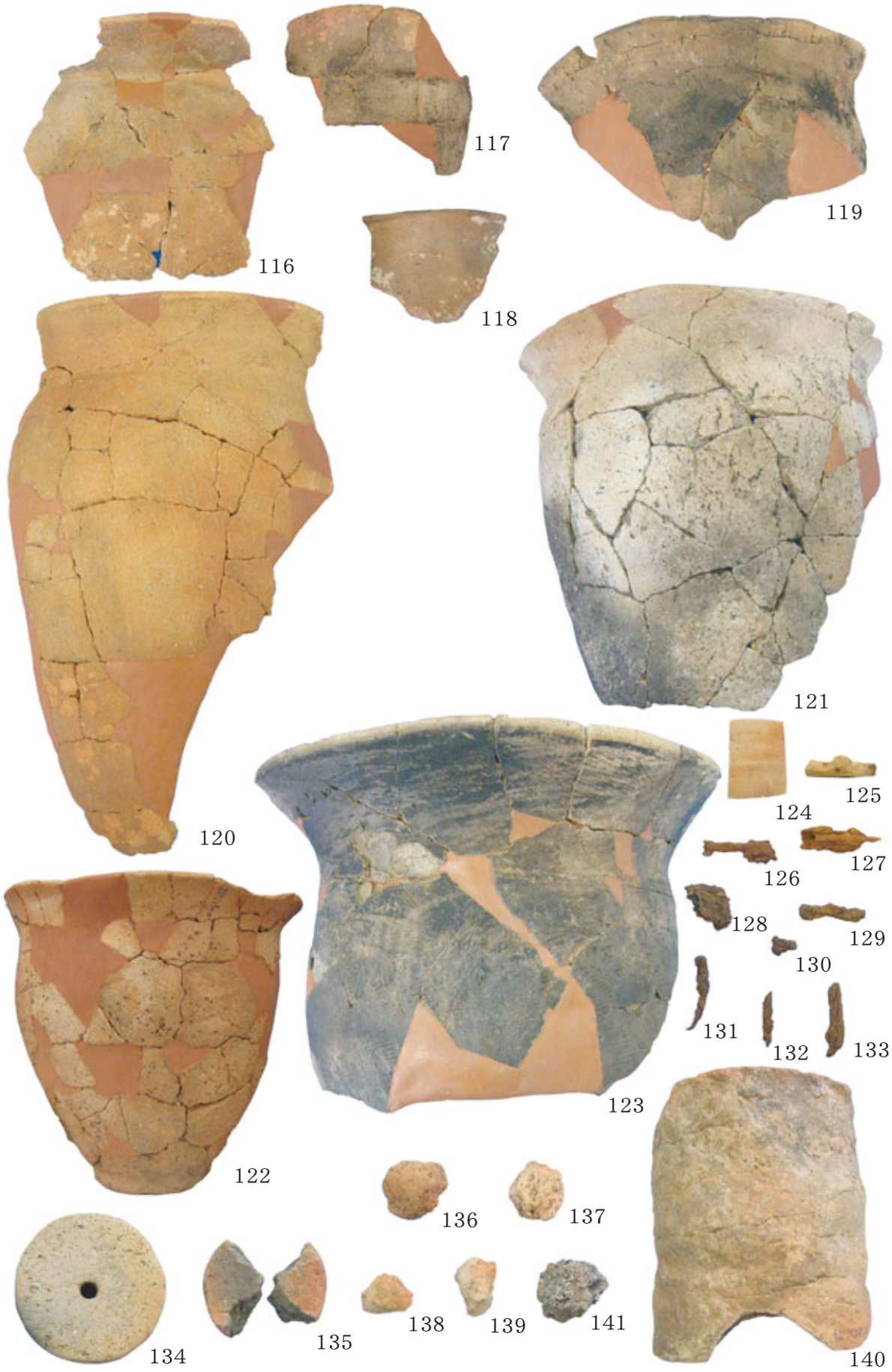
写真図版 10



写真図版 11

96
97
98
99
100
101
103
104
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115

写真図版 12


116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
139
140
141

写真図版 13

第Ⅵ章　統　括

第１節 遺構

本調査の結果、竪穴建物跡９軒、土坑３７基、ピット２６基、埋設土器遺構２基、焼土状遺構２基、溝跡１条、その他の遺構４基を検出した。明確に帰属時期の判別のつかない資料が多い状況であったが、帰属時期について判別のついたものを中心に時代毎の遺構の統括を行う。

１.縄文時代

時期判別が可能であった遺構は竪穴建物跡１軒、埋設土器遺構２基、土坑２基、その他の遺構２基である。

内訳は沢部分の左岸であるＡ区の標高６．５～７ｍ付近から大木１０式併行期の竪穴建物跡１軒、炉内に敷設された土器と同一個体の埋設土器遺構が１基、楕円形の土坑１基、その他の遺構とした不整形の落ち込み２基で、右岸のＢ区の標高９．２ｍ付近から埋設土器遺構１基、溝状土坑１基である。その他、遺物の出土が認められず時期不明と扱った資料の中でＳＩ－０５については掘り込みの形状や床面の作り出し（白色粘土を一部貼付けている）等がＳＩ－０３と類似した傾向が認められ、該期の所産である可能性がある。

出土遺物の構成は、縄文時代前期末円筒下層ｄ$_1$式、中期円筒上層ｃ・ｄ式・榎林式・最花式・大木１０式併行、後期十腰内Ｉ式の資料が出土している。出土位置について一定のまとまりを持ち得ている(第８図参照)。

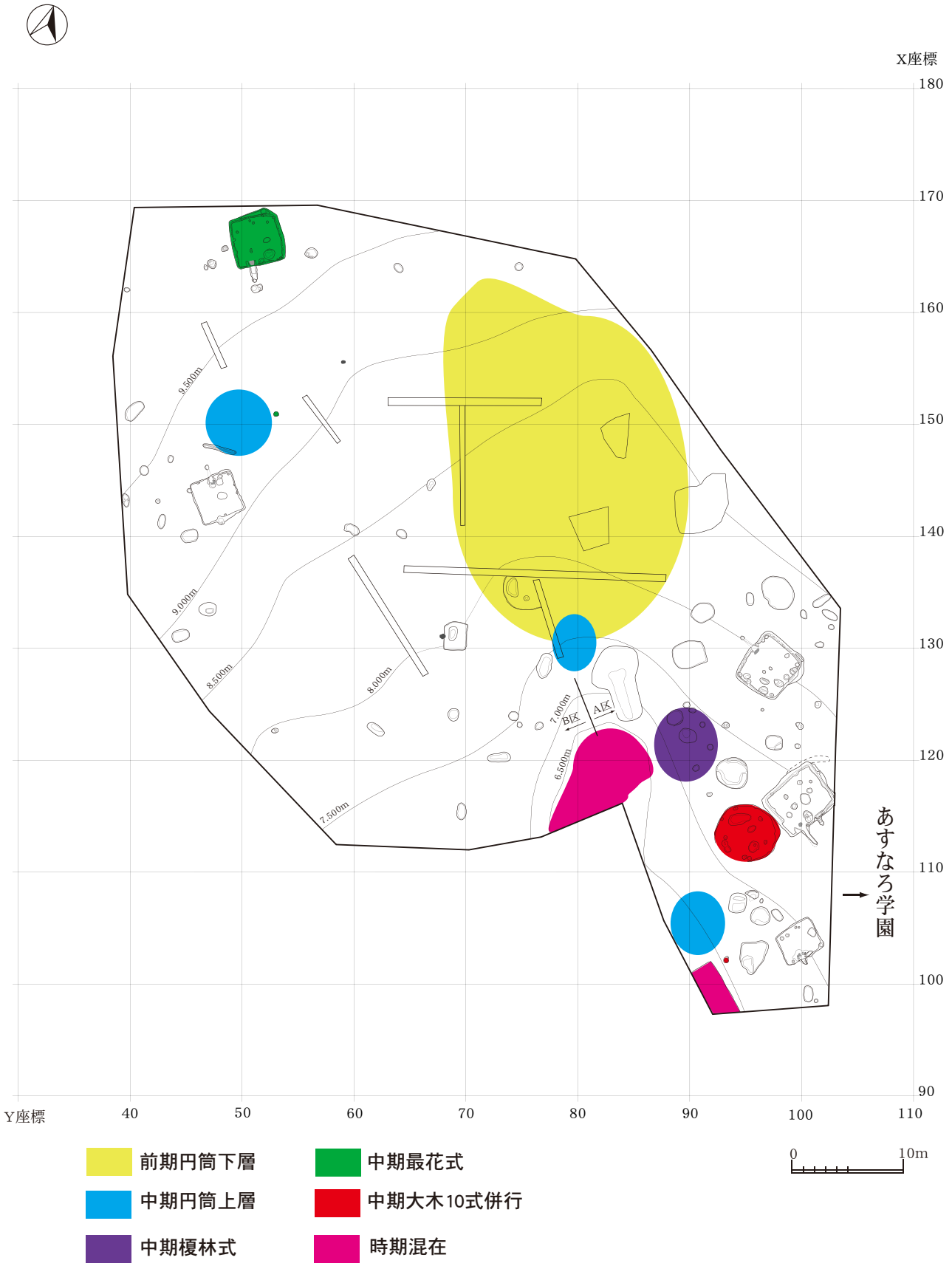
遺構の配置状況等をみてみるとＡ区についてはコンターラインに平行した形で遺構配置が認められ、隣接するあすなろ学園側の方に向かって遺構が延びていく状況を呈している。出土遺物の状況を照らし合わせてみると大木１０式併行期を主体に榎林式の破片資料がごく少量伴うのみで、沢部分やＳＸ－０１・０２など落ち込みでは複数の時期にまたがる破片が一部廃棄されている状況にあるが流入した資料が多く明確な遺物廃棄ブロックを形成するに至っていない。また、本調査区内からフラスコ状土坑は全く検出しておらず、集落における縁辺部的要素が強い状況にある。Ｂ区から検出した遺構は極めて散発的な状況で具体的な検討は難しい状況であるが、最花式が主体であることから時期毎に立地構成が異なっていた可能性が考慮される。

２.弥生時代以降

出土遺物が該期に属する資料として土坑３基を検出したが明確に該期に帰属した遺構であるとは断言できない。しかしながら、調査区外を含めた本遺跡内では二枚橋式期に土地利用が行われていたものと判断でき、Ｂ区内からは出土が認められなかったことから大木１０式併行期と同様にあすなろ学園側の方に生活域が存在した可能性が考慮される。

３.古代

時期判別が可能であった遺構は竪穴建物跡５軒、土坑２基、ピット２基である。縄文時代の遺構と同様Ａ区側がやや密な配置を呈しており、Ｂ区に関しては時期の異なる１軒ずつの構成である。第Ⅲ章第４節



第８図　縄文土器出土分布図

中でも触れたが古代において沢地はほぼ平坦な状況で、緩やかな傾斜地形になっている。遺構観察表でも明白のとおり、本調査区で検出した竪穴建物跡は平面形が長方形もしくは隅丸方形を呈し、長・短軸の比率が長軸１００に対し８４～９６という比率で､時期の古いものほど長軸と短軸に比率に差が生じている。また、柱穴配置については明確なものが少ない状況にあるが、唯一配置の明白であったＳＩ－０２を見てわかるようにカマド設置壁寄り側は壁面に近接した形での配置がなされており、さらに配置の変更時点では北東壁側の部分は壁溝上にピットが配置されている。この配置状況は斜面下方に位置するＳＩ－０１においても柱穴が３本のみであったが、同一の配置状況を持ち得ており、加えてカマドの主軸がほぼ同一（ＳＩ－０２についてはカマド２の主軸がＳＩ－０１のカマドの主軸と同一）であることから類似性が認められる。壁溝の構築は、床面積が１５㎡以上（宇部氏分類の中型※註）の３軒について認められ、ほぼ全周するタイプが１軒（ＳＩ－１１）、壁面の一角（南西側付近）が断続しているタイプが２軒（ＳＩ－０２・０４）であった。ＳＩ－０２と０４については壁溝の欠落部分が同一であり、ＳＩ－０４のカマド設置箇所についても最初壁溝が掘り込まれた後にカマドが構築されており、ＳＩ－０２と０４との間には掘削時点での類似性が認められる。溝の掘削痕については腰板・壁柱等の設置のため浅い段状の掘り込みが連続されるタイプが２軒（ＳＩ－０４・１１）、明瞭な段を持たないタイプが１軒（ＳＩ－０２）であった。焼失していた建物跡が１軒（ＳＩ－０２）あったが、主柱や腰板に相当する部材の炭化物は検出しておらず、偶発的な焼失ではなく、廃絶時の意図的な焼失であると判断される。

カマドは地下式・半地下式が認められ、同一建物内の場合地下式から半地下式に変遷しているが、建物間の関係では、半地下式のみのものがかならずしも新しいという訳ではなく建物の規模などが反映されていた選択性の生じた段階の所産であったと判断される。主軸については南向き（南東方向)、北向き（北西方向）とほぼ対角線上の軸線となっており、季節風の風向（北西・南東）や集落における規範の関係で本市から検出している野木遺跡等の他遺跡での竪穴建物跡との対比においても矛盾しない。南向き北向きを問わず基本的にカマド設置壁面に対し中央より右側に設置されるケースがほとんどで、中央より左手側に設置されたのはＳＩ－０２のカマド２のみで改築に関わる可能性が高い資料である。

各建物間の変遷過程については出土遺物の検討を経た上で後述するが遺構の要素（柱穴配置・カマド主軸方位等）は概ね本市内で検出されている古代の竪穴建物跡の系列に即した状況である。

また、本調査区内では精錬鍛冶滓が廃棄された土坑が１基検出しており、集落内で精錬鍛冶については行われていると判断できるが、具体的炉跡の検出は認められず、生産状況の検討はできない。

※註　宇部則保　２０００「馬淵川下流域における古代集落の様相」『考古学の方法』pp.25-30
氏は竪穴建物跡の規模を超大（６０㎡以上)、特大（４０～６０㎡)、大（２５～４０㎡)、中（１５～２５㎡)、小（１５㎡以下）の５区分に分けて記述している。

（木　村）

第２節　遺物

１.縄文時代

縄文時代の土器は、前期の円筒下層ｄ$_1$式から後期の十腰内Ⅰ式まで認められる。このうち中期に属するものが最も多く、円筒上層式、榎林式、最花式、大木１０式併行の四つの型式が確認された。これらの土器は、遺構内・外から出土しているが、遺構内出土土器については、中期後葉～末葉に帰属するＳＩ－

０３、ＳＣ－０１・０２以外に厳密に該期に帰属するといえる遺構から出土したものは無く、他時期の遺構の堆積土に混入する例も認められる。今回検出された遺構のうち、縄文時代に帰属する遺構はいずれも調査区の端に位置しており、また遺構外出土の土器も少量であり、今回の調査区は縄文時代の主体となる部分から外れていたものと考えられる。

本遺跡の周辺では、南西側の沖館川左岸に位置する三内沢部遺跡（調査時遺跡名三内澤部遺跡）において、縄文時代中期中葉～後葉にかけての集落が検出され、また南側の沖館川右岸に位置する三内丸山（５）遺跡においても、中期末葉を中心とする集落が検出されていることから、本遺跡においても、今回の調査区以外の部分に同様の集落が存在する可能性が考えられる。

以下、各時期の土器の様相を概観する。

(1) 縄文時代前期（図版２３－９、図版２４－２９～３４）

古代の建物跡（ＳＩ－０４）の堆積土に混入する例と、沢部分、遺構外から出土する例が認められる。該期に帰属する遺構からの出土は認められなかった。深鉢形土器の口縁部、胴部の破片資料である。これらは、円筒下層ｄ$_1$式に位置づけられるものと考えられる。

(2) 縄文時代中期

①円筒上層式（図版２４－３５～４０）

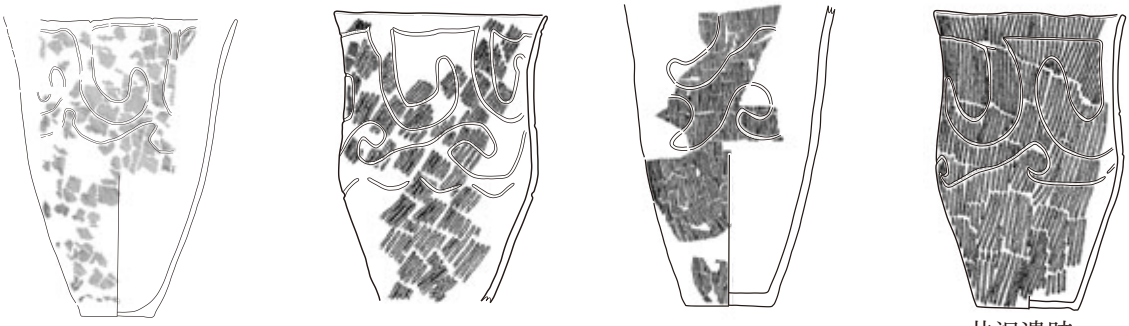
沢部分、北西･南東側の遺構外から出土しており、該期に帰属する遺構からの出土は認められなかった。深鉢形土器の口縁部、胴部の破片資料である。これらは、円筒上層ｃ～ｄ式の範疇に位置づけられるものと考えられる。

②大木系（図版２２－２～４、６～７、図版２３－８、１１、図版２４－１４～１５、２７、２８、４１）

中期後葉～末葉の榎林式、最花式、大木１０式併行が確認された。このうち榎林式土器は、遺構外から１点出土したものである。最花式、大木１０式併行の土器は、ＳＩ－０３とＳＣ－０１・０２埋設土器遺構から出土したものが中心であるが、最花式土器には古代の建物跡（ＳＩ－０４・１１）の堆積土に混入する例も認められる。

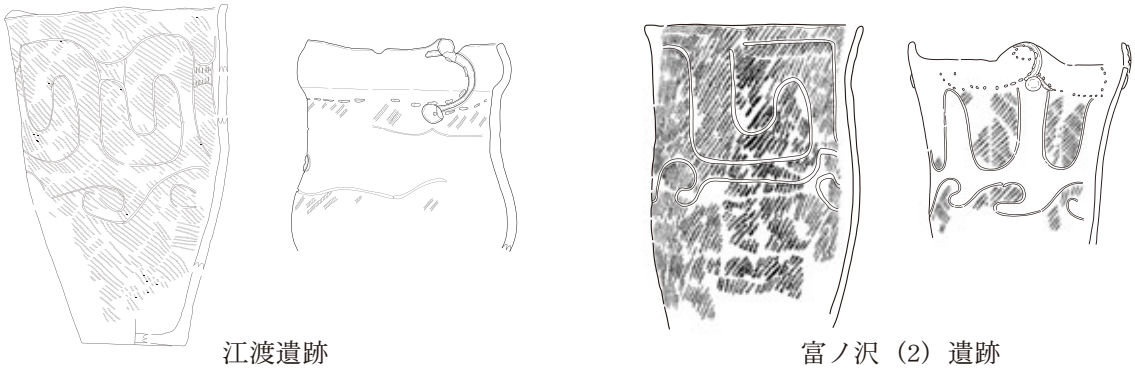
最花式土器は、ＳＣ－０２から出土したものが中心であり、壺形土器（２７）の中に、深鉢形土器（２８）を入子状に設置した状況で出土している。壺形土器は、頚部が無文の広口壺形を呈し、胴部下半を欠いているものである。またこの個体には頚部と胴部の境に瘤状の貼り付けが施されている。深鉢形土器は、口頚部が内傾し、胴上部に最張部を持つ器形を呈し、底部を欠いているものである。これらはともに正立状態で埋設されており、埋設後の要因で欠損したものでなく、打ち欠いた状態で埋設されたものと考えられる。

大木１０式併行に位置づけられる土器は、ＳＩ－０３とＳＣ－０１から出土している。いずれも深鉢形土器であり、この中にはＳＩ－０３と約１０ｍ南側の地点に位置するＳＣ－０１との間で接合するものもある（８ｂ・ｃ）。ＳＩ－０３土器敷設石囲炉出土のものは、口縁部から胴部にかけての文様施文部分で、ＳＣ－０１出土のものは、口縁部も含まれるが、大部分が文様施文以下の縄文地文の部分である。ＳＩ－０３土器敷設石囲炉とＳＣ－０１埋設土器遺構は同じ時期に構築され、土器の部位により使い分けしたも



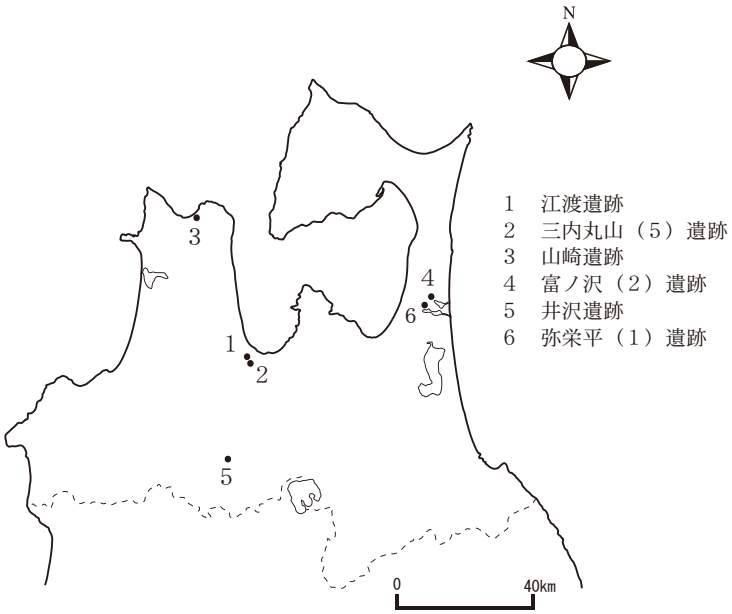
三内丸山（5）遺跡　　山崎遺跡　　井沢遺跡

J 字状文と波濤状文



江渡遺跡　　富ノ沢（2）遺跡

J字状文と粘土紐装飾の共伴事例



主なJ字状文土器出土遺跡

第 9 図　J 字状文土器

のと考えられる。

出土した土器の多くは、３～４、８のように、深鉢形を呈するもので、平口縁や、頂部内面に粘土が貼り付けられるものも認められる。文様モチーフは、単節・無節の斜行縄文を地文とし、Ｊ字状文（反転させたものを含む）と波濤状文を組み合わせたものが基本的であり、これらのなかにはＪ字状文の先が膨らんでいるもの、波濤状文の頂部が直線的に立ち上がるものなどが見られる。Ｊ字状文と波濤状文をモチーフとするものは、三内丸山（５）遺跡や山崎遺跡、富ノ沢（２）遺跡、井沢遺跡などでも認められる。

以上のような器形や文様モチーフを持つ土器群のほかに、これらとは異なる器形や文様を持つ個体も確認されている。２は、胴部に丸みを持つキャリパー状を呈するもので、口縁部に粘土紐貼付と刺突、胴部に波濤状文頂部へのボタン状貼付が見られるものである。

このような特徴を持つ土器は、富ノ沢（２）遺跡第５８号遺構から出土している。本遺跡出土の２と比較してみると、口縁部の装飾（粘土紐の貼付、刺突）と波濤状文のモチーフが共通している。弥栄平（１）遺跡の報告書（青森県教育委員会　１９８６）では、中期末葉の土器を第Ⅰ～Ⅲ群に分類し、これらの土器群は第Ⅰ群→第Ⅲ群への変遷をたどるとしている。第Ⅰ群はＳ字状・８の字状のモチーフを持つ土器群で、第Ⅱ群はＡ・Ｂに細分され、第ⅡＡ群はＪ状文やその変形的なものが多用されるもの、第ⅡＢ群は方形区画文様を主体にし、一部Ｊ状文、波状文の伴う文様で構成されるものとしている。第Ⅲ群には本遺跡出土の２や富ノ沢（２）遺跡第５８号遺構出土土器と同じような波状口縁頂部から垂下させた粘土紐の貼付、粘土紐に沿う刺突が見られるものや、キャリパー状を呈するものを分類している。また、富ノ沢（２）遺跡の報告書（青森県教育委員会　１９９１）では、弥栄平（１）遺跡の住居の重複関係を分析し、第５８号遺構床面土器群を大木１０式併行土器群の古段階として位置づけ、弥栄平（１）遺跡の第Ⅰ群に併行するものとしている。このように、弥栄平（１）遺跡では、Ｊ字状モチーフを持つ土器と粘土紐装飾を持つ土器には時間差があるとしているが、富ノ沢（２）遺跡第５８号遺構の出土例は、床面上で異なる属性を持つ土器（第Ⅰ群・第ⅡＢ群・第Ⅲ群）が共伴しており、三つの土器群が同時に存在していた可能性を示している。また、本遺跡ＳＩ－０３では、Ｊ字状モチーフを持つ土器が竪穴建物跡の土器敷設石囲炉から出土し、粘土紐装飾を持つ、キャリパー形の土器が覆土中から出土しており、ある程度の時間差が認められる。

以上のように、Ｊ字状文と粘土紐装飾があるキャリパー状の土器については、同時に存在していた可能性も考えられるが、新・旧二つの段階の土器が存在していた可能性も否定できない。

本遺跡では、最花式、大木１０式併行期の遺構は調査区の端に位置している。最花式土器が出土したＳＣ－０２は調査区北西側丘陵に、大木１０式併行の土器が出土したＳＩ－０３、ＳＣ－０１は、沢を挟む形で南東側の低地に位置しており、それぞれの時期で土地選定が異なっていたものと考えられる。これらの遺構は、集落の縁辺部である可能性があり、それぞれの時期の主体となる部分は、最花式期では北西側の丘陵上に、また大木１０式併行期では東から南東側の調査区外に存在する可能性が考えられる。

③中期後葉～末葉（図版２２－１、５、図版２３－１０、１２、１３、図版２４－１６～２６）

前述の各型式に分類できなかったものを一括した。今回出土した縄文土器の大部分が中期に属し、その中でも中期後葉～末葉にかけてのものが主要であるので、ここに一括したものについても、その範疇に属する可能性がある。遺構内出土のものではあるが、古代の建物跡（ＳＩ－０１・０４）の堆積土に混入する例や、該期に帰属するとは言い難い遺構から出土したものも含まれる。いずれも胴部、底部片で、単節の斜行縄文を施文しているものが中心であるが、沈線が施されているものも見られる。また底部片には、

網代痕が見られるものもある。

(3) 縄文時代後期

図示していないが、ＳＸ－０１・０２間で接合する無文の深鉢形土器の胴部が出土している。器面には同程度の摩耗が見られ、ともに流れ込みにより混入した可能性が高いものである。本個体は十腰内Ｉ式に位置づけられるものと考えられる。

２. 弥生時代（図版２５－４５～５７）

弥生時代の土器は、遺構内・外からの出土が認められる。遺構内出土土器には、古代の建物跡（ＳＩ－０１）の堆積土に混入する例や、ＳＫ－０３・０４・０５から出土する例が認められるが、この土坑は厳密に該期に帰属するとは断言できないものであり、出土土器に関しては、あくまで上限資料としての取り扱いである。またＳＫ－０３・０４間で接合した５３は、ＳＫ－０４出土部分に比較して、ＳＫ－０３出土部分の断面の磨耗の度合いが強いことから、ＳＫ－０４に包含されていたものがＳＫ－０３に混入したものと考えられる。土器は、鉢形土器と甕形土器が出土しており、いずれも破片資料である。出土した弥生土器は、１０点ほどであり、遺構に伴うものと断言できる出土状況ではないことから、該期の主体は今回の調査区以外に存在する可能性がある。

これらの土器は、二枚橋式に位置づけられるものと考えられ、青森市内においては、類例の少ない遺物のひとつである。

（相　馬）

第３節　古代の遺物と竪穴建物の変遷について

第Ⅴ章でも触れたが本調査では総出土破片数２,８０４点中約７割を超える１,９７４点の古代の土器が出土した。そのうち１,２３２片が接合し、１７４資料が接合個体資料となった。本来であるなら前節の遺物の中で詳述すべきところであるが、出土量が全体の７割を超え、第１節でも触れたとおり検討すべき点が多々あるため、節を分け詳述することとする。

第 11 表は本調査における出土資料について個体識別法および口縁部残存計測法を用いた測定結果である。黒色土器については、ＳＩ－０２およびＳＩ－１１から非ロクロの椀が出土しているが、口縁部が欠損していたため、純粋な組成比を反映していないが、全体的な量比についてはほぼ反映されている状況であると判断される。

この中で、特筆すべき点は「①黒色土器の組成が圧倒的に少ない。②須恵器の器種が坏に限定される。③土師器についても器種のバリエーションが坏・甕・小甕・鉢に集約されている。」という点である。黒色土器については県南の三八地方では供膳具としての非ロクロ坏の段階から伝統的に用いられ、９世紀前半代のロクロ土師器導入以後も内黒を主体に１０世紀中葉段階まで根強く定量残り続けている。津軽地方においても浅瀬石川流域の８世紀代から９世紀、さらには１０世紀に継続する集落跡では三八地方と同様にロクロ導入後も定量黒色土器が存在し続けている。その一方、９世紀第４四半期以降五所川原窯の生産体系を担った集落については、黒色土器の組成比が極端に少なく、非黒色の土師器椀・皿が伴う集落が存在している。

本市においても市内南部では五所川原窯開窯（９世紀第４四半期）以前に集落が開始されている新町野

遺跡・野木遺跡では１０世紀以降組成比が極端に減少（５０％→１４％）する例も認められ、在地での非黒色土師器の生産が行われており、全体的に組成の中で黒色土器が少ない状況にあるが、少ないながらも１０％を超える組成比を占めている[1)]。その一方、五所川原窯開窯以後に集落が開始した雲谷山吹（５）～（７）遺跡では、五所川原産の須恵器と共に非黒色土師器の供給を受けており、黒色土器の組成が０．０８％と極めて少ない状況にある[2)]。

東部地区の宮田館遺跡では、三八地方と同様に黒色土器が定量存在し続けており、１０世紀中葉を越えた時点でも存在している[3)]。本遺跡の所在している西部地区について概観してみると南部地区と同様に黒色土器が主たる組成を占めないが、少ないながらも定量存在する傾向にある。

本遺跡から出土した土器については、器種のバリエーションが少なく、須恵器については長頸瓶や甕が伴わず、回転糸切による切離しが行われている坏のみで、土師器の坏についても底部のヘラケズリによる再調整が行われず、底径幅が狭い椀形の器形が多数を占める。その一方、煮沸具の甕は、浅い段状の頸部を持ち、調整はハケメを基本とし、外面体部についてはヘラミガキが施されるなど、８世紀代からの伝統的手法が多用される土器が主体を占めている。単独の土器に見られる構成要素（器形・調整手法等）としては比較的古手の様相であっても、それが全体を表象する訳ではない。本遺跡における時期的な位置づけについては全体的なセット関係や遺構間の関係、調整手法の要素等を検討した上で、提示することとする。

１．種別毎の傾向

Ａ．黒色土器

供膳具的な坏形を呈する資料はＳＩ－０４出土の破片資料１点（第１０図）のみで、それ以外は椀形の非ロクロ黒色土器２点で、本遺跡内では主たる組成を占めていない。図版追加資料として第１０図に掲載したＳＩ－０４床面出土の坏は口径１４．０ｃｍを測る。全体的に摩耗しており特に外面側の摩滅が著しい。粘りに欠ける胎で、ザラザラした質感を有する。石英や輝石等が微量含まれるのみで目立った混入物がない。口縁部直下にはルーズな横走沈線が一条施されているが、段状を意識している訳ではなく形骸化している状況である。内面は黒色処理され横方向のヘラミガキが施されており、外面も黒色化しているが明瞭なヘラミガキ痕は存在しない。

口縁部が欠損している２資料のうちＳＩ－０２の堆積土から出土した資料（図版２６－７２）は、外面の底部下半まで精緻に磨かれており、ＳＩ－１１出土の資料（図版３０－１０９）は非ロクロでありながらロクロ椀を意識した作り出しで、高台部の作りが回転ナデによるものである。外面の黒色化は口縁部付近が中心で、ヘラミガキ調整についても黒色化している箇所を中心に行っている状況で、本市におけるロクロ黒色土器と同様の調整が行われている。

量的に極端に少ない状況にあり、非黒色土器においてロクロ使用が認められるのに対し、黒色土器については非ロクロのみであり、アンバランスな状況である。竪穴建物跡の廃絶時点で、意図的な焼失に伴う時点で廃棄が行われている状況等もあり、①集落内で次段階へ移るにあたって廃棄せず持ち出したまま、次の段階でも使用が継続されているか、あるいは②黒色土器を明確に断絶するような状況であったのか、③それとも、もともと黒色土器を受容しない集落であった可能性等も考慮されるが、本調査区内の部分から黒色土器の廃棄ブロックは検出しておらず、本調査区内から検出した竪穴建物跡内からは前段階の遺構から持ち出されたと仮定される黒色土器がほとんど出土しない状況であることを踏まえると、黒色土器の絶対量が少ない可能性がある。しかし、集落そのものはあすなろ学園側に延びる傾向が

全体

種別	個体数	%
須恵器	1.9333	7.99
土師器	22.1753	91.73
黒色土器	0.0666	0.28
合計	24.1752	100

須恵器

種別	個体数	%
坏	1.9333	100
甕	0	0
壺	0	0
小計	1.9333	100

土師器

種別	個体数	%
坏	6.9832	31.49
甕	12.5338	56.52
小甕	2.3582	10.63
鉢	0.3	1.35
小計	22.1752	99.99

黒色土器

種別	個体数	%
坏	0.0666	100
椀	-	-
小計	0.0666	100

SI-01

種別	個体数	%
須恵器	0.6416	31.48
坏	0.6416	100
土師器	1.3967	68.52
坏	0	0
甕	0.3667	15.89
小甕	1	43.32
鉢	0.3	13
黒色土器	0	0
	2.3083	100

SI-02

種別	個体数	%
須恵器	1.2917	13.89
坏	1.2917	100
土師器	8.0079	86.11
坏	1.7166	21.44
甕	5.6081	70.03
小甕	0.6832	8.53
黒色土器	0	0
	9.2996	100

SI-04

種別	個体数	%
須恵器	0	0
土師器	3.8334	98.29
坏	3.225	84.13
甕	0.4667	12.17
小甕	0.1417	3.69
黒色土器	0.0666	1.707
坏	0.0666	100
	3.9	99.99

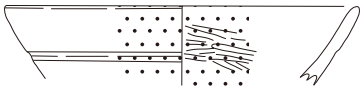
SI-10

種別	個体数	%
須恵器	0	0
土師器	2.6591	100
坏	0.525	19.74
甕	1.6341	61.45
小甕	0.5	18.8
黒色土器	0	0
	2.6591	99.99

SI-11

種別	個体数	%
須恵器	0	0
土師器	5.5166	100
坏	1.35	24.47
甕	4.1333	74.92
小甕	0.0333	0.6
黒色土器	0	0
	5.5166	99.99

第 11 表　土器組成表



ＳＩ－０４　床　Ｐ－１２
黒色土器　坏
口径14.0ｃｍ
調整　外：ナデ・沈線、内：ヘラミガキ
色調　外：５Ｙ２/１、内：Ｎ１.５/０
焼成：良、砂：微、骨：無、赤：微
遺存率：0.8/12

第 10 図　図版追加資料

あるため、本調査区内での様相が集落全体で裏付けられるかは検証不可能である。

Ｂ．須恵器

回転糸切の坏のみの出土であった。Ａ区のＳＩ－０１と０２の２軒のみの出土でＳＩ－０２の資料については破片化した状態での廃棄資料も含まれる。出土位置に偏りがある傾向にある。この点は器種のバリエーションの少なさや黒色土器の量比の少なさとの関連性が考慮される。

いずれも胎土の特徴や調整手法から明らかに非五所川原産と認定できる資料で、黒色土器や土師器等の状況を踏まえても、本調査区内から出土した遺物は五所川原窯開窯以前の所産であると判断される。

指数が算出できた資料については２点のみで底径指数が４６．７と４９．６と底径幅が広く、器高指数は３６．４と４２．１と本市を含めた津軽地方で出土する資料としてはやや浅身のタイプと普遍的な範疇に入るものであり、土師器坏と同様の状況である。体部に明瞭な稜段を有し、内面についても段を意識した作りで、口縁部がやや軽くつまみ返すように外反している状況にある。９世紀第３四半期～第４四半期に操業した海老沢窯[4]との関連が考慮されるが、有台皿が既に出現している段階であるため、皿の出現以前である９世紀第３四半期併行が相当であると考えられる。

Ｃ．土師器

既にロクロ土師器の導入以降の段階の資料が含まれるが、煮沸具については外面体部にヘラミガキによる調整が施されるものも含まれる。本調査出土の古代の土器の約９割を占める関係上器種毎に細別して記述する。

ａ．坏

全ての竪穴建物跡から出土したが、破片資料や欠損品のみの建物跡もあり、全体的な比較はできない。供膳具的な形態を呈しておらず椀形で、器高指数４０を越える深身のものが多い、Ｂ区のＳＩ－１０出土資料およびＳＩ－１１出土資料の一部は直立気味に立ち上がる形状である。底部から体部下半にかけてやや膨らみを持ち立ち上がる形状で、口縁部はつまみ返すように外反させているものが多い、底径指数は浅身の図版２８－８９を除いた資料は４０を越える。底部側縁はヘラケズリによる再調整は行われていない。

非ロクロの資料についてはＳＩ－１０からやや大型の口縁部資料が１点のみ出土している。内外面ともヘラミガキによる調整であり、外面体部下半は縦方向のヘラケズリを基調としている。また、ロクロ土師器においても底部円柱で、体部が巻上げ成形[5]の資料が１点（図版３０－１０８）出土しており、ロクロ技術の過渡期の資料であるといえる。

ｂ．甕

長胴甕が主体で、頸部に浅い段を有するものや沈線が施されるものなど古手の要素を持ち得る資料も含まれる。その一方、９世紀後半の集落で一般的に出土する外面体部調整がヘラケズリのものも含まれている。

ロクロ使用は小甕のみで、この口縁部形態は秋田城下では９世紀第２四半期を主体に第３四半期まで存在する形態である[6]。本遺跡出土の資料についても須恵器坏の年代観と矛盾しておらず、概ね該期に帰属しているものと考えられる。また、その時点ではロクロ甕の大型品は流通していない状況にあった可能性が考慮される。

非ロクロの甕についてはＡ区のＳＩ－０２とＢ区のＳＩ－１０出土資料は頸部幅が長い傾向にある。口唇部の形状は丸縁・平縁・先細りのもの等多種多様ではある。体部の調整についてはハケメ調整が主体になるもの、ミガキ調整が主体になるもの（前段のハケメ調整が残存して観察されるケースが多い）、ヘラケズリ調整が主体になるものがあり、各調整が混在するものも存在する。ヘラミガキとヘラケズリが混在した調整は、三八地方では根城跡で８世紀後葉に位置づけられるＳＩ２２１[7]から出土している長胴甕に既に出現しているが、本遺跡出土資料についてはヘラミガキがかなり粗雑な状態で、ヘラミガキのみの土器同様体部上半を斜め方向に磨く傾向が強い。

平行沈線については、頸部に二条のみのもの（図版２７－８０、２８－８２、３２－１２３）、と五条以上のもの（図版２７－７８、２８－８１）が出土したが、一条のみのものは小甕に分類した１点（図版３０－１０３）のみである。また、平行沈線文にかなり崩れた鋸歯文が施される事例もあり、９世紀以前の伝統的な手法が用いられているが、ＳＩ－０４から出土した黒色土器坏破片に見られるように、伝統的な手法である境界性が形骸化した状況にあると考えられ、平行沈線文についても宇部氏が９世紀後半に位置づけている根城跡ＳＩ１０８[8]や田面木平遺跡第８次調査Ａ地点ＳＩ２２[9]出土資料ではロクロ甕と共伴していることや、鋸歯状の崩れたタイプは本市西部地区に所在する近野遺跡６０号住居跡[10]から出土していることから９世紀代にも残存していてもなんら矛盾はない。

ヘラケズリが主体に用いられるのはＳＩ－０４およびＳＩ－１１出土のものが量的に多く、小甕についてはヘラミガキ手法より多用される傾向にある。頸部の幅が短くなり、「く」字状（図版２９－９２、３２－１２０など）や本市において９世紀末～１０世紀代に盛行する器形につながるタイプ（図版３２－１２１）など新段階の要素が強い。ただし、内面の調整はハケメ（木口が柾目）がまだ残存しており、一部ヘラ（板）ナデ（板目）のものが存在し始める。降下火山灰にＴｏ－ａが欠落していたＳＩ－１１に出土がまとまる傾向がある。ＳＩ－１１は同位置にカマドを３回作り直した継続幅の長い竪穴建物跡であるため、Ｔｏ－ａ火山灰降灰時にはまだ建物が機能していた可能性も否定できない。Ｔｏ－ａ火山灰降灰時には五所川原窯は既に開窯しており、廃棄資料の中に五所川原窯の製品が流入してもおかしくはない状況であるが、継続的集団の調査区外への展開の際の持ち出しという要素も踏まえ、使用不可になった９世紀後葉主体の資料の廃棄群として現時点では解釈したい。

２．竪穴建物の変遷

竪穴建物跡ごとの遺物の構成表は第１１図のとおりである。前述の要素等を踏まえ、土師器甕については調整手法の代表的なものを主眼として細別している。遺構間接合資料については各区とも近接する遺構間で接合関係を持っている。提示に際し、図版と対応させ表示している。

表を見て明白であるが、前段で記述したとおり、Ａ：須恵器はＳＩ－０１・０２に集約される。Ｂ：土師器ロクロ坏は各建物跡から出土している。Ｃ：土師器甕で古相の調整手法（ヘラミガキ・ハケメ）はＳＩ－０２･１０にまとまりを持ち、新相の調整手法（ヘラケズリ）は、ＳＩ－０４･１１にまとまりを持つ。

遺構の状況として、ａ：ＳＩ－０１と０２は類似した軸線・柱穴配置を呈する。ＳＩ－０２はカマドが位置変えを含め３段階存在する。ｂ：ＳＩ－０４はカマドが北向きの地下式ではあるが、構築時点の壁溝の構築方法がＳＩ－０２と類似しており、カマドは壁溝の掘削後位置決めがなされている。ｃ：ＳＩ－１０とＳＩ－１１は廃絶後の堆積土中の火山灰の状況が異なり、ＳＩ－１０は明白にＴｏ－ａ火山灰降灰前と断言できるが、近接しているＳＩ－１１はＢ－Ｔｍ火山灰のみで、堆積位置についてもＳＩ－１０の

方が、埋没が進行した状況で堆積している。ｄ：ＳＩ－１１はカマドが同位置に３回作り替えが行われており、継続幅がある。

以上の条件を考慮した上で、本調査で検出した遺構の変遷について考察する。

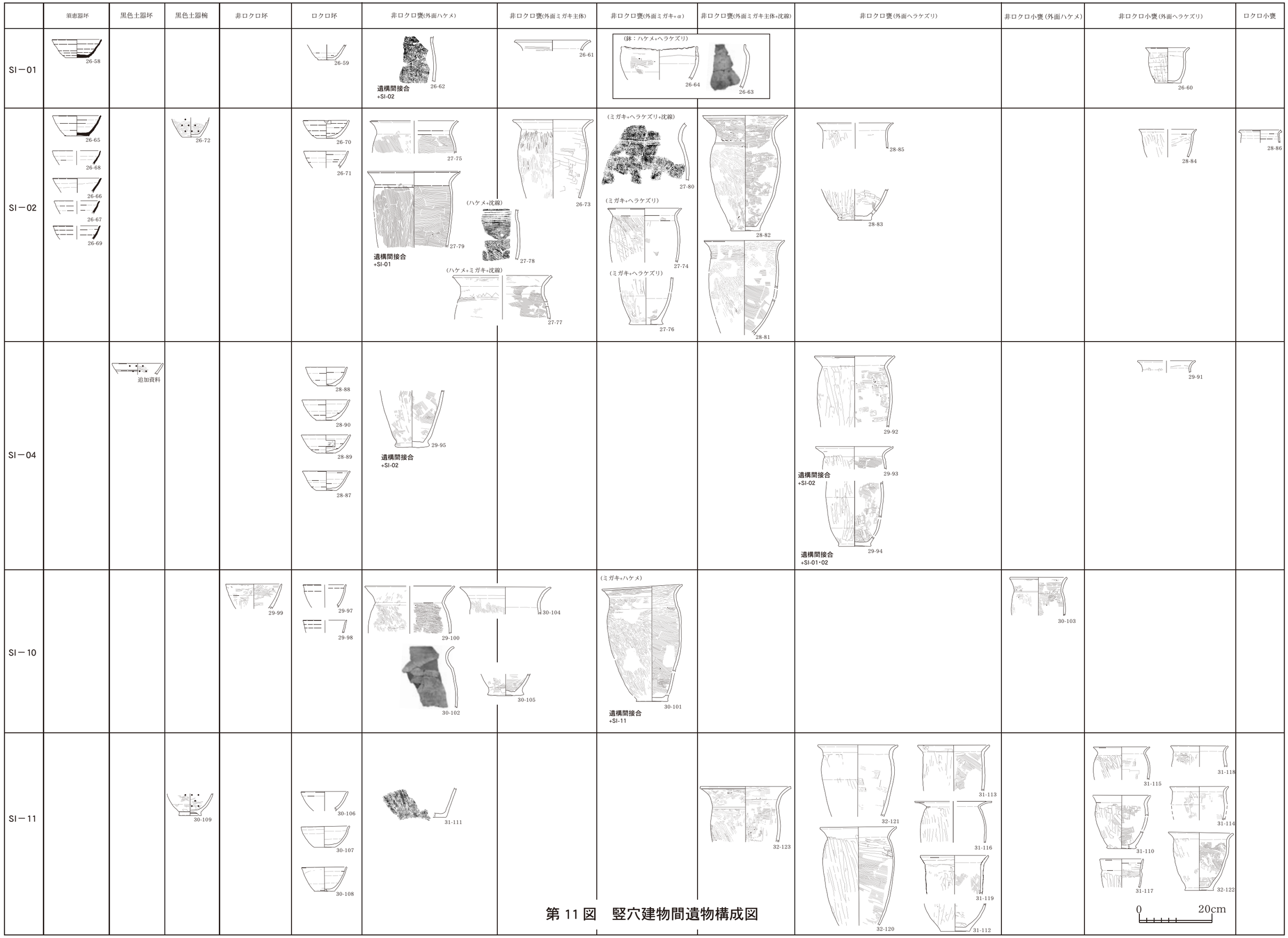
Ａ区（ＳＩ－０１・０２・０４）

ＳＩ－０１とＳＩ－０２の構築開始の順番について詳細は構築時点の床下構造から帰属時期の明白な遺物が出土していないため、詳細は不明である。カマドの構造はＳＩ－０１が南向きの半地下式１基、ＳＩ－０２が南向きの地下式１基、半地下式２基、ＳＩ－０４が北向きの地下式１基という状況である。ＳＩ－０２についてはカマドの改築等も踏まえて継続幅があったことが認定できる。

前述のａの要素、すなわち建物の構造としてＳＩ－０１とＳＩ－０２についてはカマドの主軸の共通性と平面形の共通性および柱穴配置の類似性があり、ＳＩ－０２とＳＩ－０４との間には前述のｂの特徴がある。ＳＩ－０１と０２については須恵器坏の出土が共通しており、また煮沸具においてもＳＩ－０１カマド出土の図版２６－６１とＳＩ－０２カマド等出土の図版２６－７３が類似した口縁部の外反を呈していることから、２棟単位というセット関係を認定できる。また、ＳＩ－０２Ｐｉｔ８・９等出土資料とＳＩ－０４床直・堆積土資料とＳＩ－０１堆積土出土資料が遺構間接合した図版２９－９４の土師器甕の体部～底部資料の関係と、ＳＩ－０４のカマド支脚相当位置から出土した図版２９－９５の土師器甕の体部～底部資料がＳＩ－０２の堆積土中出土資料との遺構間接合関係があったことからＳＩ－０１の廃絶時期については、ＳＩ－０２の床面付近に介在した遺物が破片化して廃棄・流動が起こった時点では既に埋没過程が進行中の状況であり、ＳＩ－０４のカマド構築時点ではＳＩ－０２の床面付近に遺物が埋まる状況が可能であったと判断できる。よって、ＳＩ－０１はＳＩ－０２と併存し、ＳＩ－０１はＳＩ－０２よりも先に廃絶し、ＳＩ－０２はＳＩ－０４と廃絶の前後を含め併存した可能性がある。ＳＩ－０２はヘラミガキやハケメによる古相を示す遺物が多量出土しているが、床面直上から出土した甕底部（図版２８－８３）はヘラケズリ調整によるものであり、意図的な焼失直後に廃棄された須恵器坏（図版２６－６５～６９）や土師器坏（図版２６－７０）、さらに堆積土中から出土したロクロ小甕（図版２８－８６）から少なくとも９世紀第３四半期には廃絶が完了している。ＳＩ－０４は古相を示す黒色土器坏が破片で出土しているが、本遺構の帰属時期を決定するものではなく、むしろＳＩ－０２出土の甕と併せ、遺跡全体の上限時期の判断材料となる。ＳＩ－０２のカマドの作り替えの要素も踏まえると９世紀前半代には本遺跡で集落が形成されたと判断できる。ＳＩ－０４はピットの堆積土中にＴｏ－ａ火山灰が介在していることや、床直出土の図版２９－９２とＳＩ－１１堆積土出土の図版３２－１２０との間に器形と調整手法の共通性が認められることから９世紀第３～４四半期に営まれた建物跡であると考えられる。ＳＩ－０１・０２廃絶時点では須恵器坏を断絶しているが、ＳＩ－０４では土師器坏を断絶した状況にあり、欠落した遺物については、次段階への持ち出しの可能性[11]は考えられるが、現時点では検証不可能である。

Ｂ区（ＳＩ－１０・１１）

構築の順番については不明である。カマドの構造はＳＩ－１０が北向きの地下式１基、ＳＩ－１１は南向きの半地下式が３回改築されており、ＳＩ－１１の方が継続幅があり、前述のｃ・ｄの要素から遺構から廃絶の順番としてＳＩ－１０の方がＳＩ－１１より早く廃絶されているという関係が導きだせ

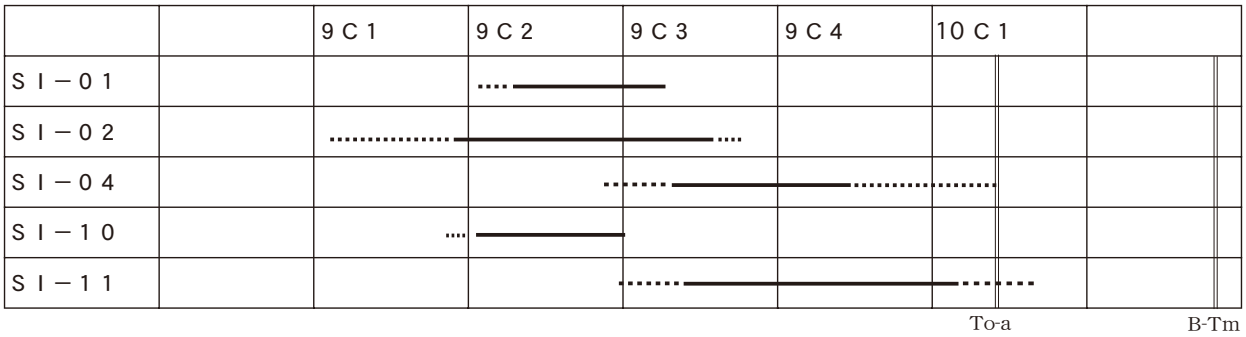


第 11 図　竪穴建物間遺物構成図

る。

ＳＩ－１０の出土遺物の中で、床面・カマド煙道・堆積土から出土した図版３０－１０１は、ＳＩ－０２カマド新出土の図版２８－８２と類似した調整手法が施されており、頸部の幅がＳＩ－０２出土資料に比べ短く、口縁端部の作り出しも精緻ではなく、また、体部との境界部分に沈線が施されないなど、型式的に新相の様相を持つが、他の煮沸具についても口縁部が幅を持ち、平行沈線やハケメ・ミガキ調整が主に施されるなどの特徴を有し、ＳＩ－０２に後続した時点で建物が機能していると判断できる。廃絶時期についてはカマド１基のみの状況であることから継続幅が短い可能性も否定できず、ヘラケズリ手法の遺物が伴わないＳＩ－０２よりも古い段階で廃絶した可能性が高い。ＳＩ－１１はカマド堆積土や建物跡堆積土中にハケメ調整やミガキ調整の土師器甕の混入が認められるが、主たる段階は外面ヘラケズリ主体の段階に建物跡が機能している。出土遺物についても概ね９世紀第３～４四半期併行のものが多く、ＳＩ－０４と併行した竪穴建物跡であると判断できる。ただし、廃絶時期についてはＳＩ－０４より新相の土師器甕（図版３１－１１９等）も含まれることと、遺構の堆積土中にＴｏ－ａ火山灰が検出されなかったことから１０世紀初頭まで機能した可能性も否定はできない。

廃絶時点での持ち出しの可能性についてはＡ区と同様であり、本調査の成果としては検証不可能である。



第 12 表　竪穴建物跡消長表

註

1）青森市教育委員会　2001『野木遺跡発掘調査報告書Ⅱ』p.571

2）青森市教育委員会　2003『雲谷山吹（４）～（７）遺跡』pp.249-252

3）青森市教育委員会　2003『市内遺跡発掘調査報告書 11』pp.27-68、2004『市内遺跡発掘調査報告書 12』pp.30-97
なお、宮田館遺跡の青森市教育委員会調査区の統括については次年度報告予定である。

4) 秋田県教育委員会　1950『城土手遺跡緊急発掘調査報告書・海老沢窯跡緊急発掘調査報告書』

5) 福田健司　1990「古代末期に頭角を現す土器について」『シンポジウム「土器からみた中世社会の成立」資料集』pp.173-176

6) 秋田市教育委員会伊藤武士氏のご教示による。

7) 宇部則保 2001「青森県東部の土器変遷」（検討会資料）

8) 前掲註 7)、八戸市教育委員会 1983『史跡根城跡発掘調査報告書Ⅴ』

9) 前掲註 7)、八戸市教育委員会 1997『八戸市内遺跡発掘調査報告書 9』

10) 青森県教育委員会 1975『近野遺跡発掘調査報告書Ⅱ』

11) 前掲註 1) 野木遺跡で検出した竪穴建物（住居）跡のうち、重複関係のあるＳＩ－９１～９３の建物跡の中で、五所川原産須恵器が一括して廃棄されていたのはもっとも新しいＳＩ－９１のみで、遺構の廃棄時期と合致しない遺物構成であった。須恵器そのものは様々な転用が行われ使用年代に幅があるケースが多々ある。

（木　村）

引用参考文献

青森県教育委員会 1975『近野遺跡発掘調査報告書Ⅱ』青森県埋蔵文化財調査報告書第 22 集
青森県教育委員会 1975『中の平遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第 25 集
青森県教育委員会 1976『黒石市牡丹平南遺跡・浅瀬石遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第 26 集
青森県教育委員会 1978『青森市三内遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第 37 集
青森県教育委員会 1978『三内澤部遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第 41 集
青森県教育委員会 1982『山崎遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第 68 集
青森県教育委員会 1984『和野前山遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第 82 集
青森県教育委員会 1984『韮窪遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第 84 集
青森県教育委員会 1986『弥栄平（1）遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第 98 集
青森県教育委員会 1988『李平下安原遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第 111 集
青森県教育委員会 1991『富ノ沢（1）・（2）遺跡Ⅲ』青森県埋蔵文化財調査報告書第 133 集
青森県教育委員会 1991『富ノ沢（2）遺跡Ⅳ』青森県埋蔵文化財調査報告書第 137 集
青森県教育委員会 1994『三内丸山 (2) 遺跡Ⅱ』青森県埋蔵文化財調査報告書第 157 集
青森県教育委員会 1998『岡町 (2) 遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第 232 集
青森県教育委員会 1998『隠川（4）遺跡・隠川（12）遺跡Ⅰ』青森県埋蔵文化財調査報告書第 244 集
青森県教育委員会 1999『三内丸山 (6) 遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第 257 集
青森県教育委員会 1999『三内丸山（5）遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第 269 集
青森県教育委員会 2001『安田（2）遺跡Ⅱ』青森県埋蔵文化財調査報告書第 303 集
青森市教育委員会 1962『三内霊園遺跡調査概報』青森市の文化財 1
青森市教育委員会 2001『野木遺跡発掘調査報告書Ⅱ』青森市埋蔵文化財調査報告書第 54 集
青森市教育委員会 2002『市内遺跡発掘調査報告書』青森市埋蔵文化財調査報告書第 64 集
青森市教育委員会 2003『雲谷山吹（4）～（7）遺跡発掘調査報告書』青森市埋蔵文化財調査報告書第 65 集
青森市教育委員会 2003『市内遺跡発掘調査報告書 11』青森市埋蔵文化財調査報告書第 69 集
青森市教育委員会 2004『市内遺跡発掘調査報告書 12』青森市埋蔵文化財調査報告書第 74 集
秋田県教育委員会 1950『城土手遺跡緊急発掘調査報告書・海老沢窯跡緊急発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第 32 集
五所川原市教育委員会 2003『五所川原須恵器窯跡群』
平賀町教育委員会 1976『井沢遺跡』平賀町埋蔵文化財調査報告書 5
若美町教育委員会 1987『西海老沢遺跡発掘調査報告書』
日本考古学協会 1997 年度秋田大会実行委員会 1997『蝦夷・律令国家・日本海』
岩見誠夫・船木義勝 1985「秋田県の須恵器および須恵器窯の編年」『秋大史学』pp.1-27
宇部則保　2000「馬淵川流域における古代集落の様相」『考古学の方法』pp.25-30
宇部則保　2002「東北北部型土師器にみる地域性」『海と考古学とロマン』pp.247-265
小笠原雅行 2002「「最花式土器」雑感」『青森県埋蔵文化財調査センター研究紀要』第 7 号 pp.55-60
齋藤淳 2001「津軽海峡領域における古代土器の変遷について」『青森大学考古学研究所研究紀要』第４号 pp.1-29
坂本真弓 2002「沢部型複式炉の現在」『海と考古学とロマン』pp.83-99
塚本浩司 2002「擦文土器の編年と地域差について」『紀要』第 17 号 pp.145-184 東京大学大学院人文社会系研究科・文学部考古学研究室
成田滋彦 1985「東北地方北部の大木 10 式土器の周辺－青森県の事例を中心に－」『奥南』第 3 号 pp.19-32
成田滋彦 2003「最花式　―在地式土器群の様相―」『青森県埋蔵文化財調査センター研究紀要』第 8 号 pp.1-20

ま と め

江渡遺跡は、青森市大字石江字江渡に所在する遺跡で、標高６～１０ｍ上に立地する。

遺跡は、市西部地区の比較的早い時期に住宅地となったエリアに位置し、周辺には笹森沼等の沼地がある。緩やかな丘陵が幾重にも広がっていることから、元々は小河川に開析された丘陵地であったことがわかる。

発掘調査は、民間の分譲宅地造成に伴い急遽平成１５年８月１日～９月５日までの１ヶ月強の期間で３，１１６㎡を実施した。本調査範囲については平成１５年度に青森市教育委員会が実施した市内遺跡発掘調査事業内で範囲確認調査を実施しており、調査必要範囲を設定している。

調査の結果、竪穴建物跡９軒、土坑３７基、ピット２６基、埋設土器遺構２基、焼土状遺構２基、溝跡１条、その他の遺構４基を検出した。出土遺物は、縄文時代前期末から後期、弥生時代、古代の土器や石器・土製品・石製品・鉄滓が出土している。

縄文時代は標高６．５～７ｍ付近から中期末葉の大木１０式併行期の竪穴建物跡１軒、埋設土器遺構１基が検出し、集落の縁辺部の様相を呈することが判明した。建物跡の炉は土器片敷の石囲炉で、本遺跡から直線距離で約１㎞離れた三内沢部遺跡では大木９式期の石囲炉を持つ集落が存在しており、付近には同様の集落が展開している可能性がある。また、標高９．２ｍ付近からは前段の最花式期の埋設土器遺構１基を検出しており、縄文時代中期末葉時点では集落が分散して展開していた状況が本遺跡内でも反映されている。

古代は９世紀前半～後半にかけての集落跡の一部を検出した。これまで東部地区の海岸に近いエリアでは、本市における比較的古い資料が出土していたが、市街地が宅地化されて以降、遺跡範囲の確認や発掘調査の事例がなく、もっぱら住宅のない山間部での発掘調査事例が蓄積されてきた状況にあった。

山間部中心の発掘調査は、９世紀後半以降津軽地域全体の集落数の増加に影響された集落跡中心の調査となり、その前段階は津軽地域では浅瀬石川流域に求めるような状況が長らく続いてきた。

今回の調査結果はその前段について散発的ではあるが、再検討するきっかけとなり得る資料を得ることができた。今後、類似した調査が増加する際の一助となれば幸いである。

おりしも、東北新幹線八戸新青森間の工事が市内各地で進行中で、埋蔵文化財包蔵地の発掘調査も平成１６年度から本格的に大規模に実施され、本遺跡と隣接した石江遺跡周辺の発掘調査が青森県埋蔵文化財調査センターによって実施される予定である。類似した事例等が今後蓄積されることが期待される。

最後に、開発協議の時点から本調査実施にあたりご協力をいただいた（株）大進建設には埋蔵文化財保護の理念を十分ご理解いただいた次第で、深くお礼申しあげます。

（木　村）

報 告 書 抄 録

ふりがな	えどいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	江渡遺跡発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	青森市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第75集
編著者名	木村淳一、相馬俊也、松橋智佳子
編集機関	青森市教育委員会
所在地	〒030-8555 青森県青森市中央一丁目22－5 TEL 017－734－1111
発行年月日	西暦2004年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 (JGD2000)	東経 (JGD2000)	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
えど 江渡	あおもりしおおあざ 青森市大字 いしえあざえど 石江字江渡 104-2ほか	02201	163	40° 49′ 16″	140° 41′ 64″	20030801 ～ 20030905	3,116	分譲宅地造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
江渡	集落跡	縄文 平安	竪穴建物跡 9軒 土坑 37基 ピット 26基 埋設土器遺構 2基 焼土状遺構 2基 溝跡 1条 その他の遺構4基	縄文土器 石器 土師器 須恵器 鉄製品 鉄滓 土製品 石製品	

既刊埋蔵文化財関係報告書一覧

青森市の文化財	1	１９６２	『三内霊園遺跡調査概報』
〃	2	１９６５	『四ツ石遺跡調査概報』
〃	3	１９６７	『玉清水遺跡調査概報』
〃	4	１９７０	『三内丸山遺跡調査概報』
〃	5	１９７１	『野木和遺跡調査報告書』
〃	6	１９７１	『玉清水Ⅲ遺跡発掘調査報告書』
〃	7	１９７１	『大浦遺跡調査報告書』
〃	8	１９７３	『孫内遺跡発掘調査報告書』
		１９７９	『蛍沢遺跡』
		１９８３	『四戸橋遺跡調査報告書』
青森市の埋蔵文化財		１９８３	『山野峠遺跡』
〃		１９８５	『長森遺跡発掘調査報告書』
〃		１９８６	『田茂木野遺跡発掘調査報告書』
〃		１９８７	『横内城跡発掘調査報告書』
〃		１９８８	『三内丸山Ⅰ遺跡発掘調査報告書』
青森市埋蔵文化財調査報告書			
〃	第１６集	１９９１	『山吹（１）遺跡発掘調査報告書』
〃	第１７集	１９９２	『埋蔵文化財出土遺物調査報告書』
〃	第１８集	１９９３	『三内丸山（２）遺跡発掘調査概報』
〃	第１９集	１９９３	『市内遺跡発掘調査報告書』
〃	第２０集	１９９３	『小牧野遺跡発掘調査概報』
〃	第２１集	１９９４	『市内遺跡詳細分布調査報告書』
〃	第２２集	１９９４	『小三内遺跡発掘調査報告書』
〃	第２３集	１９９４	『三内丸山（２）・小三内遺跡発掘調査報告書』
〃	第２４集	１９９５	『横内遺跡・横内（２）遺跡発掘調査報告書』
〃	第２５集	１９９５	『市内遺跡詳細分布調査報告書』
〃	第２６集	１９９５	『桜峯（２）遺跡発掘調査報告書』
〃	第２７集	１９９６	『桜峯（１）遺跡発掘調査概報』
〃	第２８集	１９９６	『三内丸山 ⑵ 遺跡発掘調査報告書』
〃	第２９集	１９９６	『市内遺跡詳細分布調査報告書』
〃	第３０集	１９９６	『小牧野遺跡発掘調査報告書』
〃	第３１集	１９９７	『市内遺跡詳細分布調査報告書』
〃	第３２集	１９９７	『桜峯（１）遺跡発掘調査概報Ⅱ』
〃	第３３集	１９９７	『新町野遺跡試掘調査報告書』
〃	第３４集	１９９７	『葛野（２）遺跡発掘調査報告書』
〃	第３５集	１９９７	『小牧野遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
〃	第３６集	１９９８	『桜峯（１）遺跡発掘調査報告書』
〃	第３７集	１９９８	『新町野遺跡発掘調査報告書』
〃	第３８集	１９９８	『野木遺跡発掘調査報告書』
〃	第３９集	１９９８	『市内遺跡詳細分布調査報告書』
〃	第４０集	１９９８	『小牧野遺跡発掘調査報告書Ⅲ』
〃	第４１集	１９９８	『野木遺跡発掘調査概報』
〃	第４２集	１９９８	『熊沢遺跡発掘調査概報』
〃	第４３集	１９９９	『市内遺跡詳細分布調査報告書』
〃	第４４集	１９９９	『葛野 ⑵ 遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
〃	第４５集	１９９９	『小牧野遺跡発掘調査報告書Ⅳ』
〃	第４６集	１９９９	『新町野・野木遺跡発掘調査概報』
〃	第４７集	１９９９	『稲山遺跡発掘調査概報』
〃	第４８集	２０００	『熊沢遺跡発掘調査報告書』
〃	第４９集	２０００	『稲山遺跡発掘調査概報Ⅱ』
〃	第５０集	２０００	『小牧野遺跡発掘調査報告書Ⅴ』
〃	第５１集	２０００	『桜峯（１）・雲谷山吹（３）遺跡発掘調査報告書』
〃	第５２集	２０００	『大矢沢野田（１）遺跡調査報告書』
〃	第５３集	２０００	『市内遺跡発掘調査報告書』
〃	第５４集	２００１	『新町野遺跡発掘調査報告書Ⅱ・野木遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
〃	第５５集	２００１	『小牧野遺跡発掘調査報告書Ⅵ』
〃	第５６集	２００１	『稲山遺跡発掘調査報告書Ⅰ』
〃	第５７集	２００１	『稲山遺跡発掘調査概報Ⅲ』
〃	第５８集	２００１	『大矢沢野田（１）遺跡発掘調査概報Ⅱ』
〃	第５９集	２００１	『市内遺跡発掘調査報告書』
〃	第６０集	２００２	『小牧野遺跡発掘調査報告書Ⅶ』
〃	第６１集	２００２	『大矢沢野田（１）遺跡発掘調査報告書』
〃	第６２集	２００２	『稲山遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
〃	第６３集	２００２	『稲山遺跡発掘調査概報Ⅳ』
〃	第６４集	２００２	『市内遺跡発掘調査報告書』
〃	第６５集	２００３	『雲谷山吹（４）～（７）遺跡発掘調査報告書』
〃	第６６集	２００３	『稲山遺跡発掘調査報告書Ⅲ』
〃	第６７集	２００３	『深沢（３）遺跡発掘調査報告書』
〃	第６８集	２００３	『近野遺跡発掘調査報告書』
〃	第６９集	２００３	『市内遺跡発掘調査報告書 11』
〃	第７０集	２００３	『小牧野遺跡発掘調査報告書Ⅷ』
〃	第７１集	２００４	『稲山遺跡発掘調査報告書Ⅳ』
〃	第７２集	２００４	『稲山遺跡発掘調査報告書Ⅴ』
〃	第７３集	２００４	『新町野遺跡発掘調査概報』
〃	第７４集	２００４	『市内遺跡発掘調査報告書 12』
〃	第７５集	２００４	『江渡遺跡発掘調査報告書』

青森市埋蔵文化財調査報告書第 75 集

江渡遺跡発掘調査報告書

発行年月日　平成 16 年 3 月 31 日
発　　行　　青森市教育委員会
〒 030- 8555　青森市中央一丁目 22-5
TEL　017-734-1111
印　　刷　　第一印刷株式会社
〒 038-0003　青森市石江字江渡 3-1
TEL　017-782-2333